

昭和 56 年 辛酉弥生

稲葉克文礼 著（本編）
和久田寅叔虎 著（翼）

腹證奇覽 全

大塚敬節
矢数道明 解題

医道の日本社

1981

日本漢方医学の独創的成果

腹證奇覽及翼全巻集成本の発刊に寄せて

漢方の腹診法は難經系と傷寒論系の二つに大別される。傷寒論系の腹診書として最も有名なものは、いうまでもなく、稻葉文礼の著わした「腹證奇覽」四冊と、その門人久田叔虎の著わした「腹證奇覽翼」八冊、合せて十二巻に及ぶ集大成で、日本における腹診書の代表的基本文献となっている。

日中漢方医学の歴史的経過を顧ると、中国においては脈診法がよく発達し、多くの著述が遺されている。ところが腹診法の研究は、ひとり日本において独自の発展を遂げ、数多くの腹診書が次々と著わされた。その中で最も有名で、その筆頭に挙げられているのが本書である。

昭和の漢方復興期に際して、本書は多くの出版社が競ってその復刻を試み、その都度忽ち飛ぶような売れ行きを示してきた。

このたび医道の日本社が、全十二巻を集大成し、腹證図は原本をそのまま掲げ、解説を活字組みとして新しく全六百余頁の一冊本として復刻することとなった。従来と異りまことに便利で読み易く、全く新機軸の出版である。末尾に大塚敬節氏と筆者が、往年本書に対する解説を行った文章を添付してあるが、いま改めて本書編述の由来を略記してみる。

稻葉文礼が医を志し、腹診の名師を搜ねて修業の旅に出で、めぐり合ったのが「万病腹に根さす」と唱えた吉益東洞を慕っている、鶴泰榮という古方の名医で、文礼は泰榮に師事して、親しく傷寒論系の腹診法を学んだ。文礼は更に深く術を求めて諸国を遍歴しているうち和久田叔虎に邂逅し、志を同じくするものとして肝胆相照らし、叔虎は文礼を師として師弟の交りを結んだ。しかし二人は永く居を共にした訳ではなかった。

稻葉文礼は寛政十二年（一八〇〇年）門人達に口述し、「腹證奇覽」四巻を著わした。文礼は実地に鍛えた術は体得していたが文字に暗く、著述は殆んど門人達の手に委ねたので、とかく足らざるところが多かった。

叔虎は享和元年（一八〇一）の春、隅々江戸に在って書店に立寄り、測らずも恩師の新作「腹證奇覽」を発見し、胸を躍らせて読んでみると意に満たぬところがあまりに多い。叔虎はその罪をすべて門人達に帰し、「読腹證奇覽」二冊を著わし、完膚なきまでにこれに批判を加えたのであった。

しかしこの「読腹證奇覽」は公刊せずに埋もれた。叔虎は再び恩師文礼を大阪に訪ね、折しも病床にある文礼と力を協せてその不足を補い、さらに叔虎の學術を追加發表したのが「腹證奇覽翼」（一八〇九）八巻であった。その叔虎の「読腹證奇覽」は東京医大図書館古医書の中の珍本の一つで、私はこれに訳注を加えてその全文を「漢方治療百話」第二集に転載紹介した。

これら腹證奇覽の全篇を読んでもみると、文礼、叔虎の師弟の情と、學術修業の厳しさに打たれるところが多い。大塚先生の言われる如く、日本の腹診は未だ完成されたものではないが本書の成立は日本漢方医学の特質として特筆すべき意義を有している。

近年漢方医学の国際的交流が頻繁に行われる趨勢となり、中国をはじめ、韓国や台湾、印度医学等の紹介

が盛んとなり、日本独自の腹診術はすでに外国の注目するところとなっている。このとき画期的な本書の出版はまことに意義ある企てであり、国内は勿論広くこれを海外に対しても推挙するものである。

一九八〇年十二月一日

北里研究所東洋医学総合研究所所長

東亜医学協会理事長

医学博士 矢 数 道 明

「校者のことば」

一、「翼」は、主幹書の理解活用を輔けるための補足書である。

ところが腹證奇覽は、本書は臨床術書であり、翼は古籍を精研し古諺を収集して学・術を兼ねた応用自在の書である。しかも著者は異り、記述体系も共通していないので、別個の書籍というべきである。「腹證奇覽六編」として一括するならば、翼と本書の区分を替えるのが妥当と思われる。

二、稲葉文礼と和久田叔虎は師弟といわれている。文礼は、腹證奇覽の中で「浜松の門人・和久田某」と呼んでいるが、叔虎は文礼を「翁」と云い「師」と言っていない。

腹證奇覽の「誤遺」を叔虎に指摘されたとき、文礼は、叔虎の造詣の深遠なことに今更ながら愕き、むしろ「師」と思ったことであろう。

文礼は「文辞に於ては能くせざれども、医に当りては師に譲らず」と、自ら云っている自信家ではあるが、叔虎に対しては補正を乞わなければならなかった。叔虎は初対面時に感知していたが、「腹診の実技」を得たい一念であった。

三、叔虎は「先達を非議するは、却って己の醜を售るに似たりと雖も、己むを得ずして、此の弁に及ぶ」と

して、世を挙げての俗論を反駁する。伝承巷間の群書は「無用の空論と偽り」であり、大家といわれる香川修庵・吉益東洞らも「庸医の為す所、茫乎として修むるの寸も得ず」に近いと、思っていたかも知れない。

然し、儒学・陰陽五行・脈経が風靡する時代に於ては、実証を挙げてでも容れられなかった。それは、次のことから考えられる――

1、翼二編・序文者の医柳ですら、本書の理解はおろか、緝いたとも考えられない。

2、翼・初編と二編は、文勢・内容からして引続いて脱稿したと思われるが、初編出版後二十四年後に二編が発刊されている。この長い年月を隔てていることは、何らかの妨害があったのであろう。

3、翼三・四編の校者は、門弟のうちでも俊秀として自他共に認めていた人であるが、記述から忖度すると、叔虎の域には遙かに及んでいない。和久田叔虎の腹證奇覧は、開花もしないうちに消えたと言え。

四、腹證奇覧の精華は、翼・八冊に在る。それは、叔虎が原著し、門人原田らが「校」したのであるが、校の作業内容はどの範囲であつたのであろうか。

特に、三・四編の引用古籍文の訓点・ふり仮名に従うと、意味が通じない点があまりにも多い。恐らく、校者は会得せず・叔虎は後閲していないものと思う。

また、文章を離れて暦年から考えると、一七九三年・叔虎が文札と出遇った時、師をも畏れない野人が「未だ曾つて同志の人と遇わず。子の如きは与に言うべきなり」と賞讃するに至っていたので、既に相当の見識を具えていたから、叔虎も青年ではなかった筈である。今、仮りに三十才として、出版年次等を表示すれば、

編	年代	出遇からの 経過年数	年令	校者
初編	一八〇九	一六年	四六才	原田成憲子、欣校
二編	一八三二	四〇年	七〇才	同右
三編	一八五三	六〇年	九〇才	原田養賢校
四編	同右	同	同	同右

となつて、

①、当時の年令としては、あまりに長寿である。

②、校者の表示は、後出の者程、敬意を篤くするものであるが、反対に粗略になっている。三・四編出版は死後であつたかも知れない。

五、私は、努めて「校者の記述」に従つたが、引用文の訓点など意味の通じない点は「著者」の意を体して改めた。

筆を擱くに當つて、若し和久田叔虎「腹證奇覽翼」が正しく評価されていたならば、湯液方のみならず鍼灸方も含めた医の學術は、著しく実用的なものとなつていたと思う。

叔虎の説を顕彰するためには、臨床結果を照合しながら、腹證奇覽十二冊を通じて一貫整理する必要がある。

一九八〇年十一月

上田 晋 平

凡例

「腹證奇覽」は、前後編四卷・翼四編八卷、計十二巻を総称しての名である。然し、本編と翼の著者は同一人ではなく、しかも発刊時に両者は協議していないから、夫々独特の記述体系となっている。

また、「翼四編は和久田叔虎の著」であっても、「校」は識見の異なる二人が別個に担当し、全編一率の凡例は述べ難い。

一、全巻にわたって、

(一)「当用漢字」および「現代かなづかい」に従うことを本旨とした。

然し、原書が醸し出す雰囲気を活かすため、努めて原文に従った。

すなわち、和久田一門が伝承群書・通説に惑わされず、傷寒論等の古典を直接研鑽したことを示す文字（譌・闕・凡・誤・鑿等）および表現語句は、そのまま用いた。

(二)ふり仮名・句読点および段落は、適宜加除した。

(三)著者の不本意な文字（誤植？）と思われるものは、その意図を忖度して改めた。

(四)前後の意味が通じない部分は、文勢を損わない範囲内で修補した。

(五)、文中において「論に曰く」と引用した文および湯液名で、標題的なものはゴシック字を用いた。
(六)、原書中の漢文で記述されている部分は、「」を付して現わした。

(七)、原書中の次注は、細字で記述されているが、本書では()で表示した。

(八)、なお、疑義は少なからず存在するので、好学の士は原書を引見されたい。

二、腹證奇覽、初・二編

原書は、片仮名が多く、漢字は殆んどふり仮名が付けられている。

現代常識的に通用することを基準として、漢字に改め、独特な読み方以外のふり仮名は除いた。

三、翼、初・二編

「腹證奇覽」の庄巻ともいうべき篇である。

原書は、著者の見解・引用漢文とその次注・参考諸説と四区分できるが、それぞれ、文字の大きさ・高低を替えているので、一見して判別できる。

然し本書は、(前記一)の区分のみなので、読者を多岐の迷路に誘い込む慮がないとは云えない。

四、翼、三・四編

原書の漢文訓点およびふり仮名には、著者(和久田叔虎)が引用した趣旨にそぐわない条が散見される。後続の解説文を斟酌して適宜改めた。

目次

腹證奇覽

稻葉克文礼著

日本漢方医学の独創的成果

腹證奇覽及選全卷集成本の發刊に寄せて

校者のことば

矢數道明 一

凡例

上田晋平 四

自序

三

後編序

荒井公廉 六

前編上冊

1	腹證を按ずるの法	九
2	桂枝湯の證	一
3	小柴胡湯の證 I	三
4	同 II (胸肋膨脹)	一六
5	大柴胡湯 <small>たいさいととう</small> の證	一八

目次

6	柴胡加芒硝湯の證……………	二〇
7	吳茱萸湯の證……………	二二
8	人參芍藥桃花湯の證……………	二四
9	桃軍圖の證・二圖 I……………	二七
10	桃軍圖の證 II……………	二九
11	括蕤薤白白酒湯の證……………	三一
12	礪石丸の證……………	三三
13	橘皮大黃朴硝湯の證……………	三五
14	六君子湯の證……………	三七
15	大柴胡湯の證・甘草乾姜の證・二方相合するものの圖……………	三九
16	大黃甘遂湯の證……………	四一
17	大承氣湯の證 I……………	四三
18	大承氣湯の證 II……………	四五
19	小建中湯の證……………	四七
20	桂姜棗草黃辛附湯の證……………	四九

(附) 枳朮湯の證及び堅塊・結塊・血塊不解の論

目 次

21	大陷胸湯の證 I・大陷胸丸の證	五三
22	大陷胸湯の證 II	五五
23	小陷胸湯の證	五七
24	芍藥甘草湯の證	五九
25	葛根湯の證・項背の強急の劇しきものの図	六一
26	黃連湯の證	六四
27	甘遂半夏湯の證	六六
28	大黃甘草湯の證	六八
29	厚朴三物湯の證	七〇
30	乾姜附子湯の證	七二
31	芎歸膠艾湯及び猪苓湯の證	七四
32	苓桂朮甘湯の證	七七
33	大黃牡丹皮湯の證	八〇
34	(付) 臍下の毒・診察の論	
35	瘰癧圖の證	八三
36	胸腹の毒凝結し背に着くもの I	八五
37	胸腹の毒凝結し背につくもの II	八七
	薏苡附子敗壞散の證	八九

目次

38	四逆湯の證	九二
39	灸治法	九四
40	抵当湯、或は、抵当丸の證	九六
41	梔子豉湯の證	九八
42	梔実の證	一〇〇
43	諸症毒の交発するものの図	一〇二
	処方分量考（前編上冊）	一〇五

後編上冊

44	当帰芍薬散の證	一一六
45	人參去朮加桂湯の證	一一九
46	小品奔豚湯の證	一二一
47	広済奔豚湯の證	一二三
48	防風茯苓湯の證	一二五
49	小品牡蠣奔豚湯の證	一二七
50	当帰建中湯の證	一二九
51	黄土湯の證	一三一
52	桂枝加附子湯の證	一三五

目 次

63	附子粳米湯の證	一七六
67	甘草瀉心湯の證	一七四
66	半夏瀉心湯の證	一七一
65	十棗湯の證	一六八
後編下冊		
64	大建中湯の證 (Ⅲ)	一六六
63	大建中湯の證 (Ⅱ)	一六四
62	大建中湯の證 (Ⅰ)	一六二
61	大黃黃連瀉心湯の證	一五九
60	大黃附子湯の證	一五七
59	鶴家・甘遂桃花湯の證	一五四
58	調胃承氣湯の證	一五二
57	四逆散の證	一五〇
56	朮防己去石膏加茯苓芒硝湯の證	一四七
55	真武湯の證	一四三
54	理中加附子湯の證	一四一
53	附子湯の證	一三八

目 次

69	大黃甘草湯の證	一七八
70	甘麥大棗湯の證	一八〇
71	甘草粉蜜湯の證	一八二
72	桂枝去芍藥湯の證	一八六
73	大黃硝石湯の證	一八八
74	鶴丸の證	一九〇
75	桃核承氣湯の證	一九三
76	千金甘草湯の證	一九五
77	癰疽・治不治の図	一九八
78	下瘀血湯の證	二〇一
79	土瓜根散の證	二〇三
80	八味丸の證	二〇七
81	瘡毒家・陰莖腐落の図	二〇九
82	同瘡毒家骨節疼痛の図	二一二

腹證奇覽 翼

和久田寅叔虎 著
原 田成賢子 校

初編 自序 腹證奇覽翼	二二七
題 言	二二〇
翼二編 序	二二三
翼三編 序	二二三
翼四編 序	二二四

(翼) 初編上冊

83 総論、并せ内経診尺の図解診尺・左右内外上下・三部図	二二五
84 仲景腹證部位及び周身名目、三陰三陽・表裡、内外の図解	二四二
85 腎間動の説・并に図	二四八
86 動悸の弁(附・治法略案)	二五四
87 腹中・諸塊の弁并せ治、附方九首図	二六二

次 (翼)

目 (翼) 初編下冊

88	腹證・診按法、并びに図……………	二七三
89	桂枝湯發明説、并びに病因・病證の弁……………	二八〇
90	桂枝湯・頭項強痛図(桂枝加葛根湯・葛根湯・葛根黃連黃芩湯)……………	二九八
	附・項背強急・異同の弁(方・一首)……………	
91	小青龍湯図、并せ大青龍湯・麻黃湯の解……………	三〇七
92	桂枝湯氣上衝・腹拘急の図……………	三一六
93	桂枝加芍藥湯図、并せ加大黃湯・加芍藥生姜人參湯の解……………	三一九
94	小建中湯図、并せ黃耆建中湯・當歸建中湯・大腹虫丸の説……………	三二三
	附・虛勞・勞咳の弁(附方・三首)……………	
95	當歸四逆湯・同加呉茱萸生姜湯図……………	三三三
96	芍藥甘草湯・同附子湯図解……………	三三九
(翼) 二編上冊		
97	風引湯の證・發明説、并に図(紫石寒食散の説)……………	三四二
98	風引湯の證……………	三四七
99	桂枝加龍骨牡蠣湯の證、并せ天雄散の弁……………	三五〇
100	烏頭桂枝湯の證、并せ大烏頭煎・烏頭湯の解……………	三五四
101	桂枝去芍藥湯の證、并せ桂枝枳実生姜湯・桂枝去芍藥加芍藥湯……………	

(翼) 二編下冊

115	桂枝人參湯の證……………	四五四
114	人參湯の證 (一名・理中丸) (附方四方二首)……………	四四五
113	與榮黃湯の證 (附方二首)……………	四四〇
112	附・補中益氣湯の證……………	四三六
111	大柴胡湯の證、并せ附方三首・柴胡加芒硝湯・四逆散の解・柴胡飲子の説 (附方一首)……………	四二六
110	柴胡加龍骨牡蠣湯の證……………	四二三
109	柴胡桂枝乾姜湯の證、并せ柴胡去半夏加栝實湯・柴胡加桂枝湯の解……………	四一八
108	小柴胡湯の證……………	四〇九
107	柴胡湯諸方の弁、せ……………	四〇七
106	麻黃杏仁石膏甘草湯・麻黃杏仁薏苡甘草湯・文蛤湯の解……………	四〇〇
105	越婢湯の證、并せ同加朮湯・同加朮附湯・同半夏湯……………	三八六
104	桂枝加黃耆湯の證、并せ黃耆桂枝五物湯・黃耆桂枝苦酒湯・防已黃耆湯・防已茯苓湯の解……………	三七六
103	甘草附子湯の證、并せ桂枝附子湯・同去桂加朮湯の解……………	三七一
102	桂枝芍藥加蜀漆龍骨牡蠣救逆湯の解 附・胸滿諸證の弁……………	三六〇

116	附・心下痞硬證の弁、并せ人參説 白虎湯の證、并せ白虎加人參湯・同加桂枝湯の解	四六〇
	附・白虎加黃連の證	
117	竹葉石膏湯の證、并せ麦門冬湯の解	四六八

和久田寅叔虎 著
原田 養賢 校

(翼) 三編上冊

118	大承氣湯の證並びに図解 (I)	四七二
119	大承氣湯の證 (II)	四七五
120	厚朴大黃湯の證	四九三
121	厚朴七物湯の證	四九六
122	調胃承氣湯の證	五〇〇
(翼) 三編下冊		
123	桃核承氣湯の證	五〇六

目次(翼)

136	調気飲図解、并せ黄連阿膠湯解	五七二
135	黄連湯図解	五六九
134	旋覆花代赭石湯図解	五六六
(翼)	四編下冊	
133	半夏瀉心湯図解、生姜瀉心湯・甘師瀉心湯解	五六〇
132	大黃黄連瀉心湯図解 附子瀉心湯解、三黄瀉心湯解、附黄連解毒湯治・心煩諸證あるの弁	五五〇
131	梔子乾姜湯・梔子蘂皮湯・茵陳蒿湯の解、并せ梔子豉湯治驗	五三八
130	梔子豉湯の說、并せ図解(虚実の弁、并せ図附)	五三四
(翼)	四編上冊	
129	十棗湯図	五二九
128	大黃甘遂湯図	五二六
127	甘遂半夏湯図	五二三
126	小陷胸湯図	五二〇
125	大陷胸丸図・附大陷胸湯一方	五一六
124	大陷胸湯図	五一一

144	茯苓杏仁甘艸湯図解	六〇一
143	茯苓甘草湯図解	五九九
142	苓姜朮甘湯図解	五九六
141	苓桂朮甘湯図解・茯苓甘草湯図解・茯苓戎塩湯の治	五九一
140	猪苓湯図解	五八八
139	五苓散図解、附・茵陳五苓散の治	五八一
138	大建中湯図解	五七八
137	黄芩湯図解、并せ黄芩加半夏生姜湯・六物黄芩湯解・乾姜黄連黄芩人参湯解	五七五
	稻葉文礼と和久田叔虎：腹診の伝承	大塚敬節・六〇四
	稻葉文礼と和久田叔虎の師弟関係	矢数道明・六一〇
	序	大塚敬節・六一六
	跋	戸部宗七郎・六一七
	湯名索引	六二一

湖南稻葉克文禮著

腹證奇覽

攝州書林

興文堂
積玉圃

腹證奇覽 前編

自叙

古人、言うところ有り曰く、「短綆^{たんきやう}は以つて深井を汲むべからず」と、信なり。不佞^{ふへい}が如き、何を以つてか此の道の深底を知るに足らんや。然りと雖^{いとも}も、才月^{さいげつ}これ蓄る所、日夜これ積む所、門人・二三子の身^みに復て之を言わん。

克、幼にして孤なり。長ずるに及びて放蕩無頼、常に京摂の間を徘徊し、鄙夫野人^{ひふやじん}の爲す所、大人君子の惡む所、一として爲さざる所なし。適^{あた}ま、友人の言に感ずる有りて、医を学ばんと欲す。然れども、素と、目・書を知らず、耳・文を聞かず。唯^{ただ}、四方を周流し、名家高門に踵^{かかと}りて、其の方法を得ることを求むのみなり。

曩^{なま}に、浪華^{なみぎは}に遊び、鶴泰^{かくたい}先生に師事せり。先生の曰く。「汝が性・頑愚にして頗る鄙倍^{ひばい}なるを憫^{あは}れ。且つ、年已^{すで}に長ず。教うるに文字を以つてし、古人の書を読ましめんと欲するも、恐らくは、終には其の成るを期すべからざらん。よいて、我、汝に教うるに診腹の事を以つてせん。汝も亦^{また}、他を顧みず、夙夜^{しゆくや}・謹明し、以つて治療を爲せ。

古えに言あり、『病の根ざす所は腹に在り。探りて其の壅滯^{うたう}を知れ』と。古えの之を『診尺』と謂うは、

鳩尾より臍に至るまで一尺なるを以つてなり。

靈樞・論疾診尺篇に曰く。『黄帝・岐伯に問いて曰く。余、色を視・脉を持することなく、独り其の尺の
みを調べ、以つて其の病を言い、外より内を知らんと欲す。之を爲すに奈何せん？ 岐伯曰く。其の尺の緩
急・小大・滑濇・肉の堅脆を審らかにすれば、而ち病形定まるなり』と。又、内經に曰く、『尺内の両傍は、
則ち季脇なり』と。

又、按ずるに、脈の動靜は、尺の滑濇・寒温の意に循ひ、其の大小を視、之を合して病態とす。且つ、古
人・疾を言うに、必ず腹心を言う。然らば則ち、診腹の治療に於けるは斯より先なるは莫し。今、我知る所
を悉く汝に授く。冀くは、篤志明辨し、以つて疾病を救うを生涯の任とせよ』と。

克、謹みて教を奉け、諸國を遊歴し病客に遇う毎に、沈思苦慮し、或るときは宿儒老医に従つて之を問
い、或るときは学生小子と之を論ず。

壬子（一七九二）の歲、甲州に遊び富嶽に登りて塗を失し、黒川の里の禪院に投宿して、幸にも知足齋の
遺書・奇方十九を獲たり。益々、精研・究徹して、六十余方の腹候を得、病病・篤疾も往々にして愈ゆ。既
にして、門人二三子に伝う。二三子も、亦、發明する所ありて、能く相助け以つて業を成し、屢、之を梓に
上さんことを請う。然れども、克は往年東都・鳳山子の忠告に感じて、未だ之を允とせざりき。

乙卯（一七九五）の歲、京師に來遊し、此の診術を以つて、広く諸を海内に施さんと欲す。然れども、京
師は四方輻湊の地にして、其の諸君子は皆、俊才博識、固り文字に富み、又言行に優なり。克が如き不才薄
行の者は、一も其の眼路に歷ること能わず。適、一、二の門生ありて、相羽翼するに會し、丁巳（一七九七）
の春に至りて、數十病客を療し、間、其の効を奏することありと雖も、或は攻撃の過多、或は言貌の鄙俗を

侮らるを畏れ、ここに於て、克久しく止ることを欲せず、暫らく暖和の時を待つ。

而るうち不幸にして、疾に遇い、半身不遂の患に罹る。乃ち、門生をして之を詳診せしめ、攻むるに數方を以つてし、累日にして愉快を覺ゆ。而るに、克、居常・嗜酒の癖あり。病、少間すれば、則ち、寂寞鬱悶に堪えず。故に、態、復た発す。門人親戚・之を痛識すと雖も、旧癖は遂に改め難く、得て失すること數次なりき。今春再び苦しみ、因りて銳意・鬼神に誓い、盃を毀り瓶を碎きて、益々攻むるに藥劑を以つてす。累日にして故に復せり。

是に於て、遊歴を事とし、広く其の功を施し、其の未だ知らざる所を開発せんと欲す。終には、身を以つて溝壑に委ねるも、以つて其の短綆を長じて其の深井を汲むべく、且つ、道路に死すとも薄行の罪を謝さんことを冀い、窃に、諸を門生・宗輔に詢う。宗輔が曰く「先生・性直に術精し。然れども、其の言行は殆んど京師の人に非ず。縦い、先生をして京師に留寓せしむるとも、恐らくは素意の如くなることを能わざらん。美器ありても其の用を成さず、惜しむべき哉。先生の意の如くにして、遍く天下後世に伝え、以つて博く篤隆沈痼を濟い、功を為すの最も大なるには如かず」と。克・之を諾し、是に於て此の書を録し、以つて授与す。

寛政己未十一年初夏（一七九九年）

腹證奇覽 後編

序

古に曰く、「三たび骨を折りて、良医と成る」と。稻葉意仲翁は、嘗て、初学の為に腹診の書を著し、已に世に行わる。

今茲に、又、其の後編を刻せんと欲し、因りて序を予に属す。予、不文なりと雖も、翁に於ては義として辞すべからざるものあり。予、夙に、翁の治に頼りて二歴の難を免ることあり。是に於て、深く其の技を奇とし、廻ち、其の医を為す所以を問う。

翁の曰く「予の為す所は、大いに今の医に異なるなり。予、世の医を見るに、論巧みなるも術拙し。実に徒誦するのみ。所謂、書を以て御を為す者は、馬の情を尽さず。古を以て今を制する者は、事の變に達せざるなり。予、斯に観ること有りて、深く先師の教を信じ、直に其の本源に遡り、憤然として努力し、確然として精究す。故に、古人の言と雖も、治病に効無きものは捨て取らず、今人の方と雖も、回生に功有るものは採りて之を用う。壹是に、之を病者に徴するのみ。故を以て、海隅山陬も、所として耻せざるは無く、樵人漁郎も、疾として療せざるは莫し。其の間、死せるを起し、骨ばるを肉づくるの驗を得ること、頗る有り。或は臍を嚙み、心に銘せるものあり。其の効を奏するもの有る毎に、輒ち文し、以て其の治を記し、

図し以て其の病を明らかにし、以て諸弟子に視しざるもの無し。是れ、予が此の書を梓にして、天下後世を救わしめんと欲するの微意なり」と。

予、嘆じて曰く。「嗚乎、翁の爲す所は、真に良医の志なり。夫れ、張・長沙の古猿を医し、孫真人の青蛙を救えるも、翁に於ては深く奇とするに足らず。扁鵲が五臓の癥結を鑑み、丹溪が一女の情病を治せるも、亦、翁に於ては多くは譲らざるなり」

三折の医、翁に於て初めて之を見るのみ。且つ、此の書、翁に在りては、蓋し九牛の一毛たるに過ぎず。然れども、大いに初学に益あれば則ち措はなくべからざらん乎。因りて辞せず、遂に爲に其の言を記し、以て序となす。

翁の名は克、字は文礼。浪華しゅうわに僦居きょこす。父の名は文内、字は武次。其の先は河野七郎より出づ。世は江州の菩提寺郷ごうに住むと云う。

時に享和紀元、龍次辛酉上巳の後三日（一八〇一年）

布衣、後学・南阿・荒井公廉 浪華蟻屈軒に於て題す

腹證奇覽 前編上冊

湖南 稻葉 克文礼 著

1、腹證を按ずるの法（前編上冊）

夫れ、腹證を按ずるの法は、先ず、病人を平かに臥さしめ、志氣を正しくせしめ、さて医者も、亦、平かに坐し、呼吸を正し志氣を臍下に収め、あたかも、武夫の兵（きれもの）を執りて敵に向うが如く、大病を怖れず、死生に眩せず、富貴に屈せず、貧賤も侮らず、その病敵を治してその疾苦を救わんと、心を專一にして診察すべし。是れ疾医、病者を診察するの大法なり。

凡そ、腹證を候うの法は、右の如く病者に臨み、先ず、右手の掌を徐かに胸心（むね）へ当て、一息して呼吸を定め静かにし、心をしずめて、胸膈の毒を候う。中央より診して左右に及ぶ。而して後、心下へ柔かに指を下して、三指（食指・中指・無名指）の頭にて按ずべし。次に、肋骨の端へ指頭をかかげ入れて苦満の有無を候い、次に腹中、次に左右の小腹、次に臍穴、次に左右の臍傍、次に臍下と、順々に診察すべし、これ診腹の次第なり。

かくの如くにして後、外證を察し、諸患の有無を問うべし。

2

桂枝湯の證
（前編上冊）



2、桂枝湯の證（前編上冊）

此の證、腹滑にして底までも応ゆるもの無く、図の如く、只、拘攣あり。所謂、臟に他病なし。上衝・発熱・頭痛・汗あり惡風する者は、桂枝湯を用いるなり。

拘攣せざる者は、去芍藥湯を用いるなり。

拘攣劇だしき者は、加芍藥湯を用いるなり。

此の三方を合せみれば、上衝と拘攣との二つ、此の證の準拠たることを知るべし。

故に、腹證を知らんと欲せば、先ず、準拠するところの字義を味い考うべし。衝は突なり、向うなり。毒の頭上へ突上るなり。

（孔安国（漢武帝に仕えた博士、孔子十二代目の子孫、古文尚書を注釈した。然し現存のものは晋代の偽作と言われる。）曰く「衝風の末力たるや、鴻毛も漂わす能はず。初めの勁からざるに非ず、末力の衰うるなり」と。人の上衝するも之に似たることあり。其の初め劇しき者と雖も、衝風の末力の衰うるが如く、少間すれば衰うるものなり）

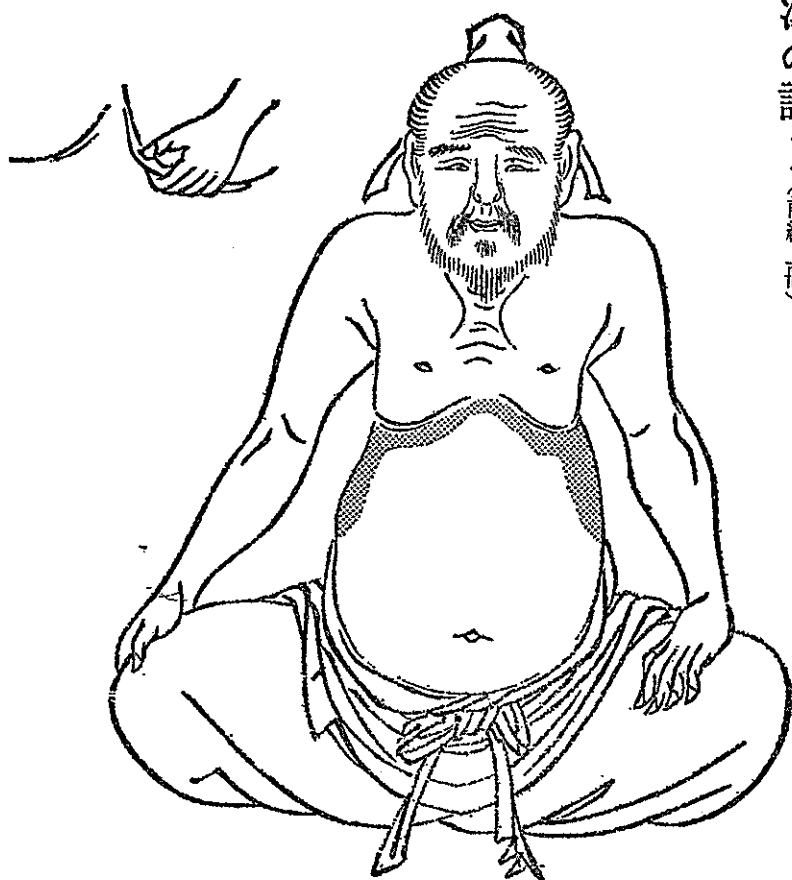
拘攣は擁係（かかりつなぐ）なり。拘は夫れ毒腹中にあり。拘攣して上衝すは、是れ即ち、桂枝湯の主治する所なり。

衝逆して、毒・心胸を過るを以て嘔する氣味ある故、方中に生薑しょうきやうあり。又、拘攣・上衝すれば、攣引・急迫も其のうちにこもりある故、大棗・甘草かんそうあり。是れこの諸藥各々主治するところありと雖も、芍に皆、桂・芍・二味二佐として、拘攣・上衝の毒を治するものなり。然れども、拘攣のみにて上衝なければ、此方の證にあらざる故、上衝をつかまえものにして、「上衝は桂枝湯を与うべし」と傷寒論にもいえり。これを「方意を明らかにし、毒の在る所を視る」といふなり。

右、桂枝湯及び去芍藥、加芍藥の三方、此に於てもとむべし。その余、本方より去加（さり、くわう）の諸方も亦、皆、桂芍に味の證を主として、出入去加したるものなれば、只、桂芍二味の意を主として考うべし。又曰く。桂枝・加桂枝・桂枝加芍藥、密伝あり。後編に奪す。懇請の人あらば伝うべし。桂枝去芍藥湯も亦、腹候・伝あり。

3

小柴胡湯の證 I (前編上冊)



3、小柴胡湯しょうさいことうの證 I（前編上冊）

肩脇苦満の毒、淺薄なる者の図なり。之れ、按じて知るの伝は、図の如く、脇下肋骨の端を指頭にて揚げ見るに、応うるものあるは、是れ薄き苦満の毒なり。又、心下こくげを按じて少しく応うるものあるは、是れ即ち痞硬おひごうなり。世に積聚しきしゆと号するもの、此の證多し。凡そ腹證を按するに、毒の在る所、厚深なるものは見易く、淺薄なるものは見難し。然れども、又、毒淺薄なるが如くにして大いに深きものあり。是れ、毒腹底に在つて、悉くは表に顯れざるものなり。これを攻るときは、其の毒、動いて表に顯る其の時、いよいよ本劑を投じて、止むことなく之を攻れば、或は寒熱往来・或は譫々せんせんとして心煩するもの、是れ方證相對して瞑眩めいけんするなり。甚だしきものは、振々戰慄して、却つて發熱、汗出で瘧狀の如く覺ゆるもの、是れ病毒去るの時なり。必ず恐懼すべからず。益々本劑を用いて可なり。又、其の外、世に所謂・疫症外邪の類、六氣の変に敗れ出でたるものは、藥を用いざる初めより件の外症なれど、様々に顯わすものあり。右の診法を詳らかにして、胸脇苦満せば、かまわず、此方を投ずべし。外證に眩して、妄りに方を転ずることなかれ。

又、図の如く、苦満ありて心下痞硬甚しきものあり。此の時は、先ず苦満をさし置きて、痞硬より攻むべし。人參湯・桂枝人參湯の類、證を詳らかにして是れを用うべし。是れのみに限らず、病人諸症あらば、先ず其の甚だしきものより攻むべし。もし甚だしきものなき時は、上より順に攻むべし。妄りに合法加減して

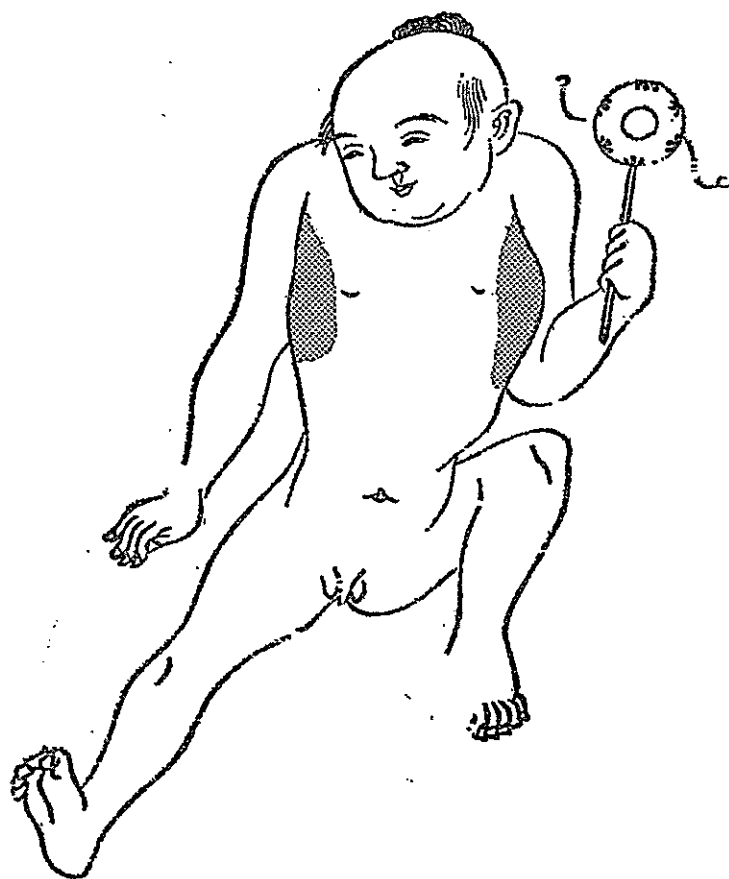
3 小紫胡湯の證 I

方法を改易すべからず。必ず功なきのみならず、却って其の害、多かるべし。之を戒め、之を戒めよ。
凡そ、此の証、大率、心煩あるものなり。即ち、柴胡、或は人參の心煩なり。兼用は三黄丸、或は知足齋
の解毒丸等、考え用うべし。」

4

小柴胡湯の證 II（前編上冊）

胸脇肋脹



4、小柴胡湯しょうさいことうの證 Ⅱ（前編上冊）

図の如く、苦満痞硬くまんひじやう見えずして胸肋きゆうたつふくれ張りたるものなり。俗に是れを緩瀲腹かんらんはらという。小兒しょうにに此の證多し。即ち此の方の證なり。外形を以て察すべし。もし知れ難き時は、指頭の横はらを以て肋骨の間をいらい・圧して見るべし。必ず痛むものなり。

又、此の證に似て胸高くはり、出たる者あり。是れは大小・陷胸湯かんきやうとうの證なり。誤るべからず。

又、胸肋膨脹して、胸高く張出たるは、二證相合したるなり。此の時は、先ず小柴胡湯を用いて後、時時、陷胸丸をもつて攻むべし。もし又、胸肋膨脹結実して解し難きものは、鶴家の滅毒丸・知足斎の玉丹たまごたんの類、考え用うべし。

5

大柴胡湯の證（前編上冊）



5、大柴胡湯だいさいことうの證（前編上冊）

図の如く、胸脇苦満して少しく拘攣あり。凡そ拘攣は、塊物と異なり、指頭に少し拘わり応うるものなり。又、腹少しく実満して心下硬せず、痞するばかりなり。よくよく診して考うべし。

前にいう小柴胡湯は、心下痞硬ありて実満なし。これを以て分別すべし。

凡そ、傷寒論の薬方は、其の意、精密なるものにして、その方、その證、自然と備わりて違わざること、欺くべからざるものなり。謹んで、方の主證を明かにし、君佐の意味を考え是れを用いるときは、一も療治せざることなかるべし。これ天然自然の方法、三代以上の術たること疑いなし。医者、私智を離れ古の法を用い、謹んで、其の功あることを知るべし。

柴さい胡こ加か匠ぼう硝しょう湯とうの證
（前編上冊）



6、柴胡加芒硝湯の證（前編上冊）

図の如く胸脇苦満して、二大竹を立てるが如く、之れを按じて堅きものあり。是れ堅塊なり。故に芒硝を加う。芒硝は堅き毒を治するものなり。然るに、世の腹診に暗きもの、是れを以つて小建中湯の證、或は芍薬の拘攣とす。大いに誤りなり。

小建湯の腹證は、拘攣急迫して、數繩を張りたるが如し。其の説、下に詳らかなり。此の證、芒硝の酸味を嫌いて薬を服しかぬるものあり。故に、斯くの如き者に至つては、大率、本方に鶴家の鶴丸を兼用すること、毎夜、一瓿にして功あり。考うべし。

案するに、傷寒論中、大小・柴胡、其の他去加の方、凡そ七方あり。柴胡加龍骨牡蠣湯は別に説ありて、ここに説かず。その外、ここに図せざる、三柴胡も同じく、皆、胸脇苦満を以つて主とす。故にこれを略す。乃ち、渴して嘔せざるものは、柴胡去半夏枳實湯。

又、上衝して少しく拘攣あるものは、柴胡桂枝湯。

又、渴して嘔せず、痞硬なく腹中動ある者は、柴胡桂枝乾姜湯の證なり。

余、諸州を経歴し、衆病人を療するに、十に六、七人までは、柴胡の證多し。医者、よく腹證を熟知せば、これを用いて功あることを知るべし。

吳茱萸湯の證（前編上冊）



7、吳茱萸湯の證（前編上冊）

図の如き、即ち吳茱萸湯の證なり。余、此の證を得ざること久し。苦心刻意して、近頃漸く審らかにすることを得たり。門人、東民と共に論ず。東民も亦、苦心すること多年。時に此の證を患うる者、兩三人に遇えり。因つて、共に單思して、始めて此の證を理解（がてん）することを得たり。柴胡を用いて治せざるもの、間この證あり。何となれば、胸脇苦満して嘔已まざるものなればなり。

然れども、胸脇苦満して嘔するものは、柴胡を用いて愈ゆ。柴胡の證にして、唯だ、胸満するもの、是れ吳茱萸湯の證なり。其の胸満するに、二證あり。現われて胸満するあり、其の現われざる者、これを按ずるに実中に一点の空所もなし。是れ即ち、此方の證なり。其の余、猶お数多あり。食せんとして嘔するものあり、手足厥冷・煩燥吐利して死せんと欲するものあり、乾嘔・喘沫・頭痛するものあり。又、嘔して胸満するものあり、この四證要するに、胸脇苦満・心下痞硬して嘔するを準拠とすべし。柴胡の證の大略かくの如し。然れども、痞硬に至りては、吳茱萸の證を大なりとす。

人參にんじん芎きやう軍ぐん桃とう花か湯とうの證しやう
（前編上冊）



8、人參芎軍桃花湯の證 (前編上冊)

図の如く、腹張満、心下痞硬、食不下、一身悉く浮腫し、両便利せず、百藥効なきもの。此の腹證、張満甚だしきゆえ、腹底の毒診察し難し。此の時、浮水を去りて而して后、旧毒を知つて、方證相對の藥劑を以つて毒を攻るに非らざれば治し難し。而れども、又、始めより、本劑極むることあり。一もみな、腹診の審らかなればなり。

ここに云う人參芎軍桃花湯は、張満、心下痞硬して、これを按ずれば腹中雷鳴す。此れ大いに白桃花湯の證なり。余、諸州を遊歴して、浮腫腹満のものは治療數多にして、これを覚ゆ。この證、或は鼓脹或は中風半身不隨、みな難治として衆医手を拱かぬ。その毒、積年あつまり一時に発するものなり。

故に浮水を去つて、謹んで、腹底の旧毒を考うるに、凡そ、大承氣湯・或は桃軍圓、或は療癰圓、或は、大黃牡丹皮湯、この四方、過半・大劑を以つて長く攻るに非ざれば治し難し。内經に曰く、「重きものは因つて之を減ず。故に凡そ、積年の患、豈、一藥にして愈ゆべけんや。漸く減じて之を去るべし。云々」と。克、衆病人を療して合するに、此のことはなり。都べて、陳寒痼冷のもの皆かくの如し。

又、云く「凡そ、死證のものを考うるに、予め知るもの三あり。一に云く、臍穴、張り出て英の如し。二に云く、足裏、一面に満ち腫ること甚だしきもの。三に云く、尸惡臭、下利するもの。この三つのもの、一

つもあれば、必ず死す」と。

又、云く「或は此の三、四の方中、一方の證有つて自若として動かざるものあり。或はこの一、二の證ありて、傍ら他證一、二、若しくは二、四兼ねるものあり。その治方、先ずその大なるものを攻むことあり。或は先ず、その小なるものを除き去りて後、大なるものを攻むることあり。又、相互にその證を頭わすときは、相互にその毒を攻むことあり。」と。此等の数件、苟も、診腹に審らかなる者に非ざれば、機に臨み変に應ずること能わず。豈、一時・筆頭の尽すべきことならんや。親しく口授を受けて、刻意苦慮するに非ざれば、その奥に入ること能わず。

9

桃軍圓の證 I (前編上冊)
とうぐんえん



9、桃軍圓の證Ⅱ（前編上冊）

図の如く形ありて、之を按して痛むもの、即ち、この證なり。

世に所謂、男女積聚なるもの、或は勞瘵癆證と号するものにも、間、この證あり。是れ血證なるが故に、或は吐血、下血、痔疾、脱肛、淋瀝、經水不調等の患あるものなり。然りと雖も、其の毒敗れざるものは、さまで患うることもなきもあり。然れども、此の腹證あるもの、桃軍圓を永久に用うれば諸患発することなし。

10

桃軍圓の證Ⅱ
とうぐんえん
(前編上冊)



10、桃軍圓の證Ⅱ（前編上冊）

又、一證、此の図の如く、紐を結びたるが如きもの、之を按せば即ち痛む。亦、桃軍丸の證なり。始めに云う腹證と異なり、其の腹軟かにして知れ難し。心を鎮めて探り求むべし。

凡そ此の證、毒の背紫（背紫は骨肉の相著く所なり。莊子に出づ）にあたりたるときは、大いに下血することあり。驚くべからず、然りと雖も、世医これらの證に至りては、腹證を審かにせざる故に、治を取るのと能わず、終身の患を抱かしめ、又は治せずして夭死に及ばしむ。豈、哀しからずや。

又、曰く。古今の医書、大率、臍より以下を小腹と名づくと。吾が門、臍傍より上腹の左右・少しばかりの所を以って小腹とす。蓋し古今の医書と合わずと雖も、医はもとより実事にして、動かざるところあるを主とするものなれば、即ち毒のある所を以って其の名を定む。

凡そ此の方の證、世に甚だ多きものにして、余、數百人を治して後、其の効をいうものなれば、容ること有るべからず。且つ、吾が師、鶴先生は、東洞翁を慕いたる者なれども、其の門に入らずして、自ら天機の力を以って腹診を究められたるものなれば、其の精妙なる所に至っては、世俗の論の及ぶ所にあらず。

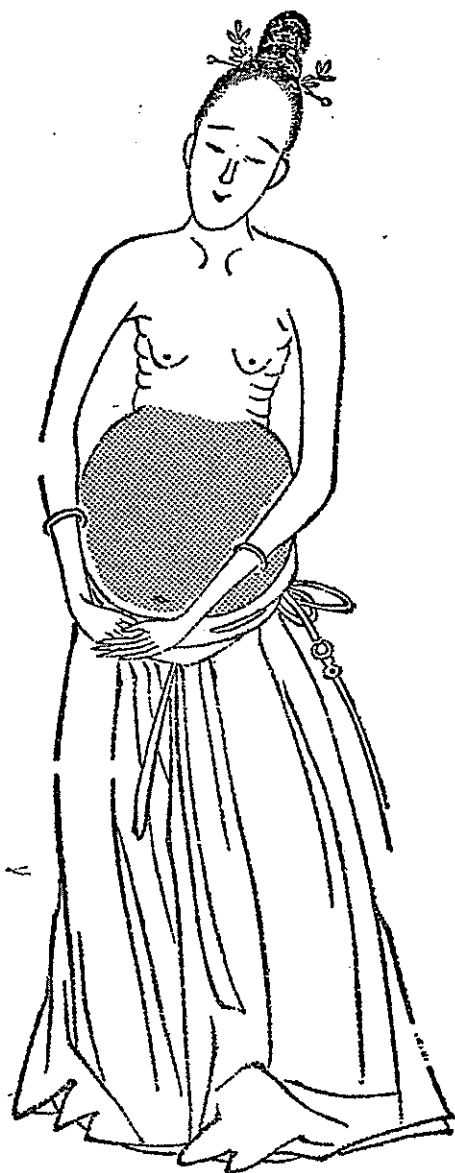
11

括^か蕒^ろ薤^{がい}白^{はく}々^{はく}酒^{しゅ}湯^{とう}の證
(前編上冊)



11、括藁薤白白酒湯の證（前編上冊）

図の如く、胸膈痞塞、喘息、咳唾、及び氣急促迫、胸背痛のもの、克、案するに、旧年喘息を患うるもの此の證多し。或は、勞咳と号して百藥効なきもの、譬えば、大小・青龍湯、或は麻黄甘草湯、或は葛根湯等の證に似て効なきもの、此の證、數多あり。然れども、又此の證に似て茯苓杏仁甘草湯の證、間あり。謹んで診察し過るべからず。その別は心下悸甚だしく、小便不利。これ茯苓杏仁甘草湯の正證なり。心下悸の有無を以て分別すべし。



12

磁^じ石^き丸^{がん}の證
(前編上冊)

12、磁石丸じせきがんの證（前編上冊）

図の如く、手足羸瘦るいすうして腹脹満・所謂鼓脹、顔色黃青白のもの、證に従いて本劑を与え、毎夜此の丸、或は二錢、或は三錢、若しくは小児は五分、毒の淺深厚薄に随つて藥の分量多少、謹んで考うべし。

此の方、もと甲斐の徳本翁十九方中の名方なれども世に知るものなし。余、遊歴りょりきの中、故あつて此れを得る。尤もその効あること、神變しんぺん微妙。学ぶ者、用いて以つて妙を知るべし。其の法方の密なるが如きは、後編に出す。然れども、吾が門に入つて懇請こんしんする人あらば、詳らかに之を伝えん。其の他、詳らかならざるものは之に倣なまえ。

13

橘^{きつ}皮^ひ大^{だい}黃^{おう}朴^{ぼく}硝^{しょう}湯^{とう}の證
(前編上冊)



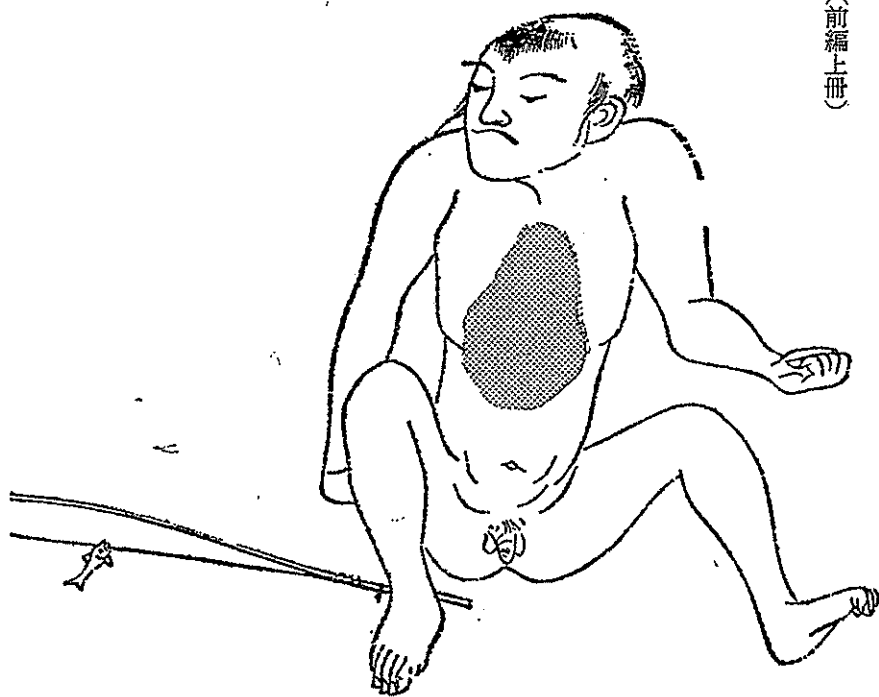
13、橘皮大黃朴硝湯の證（前編上冊）

図の如く、心胸の間、宿食あつて結するもの。

論に曰く。「かいしよく 饑食の心胸の間に在りて、化せず、吐復た出でざるは、速に之を下し、久成の癥病を除け」と。克、案するに、敢て宿食・饑食に限るべからず。心胸の間、これを按じて凸にして堅く、按じて病者痛みを覚ゆるは、これ旧毒あるを以つてなり。此の方の以つて完く治すこと、余薬の及ぶべからざるなり。

14

六君子湯の證
(前編上冊)

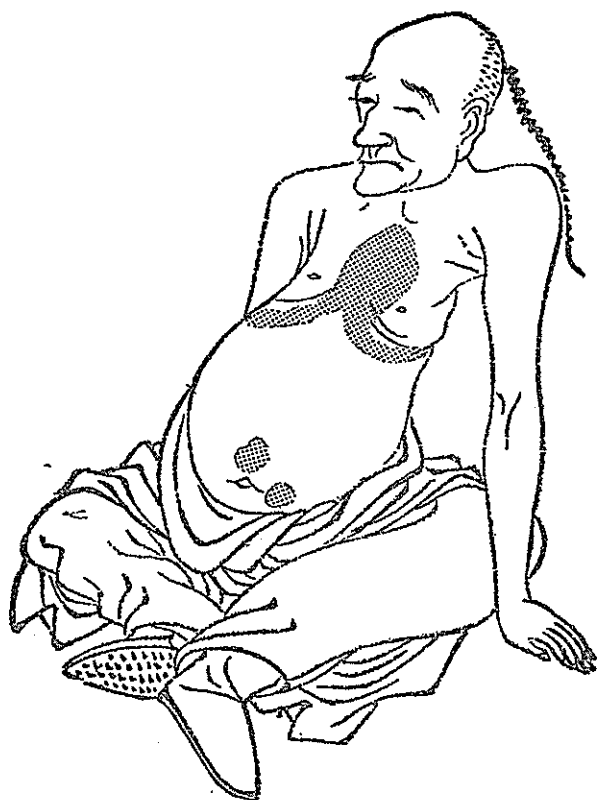


14、六君子湯りっくんしとうの證（前編上冊）

図の如く、中脘より上に腹力ありて、下脘腹力なし。苓りやう姜きやう朮じゆつ甘湯かんとうの腹證に似たり。臍下脱して力なく小便不利、或は氣急促進、その人氣短く、或は事に触れて驚く、或は歩行してよく倒る。尤も小兒にこの證多し。世に痢症と号するもの、此の證、間あり。その余、某々の病、その憂を問わず、この腹に合するものは、六君子湯を用いて治せざるものなし。学ぶ者、用いて以って効を知るべし。

15

大柴胡湯・甘草乾姜湯の證
(前編上冊)



15、大柴胡湯、甘草乾姜湯の證（前編上冊）

図の如く、二方、相合するもの。前の図にいう大柴胡湯。胸脇苦満・腹実満、二方の證に比すれば、大柴胡湯の毒最も深し。甘草乾姜湯の毒、胸中にありて浅しと雖も、まず先に、上より順に治療をなし、後、大柴胡湯を用うべし。大柴胡湯の説は前に詳にあり。

甘草乾姜湯、胸中煩躁急迫、時に涎痰を吐するもの之なり。小便不利、世俗にいう「夜尿たれ」というものの、此の證多し。八味丸の證もまた考うべし。



16

大黃甘遂湯の證

(前編上冊)

16、大黃甘遂湯の證（前編上冊）

図の如く、腹実満して青筋一、二寸ばかりのもの、横に幾筋も染めなせしが如く現れ、腹の色薄赤くして光あり。又一證、前の如く腹脹りて縦に煙を画きし如き青筋、幾筋も生ず。俱に皆、此の方の證にして、即ち所謂、「敦状の如きもの」是なり。敦は「都内の切、音は対。黍稷を盛るの器なり」その図は三才図会および、唐土訓蒙図彙・器用の部に載せらる有虞氏の兩敦これなり。蓋し敦の器たるや、その腹面、脹りて波を画き、煙を画きたるが如き模様あり。此れその形の少しく似たるを以て譬えたるのみにて、直に図と同じには非ず。

此の證、大率・難治なり。然れども、此の方を用うるときは、右の青筋尽く下りて功を奏すること尤も著し。克、数々、此の方を用う。凡そ死症なり。此の症、先ず本剤を二、三劑施し、腹満少しく減ずれば直ちに後服を止め、琥珀湯を投じて以て調和して後、本剤を施す。数々、此くの如くにして救うことを得べし。

琥珀湯の方

琥珀（一匁半） 反鼻（五分） 商陸（生に非らざれば効無し。一匁） 猪苓（八分） 桂枝（一匁）

上衝無き者は、桂を去りて丁子を加う。若し悸ある者は茯苓を加う。水二盞を以て、一盞を取る。

17

大承氣湯の證 I (前編上冊)

前、腹堅満
後、毒堅満



17、

大承氣湯だいじょうきとうの證 I

（前編上冊）

図の如く、腹十分に満ちて、此れを按ずるに堅し。即ち堅満なり。所謂、「傷寒疫利」の類に此の證多し。此のとき大劑だいじょうにして、急速に之を攻むるときは臭穢の毒物下り尽きて後、治すべきなり。

18

大承気湯の證Ⅱ (前編上冊)



18、大承氣湯の證Ⅱ（前編上冊）

又、一證。此の図の如く、敢て腹堅満なるにてもなく、腹の中央に長く堅きものあり。之を按ずるに敢て痛まず。之れ即ち堅塊なり。或は身体羸瘦して堅塊あるものあり。世に所謂、中風脹満、或は勞瘵等に此の證多し。謹んで藥品を改め、數百劑を以つて攻むること、或は半年一年より、二年三年に及ぶものあり。

凡そ、此の證、若しくは燥屎あるものなり。燥屎あるものは、臍下必ず磊砢（ぐらぐら）として、宛も、衆石を包みて上より按ずるが如し。肌膚（はだえ）枯燥（かわき）してばさばさとしたるものなり。或は、時々下利臭穢、或は結糞兔屎の如きものを下す。

總べて何病たるを問わず、腹底中央深く按ずに、底に応えて其の形長きものあるは皆大承氣湯の證なり。さてまた、此の證を攻むるときは、問、脇に引いて掣痛するものあり。此の時は本方を止めて、十棗湯を用い、掣痛治して後、本方に復りて之を攻むべし。これ兼用の法なり。或は此の時に臨んで知足齋の直行丸を考うべし。

小建中湯の證
こけんちゅうとう
(前編上冊)



19、小建中湯の證（前編上冊）

図の如く、腹皮拘急して、縦横教繩を引張りたるが如く、之を按ずるに撓まず、譬えば弓弦を押すが如し。世に所謂、勞瘵癰症、或は薛證と号するもの、此の證多し。

医者、文辭に眩せず、腹證によつて方を処するときは、百發百中、失するということなし。

20

桂姜棗草黄辛附湯の證
(前編上冊)



20、桂姜棗草黃辛附湯の證（前編上冊）

附、枳朮湯の證、及び堅塊・結塊・血塊・解せざるの論

図の如く心下に毒ありて、其の形、円（まどか）なり。所謂、盤の如く、辺の旋杯の如きものこれなり。之を按ずるに、堅くして大承氣湯の堅塊に似たり。然れども、大承氣の堅塊は其の形長きを以て之と別つ。又、図の如く心下堅大なるものに、枳朮湯の證あり。是、其の外證に依つて之を別つべし。此の方の證は、上衝喘急、或は自汗、或は惡寒、或は身痛むものはなり。枳朮湯の證は小便不利なるものはなり。余、諸州を遊歴して、衆病人を療するに、間、此の二方の證あり。これを用うるに、枳朮湯に於ては数々効を得れども、此方に於ては効を得ることなし。依つて之を疑うこと久し。曩に、吉益修夫に謁して問うて曰く「克、古医の術を慕い、諸国を周流して陳病を療するに、十に八、九は治を奏せざるものなし。其の一、二に於て方證相對すと雖も、如何ともすべからざるものあり。之を如何すべきか？」と。修夫答えて曰く、「昔、吾が翁もまた、その事あり、全く大承氣湯の證具りて、數月これを攻ると雖も、稍、微功あるのみにして塊物解せず。翁、依つて考うるに、旁ら、真武湯の證あり。是を以て、真武湯の方内に、附子を倍して、之を与え効を得たり」と。又、土州の医、小松久吾なる者の父某が曰く、「堅塊、血塊、解せざるもの、附子を用いて効を得たり」と。

此等の事ども思い合せて考うるに、桂姜棗草黃辛附湯の方論に云く、「心下堅大なること盤の如く、辺旋

杯の如し」と。東洞翁も云く、「此れ方證、備わざるなり。桂枝去芍藥湯と麻黃附子細辛湯と二方の證の合するものなり。其の分量は桂枝・生姜・大棗各六分、附子三分、麻黃・細辛・甘草各四分、水二盞四分を以て、煮て六分を取る」と。

これに依つて之を見れば、大さ盞の如く回旋盞の如きものは、是塊物なり。凡そ、附子の分量多き方劑には、煎方・水量、他方に比するに、尤も多し。然るに此の方、附子の分量少くして、水煎の分量尤も多し。是れ蓋し伝写の誤ならんと、心に疑ふこと数年。後、東都に遊ぶの日、一病人を診るに正に此の證なり。因つて附子を五倍して与うるに、盞の如き堅塊、速に解けたり。此に於て、多年の畜疑一時に解けたり。後、この證に値う毎に、数々試みて数々功あり。

又、案ずるに、世間に年来難治と稱するもの、或は大承氣湯、或は挑核承氣湯、或は大黃牡丹皮湯、或は芎藭膠艾湯、或は猪苓湯、或は枳朮湯及び此の方の枳類。其の余何等の證を問わず、塊物或は急結、或は結実堅滿の類、大黃・芒硝を以て動くものあり。枳実を以て動くものあり。附子を以て動くものあり。輕粉・水銀を以て動くものあり。

凡そ、方證相對して数月これを攻むると雖も、自若として動かざるものは、皆是所謂、沈寒、痼冷、美痰、病毒なり。是に於て、一概して大黃芒硝の主治と極むべからず。詳らかに診察して、附子の證あらば附子を以て攻むべし。若し夫れ然らざるものは、水銀・輕粉・礬石の類毒を鎔化し下すものに非ずんば、治すべからず。

是に於てか、東洞家の七宝・礬黃、知足齋の瀉心・玉丹。鶴家の滅毒丸。龜井家の三花神祐丸。村瀨家の雲龍散の類。其の余、水銀、輕粉等の組入れたる方劑、其の證を詳らかにして之を用うべし。

然りと雖も、結実堅塊となりたるものは、皆、多年の旧毒、在^{じん}再^{ざい}して凝結したるものなれば、年月の功を積まざれば治を奏することあるべからず。是に於て、病家の其の遲きに疑を起すときは活術を尽すこと能わす。能々、教諭（おしえさとす）して後、藥を与うべし。医を業とする者、此の場を考えて口実（くちしつ）（み）とせずんばあるべからず。」

21

大陷胸湯の證 I (前編下冊)

并大陷胸丸之證
結毒着項背之図



腹證奇覽 前編下冊

21、大陷胸湯の證 I（前編下冊）

併せ、大陷胸丸の證 結毒項背に着くの図

図の如く、胸高く張り出でて、之を按ずるに堅し。

世に所謂、膈噎反胃の類、この證多し。或は、心痛・久年治せざるもの、此の證あり。其の病名を問わず此の證あるときは、皆此の方を用うべし。然れども、此の方を用うるの伝、例えば小腹急結して、桃黄丸の證あるものの如きに、図の如く胸間に毒ありて、凸きものは、先ず此の方を用い胸毒を去りて後、急結を攻むべし。

大^{だい}陥^{かん}胸^{きょう}湯^{とう}の證Ⅱ
(前編下冊)



22、大陷胸湯の證Ⅱ（前編下冊）

又、大陷胸湯を用いるの法は、先ず小陷胸湯を与うるごと、日々二、三服にして、夜大陷胸丸一錢を用い、時々大陷胸湯を以って攻むべし。余證にして胸毒あるものも、また之に倣え。

又、一證。此の図の如く、胸腹より背脊に至るまで其の毒凝結して、痛み甚だしく手も近づくべからざるものあり。是れ毒の厚深にして劇しきものなり。右の法の如く大陷胸丸を以って之を攻むべし。

23

小陷胸湯の證
しょうかんきょうとう
(前編下冊)



23、小陷胸湯しょうかんきょうとうの證（前編下冊）

図の如く胸に毒ありて胸高く、時々胸痛し、或は心煩しんはんし、或は胸脇たふえんかたなく悪く、所謂心痛しんつう嗜雜しそくなどというもの、この證多し。

先ず小陷胸湯を与え、時々大陷胸湯を以て之を攻むべし。或は知足齋ちそさいの直行丸ちゆくちうがん可なり。

又、図の如く頸の廻に毒あり。凝結して痛み、或は痰喘たんぜん、或は項背強急きやうはいきやうきやくするもの、何病によらず、皆南呂丸なりよの治すところなり。之れまた直行丸ちゆくちうがん大いに宜し。考え用うべし。

例えば本剤小陷胸湯の證ありて、傍ら南呂丸かたろの證あるときは、毎夜南呂丸を兼用すべし。大陷胸湯を用うるときは、或は桃黃丸の證ありて傍ら南呂丸の證あるが如きも、また本剤を止めて南呂丸を用うべし。凡て大黃芒硝本剤にあるときは兼用あることなし。已むことを得ざるときは本剤を止めて用うべし。凡そ何れの方によらず、本剤に大黃芒硝あらば此の例を以て考うべし。

24

芍薬甘草湯の證
(前編下冊)



24、芍藥甘草湯の證（前編下冊）

図の如く、腹底引張るものあり、又拘わるものあり。指頭を以つて軽く按して之を知る。拘わるものは拘攣にして、引つ張るものは急迫なり。

芍薬は拘攣を治し、甘草は急迫を治す。或は腰脚に攣り、或は手足に攣りて痛むものに此の證多し。

又、或は世に云う積聚なるものにも此の證多し。何病を問わず拘攣急迫するものは此方を用うべし。

積聚と号するものには、鶴丸、或は三黄丸・解毒丸の類を審かにして兼用すべし。腰脚手足攣り痛むものには、平水丸、或は礬黄丸の類、證に随いて兼用すべし。

然れども、腰脚手足攣るものには間、十棗湯の證あり。十棗湯は掣痛の準拠とし、礬黄丸の惡腫を準拠とす。何れも、病名に眩せず、その證を審かにして誤失すること勿れ。

25

葛根湯の證 (前編下冊)

項背強急劇者の図



25、葛根湯の證（前編下冊）

項背・強急劇だしき者の図

図の如きもの、所謂龜背。俗に僂僂というもの、是れ葛根湯の證の劇しきものなり。

此の證、世に間ありと雖も、医者難治のものとして敢えて療せず。病家も亦た不具の生質なりとして生涯を終らしむ。惜しい哉。男女ともに此の患に罹るもの、人に接りて其の形の醜きを愧じざる者なし。豈哀しからずや。是れ生質なるものと雖も、元是れ病毒の爲す所なり。即ち先天の毒の劇しきものなり。

凡そ天地の間、万物各々淺深厚薄あるものなり。其の淺薄なるものは、庸人（つねのひと）も是れを爲す。其の深厚に至りては人皆及ばざるものとして爲さず。所謂、自暴自棄なり。余、之を憂いて古医道に入り治療を爲すに、其の厚深なるものを救わんと欲す。

図の如くにして龜背と号するものは、一身に毒凝結して、項背強急するものなり。凡そ堅塊、血塊の類。之を按じて痛む者あり、痛まざるものあり。之を按じて痛まざるものは、毒の大なるものなり。此の證亦た毒大なるが故に、項背強急することを覚えす。

是れを治するの法。葛根湯本剤の分量を二倍若しくは三倍にして、水二盞を以て煮て六分を取って之を服す。日々三貼。毎夜、南呂丸一錢目を兼用し、時々大陷胸丸、或は先天滅毒丸、或は凝腐除圓、或は直行丸の類を兼用し、其の毒を吐下し去るときは、其の形、漸々に減じて終に常人となる。然れども、その毒凝

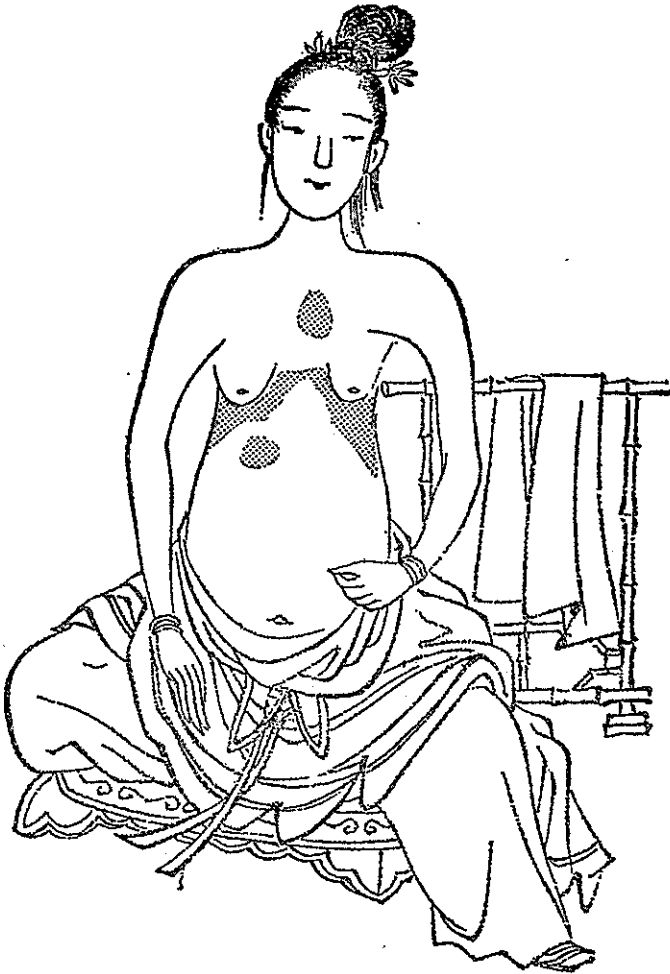
結して大なるが故に、一服薬すること一年或は一年半、甚だしきは二、三年にも及ばざれば、全くは治すること能わず。

余、往年甲州薤崎^{にらぎ}県令の請に因つて、田中^{たなか}に客遊せし日、同州加志加沢^{かしかざら}の邑、喜平次なる者の男^{おとこ}（せがれ）、年十九。此の證を愛い、之に加うるに、両脚攀急して歩行すること能わざるものを療するに、便ち此の方法を以つて、之を攻むること二月余にして歩行することを得、半才余にして龜背の形漸減す。時に余、將に東都に往かんとす。故に多く丸散湯圓を作りて残し置き去る。

余、東都に至りて、京橋南紺街^{みなみこんがやち}に僑居す。喜平次、また書を以つて請うて曰く、「先生の治療を得て、吾が男の龜背日々に減ず。今遣すところの服薬みな尽きたり。願わくは、又、薬を賜え」と。余、諾して本劑及び丸圓を作り与うること、また半才幾り。前後一年余にして、全く治して常人となる。後、門人関宗俊^{せむし}が療するところの病者、また此の證なり。其の令四十ばかり、まだ此の方を用いて三月ならずして全く治す。

26

黄連湯^{おうれんとう}の證
（前編下冊）



26、おうれんとう黄連湯の證
(前編下冊)

図の如く、上腕中腕の辺に塊物に似たるものあつて、時々痛み、心下敢て痞硬せず、食臭(めし)におい(い)をきいて嘔氣を欲するもの。或は曰う、心煩、心下痞硬、嘔吐を欲し、上衝のもの。

論に曰く、「胸中熱あり、胃中邪氣あり、腹中痛んで嘔吐を欲するもの」と。克、案するに、「心中熱あり」とは心煩と思ふべし。「胃中邪氣あり」とは、心下実痞と思ふべし。

27

甘^{かん}遂^{づい}半^{はん}夏^げ湯^{とう}の證
（前編下冊）



27、甘遂かんすい半夏はんげ湯とうの證 (前編下冊)

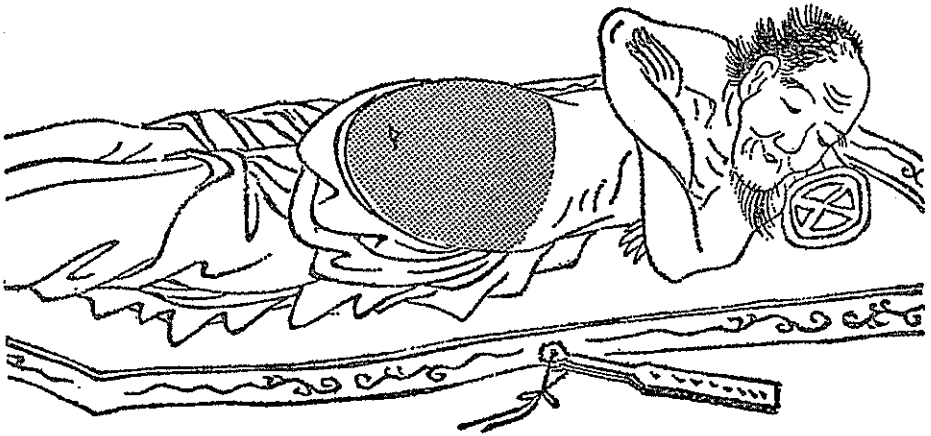
図の如く、心下の毒硬満どくこうまんして、或は便閉べんぺい、或は下痢すと雖も硬満已まず、食すと雖も心下より下らず、或は心下痛み、或は氣急促迫ききゅうそくぱく、或は脚弱歩行を憂う。譬えば、桂枝人参湯、或は朮防已去石膏加茯苓じゆつぼういきよせうかうふくろう硝湯、或は枳朮湯、或は桂姜草薢黃辛附湯、或は調胃承氣湯等の證に似て諸藥如何ともすべからざるもの。此の方、謹んで考うべし。

旧に余、此の證の一患人いんじんあつて、此の證を誤り、前に云う表方を用いるも効を得ず。昼夜困苦して以つて漸く此の方を与え、二十余劑を以つて、数年の患人全く愈ゆ。其の後、此の證の者に逢うごとに、數効を得ること譬るものなし。其の腹診の詳らかなることは口授あつて存す。

28

大^{だい}黄^{おう}甘^{かん}草^{そう}湯^{とう}の證^{しるし}
(前編下冊)

~



28、大黃甘草湯の證 (前編下冊)

図の如く腹滿すと雖も敢えて実せず、大便秘のもの。

論に曰く。「食し已れば則ち吐するもの、大いに効あり」と。克、案するに、本文にいう「食し已れば則ち吐するもの」とは、所謂反胃膈噎なり。

この證、間あり。我が門、これを用いて二、三子効を得。学ぶ者、用いて以って効を知るべし。或は曰く。「秘閉急迫は、是れ又、腹診考うべきなり」と。

29

厚朴三物湯の證（前編下冊）
こうぼくさんもつとう



29、厚朴三物湯の證 こうぼくさんもつとう
(前編下冊)

図の如く、臍の底、臍の辺に亀の甲の如く堅きものありて、之を按ずるに胸に応え、嘔氣を覚ゆるもの、是れ此の證の目当たり。

又、曰く。胸腹の満結実、或は痛閉の者。

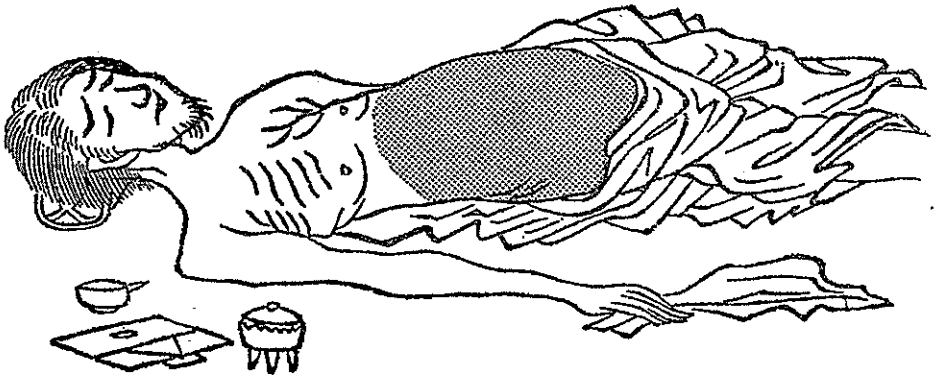
又、曰く。頭痛、百葉を以つても治せざる者に効を得。口授ありて存す。

或は曰く。腹満、心下痛んで大便通ぜざる者。

又、曰く。心下満痛し水を吐出す者。

30

乾姜附子湯の證（前編下冊）



30、乾姜附子湯の證
(前編下冊)

図の如く、煩燥し食せず、その状如何ともすべからざるもの、自ら患うる所を知らず、一身尽く寒え、昼夜氣急促迫、その余腹診伝あり。甚だしきものは凡そ死證なり。

論に曰く。「之を下すも、後復た、汗を発す。昼日は煩燥し眠ることを得ず、夜にして安靜なり。嘔せず渴せず、表證無く、脉は沈微、身に大熱無き者」と。克曰く、「本文、大凡、備われり」と。

芎歸膠艾湯及猪苓湯の證（前編下冊）



31、芎歸膠艾湯および猪苓湯の證（前編下冊）

図の如く小腹に物ありて、之を按ずれば痛む者、即ち此の證なり。然れども、按じて痛むもの桃軍圖の證ありて紛れ易し。桃軍圖の證は、之を按ずるに、腹底に応えて、力ありて堅く痛む。即ち、急結の二字を思い合すべし。此の證は、按ずれば痛むと雖も、急結にあらず。故に、堅く応うるものなく、只、少しく拘攣あり。方中芍藥あるを以て思ふべし。且つ、桃軍圖より多味にして、甘草の分量少なきを以て分つべし。

凡そ、此の證、間、腹痛むものなり。或は大いに下血漏下などすることあり。余、跋涉に勤め、大いに苦んで此の證を得たり。甚だ分ち易からず。若し、桃軍圖との分ちを知り極めんと欲せば、之を按じての痛み、下へ引いて痛むものは此の證なり。上へ引いて痛むものは桃軍圖の證なり。上下へ引いて痛むものは、二方の證相合するなり。（解毒丸、芎黃の類を兼用することを考うべし）

又、猪苓湯の腹證も、図の如く小腹に物ありて、之を按ずれば痛む。是れ、大に膠艾湯の腹證に似たり。故に、外證を以て之を分つべし。然れども、外證は頗る五苓散と紛るることあり。其の血證の有無を以て察すべし。猪苓湯は血證あり。冒瘴して渴し、小便不利、腹中満、之を按ずるに軟にして膠艾湯の證に似たり。

余、この腹症を理會せざること多年。曩に、三箇島（武州入間郡）に遊んで眼科鈴木良碩を主とす。一病

婦ありて治を乞う。診しくておもえらく、芎歸膠艾湯の證なりと。因つて數劑を与うるに功なし。其の後、良碩・五苓散を用い、深く苦心して猪苓湯を与うるに數劑、終に全功を収む。余、これを聞いて再び三箇島に到り、良碩と共に論定して、遂に此の一證を得たり。

要するに、膠艾湯の腹證に似て腹部軟満にして口渴し、小便不利、時々膿血を便にす。是れその證なり。嗚呼、良碩なる者、吾が門に於いて拔群の良才なる哉。余、結髪してより、この技に刻意すと雖も、一腹證を得るに許多の螢雪を経れば定め極むること能わず。然るに、良碩は一朝にして此の腹證を得たり。吾が門にして斯くの如き人才を得ること、豈、天の寵靈にあらずや。然かのみならず、良碩は眼科を業として、祖先已來、眼目を療すること億万何の限あらん。良碩に至るも猶且つ安んぜず、広く生民の疾苦を濟うの志を起し、余を迎えて腹證を学び、幾程ならずして其の蘊奥を極め、是れ等の證を理解す。実に、崑山に入りて尺璧を得るもの、亦た祇、積善の余慶なる哉。

32

苓桂れいけい朮じつ甘湯かんとうの證
(前編下冊)



32、苓桂朮甘湯の證（前編下冊）

図の如く心下に毒ありて悸し上衝し、起れば即ち頭眩し、小便不利、或は心煩、或は辭々として志氣安からざるもの、此の證なり。何病を問わず、心下悸し、小便不利を準拠として此の方を用うべし。

又、苓姜朮甘湯は、臍下悸して身体重く、腹冷え、水中に坐するが如し。その余諸患ありと雖も、臍下の悸を準拠として苓姜朮甘湯を用うべし。

悸は動より小さく、之を知ること至って難し。診するの伝は、胸より静かに手を下し、病人の臍に指頭の当るや当らざるやにして、之を窺う。若くは、臍下腹底に少しき動あり。垂帶の風に動いて手に触るが如し。手脈に譬うれば伏沈にして遅なるが如く、至って微なり。

又、面部手足身体のひりつき、いやぐり、動くことあり。是れ肉瞤筋惕なり。或は振々として地に擲たんと欲し、或は起れば則ち頭眩するもの、皆、悸するの毒のなす所、茯苓の主證なり。

悸の字、心動と訓す。詩の衛風芄蘭の篇に「容兮。遂兮。垂帶悸兮。」（朱氏注・悸とは帶の下垂する貌なり）と。蓋し、垂帶の歩むに従いえヒラリ、ハラリとする貌なり。之を腹證に当考うるに、その字義実相符す。豈、それ彷彿たるものならんや。誠に古人の字を用うるに苟もせざることを見るべし。

又、苓桂甘棗湯は、心下及び臍下に悸ありて、欬急上衝するものなり。唯、この三方のみにあらず、傷寒

論に載する所、茯苓ある方は、心下悸或は肉瞤筋惕等、方を明らかにして詳らかに察すべし。故にここに略す。

案するに、苓桂朮甘湯は、芎藭散・三黄丸・解毒丸の類を考え兼用すべし。苓姜朮甘湯は平水丸兼用考うべし。

大^{だい}黄^{おう}牡^ぼ丹^{たん}皮^び湯^{とう}の證^{しやう}
（前編下冊）

附^つ臍^し下^げ之^の毒^{どく}
診^{しん}察^{さつ}之^の論^{ろん}



33、大黃牡丹皮湯の證 (前編下冊)

付、臍下の毒、診察の論

図の如く臍下に毒有りて、之を按すれば痛むもの、即ち此の證なり。所謂、經閉、血塊の類。或は乳岩、男女諸惡瘡を發し腐爛するもの類に此の證多し。其の余、何病を問わず、臍下堅塊ありて之を按すれば痛むものは皆此の證なり。

又此の方のみに限らず、桃軍圓、或は癥瘕圓、或は芫花膠艾湯、或は葛根加大黃湯の類の諸證に、世に所謂、腐骨疽、乳岩の類、難治と稱するもの。其の余諸般の惡瘡腐爛するもの多し。ここに於ては、皆、丸散兼用し證に随つて用うることを忽せにすべからず。

例えば、惡瘡腐爛するものならば、先ず腹證を審らかにして、本剤を与えること四、五日、毎夜伯州散二錢或は三錢を兼用し、時々、梅肉散を以て攻むること、毒の厚薄に随つて、或は二分、三分より五、六分。甚だしきものは一錢以上に至り之を用う。若くは、其の毒大にして腐爛甚だしく、膿汁出るものの類は、雲龍散に輕粉を加倍して之を与えれば、口中腐爛して食し能わざるを一句、或は二句にして治すべし。尚愈えざるものは、口中腐爛止みて後、前方を用い、毒の愈ゆるを度とすべし。然れども、大黃牡丹皮湯を服するうちは、本剤に大黃、芒硝ある故、兼用の方を投ずべからず。若し、右の如く傍兼用の證のあるときは、本剤を止めて用うべし。然しながら伯州散は本剤に同じき寒なき故、毎夜兼用して可なり。梅肉散は峻劑(強

き薬）なれば、五日若しくは七日を隔て用うべし。

案ずるに、右の外、臍下に毒あるもの、前に云う所の苓姜朮甘湯及び赤石脂禹余糧湯・八味丸等なり。赤石脂禹余糧湯は、臍下を按ずるに軟にして痛み、下痢或は膿血を便するものなり。又、臍の上下左右、按ずれば皆痛むものもあり。八味丸は、臍下不仁して小便不利なるものはなり。

34

癥瘕圖の證
(前編下冊)



34、癥瘕圓の證（前編下冊）

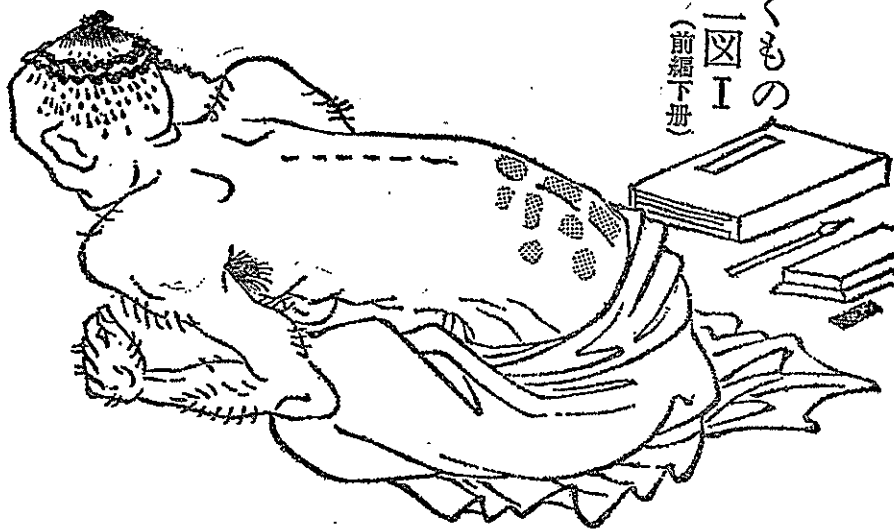
図の如く臍を遶りて動あり、これ所謂、胎動なり。天下の人、十に六、七は此の患あらざることなし。病未だ発せざるうちは、さまでに患い煩うことなけれども、若し此の病発するときは、世に所謂、中風、勞瘵等の患をなす。鬱々として心煩上衝し、起てば則ち頭眩し、或は肉膈筋惕、小便不利・血證等の諸症を頭す。一に皆、胎動を以て準拠として、此の證を極むべし。甚だしきものは、胎動上りて心胸に迫るを覚う。是れ所謂、奔豚氣なり。之を診うの伝、中指の本節を臍穴にあて指頭をかけて按すこと、或は重く或は軽くすれば、胎動なるもの臍底より到るを考うべし。

35

胸腹之毒凝結し背に着くもの

二図 I

(前編下冊)



35、胸腹の毒、凝結して背に着くⅠ（前編下冊）

何れの證によらず腹證を診いて、毒の厚深凝結したるものは、皆、背に着くなり。

之を治するの法は、先ず腹證を按じて毒の在る所を知り、その凝結する所に仮点をうち、紙線（こより）を以って背後へまわし、脊骨の中央にまた仮点をうち、是れに倣いて左右若干の所を指頭を以って之を按ずるに、腹中応うる所あり。即ち其の上に点し、灸すること一穴五十壯づつ七日或は二七日、又は三七日に至るときは、其の毒動きて腹張りいずるものなり。この時、證に随いて藥劑を投じて之を攻むべし。若し動かざるときは、また灸して止まず、動くに乘じて之を攻む。是れ古の法なり。斯くの如くにして、病毒動かざることなし。然れども、腹證を診ること審かならざるときは、法の如く灸すとも功なし。医者、豈、腹證を忽せにすべけんや。



36、胸腹の毒、凝結して背に着くⅡ（前編下冊）

又、一證。図の如く、胸毒深厚にして動かざるもの、或は心痛背に徹して痛むもの、其の毒の凝る所へ仮点をうち、是れに倣て右の法の如く指頭を以て之を接じ、痛む処へ点をうち、灸をすること、前の法の如くして、後、本劑兼用・丸散等を以て之を攻むべし。

是れを定むるの伝。指の横はらの頭にて弄い按すに、自然に凹なる所あり。是れ愈位とす。又、徹して痛み応うる所を愈位とす。是れ其の毒の所在なり。

且つ夫れ、古昔の経絡・愈穴、禁穴あることなし。靈樞に云く、「痛を以て愈位と為す」と。是れ乃ち天然自然にして、愈位あるものなり。故に是れを「天応の穴」と云うなり。疾医家、知らんずんばあるべからず。

37

薏苡^{ぎい}附^ぶ子^し敗^{はい}漿^{じやう}散^{さん}の證
(前編下冊)



37、薏苡附子敗漿散の證（前編下冊）

図の如く腹腫ること脹満に似たり。其の膚甲錯、腹皮急し、之を按ずるに軟なり。甲錯は、鑿の錯わりたる如く手に当りて粗きものなり。此の證、世に間あり。方證相對して攻めざるときは、年月を経ると雖も治せず。

往年、浪華・谷街某の妻、歳二十六、七。此の證あり。治せざること三年、衆医皆手を束ねて治療の術を失う。後、余に治を請う。往きて診するに、腹満して身重く胎孕の如く、必ずしも尊臥することなければども、心煩して歩行すること能わず。余、その頃、腹診未熟なる故、誤つて腹満なるものとして、大承氣湯を以つて之を攻むるに功なし。因て、大柴胡湯を与うること、凡そ半年余なるも始に變ることなし。是に於て病家その功なきを以つて、憊然として謂つて曰く。「足下、平常大言を吐く。然れども今その驗なし。然るときは、他医亦、いずくんぞ治すべけんや。生涯廢人たらんこと疑いなし。嗚呼、悲歎に堪えず」と。余、之を聞いて、其の言行一致せざることを愧じて、余が先師、鶴先生に告ぐ。先生、乃ち住いて之を診し、大いに余を責めて曰く。

「汝、古医の術、未熟なるが故に、病者あらば必ず我に告げて、而る後に治療を施すべしと云いおけり。然るに、汝、我が言を用いず、自是として、其の腹證を審らかにせず、妄りに是くの如き峻劑を投じ病者を

苦しましむ。術を慎します師を侮るの罪、大なり。世に汝が如き拙技の者ありて、大いに我が古医道を索る。惡むべく哀しむべきの甚だしい哉」と。

因つて教えて曰く。「此の證、腐甲錯、腹皮急、之を按ずれば軟なるもの、是れ薏苡附子敗漿散の證なり。汝が先に用ゆる所の大承氣湯、大柴胡湯の證、何くにか在る哉。汝、是を以つて後來の誠とし、輕忽を謹しむべし」と。余、大いに其の罪を謝し、教に従つて右の方を与う。僅かに、二旬許りにして其の疾、頓に愈ゆ。余、因つて、深く腹診の易々ならざるを曉り、茲より益々精研して、後來、大いに術に進むことを得たり。」

38

四逆湯の證
（前編下冊）



38、四逆湯の證 （前編下冊）

図の如く腹滿して軟。之を按ずるに力なく、腹体、或は心下底に応うるの毒なく、又肌膚は潤なく、甲錯して、俗にいう鯁肌さざねの如く。手足逆冷、或は厥冷し、且つ腹底冷え、或は臍下関元の辺不仁ふじんにして、腹底に力なし。又云く、腹底攀急、或は下痢清穀、或は小便不利、その余、本文を以って考うべし。

39

灸治法
（前編下冊）



39、灸治法
(前編下冊)

図の如く、項背の若干^{そこはなみだか}凸にして拘攣、或は項背強急。是れ皆な胸毒甚だしくして、諸藥方證相對すと雖も、全く治せざるもの間^まあり。その毒深きを以って背に着^つく。所謂、毒陰分^{いんぶん}に著くものは是れなり。之に灸するの法は、その凸なる所、骨を外れて、指の腹を以って之を按ずるに、病者応ゆる所、皆、毒なり、指頭の陷没徹底する所、之に皆灸すること、一穴に二、三十壯。或は七日、或は二十一日。灸して以て證に随い、方劑を以ってを攻む。治せざることなし。

40

抵當湯或抵當丸の證
（前編下冊）



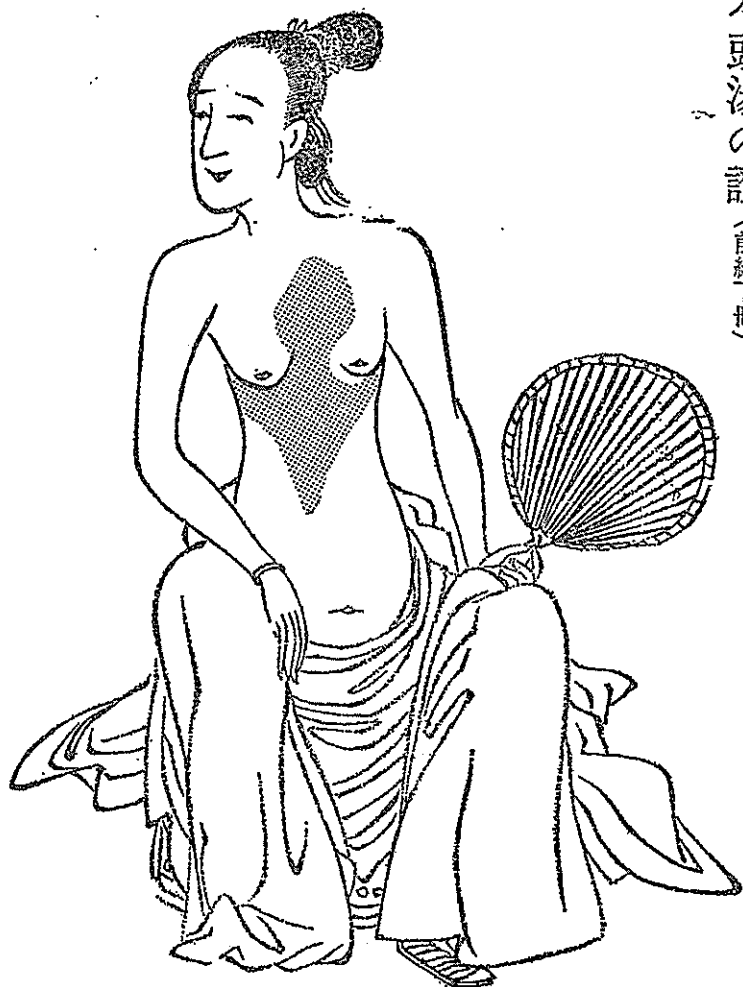
40、ていとうとう 抵当湯、或は抵当丸の證（前編下冊）

図の如く、腹中軟満にして物あり。雞子殼けいしやくの如きもの、水中に浮びてあるが如く、之を按ずれば則ち沈み、手を去るに随つて浮ぶ。或は之を按じて傍へ去り、その数は或は一・二、或は五・六。其の人の面顔唇手足、共に青白色に透き通る如くして沢なし。或は黄色なる容は勞瘵ろうさいの如し。

小便利、大便是硬きも反つて易し。其の色黒く、或は塊物の臍下臍傍、或は陰門、或は陰莖いんきやう辺、或は小腹、或は腹中来去遊走のもの、又、本文の如く腹は滿せざるに其の人「我は滿す」と言う者に用う。

41

梔^し々^し頭^し湯^{とう}の證^し
（前編下冊）



41、梔子しし豉湯ししとうの證（前編下冊）

図の如く心下空、之を按ずれば軟。心中ちゅうけつ窒結痛、時々煩熱し手足温。若しくは甚だしきものは心中懊憹、
その余は伝あつて存す。

又、曰く、「梔子甘草豉湯の證、梔子豉湯の證にして、氣息きそく吸々として將に絶せんとするの状の者」と。
其の余、梔子生姜豉湯、或は枳實きじつ梔子豉湯、梔子大黃豉湯。皆、前の梔子豉湯の證を以て之を推す。然りと雖も、豉の分量、梔子の分量有無、余藥の有無は以て謹んで考うべし。自ら其の正證を得。

42

梶実の證
（前編下冊）



42、樞実かいじつの證
(前編下冊)

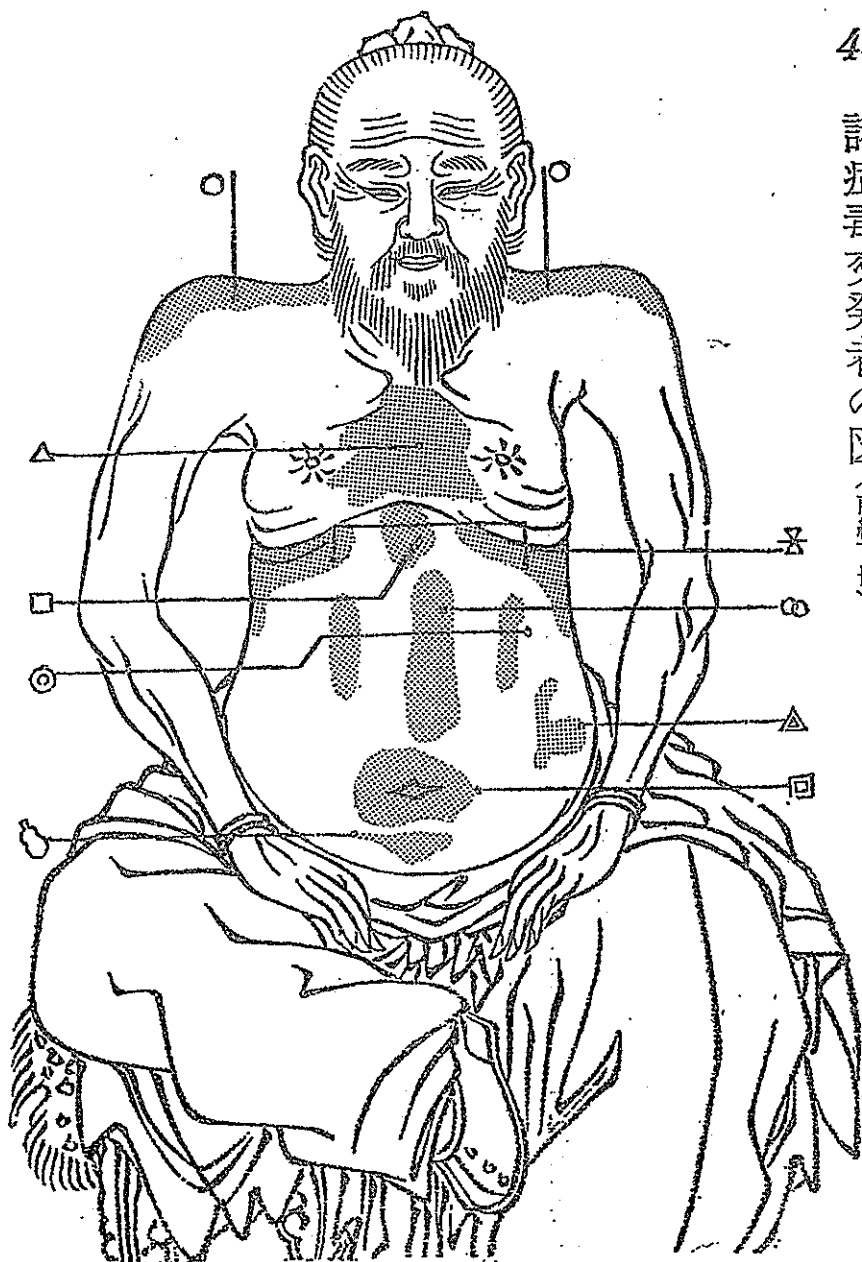
図の如く、簾を横に巻きたる如く、堅かたに筋ありて、其の筋は凸なり。或は腹痛、或は陰囊に引き痛む。世に疝氣と号する者、此の證至いたつて多し。或は張満、或は鼓脹し百藥を以つても治せざるもの、此の腹證に合するときは、右の方を以つて治せざることなし。或は大腹痛の百藥効なきもの、其の余、何病を問わず此の腹證に合するもの、皆治せざること無し。

樞実の方

樞実かいじつ(皮を去つて百六十錢)

空心くうしん(すきはら)に服すること十五日、證に随つて藥劑を投ず。服し了りて、二丈余の細長きものを下せば全く愈ゆ。余、遊歴中に、尾州名古屋、某に此の方を得る。尤も数々用いて、数々効あり。妙劑と謂うべし。

諸症毒交発者の図 (前編下冊)



43、諸症毒交発する者の図 (前編下冊)

○葛根湯、或は括蓼薤白白酒湯、或は茯苓杏仁甘草湯

△小陷胸湯、大陷胸湯、或は大陷胸丸

□桂枝人参湯、或は徳本家理中湯

ㄥ小柴胡湯、或は亦大柴胡湯

①大承氣湯

◎柴胡加芒硝湯

△桃軍圓

□瘀瘕圓

も大黃牡丹皮湯

右の方書は、世に知らるる所なり。古方分量考、或は古方便覽等を以って知るべし。

右図の如く諸證毒い、ちどに発するもの、必ず死す。

此の書に挙げざる所の腹證並に甲斐州徳本翁とくほん十九方の伝、其の他諸州遊歴中得るところの諸名家の奇方は、他日を待って後編に出す。

湖南・稻葉意仲克文礼・著 画

吉備 旭江淵白龜・画

寛政十二庚申夏五月（一七九九）

和州書林 高田

大阪書林 心齋橋通・北久太郎町北入

大坂書林 同南久宝寺町北入

本屋源左衛門

河内屋喜兵衛

塩屋平助

腹證奇覽上冊 分量考

古より、倭医の分量考、多しと雖も、瘧疾重病を療するに至りては、大服、濃煎に非ざれば効なし。故に予の分量考は、病重き者は必ず増して用う。軽き者は略して之を処すも効あり。是れ則ち、古人処劑の意なり。

1、桂枝湯の方

桂枝・生姜・大棗・芍藥（各九分） 甘草（六分）。

右、水一盞四分を以て六分に煮取り、一度に服す。

2、4、小柴胡湯の方

柴胡（一錢） 黄芩・人参・甘草・生姜・大棗・（各四分強） 半夏（一錢強）

右、水二盞四分を以て、一盞二分に煮取り、滓を去て、再び煎じ六分にとり一度に服す。

3、大柴胡湯の方

柴胡（一錢） 黄芩・芍藥・大棗（各四分） 半夏（一錢一分） 枳實（五分強） 生姜（六分強） 大黃（三分

弱）

右、水、小柴胡湯と同じ。伝に云う。「大柴胡の證にして、下利の者は大黃を去る」と。

4、柴胡加芒硝湯の方

柴胡（一錢） 黄芩・芍藥・大棗（各四分半） 半夏（一錢二分） 枳實（五分半） 生姜（六分半） 大黃

（三分強）芒硝（七分半）

水、小柴胡と同じ。

5、呉茱萸湯の方

呉茱萸（二錢強）人參・大棗・生姜（各一錢半）

右、水一盞四分を以って四分に煮とり、一度に服す。

6、人參芍薬桃花湯の方

桃花（白桃花は半開に非れば効うすし。二錢五分）大黃（一錢）人參・川芎（各四分半）

右、水一盞半を以って六分に煮とり、一度に服す。

7、10、桃軍圖の方

大黃（二十錢）桃仁・桂枝・甘草（各十錢）芒硝（十二錢）蕎麥（五錢）

右末となし、練蜜に和して丹となす。此の方は傷寒論に云う、桃仁承氣湯なり。此の如くにして、其の効ある故に、丹にするなり。

8、括萎薤白白酒湯の方

括萎仁（四分半）薤白（二錢九分）白酒（常の酒なり）

右、水一盞と酒一盞とを以って六分に煮とり、一度に服す。

9、磁石丸の方

磁石・大黃（各十二錢）浮石・桃仁（各六錢）

右、末となし、小豆の大きさの如く丸くす。毎夜一錢、或は一錢半を、白湯を以って送下（のむ）す。

〔右、徳本家の薬品分量と少しく違えるも、効多し。〕

10、橘皮大黃芒硝湯の方

橘皮（七分半） 大黃・芒硝（各二錢四分）

右、水一盞八分を以って六分に煮とり、一度に服す。

11、六君子湯の方

人參（蔓人參可なり）・白朮・茯苓・半夏・陳皮（各一錢二分） 甘草（四分）

右、水一盞半を以って六分に煮取り、一度に服す。

12、甘草乾姜湯の方

甘草（二錢） 乾姜（二錢一分）

右、水一盞半を以って六分に煮とり、一度に服す。

13、大黃甘遂湯の方

大黃（二錢四分） 甘遂・阿膠（明の硯出に非ざれば効薄し）（各一錢二分）

右、水一盞八分を以って六分に煮とり、滓を去り、阿膠を入れ消しめ、少しく冷し甘遂の末を入れ、頻に服す。

14、大承氣湯の方

大黃（二錢二分） 厚朴（二錢四分） 芒硝（六分） 枳實（二錢五分）

右、水三盞を以って二物を煮、一盞半に取り滓を去って、大黃を入れ六分に煮取り、滓を去って芒硝を入れ消しめ、一度に服す。

15、小建中湯の方

芍薬（一錢四分） 桂枝・甘草・大棗・生姜（各八分） 飴（三錢五分）

右、水一盞四分を以って、六分に煮て滓を去って、飴を入れ消しめ、一度に服す。

16、桂姜棗草黄辛附湯の方

桂枝・生姜・大棗（各八分） 麻黄・細辛・甘草（各五分半） 附子（一錢三分半）

右、水二盞四分を以って六分に煮とり、一度に服す。

腹証奇覽下冊 分量考

17、大陷胸湯の方

大黄（一錢二分） 芒硝（六分） 甘遂（五分）

右、水一盞八分を以って大黄を入れ、六分に煎じ滓を去って、芒硝を入れ一・二沸よして解けて後、甘遂の末を入れ、一度に服す。

18、大陷胸丸の方

大黄（八錢） 葶藶・芒硝（各十六錢） 杏仁（六錢）

右、末となし彈丸の大きさの如く丸くす（但し四錢なり）。

甘遂末（一錢） 白蜜（三錢九分）

右、水一盞二分を以って六分に煎じ、滓を去って甘遂末を入れ、一度に服す。

〔東洞、大陷胸丸の方を按ずるに、大黄一錢六分、杏仁・芒硝各一錢、甘遂二錢なり。曰く。〕葶藶は眞贋

分ざるを以って甘遂を倍加す。右、末となし練蜜を以って丹とす。」と。克案するに、葶藶の真贋分ざるを以って、白芥子に替えて可なり。古方控涎丹に白芥子を用いるを以って考うべし。

19、小陷胸湯の方

黄連（五分半） 半夏（二钱七分） 栝蒌仁（八分）

右、水一盞八分を以って、栝蒌仁を煮て九分に取り、滓を去って、二味を入れ六分に取り、一度に服す。

20、芍薬甘草湯の方

芍薬・甘草（各一钱八分）

右、水一盞二分を以って六分に煮とり、一度に服す。

21、葛根湯の方

葛根（一钱） 麻黄・大棗・生姜（各七分半） 桂支・芍薬・甘草（各五分半）

右、水二盞を以って六分に煮取り、一度に服す。

22、黄連湯の方

桂支・甘草・黄連・乾姜・人参・大棗（各五分半） 半夏（一钱二分）

右、水二盞を以って一盞二分に取り、滓を去って再煎し六分に取る。日に三服、夜に二服す。

23、甘遂半夏湯の方

甘遂（二分） 半夏（一钱二分） 芍薬・甘草（各八分）

右、水一盞六分を以って四分に取り、蜜四分を入れ煎じて六分に取り、一度に服す。

24、大黃甘草湯の方

大黃（一錢四分） 甘草（四分半）

右、水一盞二分を以って四分に煮取り、一度に服す。

25、厚朴三物湯の方

厚朴（一錢六分） 大黃（八分） 枳實（一錢）

右、水二盞四分を以って二味を煮て一盞に取り、大黃を入れ六分に取り、一度に服す。

26、乾姜附子湯の方

乾姜・附子（各一錢）

右、水一盞八分を以って六分に煮とり、一度に服す。

27、芎歸膠艾湯の方

川芎・阿膠・甘草（各四分半） 芍藥（八分半） 艾葉・當歸（各六分） 乾地黄（一錢二分）

右、水一盞と清酒とを以って六分に煮取り、滓を去って消しめて、一度に服す。

28、猪苓湯の方

猪苓・茯苓・阿膠・滑石・沢瀉（各八分半）

右、水一盞二分を以って六分に煮とり、阿膠を入れ消しめて、一度に服す。

29、苓桂朮甘湯の方

茯苓（一錢二分） 桂枝（一錢半） 朮・甘草（各七分半）

右、水一盞二分を以って六分に煮とり、一度に服す。

30、大黃牡丹皮湯の方

大黃（一錢二分） 牡丹皮（九分） 芒硝・桃仁（各六分） 瓜子（かも瓜の子なり。一錢五分）
右、水三盞六分を以って六分に煮とり、滓を去って芒硝を入れ消しめて、一度に服す。

31、癰瘤圖の方

茯苓・大黃（各二十錢） 牡丹皮・桃仁・芍藥・桂皮・當歸（伊吹可なり）（各十錢）
右、末とし、練蜜を以って丹となす。

32、薤苳附子敗壞散の方

薤苳（二錢） 附子（四分） 敗壞（一錢。女郎花の根なり。花白し。黃花を男郎花おとめしと云う。若し、この物
なくば、刈安かりやすを替えて用いて効あり。）

右、散となし一錢を、水一盞二分を以って、煮て半ば減らしぬ頻しばしばに服す。

33、四逆湯の方

甘草（八分） 乾姜・附子（各六分）

右、水一盞を以って四分に煮とり、一度に服す。

34、抵当湯の方

水蛭・蜚虫・桃仁（各七分） 大黃（二錢）

右、末となし、水一盞を以って六分に煮とり、一度に服す。

35、抵当丸の方

水蛭（二錢五分） 蜚虫・桃仁（各二錢） 大黃（六錢）

右、末となし糊丸す。六分或は一錢を温酒を以つて送下（のむ）す。

36、梔子鼓湯の方

山梔子（六分） 香鼓（一錢九分）

右、水一盞一分を以つて、先ず山梔子を煮て七分に取り、滓を去つて香鼓を入れ、煮て四分にとり一度に服す。

克曰く。此の書は、世の沈痼痼疾と称して、医薬の治すること能わざる者を療する為に著す所なり。

医薬も治すること能わざるは、是れ其の病毒あつく積むを以ての故なり。因りて、其の薬を投ずるも、尋常の規矩に拘わらずして、其の毒に應じて薬湯の分量を増加せざれば、効なきことを知るべし。故に其の薬力、病毒に敵せざれば治せず。敵する時は、必ず瞑眩す。所謂、「薬・瞑眩せざれば、厥の病癒さるものなり」

又、世に、某々の薬を与えるも、病者拒むを以つて受けずと云う者あり。是れ則ち、方症相敵するを以つて、病毒之を拒むなり。たとえ、薬を与え、直に嘔する者と雖も、強いて用うべし。良薬は口に苦くして病に利あるを知るべし。五雜組に「江左の商人、左膊上に人面瘡あり物を食う。医者、薬石を試みることを教うるに皆苦しむことなし。唯、貝母に至りては口を閉じたり。口を抉りて灌げは、遂に瘡を結んで愈ゆ」と。是れ、其の薬、病毒に的（あた）る（中）する故に之を拒むの証なり。予・衆病者を療するに、此の如きこと甚だ多きを以つて、定極することあり。故に嘔して飲まず・拒んで受けずと雖も、医人、必ず方症相對す

るの藥を用い、病者に阿^いりて妄^まりに分量を増減せず、善^よく告^つげ諭^{まじ}し用い得て、其の効を奏すべし。
享和元年酉七月（一八〇二）

享和元年酉七月

高田

和州書林

本屋源左衛門

心齋橋通北久太郎町

河内屋喜兵衛

大坂書林

同 南久金寺町北入

塩屋平助

腹證奇覽後編 上冊

湖南 稻葉克文禮父 著

余つらつら腹證の診察を以て難治と称するを考うるに、凡そ腹底より動氣する者多し。或は臍底臍下臍の両辺、或は小腹、或は心下・心上・胸膈に動氣を發し、又は奔豚氣腹底より起りて、甚しき者は死せんとす。此の如き類あげて教うべからず。

余諸州に奔走し、之を患るものを治療し以て按するに、凡そ世に癰と号する者、或は小兒の驚風と称する者かくの如き症を發する者多し。此れに因て之をみるに、諸病みな一毒にして諸患をなす事を知れり。

皆狀に因りて其の名を命するなり。しかるに是等を治するの方。天然自然、術有りて治すべき事なり。然るを今世医家者流の治療する所を見るに、速かに之を治するは甚だまれなり。たとい治すといえども四五日にし復發し、他日にし又發す。是に於てみな云う。「癰は治すべからざるものなり」と。

たまたま諸州中に名家ありてその治効を奏すると云うを聞くごとに、余敬て行き教をこい、之を得て療せんとするに、皆脈を主とし、或は五行の論を以て教をなす。

余謹んで此の教を奉じて治を施すに、彼は治し此れは治せざる者多し。是に於て診脈五行の論はみな空論にして、病を治するの實用たらざる事を悟れり。

故に余腹診の術を以て方法を考えて、その規模を立つ。実に十に八九中^{ちゅう}らざる事なし。
然りといえども、是余が自ら知る所に非ず。天然自然の治法にして、なま喚^{おかし}き邪智の私ならざる事、諸君
子つとめて以て知るべし。

44

當歸芍藥散^{とうきしやくさん}の證（後編上冊）



44、当帰芍薬散の證（後編上冊）

図の如く、臍傍・臍上・臍下の四辺に拘攣（ひっぱること）ありて、之を按て痛み背に徹する者、或は心下悸し、或は小腹、強痛（こわばり）、或は胃して渴し、小便小利の者、此の方の正證なり。

男女老若を問わず、何の病を問わず、此の方を用いて、病患治せざることなし。然れども、毒の浅深厚薄に因りて、敢て瞑眩せざる者あり。又、其の毒、厚深にして瞑眩甚しく、若しくは腹痛忍ぶべからざる者あり。或は志氣、冒（うつとり）して樂しまざる者間あり。必ずしも驚くべからず。ますます服薬を重ね進めて可なり。

当帰芍薬散の方

当帰（伊吹が可なり。一錢）芍薬（眞の生干）茯苓（各八分）沢瀉・唐菰朮（各四分）

右五味、散となし、清酒を以って一錢を送下す。日三、夜二。

又、煎方。水一盞と酒半盞を以って六分に煮取り、一度に服す。

又、此の證にして便閉の者。三黄丸毎夜一錢を兼用して可なり。又伝に云う。婦人妊身便閉、或は便遠の者、必ず産重し。此の方を用いて可なり。亦、三黄丸兼用を欠くべからず。

三黄丸の方

唐大黄（古渡・重実のもの可なり。三錢）黄連・黄芩（各一錢五分）

右三味を末となし丸す。

45

人參にんじんきよじつ去朮か加桂けいと湯とうの證
(後編上冊)



45、人參去朮加桂湯の證（後編上冊）

図の如く、本動氣臍底に在りて、時々臍上を衝くもの、是れ腎氣動するなり。

心下痞硬・胸中痹（なえ）、或は胸膈の痞塞、或は心を衝くもの奔豚氣に似たり。皆血證にして腎間の氣動くなり。

古人云う。「腎間の動氣は、十二經の根本なり。その動変じて百患をなす。則ち百證そなわる」と。乃ち、百患・百證、百藥・百方を以って、先後の取捨樞機を違はざるときは、百患百證治せざることなし。

人參去朮加桂湯の方

人參（竹節）・甘草・乾姜（各二錢） 桂枝（二錢七分）

右、末となし、蜜丸、雞子黃（たまご）の大きさの如く、熱湯六分を以って研碎き、溫服す。日三たび、夜二たび。

46

小品^{しよひん}奔豚^{ほんとう}湯の證
(後編上冊)



46、小品奔豚湯の證（後編上冊）

図の如く、其の心胸満して氣急速迫、俗に云う「息たわしく」、時々息切れして起居安からず、心細く、時々臍の左右より奔豚氣発り、驚冒して項背強急し、或は手足逆冷する者。此の方の正證なり。腹診を審にして、此の方を与えて其の効を知るべし。

余、此の方を数用いて、其の効驗あるを知る。例えば、桂枝加桂湯の證に似て、敢えて上衝頭痛することなし。然れども、下より衝き上げ奔豚氣をなさんと欲す。上衝に似て上衝に非ず、甚だしき者は、小児の驚風の如く人事を知らず。此の如き者に、大いに此の方效あり。

此に因つて之を考うるに、小児の驚風と号する者も、大人の奔豚氣衝き上り、項背強急して死せんとする者も、又、角弓反張（弓の反り返える）してせ死んとする者も、其の毒は一なり。後世、状に因つて、其名を命すること異なるを以つて、其の方も亦異にして、治せざる者多し。只、腹證に因つて一毒なるを知るべし。又、常に癰疽と号して、時々癰氣下より刺込むと云う者、此の證間あり。考うべし。

葛根李根皮湯の方

炙甘草（八分） 李根皮・葛根（各一錢五分） 黄芩・桂心・瓜蒌仁・人参（竹節）（各四分） 川芎（五分）
右五味、水一盞八分を以つて六分に煮取り、一度に服す。

47

廣濟奔豚湯の證
(後編上冊)

心胸ニ奔豚氣ノ毒客スル也
心ヲ沈メテ之ヲ按ノ暗然ト
シ心煩アリ其余文面ヲ以
テ考ベシ



臍底毒動ノ

47、こうざいほんとう廣濟奔豚湯の證（後編上冊）

図の如く、臍底に動氣あり。又、心胸に奔豚氣少しく客すること暗然たり。きゆうきやう吸々として氣急速迫、人語を聞くことを欲せず、或は心下煩乱して安からず。發作時にあり。或は四支煩疼、手足逆冷。或は氣上りて心胸を衝くもの。此の證、世に癰氣しやうきと号する者に甚だ多し。諸藥投するに効なし。此の方に非ざれば治せざるなり。

廣濟奔豚湯の方

李根皮（一錢六分） 半夏（一錢四分） 乾姜・桂心（各八分） 茯苓（六分） 炙甘草・竹節人參（各四分） 炮附子（二分）。

右八味、水一盞八分を以って六分に煮とる。

48

防風茯苓湯の證
(後編上冊)



48、防風茯苓湯の證（後編上冊）

図の如く臍底に動氣ありて、胸滿、氣急速迫、心痛して涎を吐し、虛冷の者、此の方を用いて効あり。
防風茯苓湯の方

桂枝（一錢二分） 半夏・乾姜（各八分） 竹節人參（六分） 甘草・茯苓・防風（各四分）
右七味、水一盞半を以て六分に煮取る。伝に云う。心痛止まざる者、毎夜龍肝散を兼用して可なり。
龍肝散の方は、下の黃土湯の条下にあり。

49

小品牡蠣奔豚湯の證
(後編上冊)



49、小品牡蠣奔豚湯の證（後編上冊）

図の如く臍底に動氣ありて、時々奔豚氣小腹より起り、撞胸愚冒し、上逆或は心痛、手足逆冷の者。此の方之を治す。（愚冒とは、精神を失い、うっかりとして氣拔けの如くなるを云う）

小品牡蠣奔豚湯の方

牡蠣（六分） 桂心（一錢六分） 李根皮（一錢五分） 炙甘草（六分）

右四味、水一盞半を以って六分に煮とる。

此の證も亦た、龍肝散を兼用して可なり。都て血症にして心痛のもの、之に倣え。

50

當歸建中湯の證
（後編上冊）



50、当帰建中湯の證（後編上冊）

図の如く、腹中拘攣急迫して腹底に数繩を引張るが如くにして、小腹腰背より引痛む者。或は手足疼痛して浮腫する者。或は卒に手足攣痛し、俗に筋戾と云うもの。或は血症にして虚羸、氣息吸々として將に絶せんとする者。皆、此の方を用いて其の効著し。

余・案ずるに、凡そ重病にして世医その療を失うもの、或は大承氣、或は桃仁承氣、或は大黃牡丹皮などの證の全く備わりて久しく攻むるもの、時として其の毒限眩して動き諸症を発す。其の発する症を詳らかにして、赦さず攻め追ひ去りて、また本の備わりたる症を攻めて、月日を経て全く治すべし。

凡そ、下剤を以つて攻め下す時は、忽ち上衝拘攣し或は急迫などするは、桂枝加桂湯。或は面浮腫し、手足攣痛などする者は、当帰建中湯。或は上衝頭眩、小便不利をなすは、苓桂朮甘湯。或は上衝胸脇苦満するは柴胡桂枝湯等の諸證を發すること、挙げて数うべからずと雖も、本・血症にして動くものなり。凡そ、旁ら・当帰建中湯の證多し。学ぶ者、謹んで考え用いて、詳なることを知るべし。

或る伝に云う。「当帰建中湯の證にして、脱血崩漏のもの、此の方内に於て、劉寄奴を大に加えて可なり」と。

当帰建中湯の方

50. 当帰建中湯の證

当帰（伊吹可なり、一錢四分） 芍薬（一錢二分） 桂枝・生姜（各六分） 甘草（四分）
右五味、水一盞半を以つて六分に煮とる。

若しくは、大虚の者には、飴糖（かたあめ）三錢を加う。或は、血を去ること過多の者、或は崩症（崩れ
る如く血出る）にして止まざる者には、地黄（一錢二分）、阿膠（八分）を加えて可なり。
伝に云う、「この證、広東人參二錢を濃煎にして、時々用いて可なり」と。

51

黄土湯の證（後編上冊）



51、黄土湯の證（後編上冊）

図の如く臍の四辺動氣して、時々奔豚氣上り攻めて心胸を衝く者、或は冷痛し手足不仁（しびれ）、或は小便不利、或は吐血衄血、或は下利、或は小便膿血の者、皆此の方を用いて大効あり。余、此の方を数用數効して云う。墮胎後に此の證甚だ多し。凡べて、血を脱すること過多の者、此の證多し。其の腹診の分ち、右に記するの方剂、皆、動氣奔豚氣を以て眼とすると雖も、其の動、他に較れば至りて甚だしき者を此の證と知るべし。

黄土湯の方

黄土（二錢六分） 炙甘草・干地黄・唐菰朮・附子・阿膠・黄芩（各一錢）
右七味、水二盞を以て七分に煮とる。

黄土の真物を得るの伝あり。山野僻地の民家、他土を混えず、生土を以て甕を作り、毎日炊くこと年を経て凡そ二十年余にして、其の色紫になるもの可なり。之を水干すること七度。砂石灰を去り、善く清らかに干して用いべし。右、黄土一味を龍肝散と云う。その効能、左に記す。

龍肝散の功能。

心痛・反胃・中惡に可なり。腋臭（わきが）に頻に塗付けて可なり。小兒臍瘻にも亦可なり。小兒の重舌

腹證奇覽（後編上冊）

に酢を和えて塗る。又、産後に惡血・心を攻めて痛む者は、酒を以って二錢を服す。崩漏・帶下・吐血・欬血および催生胞衣（えな）を下すの大効あり。

52

桂枝^{けいし}加^か附子^{ぶし}湯^{とう}の證
(後編上冊)



52、桂枝加附子湯の證（後編上冊）

図の如く、仮令は身体或は手足に毒あつて痛み、事にふれて疼痛甚しく、或は動揺して疼み忍び難きもの、或は疝氣と号するもの、疼み上りて心下に充塞し、疼痛甚しきもの、此の方を用いて効あり。

又、云う。心腹・痞滿疼痛し飲食せず、日々水數升を吐き、骨立倦怠の者。先ず茯苓湯或は桂枝芍朮湯、或は小半夏加茯苓湯、或は桂枝人參湯、或は半夏瀉心湯、或は茯苓飲等。其の正證を審かにして之を用い、吐止んで、桂枝加附子湯之を主る。其の効、神なり。

又、云う。惡寒發熱、頭痛煩騒して、心下に結聚（かたまり）ありて、之を按せば暗然とし、冷氣ありて時々鳴動する者、桂枝加附子湯の正證なり。

又、云う。時々、五心煩熱し心氣楽しまず、羸瘦倦怠し、或は心下に現然として塊あり、之を按せば冷氣ありて鳴動する者、先ず大黃附子湯を与え、毒を下して後、桂枝加附子湯を用いて可なり。

又、云う。心痛久しく止まず、心下痞硬し、毒心脾に客し上衝して心を攻め痛む者に用いて大いに効あり。然れども、腹底に冷氣あるを服として用うべし。

又、云う。寒疝、心腹疼痛、手足逆冷して身体拘攣の者、皆、此の方を用いて効あり。

桂枝加附子湯の方

52 桂枝加附子湯の證

桂枝・芍藥・附子・大棗（各七分半） 生姜・甘草（各五分）
右六味、水一盞八分を以って六分に煮とる。

53

附^ぶ子^し湯^{とう}の證^{しるし}
(後編上冊)



心下痞鞭ノ悸
スルノ毒

拘挛

53、附子湯の證（後編上冊）

図の如く、心下悸し且つ痞硬し、腹拘攣、小便不利、或は腹痛、或は身羸痛の者。

余、此の方を数々用い数々効ありて、その伝に云う。此の痞硬と云うもの、敢て痞硬するに非ず。然れども、心下の辺に結聚する処ありて、之を按せば暗然として冷氣あり。是れ則ち、附子の与る所なり。謹んで腹診を審らかにせざれば、方證相對することを得るべからず。

又、云う。心下悸し且つ痞硬・胸下の両傍に結聚する者、此れを診察するに、よく心氣を定静し之を按せば、自ら暗然として腹底に冷氣あるを覺ゆ。或は腹拘攣、小便不利、或は時々腹痛する者、これ全き附子湯の正證なり。学ぶ者、用いて以て其の奇功を知るべし。

又、金匱に云く。「身体疼み、手足冷え、骨節痛み、小腹痛の如く云々」と。余、案するに、所謂、「扇の如く」というは臍の四辺、軟（やわらか）にして、びくつき動くこと、仮令ば吹子の如く、又、扇を用うに似たり。所謂、死症に鼻扇と号するものと同じ。

又、一證。或人は云う。病人、舌上赤く爛れ皮を剥ぐが如く、食塩の味に痛みを覚えて食うこと能わず。食する時は津を吐く、或は口中粘り、或は涸渴（かわく）する者。産後に此の證多し。男子も亦あり。附子湯の方内に於いて、当帰八分を加う（但し、伊吹に非ざれば効なし）。又、鹿胎子の霜（くるやき）一

棧を兼用すべし。

附子湯の方

茯苓・芍薬・附子（各六分） 朮（八分） 人参（四分）

右五味、水一盞六分を以て六分に煮とる。

又、云う。茯苓は赤。芍薬は真の生干。附子は大にして十棧の物。朮は唐。人参は竹節を用うべし。但

し、自然に生じ瘦せたるもの可なり。凡そ、諸薬、近世薬汁を用いて作りたるは効なし。

54

理中加附子湯の證
(後編上冊)



54、理中加附子湯の證（後編上冊）

図の如く、心下痞硬、小便不利、胸中痺或は急痛急迫上衝して、手足厥冷、惡寒の者。

又、云う。心腹絞痛（しぼり痛む）、嘔吐して下痢、或は煩熱惡寒、或は噎逆の者、此の方に効あり。

理中加附子湯の方

桂枝・甘草（各八分） 竹節人參・唐菰朮・乾姜（各六分） 附子（一錢）
右六味、水二盞を以って六分に煮とる。

余、此の方、身体厥冷、大便自利の者に、数々用いて数々効を奏す。諸君子、用いて以って妙功を知るべし。

55

真武湯の證^{しんぶとう}
(後編上冊)



55、真武湯の證 (後編上冊)

図の如く腹軟満にして、之を按せば悸ありて拘攣し、或は心下も亦悸して、時々目眩(目くらめく)し、一身(みづか)顫動し、或は時々惡寒し、小便不利、或は嘔する者。

又、云う。此の證、四支(うしし)疼痛、或は沈重疼痛する者間あり。其の余、何病を問わず、前に云う如く腹診を詳かにして、現證時として目眩(めくるめき)、身顫動し、震々(ふるい)として地に擲(なげ)んと欲する者を眼として、之を用いて其の効有らざることなし。

又、云う。此の證にして、腹底に寒冷を覚ゆる者大いにあり。附子の分量、或は一倍、或は二倍、三倍に加うるの多少は、皆、腹底の冷え、或は寒の現然たるか、暗然たるか、其の厚薄淺深を以って、附子の多少を考へべし。凡(た)べて附子を隊伍(くみ)合(あ)わすするの法、此の言を以って考へべし。

真武湯の方

茯苓・芍薬・生姜(各七分半) 唐菰朮(五分) 附子(四分)

右五味、水一盞六分を以って六分に煮とる。

余、此の方を数々用いて効を得ること有るを云う。例えば、半身不遂(かなわぬ)の者、此の證にして、其の腹底寒冷且つ項背強急、痰喘ありて、時々發熱頭痛、腹中塊物あり。之を按せば痛む者、則ち此の方に

附子を益すこと三倍して、葛根湯を合して本劑大劑を以て与え、徳本十九方中の順氣丸じゆんきがんを兼用すること毎夜一錢二分。此の如く重ね進めて、其の治を奏すること多し。

眞武湯・葛根湯の合方

葛根（七分） 麻黄（五分） 芍薬・大棗・生姜・茯苓（各六分） 桂枝・甘草・附子（各四分） 唐蒼朮（五分）

右十味、水二盞を以て六分に煮とる。

前に云う如く、腹底の寒冷の厚薄淺深に因りて、謹んで附子の多少を考うべし。

徳本翁・順氣丸の方

大黃・芒硝（各等分）

右二味、末と為して丸す（丸くする時に臨みて、蜜を少し入れて丸と為すべし。）

右順氣丸の主治は、血症にして、塊氣有て、之を按せば痛む者。何病を問わず、毎夜一錢を白湯にて送下きうかす。久しく用いて治せざることなし。

古人こじん、附子を用いて効ある證を記す。

古人某云う。「寒疝にして心腹脇皆痛み、諸藥効なきに、蜜製の烏頭丸を用いて神妙なり云々。」と。余、案するに、此の證、惡寒厥冷、手足厥逆して腰足引痛し、或は腹痛、或は体痛み、時として上衝し惡風煩燥、或は絞痛し、忍び難き者に之を用いて数々効あり。

蜜製烏頭丸の方

大烏頭角を去りて四つに破り、白蜜一合を以て煎じ尽して之をとる。よく焙り干し末となし、別に熟蜜

を以て丸とす。毎日之を服するに、冷えたる塩湯を以て送下す。

余、之を用いるの伝に云う。初め五分を用いて臍眩せざれば、増して七分に至る。尚、臍眩せざれば、又、増して一錢、或は一錢五分、二錢に至るべし。

姜附湯の方法

大附子（四つに割り一枚） 生姜（十枚）

右二味、水一盞を以て七分に煎じ、おん温服す。

冷瘧寒熱往来、頭痛身疼、痰を吐し、或は汗多くして渴し、或は自利して煩燥する者、之を用いて妙効あり。

余、此の方を用いて案するに、其の人痰喘甚だしく、手足厥冷下利、身体厥逆、或は自利する者、死に向わんと欲する者に、数々用いて数々効を得たり。学ぶ者、用いて効を知るべし。

又、大渴引飲の者に、附子の證あり。石膏の證あり。其の分別の密伝有つて云う。「例えば、病人大いに熱し大渴引飲の者に、身屈り縮む者、その腹底を按ずれば寒冷なる者は、附子の證なり。又、身体厥冷し、手足厥逆すと雖も、身を伸し^す念すの中を乗り出する者、其の腹底を按するに少しく熱するは石膏の證なり」と。

56

朮^{じつ}防^{ぼう}已^い去^き石^{せき}膏^{こう}加^か茯^{ふく}苓^{りやう}芒^{ぼう}硝^{しやう}湯^{とう}の證
(後編上冊)

心下堅痞ノ毒



56、じつぼういきよせつこうかぶくりようぼうしやうとう 戒防已去石膏加苓芒硝湯の證（後編上冊）

図の如く心下堅痞し、之を按せば少しく痛み、且つ悸して小便不利の者、此の方の正證なり。

余、腹診の術を以てて薬剤を投ずることを定極するに、凡そ心下の毒動かずして患うる者多し。例えば、腹中の毒に中りて方證相對して、治方を定極すると雖も、心下の毒去らざる時は食すること能わず。故に、先ず心下の毒を去らんと欲すとも、方證相對せざる時は動かず治せざるなり。余、之を苦しむこと久し。近頃、少しく分別することあるを以て左に記す。

凡そ、上衝急迫して心下痞硬する者、桂枝人参湯の證なり。

或は、只、心下痞硬し、胸中痺にして時々急痛、小便不利の者、人参湯の證なり。

或は胸下実滿して心下痞硬、四逆散の證なり。

或は胸下結聚して心下痞硬し、之を按せば底に冷氣を覚ゆる者、附子湯の證なり。

或は大便秘、心下痞硬且つ心下臍上の間実して、之を按せば痛むこと甚だしき者、調胃承氣湯の證なり。

或は心煩吐下して、心下痞硬の者、乾姜黄芩黄连人参湯の證なり。

或は腹中雷鳴して、心下痞硬の者、半夏瀉心湯の證なり。

或は便閉、浮腫して心下痞硬、雷鳴する者、桃花人参湯の證なり。

或は心胸張出、便閉し、心下痞して硬満する者、大陷胸丸の證なり。

或は腹拘攣急迫して、心下痞硬、実満する者、甘遂半夏湯の證なり。前編の甘遂半夏湯の条下に於いて詳に論ず。其の余の方、皆之に倣え。且つ本文に、「木防已」とあるは誤なり。余考うるに、朮の字の一点を落したるが故に、蒼朮を隊伍せざるか。今、蒼朮を加えて、朮防已去石膏茯苓芒硝湯と為して用うるに、其の効著るし。

或は心下痞硬、飲食停滯して、大便せざる者、太簇丸を兼用して可なり。

朮防已去石膏加茯苓芒硝湯の方

唐蒼朮・防已（各七分半） 桂枝（五分） 茯苓・人参（各一錢） 芒硝（二錢五分）

右六味、水一盞八分を以つて六分に煮とり、滓を去りて芒硝を入れ、一度に服す。

太簇丸の方

大黄（十錢） 黄芩・黄連（各五錢）

右三味、末丸となし、清酒（よき酒）を以つて送下す。

57

四逆散の證（後編上冊）



毒腹底ヨリ
一面ニ癰張ス

57、しぎやくさん四逆散の證（後編上冊）

図の如く、胸下の左右、心下或は胸下の傍、皆実満して、たとえば大柴胡湯の腹に似て、胸膈実満・逆満して、苦痛も亦甚だし。前の章にて云う、心下痞硬の者、比の證多し。

又、云う。凡そ衆病者此の證、或は大柴胡湯の證、傍に有らざることなし。総べて、難症重病を療するに、一證の毒を攻る時は必ず變じて諸證を現わす。その方法、皆具れり。故に、古人の方法大に同うし少く異なるもの多し。

四逆散の方

芍薬・柴胡・甘草・枳実（各一錢）

右四味、水二盞を以て七分に煮取る。

58

調胃承氣湯の證（後編上冊）



心下及左
右ノ毒

58、調胃承氣湯の證 ちよういじようきとう
(後編上冊)

図の如く心下臍上の間、痞硬して堅く、之を按せば病者痛みを覚ゆる者、此の方の正證なり。
是れ乃ち、胃実して大便不通の者なり。余が門人、遠州浜松の士、和久田某、此の方を数々用い、其の効有りて云う。「攻撃剤を与えて快利せざる者に、此の方を用いて大効あり」と。

調胃承氣湯の方

大黃(一錢二分) 甘草・芒硝(各六分)

右三味、水一盞二分を以つて四分に煮とり、滓を去りて、芒硝を入れ、一度に服す。日々二、三度服す。

59

霍^{かく}家^か甘^{かん}遂^{づい}桃^{とう}花^か湯^{とう}の證
（後編上冊）



水毒心下ニ結聚ス

59、鶴家甘遂桃花湯の證 かくかかんづいとうかとう
(後編上冊)

図の如く、四逆散の腹に似て苦満なく、心下痞して軟満水鳴すること瀝々として少しく声あり。又、雷鳴する者もあり。

たとえば人參湯、或は甘遂半夏湯、或は朮防已去石膏加茯苓芒硝湯、或は大陷胸丸などを与えて効なき者、この方尤も効あり。

此の一腹證を考え知る者は、播州二見の処士、室谷某の弟、茶人大口如翁の女直なり。彼女子にして、古人も未だ達せざる所を發明す。是れ医を好むの厚き、実に斯道の忠臣とも云うべし。古人の云う、「片玉も以って珪とすべし」とは、大口氏の女を謂うなるべし。

鶴家甘遂桃花湯の方

甘遂(一錢) 白桃花(一錢五分) 大黃(五分)

右三味、水一盞二分を以て六分に煮とり、滓を去りて甘遂の末を入れ、頓に服す。但し空心(すき腹)に服すべし。

又、云う。前方の證に似て、心悸胸痛して水腫のもの、桃花散を用いて可なり。

桃花散の方

白桃花（四錢半） 黃連、大黃（各一錢）

右三味、末となし、白湯を以って一盞五分を送下す。瞑眩めいけんして大いに効あり。

60

大黃附子湯の證
(後編上冊)



60、大黃附子湯の證（後編上冊）

図の如く、臍の四辺に毒ありて絞痛忍び難き者、或は腹底冷寒、或は身体惡寒するを以て腹診の眼とすべし。或は脇下偏痛、或は身体冷えて惡寒する者、若しくは臍寒の者。

又、云う。小腹及び臍旁、或は臍下の拘攣急迫して絞痛の者、この方内に於て芍薬・甘草・各一錢を加えて大に効あり。余、数々經驗するを以て此に記せり。

大黃附子湯の方

大黃（九分） 細辛（六分） 附子（一錢四分余）

右三味、水一盞を以て四分に煮る。

61

大^{だい}黃^{おう}々^{おう}連^{れん}瀉^{しゃ}心^{しん}湯^{とう}の證
(後編上冊)



61、大黃黃連瀉心湯の證（後編上冊）

図の如く心下痞、之を按せば軟。又、心下痞氣不定の者。

余、此の方を数々用い、数々効有りて云う。本文に「心下痞、之を按せば軟。其の脈、关上浮なる者と云」と。或る説に云う、「其の字上にうけて読む時は、関上は即ち関元なり」と。余、此の説を是として後、病者を診察する毎に、此を考えて全きを得る者を左に記す。

臍下より凡そ二寸下、ひそかを指を下して腹脈の浮脈を考うるに、動に非ず、悸に非ずして、指頭に自ら浮脈を覚ゆるもの、是なり。学ぶ者、謹んで其の脈を察して、以って此の指を定極することを知るべし。

又、云う。本文に心氣不足と云う者、世に多し。俗に云う「善く物忘れして冒する者。甚だしきものは健忘」と号する、是なり。此の方を用いて治を奏すること挙げて数え難し。

一書に云う。心下痞硬、嘔吐吃逆、或は噎する者、此方大に効あり。

又、云う。心腹攪痛（かきませ痛む）し、諸藥効なくして死せんと欲するものに即効あり。余、数々経験す。

大黃黃連瀉心湯の方

61 大黃黃連瀉心湯の證

大黃（一錢二分） 黃連（六分）

右二味、水六分を以って熱湯にて振出し用う。

62

大建中湯の證Ⅰ（後編上冊）
だいけんちゅうとう



頭足了者ノ
如牛毒

62、大建中湯の證 I (後編上冊)

図の如く、腹の皮^{せき}と起りて頭足あるが如く、譬えば樹の枝を袋に包みて推してみるが如し。其の人時として大に寒痛し、嘔して食することを能わず。発する時は事にふれて近づくべからず。或は大便秘^ひし、或は心胸、大寒上衝の者。

大建中湯の方

蜀椒(六分) 乾姜(二錢二分) 人參(竹節。八分) 飴(四錢六分)

右四味、水一盞六分を以って三味を煮て八分に取り、滓を去りて飴を入れ六分にとりて、一度に服す。

63

大建中湯の證Ⅱ（後編上冊）



63、大建中湯だいけんちゅうとうの證Ⅱ（後編上冊）

図の如く、時々蛇の如く、又鰻の如きもの腹中を遊走して、頭かと思ふ処にて痛み、尾かと思ふ処にて痛み、其の患忍うれいぶべからず。

諸薬も効なく、其の余の患う所、人々にして異なるは、都すべて此の方に非れば治せず。図するが如く、其の腹三状（三通とほり）あり。腹診を詳らかにして治療の効を奏すべし。

又、云う。此の證、間々旁らに下瘀血湯の證を現わすことあり、考うべし。図、方ともに下に出す。

64

大建中湯の證Ⅲ（後編上冊）



64 Ⅲ、大建中湯の證 だいけんちゅうとう
(後編上冊)

図の如く、腹常には平穩にして、発する時は腹皮動いて波の打來るが如き者。或は腹常には之を按ずも状なく、発する時は忽ち塊物遊走し、上下往來して疼み、事にふれて近づくべからず。

又、云う。時として小さき癰の如きもの忽ち去りて無きが如く、又た來る時は痛み忍び難し。腹中に在るかと思えば、忽ち背に廻り、背に在るかと思えば、また腹中に来る。

此の三圖の腹診を詳らかにして、某々の病名に拘らず、此の方を用いて治せざることなし。

腹證奇覽後編上冊終

65

十束湯の證（後編下冊）



腹證奇覽 後編下冊

湖南 稻葉克文礼父著

65、じゅうそうとう十棗湯の證 (後編下冊)

図の如く腹中に堅塊有りて、其の状方長(細長く)にして、之を按ずも弛まず、時々掣痛(せいつう)する者、此の證の準据(じゆんきょ)(よりどころ)とす。且つ、堅塊の状、之を按ずに、譬えば胸端より臍の辺まで長く、四、五寸廻りの竹の太さを按すが如く、或は胸より腹に至り細長く引張り、或は短かくして脇下の傍に手に当る物あり。其の大小長短によらず、只、掣痛の二字を眼とすべし。掣(せ)は引なり、ビクビクと引痛むなり。

凡そ、痰飲(たんいん)有りて咳(がい)する者、或は四支、腰腹掣痛する者、その余某々の患(うれ)を問わず、胸腹掣痛するの準据を以て、此の方を用いて神効あることを知るべし。

余、此方を用い覚えて、其の藥効の神なるを以て取ること有りて云う。大棗十錢、或は五、六錢を以て水一盞半入れ六分に煎じ、滓を去りて甘遂の末を入れ、調和して頓服(とんぷく)(直に飲む)す。尤も効り。但し甘遂末、病毒の浅深によりて分量の多少を考うべし。或は二、三分、或は四、五分、甚だしきに至りては一錢。大いに瞑眩(めいけん)して吐下傾くるが如し。必ずしも恐るべからず。

十棗湯の本方

芫花・甘遂・大戟(各等分) 大棗(五分)

右四味、末丸となし、水一二盞分を以って、棗を煎じ六分に取り、滓を去りて散一錢を入れ頓服す。一（克案するに、大棗五分の分量、恐らくは伝写の誤ならん。六錢を用うるに甚だ効あり。）

又、右丸の方ありて、比に記す。

芫花（和物不可なり。藤麋藤と称するもの可なり） 甘遂（よく肥たるもの可なり） 大戟（和物不可なり。女大戟と号するもの可なり）

右三味、各等分末となし、大棗の善く肥たる肉を取りて之を丸じ、小豆の大きさの如くす。

66

半夏^{はんげ}瀉^{しゃ}心^{しん}湯^{とう}の證
(後編下冊)



66、半夏瀉心湯はんげしゃしんとうの證（後編下冊）

図の如く、心下痞硬、或は軟実にして雷鳴する者。此方の證なり。

余案するに、久しく下痢止まず腹痛する者、此の證多し。或は大便秘し、時々腹痛する者、此の證間あり。余が門、數々用いて効ある毎に之を信ず。或は心腹疼痛の者、此の證多し。又、案するに、下痢して後、心下痞硬する者、此の證と雖も雷鳴せざる者あり。

又、下痢の後と雖も、未だ水氣尽きずして雷鳴する者あり。是に於て腹診の術を失う。其の伝ありて云う。下痢の後、雷鳴せざる者は、毒の浮水の去るを以つてなり。然りと雖も、心下の底に痞硬の毒は未だ去らず。其の證の定極を知らんと欲せば、心下を按して嘔氣を覺ゆる者、是なり。

又、云う。此の證に似たる者、三證有て分別す。附子粳米湯、小柴胡湯、半夏瀉心湯なり。皆、時として腹痛することあり。

二方も、亦、苦満に似て逆満、或は少しく実満にして軟。此を以つて分つ。

又、小柴胡湯は胸脇苦満なり。その苦満、之を按せば指頭に力あるを覺ゆ。又、逆満・実満にして軟は、之を按すに指頭に力あることを覺えず。

又、半夏瀉心湯は、其の雷鳴心下にあり。附子粳米湯は、其の雷鳴腹中にあり。且つ、腹底暗然として冷

半夏瀉心湯の證

気あることを指頭に覚ゆ。其の腹痛すること絞り切るが如く、又、時に嘔す。

柴胡瀉心の腹痛は只疼痛するなり。柴胡は雷鳴せず、胸脇苦満を眼とす。卒に診して違ふこと勿れ。

半夏瀉心湯の方

半夏（九分） 黄連（一分半） 黄芩・乾姜・人参・大棗・甘草（各四分半）

右七味、水二盞を以って一盞二分に煮とり、滓を去りて再び煮て六分にとる。

67

甘草泻心湯の證
かんぞうしゃしんとう
（後編下冊）



67、甘草瀉心湯の證 かんぞうしゃしんとう
(後編下冊)

図の如く、半夏瀉心湯の證にして心煩し心氣安からざる者、此の證の主なり。

余、案するに、此に心煩と云うもの、甘草の證なり。甘草は急迫を弛める能あり。且つ腹を診察するに、心胸急迫して心煩するを知るべし。其の心煩すること一ならず、或は苦満して心煩する者は、柴胡の證を考うべし。

只煩する者は、黄連の證と知るべし。此の證、心胸引張り迫るを指頭に覺ゆ。即ち、急迫して心煩し安からざる者、是なり。且つ外症は、その人、心重く眠を好むも目を閉ること能わずして、起臥安からず。或は飲食を欲せず、又、食臭を聞きて惡む。且つその人、氣の放たる如く精神正しからざるものあり。是れ所謂、蟲惑病ちゅうかくびょうの類にして、俗に「物の怪」を病むと云うが如く心氣を失うに似たるを云う。是を以て考うるに、此の證ならば蟲惑病と名づくるも当れりとすべし。

甘草瀉心湯の方

甘草(七分) 半夏(九分) 黄連(一分半) 黄芩・乾姜・大棗・人參(各四分半)
右七味、煎法前法と同じ。

68

附^ぶ子^し粳^{こう}米^{まい}湯^{とう}の證
（後編下冊）



68、附子^{ぶし}粳米湯^{かうまいとう}の證
(後編下冊)

図の如く、腹中雷鳴して少しく軟満、之を按せば益々雷鳴して、絞痛切痛し嘔吐する者、此の證なり。余、案するに、腹中を按するに腹底暗然として自ら冷氣を覺ゆ。且つ常の腹痛に非ずして、其の痛み絞り切るが如し。腹診を考うるもの、忽^{ゆるが}せにすべからず。

附子粳米湯の方

附子(四分強) 半夏(一錢一分) 甘草(二分) 大棗(五分) 粳米(二錢)
右五味、水一盞六分を以つて六分に煮とる。

69

大^{だい}黄^{おう}甘^{かん}草^{そう}湯^{とう}の證^{しう}
(後編下冊)



69、大黃甘草湯の證 だいおうかんそうとう
(後編下冊)

図の如く、腹滿して、実せず。然れども、また軟と云うにも非らず。只、滿して大便閉、少しく急迫して或は嘔吐の者。又は食して間ありて吐する者。所謂、反胃はんい膈噎かくいっと号するもの、数々用いて効を得たり。然れども、反胃と号する者は、朝に食し夕に吐す。此の方、大いに効あれども、膈噎と号する者は、今食して今吐す。此れ其の毒、厚きが故なり。此の方を以って治すること能わず。

大黃甘草湯の方

大黃(一錢二分) 甘草(三分)

右二味、水一盞二分を以って四分に煮とる。

70

甘^{かん}麥^{ばく}大^{だい}束^{そう}湯^{とう}の證
（後編上冊）



70、甘麦大棗湯の證 かんばくたいそうとう
(後編下冊)

図の如く、胸腹滿して実せず。軟と云うにも非ず。只、一面に滿し、大黃甘草湯の腹證に似て、その人躁がしく、眼鋭く、時々狂を發し、數々欠伸けんしん(のびあくび)して、或は喜び、或は悲しみ、或は笑い、或は泣き、其の状、狐狸きりの憑きたるが如く、また俗に「色狂いろまどい」と云う者にも間この證あり。

甘麦大棗湯の方

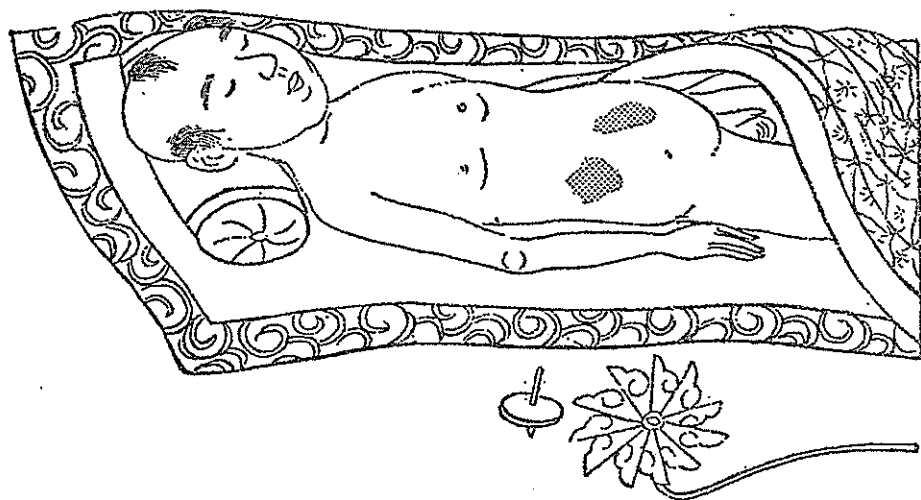
甘草(六分) 小麦(三錢二分) 大棗(五分)

右三味、水一盞二分を以って六分に煮とる。

余、伝有りて云う。發狂甚しき者は藥を服さず。故に茶湯を止め、此の方、或は十貼、二十貼を濃く煎じて、土瓶の類を以って渴する時毎に重ね勸めて服せしめば久くして治す。

71

甘草^{かんぞう}粉^{ふん}蜜^{みつ}湯^{とう}の証
（後編下冊）



71、甘草粉蜜湯の證
(後編下冊)

図の如く、腹中に塊物ありて、時々遊走來去して存が如く亡が如く、之を按して捻りみるに、長虫数条を以て小鞠(小手まり)に作れるが如く、うざうざ動くことを指頭に覺ゆ。是れ蛭虫なり。発する時は涎沫を吐し、或は虫を吐し、時々心痛腹痛することありて忍び難し。尤も小兒に此の證多し、婦人にも亦あり。

余が門人、遠州の和久田某、此の方法に善く熟することありて云う。「病人の顔青白にして、常に魚肉の味、香臭の物などを忌む。発する時は心腹痛むこと甚だしく、腹診甚だ得難し。伝有りて云う。病者、此の證ならんと察せば、先ず左手を以て臍下を按し、力を究て蛭虫の走り去る路を塞ぎ、右手を以て左手の側より狩廻し、搜り得て蛭虫なることを知りて、此の方を主とすべし」と。

余思うに、此の一腹證を知ることと和久田子が功なり。余も亦、此の術を以て心腹急迫する者を治すること、甚だ多し。

又、云う。此の證に似て急迫せざる者、甚だ多し。此れ則ち、鷓鴣菜湯の證なり。且つ、鷓鴣菜湯の方は和方にして、家々の伝、数多あり。余が門人、參州八名郡御園村の医、稻垣某、大人小人の蛭虫を治するの家伝ありて、其の国中の患を救うこと救え難し、余が爲に之を伝与す。

鷓鴣菜湯の方

海人草（黒焼き生を存す。一錢） 巴豆（皮を去る。五分） 大黃（八分）

右三味、末丸となし、三厘、五厘より三、四分に至る。その多少を分ち用うることを考へべし。

右、大人小兒蛭虫の者、或は大便秘する者、皆、此れを用いて効あり。

又、云う。小兒の急腹痛、或は痘瘡前の者、黃連、大黃を与えて三、五日を経て、此の方を以て大に下す。其の効、神の如し。

甘草粉蜜湯の方

甘草（二錢） 粉（一錢） 蜜（四錢）

右三味、水九分を以て、先ず甘草を煮て六分にとり、滓を去りて二味を入れ、攪和せしめ煎じて薄粥の如くす。

余、此の方に困苦して、其の効の有無を究ること有りて云う。此に隊伍せし粉の品。諸家の説多くして明らかならず、或は唐土と云い、或は白粉と云い、或は米粉と云う。皆、其の伝に従い之を用うれども寸効なし。余、一書（或る書）に「粉は輕粉」と云うに従い、之を用いて妙効を得ること数々なり。

旧に東都に在る時、余が使う僕、三才なるが、心腹痛を患いて止まざること半年許り、曾って衆医大家の診を受けて薬を服すと雖も、皆効なし。余、之を診するに、かの蛭虫有りて遊走來去す。乃ち、甘草粉蜜湯の本劑を以て之を攻む。大に吐下して、数月の患一時に去る。然れども、又、顔赤く胸滿することあり。乃ち、桂枝去芍薬湯を用うること五、六日にして、漸々快癒して志氣樂しみ、十日余を経て行歩することを得たり。

又、一女子、年十四才なるが、彼の小兒の妙効あるを聞いて、其の父、之を背にして來り、治を乞うて止

71. 甘草粉蜜湯の證

ます。之を診するに、両脚攀急して歩むこと能わず、又、坐すること能わず、臥す時は人に救われ、木石を倒すが如し。此の如く廢人たること四年許りなり。乃ち甘草粉蜜湯の正證なり。本方を以つて重ね進む。大に瞑眩して吐下傾くるが如く、殆んど死せんとす。父母忍びず、大に哭す。

余が云く、「死生は天に在り。病毒を去らんと欲して何の恐るること有んや。汝ら驚くこと勿れ」と云いて帰る。翌日、快愈することを覚えて起つて歩むことを得たり。此の如き類、余が門中に問あり。諸君子、粉は輕粉を用いて其の効著しきことを知るべし。

72

桂
支きよし
去きよ
芍しやく
藥やく
湯とう
の 證
（後編下冊）



72、桂枝去芍藥湯の證 （後編下冊）

図の如く、腹中軟にして拘攣なく、胸滿して上衝し、又、腹中力なく覺う。或は下劑を以て下した後、必ず上衝胸滿して腹力なく覺ゆる者あり。此の方を用うれば腹中和して快愈するなり。

凡そ自利する時は胸滿上衝するものなり。余、此の方を數々用いて効を得ること有りて云う。諸君子、その時々腹證を違えず用いて以て其の効を知るべし。たとえば、桂枝湯の證にして心痛する者、此の方の正證なり。龍肝散りゅうかんさんを兼用して可なり。

凡そ下利の後、此の方或は小半夏加茯苓湯、或は桂枝湯、或は桂枝加茯苓湯、或は下利して心下痞硬、雷鳴する者、亦雷鳴せざる者も、半夏瀉心湯の證、問あり。其の論、半夏瀉心湯の条下じょうかにあり。

桂枝去芍藥湯の方

桂枝・大棗・生姜（各九分） 甘草（六分）

右四味、水一盞四分を以て六分に煮とる。

73

大^{だい}黄^{おう}硝^{しょう}石^{せき}湯^{とう}の證
（後編下冊）



73、大黃硝石湯の證 だいおうしりょうせきとう
(後編下冊)

図の如く、腹中に血結塊ありて、顔色身体しんたい尽く黄を發し、其の腹満滑にして小便不利、時々自汗有りて、或は顔色青白にして血色なく、衆医皆、黄疸おうたんと号する者はなり。

余、此の證を数々療して考うるに、凡そ其の旁に大柴胡湯の證、自若として備れり、且つ死する者多しと雖も、生死は天工、治療は人事にして医の与る所なり。

余、尤も此證の治に苦しむこと久し。近頃、遊歴中に富岳ふがくに上りて降路に迷い怪しき寺に投じて、甲斐の徳本の十九方を得たり。其の方中に、磁石丸じせきがんと云う奇方有りて、黄疸・黄斑病おうはんびょうに兼用すること毎夜二錢。其の効著るし。乃ち前編に磁石丸の図並びに治論を記す。此にまた其の方法を記す。

磁石丸の方

磁石(二錢) 浮石・滑石(各三錢) 大黃(四錢)

右四味、末丸となし、毎夜一錢五分、或は二錢を白湯を以て送下す。且つ黄疸病及び五疸ごたんを治するの方ほうは、徳本翁の伝、一にしてやまず、その余の諸病、皆、十九方を以て、先後の取舍・交錯の妙術あり。然れども、文多きが故に此に記せず。他日を待って三編に出さんと欲す。

74

鶴丸^{かくがん}の證
（後編下冊）



74、鶴丸かくがんの證 (後編下冊)

図の如く胸脇痞塞し、腹中に血塊有りて之を按せば痛み、或は心下痞硬し心煩急迫して、時々胸腹痛み、或は上りて心を衝き、食すること能わず、或は大便秘通じ難き者。此の方の主る所なり。

然りと雖も、凡て丸・散・圓を用いることは、皆、兼用にして本剤を詳らかにして用いざれば、假令治すと云うとも偶中ぐちゅう(まぐれあたり)にして其の治に非ずの謗そしりを免れず。凡そ、此の鶴丸を兼用すべき證は、桂枝人參湯、或は小柴胡湯、或は桂枝湯、或は柴胡桂枝湯などなり。其の余某々の方、皆腹診と現證とを詳らかにして、本剤を用いて、間此の鶴丸一錢五分、或は一錢を兼用して効あり。

鶴丸の方

大黃(七錢) 芒硝(五錢) 甘草(二錢) 人參・黃連(各一錢半)
右五味、末となし糊丸こがんす。

此の一方は、先師鶴先生より伝うる所なり。故に鶴丸と稱す。東洞家に硝石大圓と号するものあれども、此に比すれば功薄し。余、此の丸を数年用い得て効あるを知れり。故に秘すること能わずして此に出せり。

75

桃核承氣湯の證（後編下冊）



75、桃核承氣湯の證 （後編下冊）

図の如く、小腹に急結有りて上衝し惡血深し。諸々の久病を患うる者に此の證多くあり。数多の病名に拘らず、只、此の腹證を眼として此の方を本劑と極め、小腹急結の病毒を攻るなり。

其の毒淺き者は、此の一方にして治することも有れども、毒深き者は日を追うて重ね進む時は、其の毒動き變じて諸證交り起るものなり。其の時、怠らず兼用して旁の諸證を去りて後、又、本劑に復して重ね進む。此の如くにして月を重ね年を経る時は、何如なる難病癰疾たりとも治せずと云うことなし。

然れども、又、其の方法、是れのみに限らず、悉く腹中を探り知りて、毒の状に依りて天然自得の腹診あり。是れ余が臆見短智を以て知るものに非ず。実に力を尽し功を積み得る所なり。諸君子、狐疑することなく、此の術に深く志し努めて以て其の自得なることを知るべし。

且つ、經文に云う。「但だ小腹急結の者は、乃ち之を攻むべし、云々」と。余、案するに、此の十字の語、天然自得の腹診にして、病毒を去るの妙術を教うる事を知れり。然る所以は皆、余が諸州遊歴二十余年の間、並に門人も此の腹診を以て病病を治すること、挙げて数え難きを以てなり。

桃核承氣湯の方

大黄（一錢） 芒硝（六分） 桃仁・桂枝・甘草（各五分）

右五味、水一盞半を以って六分に煮とり、滓を去りて芒硝を入れ一度に服す。
且つ云う。前編の桃軍圖は本劑承氣にして、大黃・芒硝、君たるを以って服することを難んず。故に之を略す。最も効あり。

桃軍圖の略方

大黃（十錢） 芒硝（六錢） 桃仁・桂枝・蕎麥（各五錢）

右五味、細末となし蜜を以って練る。

此の方、永久に用いざれば沈痼^{ちんぷ}を治すること能わず。故に丹^{たん}となす。

76

千金甘草湯の證
(後編下冊)



76、金匱甘草湯の證（後編下冊）

図の如く腹中拘攣急迫し、或は腹滿し時々息急しく上衝し、又、息切れすることを覚ゆる者、此の證の眼なり。

此に拘攣と云うは、腹中に物ありて指頭に拘わり、引張る如く覚ゆるを云う。

又、急迫は、急り迫る義なり。急は腹底にて、弓の弦を按ずも撥まざる如きを憶ゆ。迫は圧しつけらるる如く、或は胸、或は腹、息急しく息切れのする如く覚ゆるなり。

又、此の證、或は口中乾き手足冷ゆるもの多し。或は唇の乾くこともあり。本文に云う。「妊娠せる者、乳余り、血尽ずして逆まに、心胸を捻き、手足逆冷・唇乾き・腹脹り・短氣す」と。

甘草湯の方

甘草・桂枝・芍薬・阿膠（各八分） 大黃（一錢）

右五味、東流水（漢土は川、多く東に流る。本邦にては南に流る川の水にても可なり）二盞四分を以って一盞に煮とり、滓を去りて阿膠を入れ一度に服す。

余、此の方と前に記する桃軍國とを久しく用い憶えて、癰癤に治すこと間あり。然れども、此の二方に限りて治すと云うにも非ず。世上、多くは癰癤と云う病名に泥み、名方・妙薬・禁秘の方など云うものを以つ

て療すれども、彼治すも是治せざること多し。方證相對せざるが故なり。只、其の腹證を詳らかにして毒のある処を明察し、其の毒の尽るまで攻めて何如なる難病たりとも治せずと云うことなし。是れ天然の方法なり。

余、曾つて京師^{けいし}に在つて、寺町新竹屋町^{しやうじん}辺に住する匠人^{しやうじん}嘉七と云う者を療せり。其の者、癰^{うん}瘤^{りゅう}を患うること歳^{とし}久し。其の時に二十七、八なり。時として病発するときは人事を知らず百藥効なし。夫婦相泣くの外、すべきことなし。然れども、発せざる時は、平人の如く其の業に勤む。近頃に至りて、病毒深く加て日夜^{にちや}発らざることなし。夜にして発する時は水火を避けず、或は唇を咬み破り、或は舌を咬み、殆んど死せんとす。余、之を診するに、其の腹、別に拒むことなし。胸脇苦満、及び臍^{へい}して小腹急結す。之を按せば痛み、両眼常に引つり、白眼にして人を睨むが如し。乃ち大柴胡湯の本剤を与うること日に三度^{さんど}。毎夜、桃軍國^{とうぐんこく}を雞卵の大きさほど空心に用う。時々、先天滅毒丸^{せんてんめつどくがん}、五分を兼用す。斯くの如く重ね進めて、毎夜、合掌の灸を四十余日して、全く治して平人の如し。然れども、斯く早く治するは甚だ少なし。多くは一年或は一年半二年、早く治すと云うも半年許りなり。

77

癩癩

治不治の図

（後編下冊）



77、癩癧の治不治の図 (後編下冊)

信州飯田の傍、豊浦某家秘の方。癩癧を治するの妙劑なりと云い、混元丹と号す。

混元丹の方

混元衣 (胞衣・黒焼き、六錢) 天南星・附子・銀朱 (水かね) (各三錢) 牛黄・雞舌 (丁子) (各一錢五分)

右六味、各々別に末となし糊丸す。但し混元衣は、男の病には女を用い、女の病には男を用うと云う。下、之に倣え。

安鎮丸の方 (主治、上に同じ)

混元衣 (一両) 萸藟根 (陰干にして) 鹿角屑・甘草 (各七分)

右四味、黒焼きにし、別に末とし合して、更に生甘草の末・麝香各二分を加え、再び合して之を和し七服となし、日に一貼を服し七日にして尽す。

若し、愈ゆるや否やを知らんと欲せば、萸藟根の生末一錢を服すべし。病未だ尽きざれば忽ち発す。

米粉割の方 (上に同じ)

米粉 (一両) 莖朮・質汗 (各一両)

右三味、末となし糊丸し、白湯を以って送下す。

又、方。

米粉（二兩） 莖朮・鉄砂・水銀（各二兩）

右四味、末となし糊丸し白湯を以って送下す。

又、方。（此の一方は豊浦子の教用教効するものと云えり。）

薔金（六兩） 苦参・枯礬（各三兩）

右三味、水にて煎す。

豊浦子云う。「世に癩痢の妙方奇薬ありと雖も、皆、方證相對するを以って善く治するなり。然らざれば、彼治するも是治せず」と。此の言、甚だ信なり。

余、諸州を遊歴中に名家累代旧伝の妙薬奇方と称するものを受け得たり。其の数、凡そ二百五十余なり。時時、之を用い試みるに、少しの効を得ることありと雖も、全く治すること稀なり。或は彼治すれども是治せず、その準繩（墨曲）定め難し。故に捨て用いず。然りと雖も、此に記する所の五方は、豊浦子の奇方にして、妙効あること余が旧友之を云えり。故に之を得て余に伝う。且つ、余も亦、腹診の術を以って癩痢を治すること間あり。故に此に列べ記す。

学ぶ者、選り用いて、其々の効を詳らかに極め知りて、天下後世に伝え遺さば、痼疾を救うの一助ともならんか。

78

下瘀血湯の證
(後編下冊)



78、げ おけつとう下瘀血湯の證（後編下冊）

図の如く、臍下に毒有りて、時々痛むことを覺う。之を按するに寒に痛むに非ず。若し之を按じて痛む者は余證なり。劑を投するに、臍下の診を以て分別する者、八、九あり。詳らかなることは下に記す。

此の證は臍下を探りみるに、少しく指頭に応え堅きものあるを覺え、時として痛むもの、此の方の正證なり。

余、考うるに、是れ大血症にして、婦人は經水通ぜず、男子も亦、血症の者に多し。其の人、或は腰痛久しく止まず、或は瘰癧・痔・脱肛などの患ある者あり。或は大建中湯の證を發する者、必ず此の證多し。

下瘀血湯の方

大黃（四錢） 桃仁・蟅虫（各二錢五分）

右三味、細末にして蜜を以て練り四丸となし、酒八分を以て一丸を六分に煎じ取りて一度に服す。

余、旧に東都にある時、一男子三十四五才。大腹痛にて臍下痛むこと三年、百療効なしと云う。余之を診するに、暗然として冷氣を覺う。腹皮強急して頭足あるが如し。乃ち大建中湯を与え、一月許りにして漸々愈ゆ。又臍下痛むを覺え忍び難し。乃ち下瘀血湯を与う。數日にして全く愈ゆ。

79

ど
か
こん
さん
土瓜根散の證
(後編下冊)



79、土瓜根散の證（後編下冊）

図の如く、臍旁小腹に拘攣するもの有りて、婦人は経水利せず、或は白物を下し、或は帯下の患あり。男子は血症にして、時として腹痛する者に此の證間あり。且つ小腹拘急することあるを考うべし。

土瓜根散の方

土瓜根（胡瓜の根）・芍薬・桂枝・蟅虫（各等分）

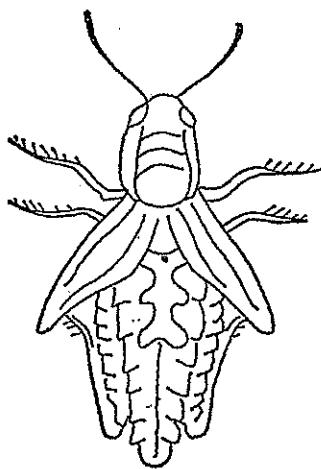
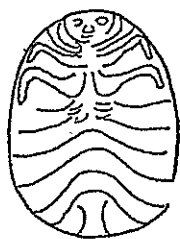
右四味、細末にして酒を以って一錢五分を服す。日に三貼を用う。

鶴先生の云く、「土瓜は王瓜の誤ならん。王瓜は即ち胡瓜なり」と。余、此の説に従いてきゅうりを用うるに効あり。

遠州浜松の土、和久田某、蟅虫の考に曰く、「字彙に之夜の切、音は柘。虫の名。一に曰く、蝗（いなご）の類。一に曰く、鼠婦と。案ずるに、本草・化生虫の部に出づ。字彙に蝗の類とすること尤も拠あり。今、字義を審らかにして之を案ずるに、蟅虫と蝗と本一物にして、其の化生するに従つて名を殊にするならん。蓋し、蟅の字・庶に従う。衆多の義に取るものならん。今、華船（唐人船）載せ来る所の物を見るに、本草の蟅蜂虫と云うもの、其の形よく似たり。地鼈と云うものも亦た少しく似たり。之を我が邦に産する所の物に考うるに、即ち、水田の泥中、或は、池沢の中に住む甲虫、其の形相似たり。俗に呼んで、盛長虫と云う。

此の虫、五、六月の頃、黍粒の如き小卵數十を生みて背に負う。稻禾長ずるを待ちて、禾の本に其の卵を附けて去る。此の卵、風化して蝗を生ず。蝗の形たる方首（角な頭）青身・兩鬚（二つのひげ）・六足・後の二脚長くして能く跳る。羽あれども、飛ぶこと能わず。背に黒文あり。形は王の字に似たり。蝗の字、皇に従うことは之を以てなり。短かきものは五、六分、長きものは一寸許り。稻禾を食いて害をなす。霜降の後、色赤くなりて死す。即ち、民間に呼んで伊那古と云うものは是なり。是れ蝗の親は廢虫にして、其の子を生ずること衆多なるを以て、廢と名づくるならん。

本草に土鼈・鼈箕の名を弁ずと雖も、廢字の義を詳らかにせず。又、蝗を生ずることを知らず。或は甲ありと云い、或は甲なく鱗ありと云う。其の物を究極せざることを見るべし。其の功能を論するに及んでは、廢蝗同根性、故に其の功、亦同じ。且つ華産の物尤も高価なり。又、真臘審らかならず。故に、多く用いて經驗すること聞かず。今、水田中にある廢虫も、亦採得すること易からず。蝗は甚だ多く、得ること尤も易し。七、八月の間、稻禾中に在るを取り、火に炙りて殺し、日に干して之を貯う。此れを廢虫に易え用う



ること、古人も未だ發明せず」と。

仙石伯州刺史の医、中川友三と云う者、鶴先生の門に在りて、予師稻葉翁の先弟なり。始めて蟬を以て
廢虫に易え用うることを知りて、其の効驗を極む。予因って、諸家の説を参考して以て此に記す。

80

八味丸の證
はちみがん
(後編下冊)



80、八味丸の證（後編下冊）

図の如く臍下不仁、或は小腹不仁にして、小便不利の者。

又、一證。手足煩熱し、腰痛、小腹拘急し、小便不利の者。

又、一證。不仁するに非ずして、小腹拘急の者。又、臍の四辺堅大にして盤の如く、之を按せば陰莖・陰門に徹し痛む者。瘰癧・血症の者に此の證多し。

八味丸の方

地黄（八錢） 山茱萸・薯蕷（各四錢） 茯苓・牡丹皮・沢瀉（各三錢） 桂枝・附子（各二錢）

右八味、末となし、蜜を以て丸ず。

余、此の方を用い知りて云う。臍下及び小腹不仁と云う者、指頭にて按するに、ズブリと凹み力なく、其の人、心細く便なく覺ゆ。不仁なること知るべし。且つ、小便不利或は腹底に暗然として少しく冷氣を覺う。心を鎮めて之を察すべし。若し、其の冷氣なくして、附子の證あらんと疑う時は、背を見るべし。必ず、手の裏ほどの冷氣あらば、附子の證と知るべし。又、此の證にして、或は悸し、或は手足冷ゆるもの、皆、是れ八味丸の正證なり。

81

瘡毒家^{そうどくか}

陰茎腐落の図^{いんけいふらくの図}
(後編下冊)



81、瘡毒家陰莖腐落の図 (後編下冊)

図の如く陰莖腐り落ちて、其の状、肉腐の爛れたるが如くにして、疼痛忍び難し。其の腹も亦、図の如く、堅塊有りて臍下より鳩尾に至り、之を按ずに自若として動かず。其の人羸瘦して、時々寒熱往来し、手足の裏熱し、大便閉し不食す。此れ大承氣湯の證なり。瘡毒とのみ心得て治療するゆえに愈えず。

此の證のみに限らず、凡そ瘡毒と云うも、皆、腹底に毒あるを以てなり。俗に「古濕」と号して、瘡毒の治し難く、或は鼻梁落ち、或は耳癰い、或は目盲し、生質に非ずして五体不具なる者、皆腹證に本づき、旧染の毒を去ることを知らずして、濫に輕粉劑、或は山掃來劑などを用いて攻るが故なり。

余、旧に東都にある時、内田某なる人、博く医書に渉り、又た善く治療をなせり。余が腹診を唱うるを聞きて、厚く信じて門に入らんことを乞う。余、其の厚く医に志して深く此の術を好むを嘉して、卒に腹診の術を伝う。一日一病客を挑え來り診を乞うて云く、「此の人瘡毒を患いて、世に所謂、蠟燭下疳と号するものになり。前に、瘍医（外科）に托して治を受くれども數月効なくして、遂に陰莖腐落し疼み忍び難し。余、小柴胡湯及び德本家の瀉心湯を以て攻れども、其の効なきを以て、先生に托して診を乞う」と。

余、之を診するに、腹底に堅塊ありて臍下より鳩尾に至り自若として動かず。「是れ大承氣の正證なり」と云う。内田子・異みて云く「予曾て諸々の医書を読み、數々衆医に会して奇説を聞くと雖も、未だ先生

の診する所の如きを聞ず。厚く先生を信ずと雖も、是に於て疑を發せざること能わず」と。

余が云く。「子も亦、後世^{こうせい}の惑^{まど}未^まだ脱^{だつ}せざるが故なり。此の病客の如きは、大承氣のほか他證なし」と。乃ち、之を与うるに數月にして全く治せり。

大承氣湯の方

厚朴（二錢四分） 枳實（一錢五分） 大黃（一錢二分） 芒硝（六分）

右四味、水三盞を以って一盞二分に煎じ、厚朴・枳實の滓を去りて大黃を入れ、六分に煎じ、滓を去り芒硝を入れて、一度に服す。日に三度服す。

82

同瘡毒家骨節疼痛の図（後編下冊）



82、瘡家骨節疼痛の図（後編下冊）

図の如く身体羸瘦して、行歩すること能わず、手足疼痛して発する時は忍び難し。其の腹も亦、図の如く、心下に毒結聚して之を按せば疼み、腹底に暗然として冷氣を覺ゆ。時に上衝頭痛し、寒熱往來、或は惡風惡寒す。是れ、桂枝加附子湯の正證なり。

毎夜、芎黃散二錢を兼用し、四、五日して毎夜七宝丸六分を用うること三日にして、又、故の如く芎黃を用う。此の如く二、三次、或は五、六、七次して、毒の淺深により之を攻むべし。毒淺き者は一、二次にして愈る者間あり。毒深き者は六、七次にして愈ゆ。時に臨んで考うべし。

伝に云く。「或は惡浮腫の者、礬黃丸可なり。羸瘦して骨節疼痛の者、七宝丸可なり」と。若しくは瘡毒家、或は二、三分より四、五分に至る。大に下るものは兼用を止め、本剤のみ用うること二、三日にして、又、梅肉散を兼用すること。此の如く一・二次、六・七次、前の如く毒の淺深に随って考うべし。

凡そ、輕粉剤を用うるの伝は、初め四、五下劑を用い、下利して後用うべし。否ざれば輕粉の毒、口中に中り、爛れて他日食すること能わず。

余、此の劑を數用數効して、病者をして苦惱せしめんことを恐れて、此の如く熟するものなり。

桂枝加附子湯の方

桂枝・芍藥・大棗・生薑（各七分） 附子（六分） 甘草（五分）

右六味、水一盞半を以って六分に煮とる。

七宝丸の方

午膝・輕粉（各四錢） 土茯苓（三錢） 大黃（二錢五分） 丁子（一錢）

右五味、末となして糊丸す。

右の治に云く。癰疾沈痼の毒及び瘡毒にて骨節疼痛する者は、皆、之を兼用して可なり。

礬黃丸の方

枯礬（十五錢） 大黃（十錢） 輕粉（五錢）

右三味、末となして糊丸す。

右の治に云く。無名の惡浮腫、骨節疼痛及び疥癬・白癰風、一切の惡瘡に兼用して皆、大効あり。余、數年來用い得て經驗すること挙て教うべからず。

梅肉散の方

梅肉（塩梅・核ともに黒焼き）・山梔子（黒焼き）（各三錢） 巴豆（皮を去る。一錢） 輕粉（八分）

右四味、末となし糊丸す。一、二分より四、五分まで用う。小兒の頭瘡、或は無名の惡瘡を發する者、赤子より五、六才の者は一、二厘より四、五厘に至る。毒深き者は一分、一分五厘に至る。或は婦人の乳岩・乳腫などに皆用いて大効あり。

浪華岡熊岳画

湖南福葉意仲亮文化著

腹證奇覽後編卷之下絡

享和紀元辛酉冬十一月

高田

和州書林

本屋源左衛門

心齋橋通北久太師町北入

大坂書林

河内屋喜兵衛

同 南久金寺町北入

塩屋平助

文已化己之秋新鐫

樛木園和久田先生著

復從月
證奇覽異
編初

浪華書林

興文堂
積玉圃

腹證奇覽翼 初編

自序

夫れ、人の遇・不遇は天なり、時あるなり。時たるや言い易く、天たるや論じ難し。何を以てか之を言
うか。其の智愚賢不肖、君子小人を問わず、時・有れば窮し、時・有りて達するを以てなり。是れが為め
言い易きなり。若し夫れ、天は、其の身・修まりて然る後に始めて道うべきなり。己を修めずして命を天に
期す者は、天を知らざるなり。是れ、其の難しとなす所以なり。

寅、未だ弱冠ならずして、父兄の喪に再服せり。其の病に侍り薬餌を執るの間、凡て六年なるも、未だ曾
つて良医の診に遇わず。是れより先、長兄・仕外に出で、寅・單身にて母に奉ず。居常、稟質の驕弱を慮
うるも、誤りて其の身墜つ。母は老い且つ病み、朝夕、庸医の特むべからざるを恨む。是に於て、慨然とし
て始めて医を志し、好んで古の方書を読み、以って、身を保ち親に事うるの用に供せんことを求めり。

仍に庸医の為す所を倣らうも、茫乎として自ら修むるの寸も得ざるや、有年なり。不遇と謂うべきなり。
己にして寛政癸丑（一七九三）の春、湖南・稻葉文礼翁に友人真田東溟の家に於て邂逅し、譚、医事に及
ぶ。翁、寅に謂いて曰く。

「吾、曩に、雲州の鶴泰榮に從い診腹の法を学び、遂に其の術を修む。而して、四方を遊歴すること、二十

年に幾きも、未だ曾って同志の人に遇わず。子の如きは与に言るべきなり」と。

乃ち、偕に草廬に帰り、医を講究す。翁の淹留すること数月。修める所の診腹の法を悉く挙げ、以って寅に授けて去る。

爾来、寅、診腹の法に従事し、以って医方を試み、併せて仲景の書を読み以って其の義を研究し、積むに才月を以ってす。稍、得る所有るを覚ゆるも、猶、病の未だ其の奥に至ること能わざるがごときのみ。

後、翁は西遊して診腹を唱う。寅は故ありて、家を提え東都に遷り相距てること千里にして、翁の在る所を知らず。庚申（一八〇〇）の冬、坊間を過ぎ、書肆に就き、偶、「腹證奇覽」と題するを見、巻を展きて之を読めば則ち翁の著す所なり。

翁は天資狂簡にして、文辭を学ばず。専ら診腹の術を修めて、其の著す所の書は、皆、門人をして代録せしむ。故に、其の書は遺闕無きを得ず。寅は是に於いて、上國に遠遊し、翁の存所を索め親しく討論し、以って其の遺闕を拾補せんことを欲すれども、世事方び身に纏わりて、其の志を遂ぐる能わず。徒らに、書に臨みて歎息すること已まざるのみなり。

享和癸亥（一八〇三）の秋、寅、浪華に適くの役有り。至るや則ち、翁の浪華に僦居するを聞き、乃ち、住きて之を訪ぬ。相見て喜ぶこと甚だし。寅、幸にして京抵の間に留ることを得、因りて、數、相往來して譚ずるに、診腹の事に非ざることを莫し。後、翁は病を得、自分は起つべからず。寅に後事を囑するに、但だ、奇覽の補翼のみを言う。翁、文化乙丑（一八〇五）の夏六月、浪華に没し、遺言存するのみなり。

丁卯（一八〇七）の秋、寅、京師に卜居し、世事頗しく間を得、因りて、翁の志を追成し、「腹證奇覽翼四編」を作る。合して八巻なり。

寅、歎じて曰く。嗚乎！翁の医に於けるや、篤と謂うべきなり。其の臨終の願囑する所、亦他に及ばざるは、以って観るべきのみ。且つ翁の寅に於けるは、之れ遇と謂う耶。抑も天なる耶。何ぞ、其の離合の期を定むること有らずして願囑の前約有るに似たるや。

因りて、世間、亦寅の如き不遇の者有りて、偶、此の書を読み以って自ら修むるの方を得、而して、身を保ち親に事うるの用に供せば、則ち亦、猶、翁の寅に於けるがごとからんことを思うなり。

書肆、積玉圃主人、翁の奇覽の故を刻するを有する以に、來り此の書を刻せんことを請う。因りて、其の始末を叙し、以って授けて爾と云うなり。

時、文化六年己巳、孟春の望（一八〇九）

平安の僑居において書す

遠州、和久田寅

題言

一、曩に、湖南桐葉翁著すところの腹證奇覽二編は追日、世に行わる。

翁は素、文辭を學ばず。専ら診腹の一技を脩す。故に、其の著すところ、皆門人・二三子の口授筆記するところ、遺闕なしとせず。此の書、奇覽に依りて、其の闕たるを補い、其の遺せるを拾い、加うるに余が千慮の一得を以て之を羽翼す。

其の図する所の腹狀、重複するものあり、新写するものあり。其の重複するものと雖も、亦闕たるを補うのみ。奇覽と併せ讀みて、其の全旨を得べし。是れ翁が余に顧囑する所の意なり。

一、診尺の診腹たる内經明文あり。之を仲景の腹證に徴して、益、古医の術たることを知る。故に、首に其の文を載せて、略、愚解を附す。之に次ぐに仲景腹證部位及び陰陽表裡内外の図説を以てす。互に相發明して、腹診の術の最も古にして妄ならざることを知らしめんが為なり。

一、方意を發明するものは、每方その説を挙げ、復たその煩を厭わず、且つ傷寒論、金匱の中に就いて其の證を引き、加うるに註釈を以てす。初學をして讀み易からしめ、且つその殊途、帰一の趣き知らしめんが為のみ。

一、編集の次序、奇覽に依らざるものは、一に方意を弁することを主として、加減方の如きは本方に隸屬す。前後相發明するに便ならんことを要するなり。

一、諸家腹證を言うものあるをみれば、輒ち取り以て其の説を附記す。其の未だ試みざるものは、別つに

「或曰く」を以つてす。異聞を弘るにあるなり。

題
言
畢

腹證奇覽翼 二編

序

遠州浜松、和久田叔虎は、湖南の稻葉文礼の弟子なり。

文礼、自ら謂いて曰く。「文事に於ては、則ち吾れ能くせざれども、医事に当りては、則ち師に譲らず。尤^{もつと}け、診腹の術に精^{こころ}わし」と。

業^{わざ}已に、「腹證奇覽」前後編を著わす。叔虎、其の志を襲^{つぐ}いで翼初編を著わし、今又、第二編を著わす。

蓋し、叔虎は、文事有るの士にして、文礼に師として事^{つか}うれば、文礼の技に則し、衆医に超越すること知るべきなり。且つ、叔虎の医事に篤^{とく}きも亦知るべきなり。

頃^{ころ}、書肆積玉圃、將に諸^{しよ}を木に上^{のぼ}さんとして、序を予に謀る。然れども、余、未だ二子を識^しらず。總^{おと}に、二子の著す所の自序を觀、而して其の人と爲りを概するのみ。

漫^{まん}に、癡言^{ちげん}を書して、以つて弁^{べん}駟と爲す。只恐^{ただ}らくは、棋師、旁觀の譏を免れざらんも、爾^{しか}云う。

天保壬辰首夏（一八三二）

河内村・脩竹深処に於て書す

腹證奇覽翼 三編

序

夫れ腹は、生を保つの本にして、百病は都て此に根さす。故に、古方を修むる者は、證を先にして脉を先にせず、腹を先にして證を先にせざるなり。然して、腹状を主とするもの有れば、外症を主とするものも有り。

医は病の応は脉診に在りと謂う。然れども、留飲家の積聚脉の如きは千状万形にして、或るものは無く、或るものは有りて、得て審らかにすべからず。脉の足らざること、以て證するに此の如し。

是れに由りて、和久田君は、次して曩に世に公にせる所の腹證奇覽、其の翼を轉めり。方意を釈く毎に、各々図を摸し、以て方證の正鵠を指す。能く斯の篇を理會して、仲景の矩則を執り、則して差わざるに庶し。

聊か、其の志を繼ぎて、爾云うなり。

嘉永辛亥春二月。(一八五一)

浪華 小川恒徳 撰す

腹證奇覽翼 四編

序

今の方技を為す者、明斷秀工の士、少なし。而して、放蕩怪猾の徒、糊口の資を失ひ、遽然として医となる者、夥し。固り、秦張の古籍を精研せず、遠奥を簡約して、粗しに諸家の雜書を看過し、以って得たりと爲す。致々紛々として、猥りに攻劇なるのを投じ、誤りて人命を損じ、遂は、其の拙劣なるを言わずして、却って古方を誣る。上古の聖方と雖も、奚ぞ其の肯綮を得んや！

苟くも医たるや、天下の大任なり。須らく、心を尽くし智功に力め、枢要精微を究め、以って天下の用に供すべきなり。是に於いて、和久田氏は、専ら長沙の論に拠りて、方意を弁じ、章句を訳して、号して「腹證奇覽翼」と曰い、以って初蒙の階梯を爲れり。予、之を閲するに、本源を搜りて華実を撫めるものなり。亦、刀圭の捷徑たらざらんや！

孟軻氏曰く「愆らず、忘さずして、旧章に率由す」と。余、其の篤志を善とし、是に於いて序す。維れ時に、嘉永辛亥二月。（一八五二）

小川恒徳 撰す

腹證奇覽翼 初編上冊

遠江浜松

和久田寅叔虎 著

門人豊前中津

原田成憲子 欣校

83-I、総論 併せ内経診尺図解二図（翼 初編上冊）

上古の医は如何なる術を行ない、如何なる薬を用いて、疾病を療せしや。其の詳らかなることは得て知るべからず。但し、書に曰く、「薬、瞑眩せざれば厥の病瘳す」と。仲尼の曰く「良薬は口に苦けれども、病に利あり」とを併せ考うれば、いずれ偏性の毒薬を以て疾病を療せしこと明けし。（周礼。医師、医の政令を掌り、毒薬を聚め以て医事に供す。云々）

されども、後世の如く医論の書もあるまじければ、但、薬方のみを伝えて其の施用に至りては、口訣に存して師弟相承けたるものならん。且つ、其の薬方とても至って簡易にして、薬品も寡少なりしこと、推思うべし。

左氏伝に、医緩・医和の事を載すと雖も、頗る怪談と議論とのみにして、治療のことに及ばざれば、以て法とすべからず。

降りて戦国に及びて、扁鹊の名、天下に高し。太史公、為に伝を作ると雖も、是れ亦、異聞を集め載すといえは、虚実審かにし難し。然れども、齊の桓公の色を望みて、其の病の浅深を説く。虢の太子の尸厥を聞

くとき、乃ち曰く「越人の方を為るや、脈を切し・色を望み・声を聞き・形を写すこと待たずして、病の在る所を言う。云云」とあり。此の言を参観（まじえみる）するに、四診の中に於いて、特に望・聞の二つに通ずること、所謂、神・聖の域に躋るものにして、誠に上工の手段なれば、是れも亦、何れも扁鵲の遺法として則り難し。難経を扁鵲の書と言伝えれども、偽（いつわり）たること疑を容れず。

其の他は、素問・靈樞の二書とも上古の書と言は、固り論ずるに足らず。然れども、秦漢より魏晉までの間の作たるべければ、其の古を遠ること遠からず。其中、素問は一人の手に成りたるものに非ず。色々とり輯めて編什の次序もなく、臟腑陰陽の論の如き、其の説一定せず、無用の空論も多し。然れども、就中、刺絡、鍼治の事は、実に涉りて医療の心得とすべきこと多し。

靈樞は一家の手に成りて、専ら鍼術の事を論ず。僅かに一、二の藥法ありと雖も、信ずるに足らず。

此の二書も、後世は上古聖人の書として尊みて、全く以て医療の法則とし逐一に金科玉条とするは、余りに思い過したることにて却って「見解なし」と謂うべし。孟子の曰く「尽く書を信ぜば、書無きに如かず」とは、是れ之を謂うなり。

又、素靈の中に、問、診尺の論あり。其の文を審らかにするに両説あり。

一は、臂を尺と名づけて、臂を診すること。

一は、腹中を尺と名づけて、腹を診することなり。

臂肉を診することは、後世、其の術を伝えざれば、捨て論ぜず。

腹を診すること、切要の事なれば審らかに推考うるに、蓋し手脈に於て、医の三指の当る所を寸口と名づ

け、之に対して鳩尾より神闕までを一尺と定め、一身の中央なる故に之を「尺中」と名づけたるものならん。

此れも後には、手脈の名に取りて、寸口に於いて又三部に分ち、医の無名指の當る所を「尺中」と名づけたるより、名義相混じて紛々たり。されども、手脈に尺中の名あるは、臂を尺と名づけたるより出たる名なるべけれども、中の字義を成さず。

(案するに、肘際より臂彎に至り一尺とす。臂彎より魚際に至り一尺二寸、魚際より中指頭に至り八寸、合せて二尺。是れ人身自然の尺度なり。大指と中指とを分開して之を計る。然らば則ち、臂よりいうときは尺前、手頭よりいうときは尺後なり。尺中の名義廻りどころなきことを見るべし)

抑々、素靈の中に於いて、尺を診すれば脈を切することを待たずして、病を言うことあり。尺と脈とを分對するの文ありて、診尺の診腹たる、疑を容れず。然れども、其の診法の詳らかなること載せて伝わらざれば、今に則りて試むべきこと難し。

此の外に、古書の今に存して取るべきものは、傷寒論・金匱・玉函より貴きはなし。脈證・治論・藥方兼ね備わりて遺すところなく、実に医家の至宝とし尊むべき書なり。其の仲景の作たると否とは、措いて姑く論ぜず。此の書も亦、晋の王叔和が撰次にかかり、私言を雜えて真を乱るもの半を過ぐ。然るを後世の諸医、全く以って仲景の遺書と心得て取捨せざるは、是れも亦、見解なしと謂うべし。

近時、本邦の医、稍、其の非を覺り、其の妄を破りて、互に一家言を張り、彼此に門戸を立て、復古學を唱うもの踵を接いで起る。其説も亦、一得一失ありと雖も、概するに宋元以降の医の上に当たり。其の中にも亦、名聞を求むるものは文飾に過ぎ、世を慷慨するものは剛毅に僻して、中正を得るものに至りては、幾

んど希なり。然れども、医は固り技術たれば、孰れにも実に近しと思うところを、自ら採びて之を学ぶに如くはなし。

傷寒論を読み、金匱・玉函を看て、旦夕に其の深きに釣り、其の旨を味うべし。後世の著書とは格別にして、文簡にして、旨微なり。必ずしも一家の言に僻すべからず。

其の陰陽を分ち、六位を差し、病状を弁ずる中に、腹證と外證とを対して言うもの多くして、脈候を挙ぐるものは、大率、疑途に非らざれば言わず。其の證を捨てて専ら脈に依りて病をいうもの、皆叔和の補添するものなること疑なし。脈と因とを後にして、一に證に隨いて治法を論ずるもの、概するに仲景の本色なりとして看読すべきこと肝要なり。

是の故に、腹状を診按して病證を弁ずるは、仲景を以て則とし学ぶべし。其の活套を得るに至りては、勉めて思うにあり。語に曰く「学びて思わざれば則ち罔し。思いて学ばざれば則ち殆し」と。今且つ、素靈の中に於て、診腹の徴とすべきもの一・二を掲げ、其の義を解釈し、以て初学に示すこと左の如し。

《素問・脈要精微論》に曰く。「尺内兩傍は則ち季脇なり」（鳩尾より臍までを一尺とす。其の兩傍は、則ち脇肋（あばら）の下端（はずれ）なり。季は末なり。あばらの末という義なり。内は外に対するの字。臍下を「尺外」というに對して「尺内」という。「尺中」とは其の義のことなり）

「尺外は以て腎を候う」（臍より上を尺内とす。臍下を尺外とす。蓋し、氣海丹田を指す。故に腎を候うという）

「尺裡は以って腹を候う」(尺裡は、則ち尺内なり。心下より臍上までの間を広く指して腹という。尺裡は皆、腹なり。故に、腹を候うという)

「中附の上」(身軀を三つに分ち、鳩尾より臍までを中とす。中附上は、臍より上、中部に附くというの義なり)

「左外は以って肝を候い、内は以って兩を候う。右外は以って胃を候い、内は以って脾を候う」(中附上の間にて左右を分ち、左右各々、内外に分つ。下も同じ。兩は脇なり。胸腹の分界の名なり)

「上附の上」(鳩尾より上。天突の下までを指す)

「右外は以って肺を候い、内は以って胸中を候う。左外は以って心を候い、内は以って膻中を候う」(膻中は、兩乳の間なり。案ずるに、胸腹とも其の候うの処、各々高下あるべし。細に分たざるなり)

「前は以って前を候い、後は以って後を候う」(前は、蓋し前陰及び面部の七竅なり。後は肛門及び頸・項・背脊なり。通塞・利不利及び凝結等を候うなり)

「上竟の上は胸喉中の事なり」(上竟の上とは、上部の竟の上なり。蓋し天突より上を指す。故に胸喉中の事という。喉は、のどぶえなり。事は、候うを事とするなり)

「下竟の下は少腹・腰・股・膝・脛・足中の事なり」(下竟の下は、下部の境の下なり。蓋し横骨・髀関より下、足さきに至るまでをいうなり)

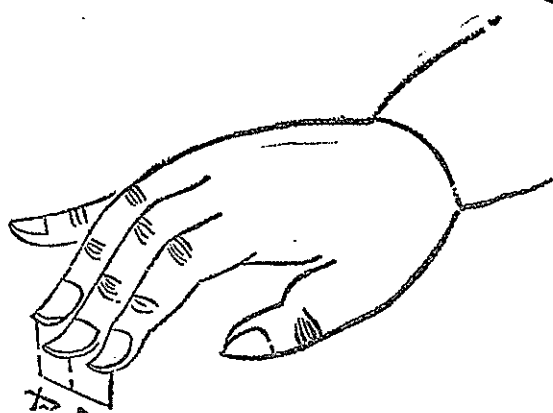
此の章に因り考うるときは、古え三部九候というは、身軀を三段に分ち、上中下・各左右中を候う事なり。(天突より鳩尾まで一尺、鳩尾より臍まで一尺、臍より横骨に至るまで一尺。指を分開して之を度る。)

是れ人身自然の尺度なり）

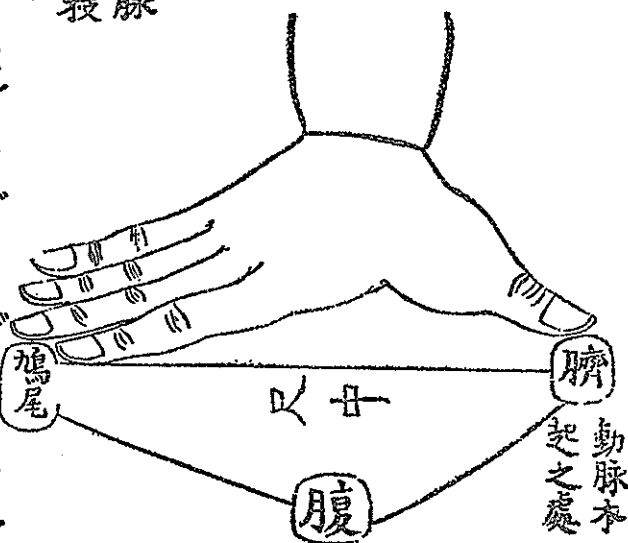
後、之を手脈に移して、寸・関・尺に於いて浮・中・沈を候うの事とするならん。案するに、周礼に曰く、「之を兩にするに九竅の変を以てし、之を參にするに九臓の動を以てす」と。（東洞吉益子、以為、竅の変は、開閉常に非ざるを謂う。陽竅七、陰竅二。臓の動は、水穀納る所、之を腑という。九は上中下各々左右中なり。夫れ、飲食の口に入り、咽喉より肛門に至りて一路なり。糟粕滯らず、二陰より出れば、百臓に度りて病なし。滯るときは、變じて一身に充ち、四肢百骸を病ましむ。中行に在るを危しとす。左右之に次ぐと。云々）

此れ亦、三部九候及び前後の変を候うのことにして、此の章の旨と相似たり。并に古診の事たるを見るべし。更に図を以て、左に詳かにす。

寸口尺中図 (翼 初編上冊)



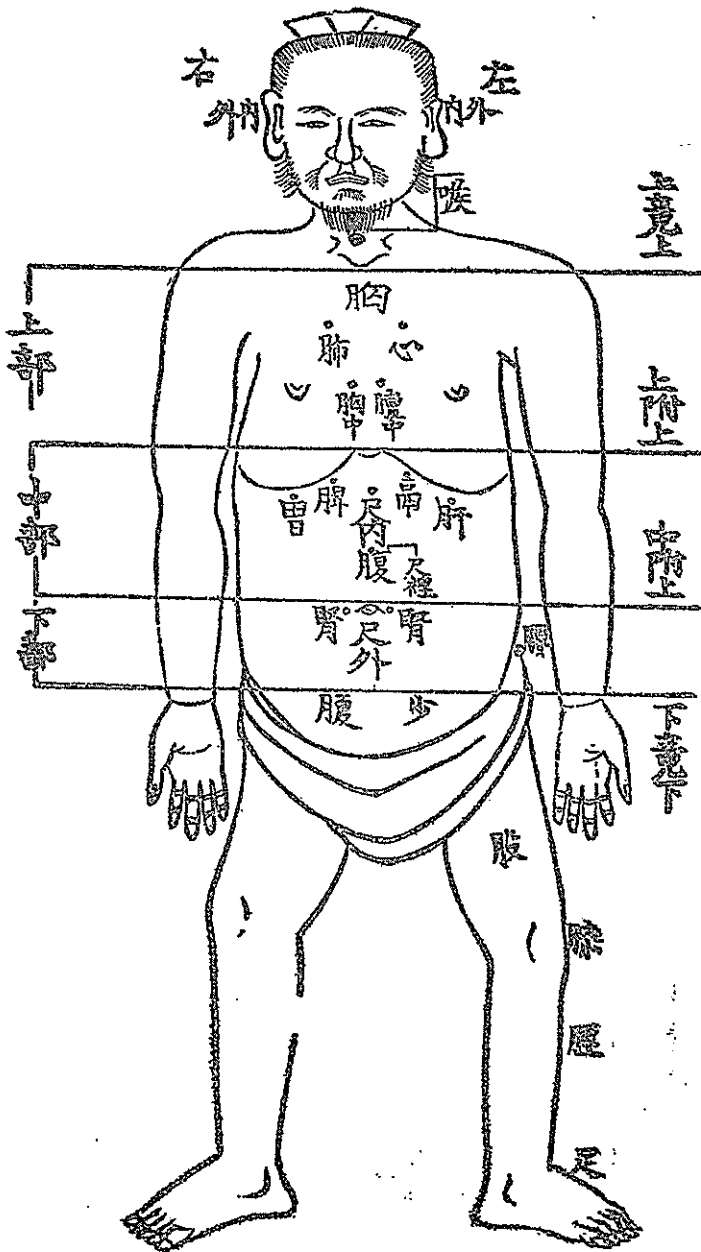
經脈
之技
(手)
葉



動脈本
起之處

古診ハ蓋寸關尺ヲカクス。三指ノ當處僅ニ寸許ナルヲ尋之ヲ
寸口ト咎グ。大指ト四指トヲ分節スル處。一尺ト起テ尺中
トイフ。手脈ハ外ニ衝テ。癰ノ動靜ヲ候ノ門戶トス。故ニ寸
口トイフ。腹ハ内ニ知ル。故ニ尺中
シ病ノ在トコロヲ知ル。故ニ尺中
イフ。中焦ヲウカバフノ義ナリ。

診尺左右内外上下三部図 (翼 初編上冊)



83-II、診尺・左右内外上下・三部図

〈素問・方盛衰論〉に曰く。「脈の動靜を按じ、尺の滑濇を循る」(按は抑えるなり。脈、浮数は動なり、沈遲は靜なり。循は撫でるなり。尺は腹尺なり。滑はなめらかなり、濇ありてすらすらしたるを謂う。濇は渋るなり、鉄の鏑を撫づるが如く乾きて滯るなり、肌・甲錯の類なり。

「寒溫を之れ意し」(寒は冷ゆるなり。溫は暖かなるなり。意はおもうなり、心づもりをすることなり。脈の動と尺の滑とは、溫を知る所以なり。乃ち、陽證なり。脈の靜と尺の濇とは、寒を知る所以なり。乃ち、陰證なり。是れ、陰陽の二途を分別する。乃ち、寒溫を意測するなり)

「其の大小を視」(視は、心を著けてみるなり。其の字は尺を指す。大小は形の大小なり。故に、視の字を下す。乃ち、腹状の大小を視て、病の輕重を別つなり)

「之を合せて病態とす」(之を合すとは、脈と尺と其の大小との三なり。態は容なり。此の三候を合せて、一病の態として定むるなり)

此の章、脈と尺とを分対し、脈に按(おす)といい、尺に循(なでる)といい、其の大小を視るといふ。診腹の事たる昭々たり。

《靈樞・診尺篇》に曰く。黄帝、歧伯に問うて曰く。「余、色を視・脈を持つこと無く、独り其の尺を調え、以て其の病を言い、外従り内を知らんと欲す。之を為すこと奈何」〔調はとどのえるなり、こしらえて程良くし和すことなり。或は按し或は循て、諸々の形状を審らかにするが、乃ち調なり。此は顔色も脈候も捨て、独り腹尺ばかりを調べて、其の病情を言い、外側より腹内の様を知らんと問なり〕

歧伯が曰く。「其の尺の緩急・小大・滑濇・肉の堅脆を審らかにして、病形定まる」〔審は、つまびらかにするなり、とくと其の模様をわかたなり。緩は、ゆるむなり、皮の緩みてぐさつくなり。急は、引張るなり。小大滑濇の解は前に見ゆ。堅は、かたきなり、根の張りて動かぬなり。脆は、もろきなり、砕け易きなり。其の腹皮の緩急と、形の大小と、肌膚の滑濇と肉の堅脆とを審明にして、それにて病の形は定まることになるとなり。定は、ゆりすわりて条理のたつことなり〕

此の章、色候も脈診も捨て、独り調尺のみにて、其の病形を定めることを言う故、《方盛衰論》よりも、又一段、詳らかなり。

抑、今之を病人に試験したところの仲景の腹證に當るに、其の大概を言うべし。

仮令ば、腹皮の緩なるものは、桂枝去芍藥湯・桂枝附子湯・梔子豉湯・四逆湯の類、是なり。

其の急なるものは、小建中湯・芍藥甘草湯・甘麦大棗湯の類、是なり。

形の小大は、胸に於ては大小陷胸湯。胸腹の間に於ては大小柴胡湯。腹に於ては大小承氣湯の類、是なり。肌膚滑沢なるものは桂枝湯。濇澁なるものは大慶虫丸・薤白附子散の類、是なり。又、案ずるに、黄耆諸劑も肌膚の枯燥濇澁の證あるべし。

堅は、諸の心下痞硬・堅・硬満の類、皆堅きなり。

脆は、諸水気あるの腹、物あるが如くにして、之を按すれば碎け散るものの類、是なり。

凡そ、是等の腹證、枚舉するに遑あらず。此に、僅かに其の一、二を例するのみ。各方の證ごとに、皆此の分別あらずということなし。是の故に、腹證を審らかにすれば、脈を切し色を望み、及び病者に問わざる前に、予め其の患うる所を知り、吉凶を分つに足る。且つ、「未病」というて、其の毒内に伏して未だ外に発せざるものを知り。藥を与うる後に於ては、病毒の既に尽ると未だしきとを明にせらるること、信に此の章の言う所の如し。

是に於てか、古診尺の法、取つて以つて仲景の腹證に徴するに足るのみ。

同篇に曰く。「尺の膚、滑にして淖沢なる者は、風なり」(淖沢は、潤いてぬらつくなり。蓋し、微汗出づるの謂なり。此れ乃ち、太陽中風・汗出づるものにして、桂枝湯の證なり。故に、「風なり」という)

「尺の肉の弱き者は解臥・安臥す」(解臥は、くたびれて精氣なきなり。安臥は、おちついて寝るなり。凡そ、陰證の腹には、しまりなく熟瓜を抑す如くにて、其の人、精氣衰えくたびれて、安靜平臥するもの多し。四逆湯の證の如き是れなり)

「脱肉の者は、寒熱ともに治せず」(脱肉は、肉のおちたるなり。腹皮薄く掴み揚るようになりて、之を按すに綿絮の如くたわいなくなりたるをいう。前の弱、というよりは、一等精氣の脱けたるものなり。此の證、寒にても熱にても、并に治せぬものとするなり)

「膚、滑にして沢脂なる者は、風なり」(脂は、あぶらぎるなり、汗ばみて脂ぎるなり。此れ亦、太陽の中

風の證なり）

「尺膚澹る者は、風痺なり」（痺は、しびれるなり。膚の澹るものは、氣血の不足して、風を感じて痺れるなり。乃ち身体不仁の病なり）

「尺の膚、癢にして枯魚鱗の如き者は、水にして洩飲なり」（癢は、粗るなり。枯魚鱗の如きは、がさつきて潤なきなり。此れは水氣にて、留飲の皮膚に溢れたるなり。洩は、あふるるなり、溢飲というが猶し）

案ずるに、此の篇は錯脱多くして全文の義を成さずと雖も、所謂、尺膚を審かにして病形を定むるもの、概見すべく、亦之を仲景の腹證に徴すべし。王冰等、文義を審かにせず、一に以て臂肉を診することとして、牽強付会す。妄と謂うべし。

凡そ、文辭錯脱し全義を見るべからざるものは、古書の往々然とする所、其の疑わしきものに於いては、蓋し闕如するなり。読む者之を思え。

已上、内經の文を解釈して、腹證の古診法たることを知らしむ。其の他、一、二診尺を言うものありと雖も、已上の諸章にして、已に徴するに足るを以て、之を略す。委くは本書に就いて覽るべし。

或問いて曰く、「古医に四診の目あり。曰く、望・聞・問・切。其の術に違する者、名づくるに、神・聖・巧・工を以てす」と。吾子が云く、「扁鵲の術の如きは上工の手段にして、則るべきこと難し」と。

然れども、齊桓の色を望むは、乃ち望なり。入虢の診は、乃ち聞なり。則ち扁鵲の術と雖も、四診の外に出ず。乃ち神、乃ち聖なりと雖も、彼も人なり、我も亦人なり。為ることあるものは、皆斯の如くなるべ

し。

本邦の先達、今大路・古林の如きも、亦其の術を能することありと聞く。至高至遠にして到り難しと雖も、造るに其の道を以てせずんば、曷の日か、其の源に逢わんや。之を「自棄」という。

吾子、今儒に診腹のみを主張す。是れも亦古の術なりと雖も、僅かに四診中の一にして、最も卑しとするところにあらずや。「積聚に習いて深淵を窺わざるものは、鸛龍の蟠る所を知らず」といへり。吾子も亦一家に僻して、反って卑近に失するにあらずや。

抑、望と聞とは、得て学ぶべからざるや。願わくは其の説を聞かん。

答えて曰く。古、四診の目あるは、別つて四術とするにあらず。其の帰は一なり。仮令ば、今一病人を得て之を診するに、未だ、其の前に還かざるときに、先ず遠く望んで其の神色を觀察し、予め其の吉凶・淺深を知り。既にして其の傍に到るや、先ず其の語声の清濁・高下と、呼吸氣息の緩急・長短・多少とを聞いて、其の輕重劇易を知り。次いで、其の患うるところを問ひ、且つ脈を切し、腹を按じて、其の陰陽・虛実及び病毒の形状・所在を審らかにし、然して後、其の病態を定め、慎んで治案を処す。是れ、四診の序なり。

然らば則ち、四診は一病人ごとにして、必ず闕くべからざるの法なり。而して、其の帰は一なり。別つて四術とするに非ざるなり。但、望と聞とは、黙して識り・感じて格るべし。初めより其の術を能すべからず。教うるに物なく、学ぶに則なし。大匠は人に教うるに規矩を以てす。学者も亦、必ず規矩を以てすといへり。

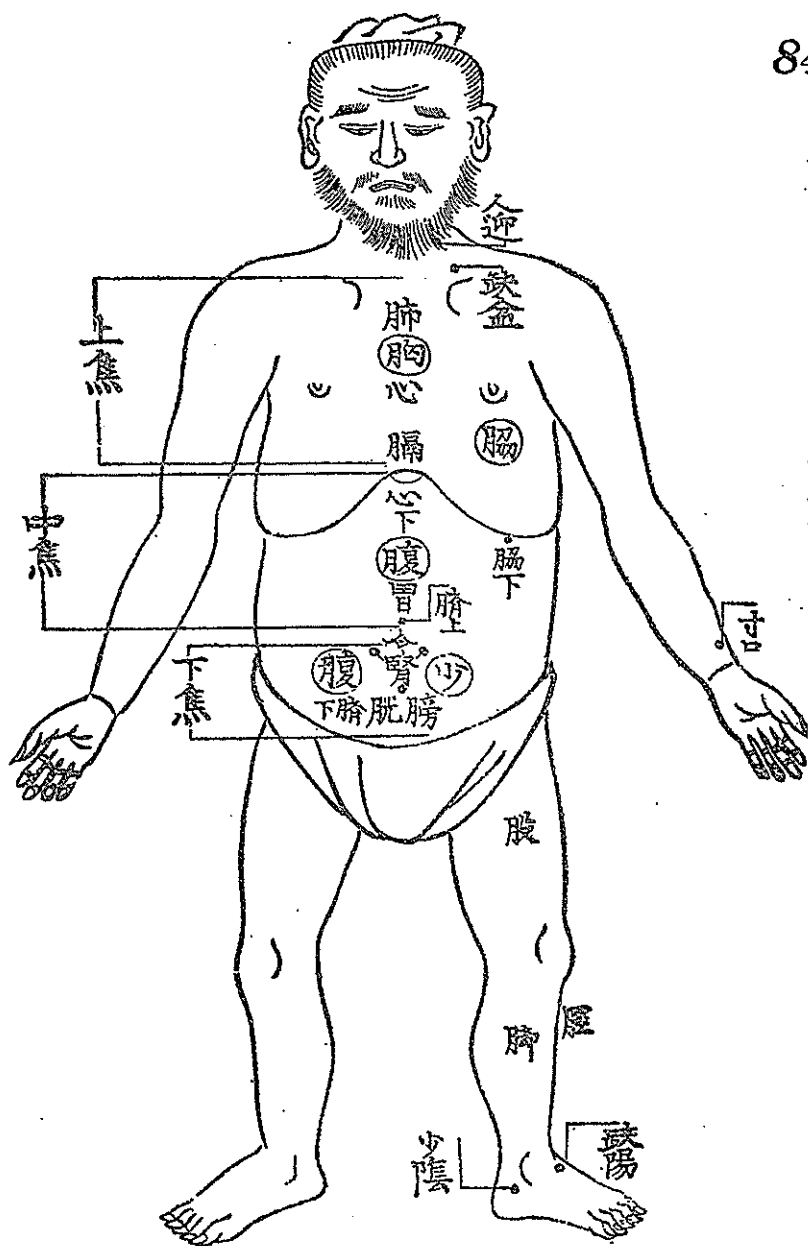
問と切とは、教うるに物あり、学ぶに則あり。抑、古人の曰く「高きに陟るに、必ず卑きよりす。遠きに

涉^わくに、必ず通^{とほ}きよりす」と。切は、四診の下に序^{ついで}て最も卑^ひ近^{きん}なり。是の故に、初^{はつ}学^{がく}は必ず先^{まづ}ず、切より入るべし。

予が所謂「切」とは、徒らに脈を切するのみを謂うに非ず。腹を診するを以て緊要至切とす。蓋し、腹を診するときは、詳かに病の在る所を知り、陰陽虛実、復た臆断なし。故に腹候詳なれば、脈状も亦隨いて明かなるべし。是に於てか、之を問うに方あり、之を聞くに物あり。力を用うるの久しきに至らば、豁然として望^{もち}察^{さつ}の神鑒^{しんかん}を得べし。扁鵲が五臟の癥結^{しやうけつ}を見るも、豈、是の外に出んや。

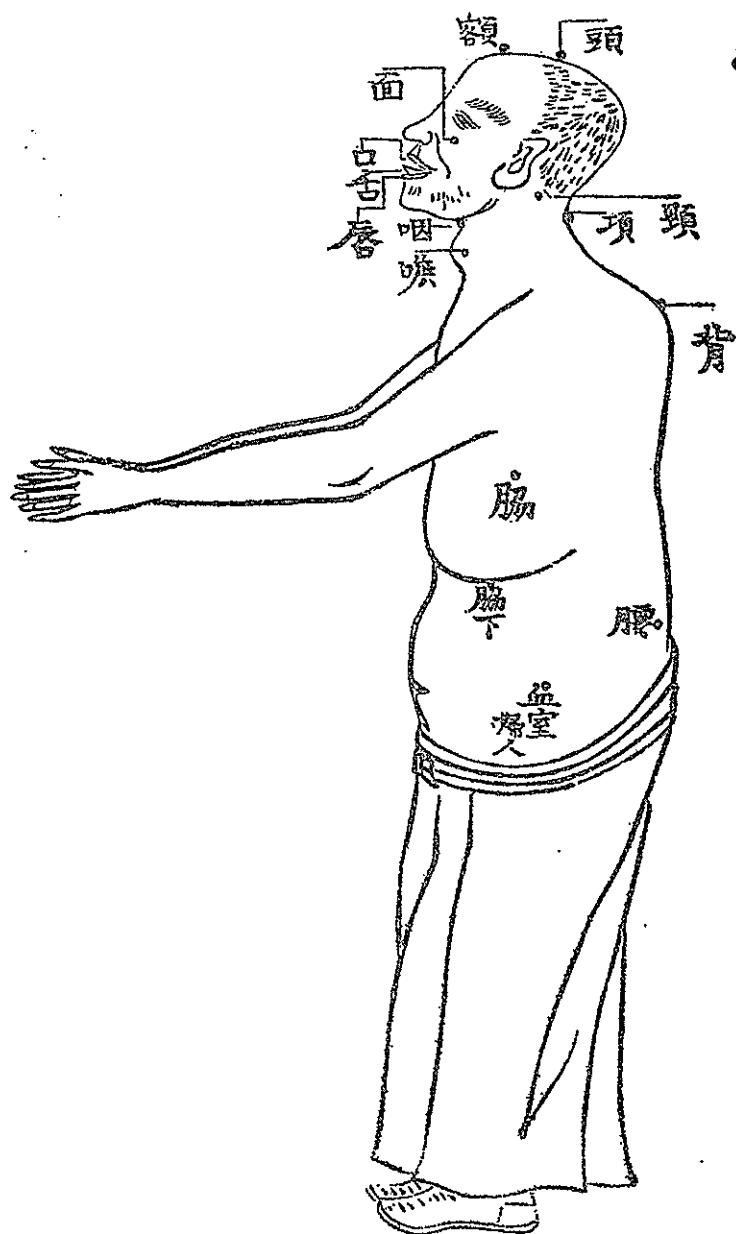
是の故に、吾が門は腹を診するを以て入門第一義とす。豈、舊^{ふる}此の診腹にして已^やまんや。宜しく、此に就いて四診を脩するの階梯^{かいでい}とすべし。是れ、鶴・稻葉、二翁の腹診に先驅し、予が勉めて殿後^{でんご}をなす所以なり。

正身名目及三焦分解図 (翼 初編上冊)

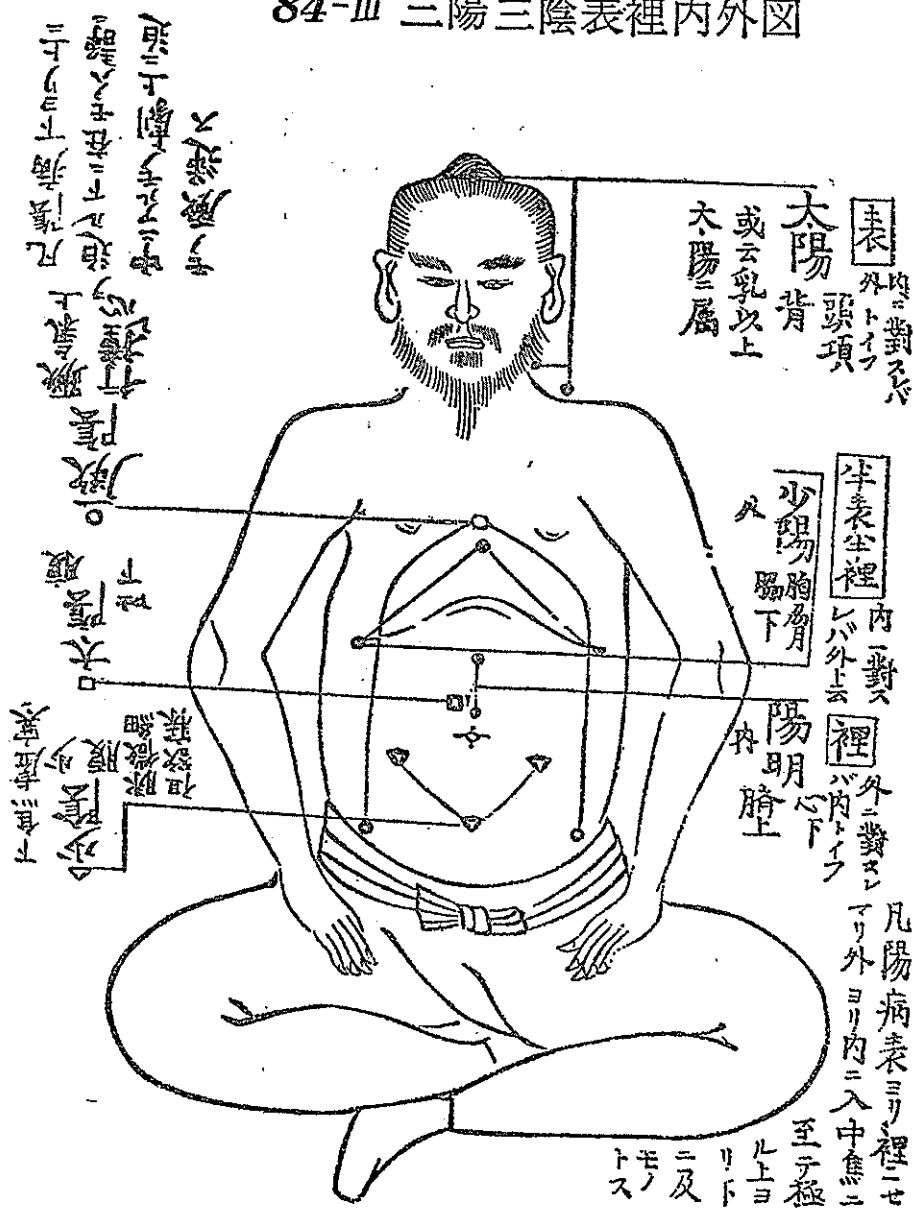


84-II

側身名目図 (翼 初編上冊)



84-III 三陽三陰表裡內外図



84、仲景・腹證部位及び周身名目・三陰三陽・

表裡・内外の図解（翼 初編上冊）

夫れ、仲景の治法を論ずるに、病因と経絡とに於いてせずして、一に之を脈證を審らかにす。故に曰く「證に隨いて之を治す」と。

證を審らかにする所は、各々其の部位に於てす。部位とは、三陰三陽及び三焦の部位なり。……

先ず、身軀の分段を分つて三とす。

曰く、上焦。膈膜より上、心胸の位をいう。

曰く、中焦。鳩尾より下、臍上の位をいう。……

曰く、下焦。臍より下、少腹の位をいう。……

論に曰く。「湯を得て、反つて劇する者は、上焦に属するなり」又、曰く、「理中は中焦を理す。此の利は下焦に在り」と、是れなり。（愚、案するに、三焦を経絡の名とするは古義に非ず。焦はこがすと訓じ、蒸焦の義なり。蓋し、陽氣蒸焦して食物を剋化し、精氣を運行す。故に、咽喉より肛門に至るまでを三段に分つて、三焦の名あり。上焦は水穀をいるる道路なり。中焦は水穀を剋化する鍛爐なり。下焦は水穀を通利する溝渠なり。故に經に曰く「三焦は元氣の別使なり」と）

而して、太陽は、其の證を上焦に現わす。所謂、頭項強痛・項背強、若しくは喘・乾・嘔の類、是れなり。少陽は、上中二焦の間に現わす。所謂、口苦く・咽乾き・目眩す。

(此の三證は、熱、胸腹間にあるの候なり)

若しくは、胸中滿し而して煩し・脇下硬滿、是れなり。陽明は、中焦に現わす。所謂、胃家實・腹滿、是れなり。又、之を名づけて、表證・裡證という。

(太陽を表とし、陽明を裡とし、少陽を半表半裡とす。表裡は裏と表なり。陽病転入する故、此の名あり。) 又、其の表裡の中に於いて、内外を分つ。

(内は、胃内なり。外は、胃外なり。陽邪、胃に入りて、大便秘し実熱の證をあらわす。之を内実という。外は胃外なり。内に對する字なり。故に内に對していうときは、表證・裡證ともに、之を外證ということあり)

論に曰く、「傷寒六七日、發熱・微惡寒・支節煩疼・微嘔・心下支結し、外證の未だ去らざる者は、柴胡桂枝湯、之を主る」と。

これは、傷寒六七日、結胸をなさんとして、心下支結すれども、發熱・微惡寒等の外證あり。且つ、支結いまだ結實に至らざる故、結胸として下すべからざるを以て、外證という。

又、曰く。「傷寒十三日、解せず胸脅滿し而して嘔し、日晡所、潮熱を發する者」云々。「潮熱は実なり。先ず宜しく、小柴胡湯以て、外を解すべし。後に、柴胡加芒硝湯之を主る」と。

これは、潮熱・胃実の候にて、下すべきものなけれども、「胸脇滿して嘔」の胃外の證あるものは、先ず之を解して、後下すべしとなり。これ、胸脇滿は裡證なれども、内に對して外というなり。

又、「太陽病解せず、熱膀胱に結び、其の人狂の如く、血自ら下る。下る者は愈ゆ。其の外、解せざる者は尚未だ攻むべからず。當に、先ず外を解すべし。外解し已り、但、少腹急結する者は、乃ち之を攻むべし。桃核承氣湯に宜し」と。

これは、少腹急結する者は血證にして、胃内の事に非ずと雖も、所謂、急結する者の熱血相結ぶものにして、攻め下さずんばあるべからず。故に、太陽の表證を指して外というなり。

又、曰く「太陽病、外證未だ除かずして、數之を下し、遂に協熱して利し、利止まず、心下痞硬、表裡未だ解せざる者は、桂枝人參湯之を主る」と。

これは、凡そ外にあるものは、下すべからざるを法とす。今、外にあるを數下して、遂に熱を内に協合して、下利をなして止まず。是れを以て、表にある發熱惡寒も、裡にある心下痞硬も並びに未だ解せずしてある故、表裡を兼て治す藥を用うとなり。

已上の教章、並に内に対して外というなり。故に、其の下すべからざると、攻むべからざるとの意を以ていうことを考うべし。

若し夫れ、陰病も亦、部位あらざることなし。所謂、「太陰の病たるや、腹滿して吐し、食下らず、自利益甚だし。時に腹自ら痛むもの、是れ、胃陽衰えて、水氣溜滯するの致す所にあらずや。故に部位を中焦にあるものとす。（陽明の腹滿は裏なり。熱、其の水を燥すものとす。故に之を按すに硬くして痛む。太陰の腹滿は虚なり。水、其の火を剋するものとす。故に、之を按すに硬からず・痛まず。これ、陰陽腹滿の異なるなり）

少陰の初めや、其の證を外に現わす。所謂、脈微細にして、但寝んと欲し、或は手足寒え、背惡寒するもの、腹内の事に非ざるが如しと雖も、其の寒固り表證の惡寒と異にして、其の源を下焦の虛寒とすれば、亦其の部位に於いてせざるることなし。況んや、其の「下利腹痛及び膿血を便する」もの、中下二焦の事に非ざることなし。(少陰病、咽痛み、心煩胸滿等の上焦に属するものありと雖も、皆、氣血上り迫るの致すところにして、悉く下焦の寒に非ざることなし。是の故に、少陰の病候は臍傍より少腹にあるものを本とす)厥陰の病たる、四肢より厥逆するを以て名とすと雖も、所謂、消渴、氣上りて心を撞き、心中疼熱、餓えて食を欲せざるもの、陰病の極にして、「微陽將に絶えんとす」の候なり。

是れ、其の下焦の陽氣已に虚して、陰寒・蹶起して心中を攻むるものとすれば、所謂、消渴、疼熱、邪氣の致す所に非ず。氣血上逼して、此の熱狀を現すものにして、其の病下焦に始りて直に上焦に迫るものなり。(案するに、陽病、外より起りて内に及び、中焦に至るを其の極とす。陰病、外体より始まるが如しと雖も、其の本は下焦より起りて中焦に於けるを甚しとす。其の上焦に及ぶものは、氣血これが為に衰えて上に迫るなり。故に、陽病は上より下に及ぶ。太陽を始めとし、少陽を中とし、陽明を終とす。

陰病は下より上に迫る。少陰を始めとし、太陰を中とし、厥陰を極とす。是れ、陰陽・順逆・自然の象なり。

已上、皆、腹證に非ざることし。之を要するに、陰陽、表裡、内外、皆證を弁し、位を分つ為の紀号にして、其の三陰・三陽・三焦を以て経脈の名とするものは、仲景の本旨に非ざるなり。

又、其の各位に於いて、細に別つところの名あり。

胸膈は、膈上の総名にして、其の内に於いてするもの、肺・心・缺盆・膈上・膈内等の名あり。

腹は、膈下より臍に至るまでの総名にして、其の内に於いてするもの、心下・脇下・臍上・胃の名あり。

少腹は、臍下より横骨に至るまでの総名にして、其の内に於いてするもの、腎・膀胱・腸・血室（婦人のみにあり）・臍下・関元・氣街の名あり。

已上皆、細かに別つところの名目にして、臟腑の名ありと雖も、悉く臟腑内の事をいうに非ず。畢竟亦、各位を細別するの紀号なり。陰陽五行・臟腑配当の説と齊しく見るべからざるなり。

（肺癰、腸癰の如きも、但、其の部位を紀し、専ら證に発見するものを以て之を定む。其の肺癰の證にして、膿を吐かざるものを名づけて肺痿とす。是れ、蓋し肺痿は肺疽なり。然れども、膿なきを以て疽とするは臆断なり。故に、名づけて肺痿という。

凡そ、仲景、名づけて「某の病」とするもの、皆其の證を枚舉して臆断せざるを以て見るべし。其の腎著・肝著の如きも、皆其の位を紀するの名なり。独り胃に於いては、府内の事をいうものあり。これは、飲食、口より入りて其の納るところ、自ら知るべきを以て臆断に非ず。然れども、其の證を得ざれば言わず。其の大便せざること、五・六日已上、潮熱、若しくは腹滿の證を得ざれば、胃中燥屎あるを言わず。乾噫・食臭の證あらざれば、胃中不和を言わず。

吐下の後、及び腹微滿、若しくは心煩等の證あらざれば、胃氣を和調するの劑を投ぜず。

又、梔子豉湯の證に、胃中空虛、といえ、又、之を按すに心下軟ということあり。

黄連湯の證に、胃中・邪氣有り、といえ、腹中の痛むを以て其の応とす。

其の他、熱・膀胱に結す、といえ、下に少腹急結の応あり。

皆、腹診の抛り本づくところなり。

若し夫れ、心煩と胸煩との別は、広狹の異称とす。心は胸の中央の辺あたうの称なり。小柴胡の證に、「心煩・喜嘔、或は胸中煩して嘔かず」という。其の嘔の有無によりて、心胸の分別あるを以て考うべし。此れ皆、作者の意を寓するところなり。

其の瀉心湯の證に於いて、心氣不足、というのは、千金方に「不定」に作るを是とすべし。若し、強て不足とせば、瀉心の名と反せり。瀉は実を瀉するなり。実は乃ち有余なり。何ぞ、不足を瀉するということを得んや。読む者、詳らかにせよ。

85、腎間動の説并に図（翼 初編上冊）

夫れ、腹中を按じて動脈を候うこと、最も緊要にして、務めて、精察せずんばあるべからず。

然るに、濟生家、此の診に疏なるもの多し。甚しきに至りては、所謂、「寸を按じて尺に及ばず」或は動あり、或は動なしとして、但、病毒の致すところとする者あるに至る。豈、歎息せざるべけんや。

古人も言わずや、「腎間の動は生命の本。十二經の根本なり」と。

又、云く「人の尺あるは、樹の根あるが如し」と。（已上、難經に出づ。尺は動脈の根本なり。委しくは、別に論ず）

又、云く、「陰尺の動脈、五里五俞の禁に在るなり」と。（靈樞、本輪篇に出づ。陰尺は腹なり。動脈は動氣なり。五里、五俞は、五臓の在る所なり）

此れ皆、動脈の事にして、呼吸の氣息絶えざる間は、此の動なしということなし。世医、動もすれば、元氣の虚実をいうもの、亦此の物に於いてせずして何をかいふことを得んや。論、偶此に及ぶものありと雖も、或は神闕に在りと云い、或は氣海丹田に在りと云い、其の實を極むるに至りては、大率「秘訣」として言わず。他なし。徒らに之を彷彿の中に求めて、其の物を究極せざるなり。

蓋し惟うに、天は一氣にして万物を維持するものなり。故に、天地の間に生れて氣息あるものは、命を受

けて活動せずということなし。命とは、乃ち天の一元氣にして、之を其の腹内に結ぶところありて、夫より己が有となり、一身に運行して活動の用をなすなり。

其の形氣の相結ぶ處、名づけて魄はくという。其の氣は即ち魂なり。是れ魂魄は神明の舍しやにして、生命の本なり。

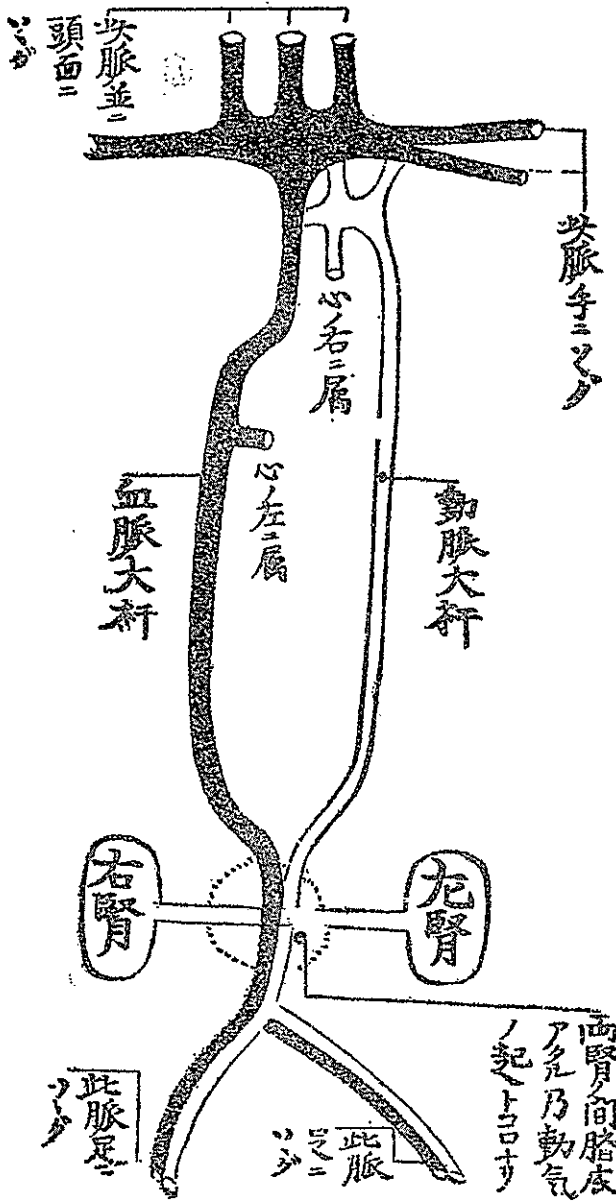
(愚案するに、漢儒以來、元氣の説を立つ。遂に取りて以って医家の恒言こうげんとなる。其の説、易の先天太極に基づきて、人の元氣をいう。以為けいぎ、人生の初に天より賦し与えられて出生より後は、我が腹内にもちきりになりて活動するものあり。之を元氣と名づくと。因って元氣を補うの説あるに至る。大なる誤なり。

元氣は天の一元氣にして、此れを我が内に引うくるところありて、それにて活動するものにして、日々に新たにし、我が口鼻より出入往來してあるもの、猶、魚の水中に居て水を得たるがごとし。されば、元氣の旺衰は、それを我が内に繋ぎ有つところの強弱をいうまでのことにして、別に人の元氣として、我に持ち切りたるものなし。譬えば、子舗なの如くなるものにして、主人は彼に在るなり)

抑、人の初めて生れるや、男女、精を構かして以って成る。譬えば、燧たいを鑽くりて火を得るが如し。其の育するに乳汁を以ってし、之に續くに穀肉果菜を以ってす。譬えば、得るところの火、油を湛とえて燈ともしびとするが如し。其の死するや、精虚し魄散じて、氣・独り其の元げんに帰す。譬えば、油尽きて燈滅るが如し。是れ、魂氣は猶燈火のごとく、形魄は猶油汁のごとし。(魂、魄の名義、別に詳らかにす。此に略す)

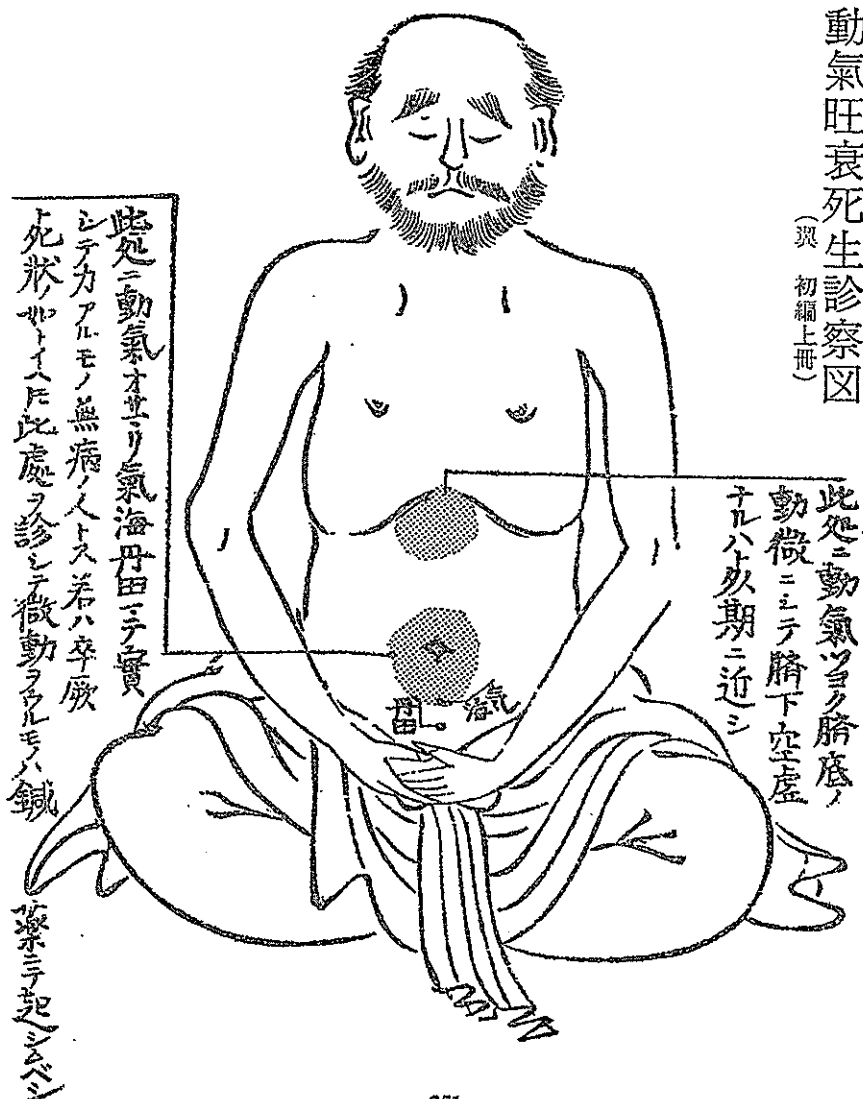
其の形氣の相結ぶ所の處、之を腎間とす。正に、臍底に當れり。故に、臍底を以って動脈の根本とす。所謂、腎間の動、是れなり。(腎に左右あり。左を腎といい、右を命門という。其の中間は臍なり。故に腎間と

腎間動氣所起解体図 (翼 初編上冊)



動氣旺衰死生診察図

(翼 初編上冊)



いう。又、臍を名づけて「神闕」というも、神氣往来の門戸なるの義なり。命門と其の義同じ。

和蘭の説。子の子宮に在るや、其の養を臍に受く。先ず其の母の血を胞衣に受け、其の血浸漬して、其の臍帯の血脉に伝い、漸くに之を肝に送り、肝より心に伝え、心よりして一身に周流するもの、大人と異なることなし。其の血、一身に周流して後、臍帯の動脈より復た胞衣に帰り、其の母の血と相和すること、環の端なきが如しと。

凡そ、児の胎に在るや、其の頭足ともに皆白膜ありて之を包み、其の内に漿水充つるときは、免身より前、口鼻より氣を通ずるの路なし。

和蘭の俗は、人身の事を説くに、皆解体して、実に拠りて発明して其の精微を究む。一も臆見なし。正に其の説の如く、子母臍帯より氣血を相通ずることとなるべければ、免身の後、口鼻より通ずるところの氣も、直ちに臍底に於いて相結ぶところあること、亦疑うべきからず。

此の氣の道を通ずるや、上は鼻口に開け、咽喉に至りて気管の一路となり、下は腎間に達し、氣形相結んで呼吸に往来す。而して其の相い結ぶ處、一は血脈に分れ、一は動脈に分れて上下に運行し、一身に周流し四体を温む。

故に、神明の舍す所も此に在り。思慮の発する所も此に在り。嗜欲の動く所も此に在り。驚くときは則ち此の動は跳々とし、憂るときは則ち此の氣沖々たり。君子は養いて以て浩然たらしめ、小人は暴して以て禍を致す。吾が聖人の道より、仏老諸子及び凡百の技芸に至るまで、是の物を知りて自ら省察せざれば、其の徳を成し、其の術を達すること能わず。且つ、人、常を得るときは、此の氣、四肢に旺じ、百骸に充ち、臍下実して力あり。

若し病篤く、若しくは年老いて、神まさに其の舍を去らんとするときは、此の動、心胸に逼りて、四肢に旺ぜず臍下空虛、之を按ずに絮の如し。

(動氣上にありと雖も、臍下に氣旺じて力ある者は、危しとせず。又、形状死せるが如く、或は形容枯槁すと雖も、此の氣存する者は、起しむべし。所謂、形容枯槁すと雖も、根本まさに自ら生ぜんとす。又、所謂、「自ら生くべきもの、之をして能く起しむ」とは、是れなり。)

若し、此の氣旺せざるものは、其の人未だ病まずと雖も、名づけて「行屍」という。是れ死人も同じことにして、所謂、「司命と雖も如何ともすることなきもの」なり)

然れども、人未だ全く死せざる間は、此の動、尚存して止まず。故に、此の動を按するのみにしては、未だ吉凶を予決(予め決める)し難し。故に、之を氣海・丹田の間に候う。是れ少しく動を離れて、其の氣の旺衰を窺(うかが)ふなり。(氣海、関元まで動氣の応ずるもの間ありと雖も、臍底を本とす。故に人毎にはなきなり。試みて知るべし)

86、動悸^{どうき}の弁^{べん}

附・治法略案（翼 初編上冊）

動はうごくなり。神氣にて動くを動という。腹底を按ずに、指頭に応じてドキドキと動いて止まざるもの、動氣なり。

腹皮を浅く按ずに、ビクビクとして指頭に応じ、深く按せば却つて失うものは悸なり。然れども、悸はおそる意ありて、相当る氣に弱^{よわ}のつきたるの字義なるゆえ、其の悸するところ、心中のみならず、心下にても臍下にてもビクビク、ダクダクとして、其の氣の弱ありて落ちつかぬ心持あるもの、乃ち悸なり。

案するに、動は本なり。悸は末なり。動は形あり、悸は形なし。悸は必ず動より発す。故に、動悸を連ね言うことあり。然れども、動あるもの必ずしも悸せず。故に又、動と悸とを別つて、其の證候を異にす。且つ動は動脈の根本にして、病に非ざること前説の如し。但、其の常を失い其の舍^{やど}に安んぜざるときは、之を病證に見ず。證に曰く。「臍上・揺^ゆする者は、腎氣動なり。桂四兩を加う」と。（人參湯。案するに、方下の加減法は、多くは古に非ざるに似たり。然れども、其の古意を存し、且つ試効あるものは、之を棄てず）

又、曰く、「動・臍上に在る者は、癥瘕^{せいか}の害と爲す」と。（桂枝茯苓丸。胎動を連ね言うもの非なり。本方の下に弁す）

又、曰く、「脈、結代、心動悸」と。(炙甘草湯)

其の他、胸腹動あるもの、復、直に其の動を言ずして其の応を言う。所謂、驚狂・煩驚・煩燥・心煩・癡癎・目眩・氣上衝・奔豚氣上りて心を衝くの類、皆動氣の変候なり。

悸は病證なり。其の發する所、三つ。曰く心中。曰く心下。曰く臍下。而して、其の候は一ならず。

水氣によるものあり。(半夏麻黃丸・苓桂甘藷湯・真武湯、是れなり) 熱によるものあり。(小柴胡湯、是れなり) 急迫によるものあり。(小建中湯・桂枝甘草湯、是れなり)

其の他、驚きて悸するもの、憂いて悸するもの、時あつて悸し・時あつて自ら定まるものは、藥治に及ばざるなり。(詩に曰く。「容し・遂し・帶を垂れて悸せん」とは、憂いて悸するの謂なり。五雜俎に曰く、「懸崖に臨み独木橋を涉れば、人をして悸を病しむ」とは、怖れて悸するなり)

或る人、問うて曰く、「動脈を診するの緊要なること、動と悸との弁は、粗、其の旨を明らかにすることを得たり。

今、病人を診するに、動氣の指頭に応ずるものあり、又応じ難きものあり。宜なるかな、世医の動氣に於いて有無をいうることあること。之を診するに法ありや。且つ、其の動氣の応ずるもの、其の證を弁じ、其の方を処するの略も、亦聞くことを得べきや」と。

答えて曰く。「凡そ、腹を診するもの、三指探按(さぐり按ず)の法あり。覆手圧按(押しつける)の法あり。探指に応ぜざるものは、覆手圧按せざれば得べからず。(診法は下冊に詳にす)

今、初学の爲に、其の治法の顯然たるものを挙げて、以つて索按の引とす。豈、其の変を尽すに足らん

や。委くは各方の腹證の下に弁ず。

虚里の動は、左の乳下に在り。

凡そ、胸腹に動あるもの、多くは此処に応ず。甚だしきものは、右の乳下にもあり。平生、此の動高きものは、痰飲に属す。

（蒼桂朮甘湯の類。證に随つて考え用うべきなり）

傷寒熱證に、此の動高きものは、後、大患あり。怪視すべからず。

或、曰く。「虚里の動亢るものは、痰飲・食積多し」と。

又、曰く。「此の動亢りて、行歩なりかぬるものは、脾氣の不調とす」と。

又、原宗甫が曰く。「此の動洩もの、半夏の證なり」と。

心・動悸するもの。（炙甘草湯）

覆手に胸を按じて、之を得べし。其の他、病人を診する毎に、必ず先ず、覆手圧按して、心胸の動靜を候うことを要す。

心胸一面にダクダクと動くを覺ゆるもの、諸證の分別ありて紛れ易し。

熱煩なるものあり。（柴胡桂枝湯・瀉心湯）

虚煩なるものあり。（梔子豉・酸棗仁湯・竹葉石膏湯の類）

氣・上衝するものあり。（諸の桂枝輩・臍上の動ある者）

氣・上衝して急迫するものあり。(甘草干姜湯・小建中湯・桂枝甘草湯の類)
痰飲なるものあり。(苓桂五味甘草湯・小青龍湯・苓桂朮甘草湯の類)

宗甫が曰く。「膈中以上、悸して熱煩せざるものは、麻黄の證なり」と。
まさに、外證と腹状とを併せて、之を分別すべし。

動氣心に迫りて、胸滿短氣・煩悶、若しくは喘急、若しくは乾嘔、若しくは痰涎、若しくは上竄して死せんと欲する者は、危急の證とす。

(風引湯・紫石寒食散を撰び用うべし。妄りに、吐方及び走馬備急を用うべからず)

動氣、上中脘の間にありて、強きものは(桂枝輩)

若しくは、驚狂・煩狂・心煩・心悸煩躁・目眩等の證を発するものは(諸・加竜骨牡蠣の輩)

若しくは、心下痞するものは(諸・瀉心の輩)

亦、外證と腹状とに依つて分弁すべし。

動氣・心中にありて、背の五、六椎に徹し痛みあるもの。或は動氣・上脘より心下に逼りて、臍下空虚なるものは危とす。(垂死の候なり。妄りに治法を論じ難し)

中脘の辺動氣ありて、之を按すに浮なるものは、大率、表證なり。(諸の桂枝輩を考うべし。若しくは、胸

実して力ありて、上中腕の動氣・按せば按すほど強きを覚ゆるものは、実邪裏にあり。或は胃内に実するものとす。大柴胡加芒硝・承氣の輩を考うべし。沈実にして力あるものとす。

案するに、肌表の虚のものの動氣多し。桂・著、二味の施用、尤け意を尽すべし。

水分の動、浮にして、之を按して痛むものは、水氣なり。（若し、小便不利、若しくは水瀉、若しくは渴等の證を兼ねば五苓散の證なり。

或は曰く、外邪の候あり。愚云く。桂枝湯・苓桂朮甘湯・桂枝茯苓丸の類にも、亦あるべし。

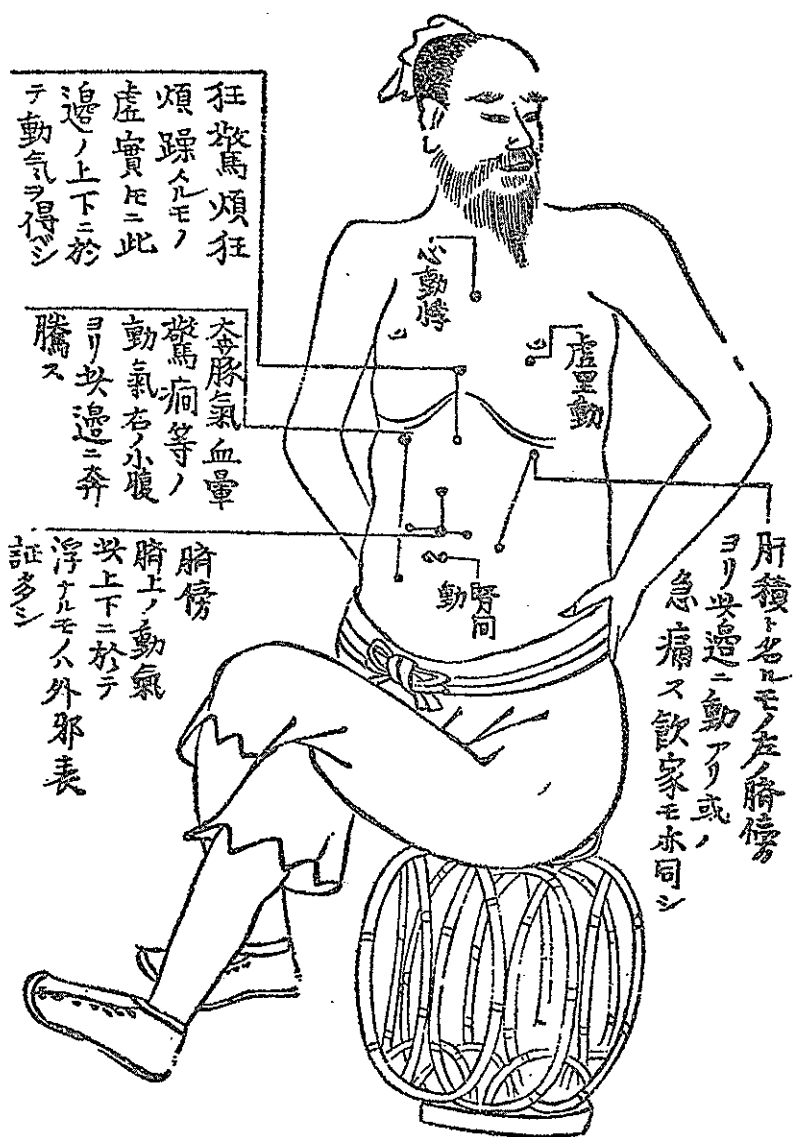
臍底の動は前に弁す。若しくは、之を按すに、底に堅塊あり。動氣と俱に動き、上中腕の辺に及ぶものは、癰瘕なり。（桂枝茯苓丸。若しくは臍底に動あり、之を按すに牢痛み、外證熱腫すれば口舌乾き肌膚枯燥するものを脾虚とす。貞元湯を用う。

（貞元湯の方。熟芩、十棗 炙甘草・当帰・各三錢。右、水煎す）

奔豚の動は、臍底より起りて直に心胸に至り、休作あり。若し、臍下悸する者は、奔豚をなさんとす。水氣ありとす。（桂枝加桂湯・苓桂甘藥湯・奔豚湯及び広濟小品の方）

又、此の形状に似て、発するとき呻吟するものは、虫なり。又、虫證に、常に動氣甚しきものあり、或は心中煩悶、怔忡するものあり。他の蛔虫の脈證と併せ考えて、之を分弁すべし。（甘草粉蜜湯・烏梅丸、其の他殺虫の方を考うべし。

腹中動氣所在分属図（翼 初編上冊）



宗甫が曰く、「臍の左天枢に動ありて、常に異なるもの、蛔虫の證あり」と。
癰癧も亦、奔豚に似たり。（別に論ぜり）

産後の暈及び諸血暈するもの、皆動氣上りて心胸に迫る。（右の不容の穴を按して、其の暈を禁すべし。
虚実あり。大率、産論によるべし。若し、瘀血上衝する者は、黄土湯・千金甘草湯・失笑散の類。

瘀血上衝する者は、金匱柏葉湯の證、亦考うべし）

水腫・癰瘕を兼ねるもの、悸動あるものあり。又、脚氣・衝心の漸あるもの、心下に必ず動あり。誤りて
混すべからず。（水腫に積癰動を兼ねるもの、柴胡姜桂湯・茯苓を加う。脚氣衝心するものは、風引湯。劇急
ならざるものは、呉茱萸劑）

所謂、火動燥證。積熱と名づくるものの類は、必ず動氣亢る。まさに虚実を分別すべし。（実するものは、
諸瀉心證。虚するものは、百合湯・竹葉石膏湯の類）

或る人、曰く、「動、臍の右に属するもの、陰虚火動。臍の左に属するもの、肝虚痰飲」と。

凡そ、婦人の血證、悸動するもの多し。（桂枝加黄耆湯・小建中の輩あるべし）

若しくは、産後の病・男婦の諸血・痰飲・積癰の類、悸動を兼ねるもの多し。能く其の本證を探り、證に
随つて之を治すべし。善く其の本を得るときは、或は動を主とせずと雖も、動は自ら治することあり。

左に試むるところの一、二を具列す。併せ考うべし。

沈香天麻湯（衛生宝鑑の方。療治茶談によるべし）三物黄芩湯（金匱・産後病を考うべし）人參去朮加桂

湯・四逆散・加牡蠣湯・桂枝湯牡蠣湯合方・其の他、前に載する所と併せ覽るべし。

（以上、多くは陽證に於けるものとす。其の他、陰證にあるものは、外證によつて動を主とせず。

仮令ば、真武湯の心下悸・頭眩・身瞤動するもの若しくは四逆湯の裏寒外熱するもの、通脈四逆湯の面赤色なる者、白通加猪胆汁湯の乾嘔し煩するもの、当帰四逆湯の脈・浮革なるものの類、皆其の動氣臍上より心下に甚しきものとす。

其の他、脈家に所謂、浮大・洪大等を忌むというものは、皆下焦虚して臍下の氣衰え、動氣・心下に逼るものなり。

是に於いて乎、陰陽虚実の弁、審らかにせずんばあるべからず。

附方 三歲飲

癢動、百計するも、及ぶこと能わざる者を治す。又、諸の暴逆の證を治す。

熊胆（二錢） 沈香（一两） 水銀（二兩） 鉛（二錢）

右、先ず、水銀と鉛二錢とを取り、俱に銅器に於て炭火を以て之を溶し、之を台器の上に移し冷めるを俟い、乃ち、研り之を末す。沈香の細末に和し、熊胆を細末に剉み、少しく水を加え、搗りて糊を成し、以て膏の如くならしむ。米湯にて送り下す。

腹中諸塊分并図 (翼 初編上冊)



87-II

腹中諸塊分弁図

(翼 初編上冊)

臍ヲメクフシテ堅塊アリ。之ヲ按ニ動アリ。
 又血癥トス。又脾虛トス。
 少腹ノ塊之ヲ按テ左右ニ移リ
 二動モノハ血塊ナリ。

臍下ヨリ心下ニ
 ツラ又キ大筋ヲ
 アラハシ。之ヲオスニ平
 強シ。腹皮ハ反テ濡弱
 ナルモノ。精氣虛シテ
 血カワナリ。攻戰手スベカラス。
 又腹皮濡ニシテ物ナキガミトノ。
 腹底ニ至テ任脈ノ行細々長キ堅塊ハ八脊骨ナリ

腹證奇覽翼初編上冊終



87、腹中・諸塊の弁 并せ治、附方九首図（翼 初編上冊）

夫れ、腹中の病、塊を成すもの、古名つけて癥^{せう}といひ、癖^{へき}といひ、瘕^かという。

而して、其の物たる一ならず。先達^{せんたつ}、七種の塊を弁す。今、愚按を附して其の説を載す。

一に曰く、食塊。左右脇下にあらわる。（愚案。肉食の癥瘕は心胸間に在りとす。又、宿食の結瘕は上腕にありとす。皆、胃管に留りて化せざるなり。或は曰く、左の脇下に麵筋^{めんじん}の如きものを見わす。食毒なり）

二に曰く、風塊。中腕の辺にあらわる。（愚案。臍上動脈に塊を成すものあらわる。所謂、中風半身不遂のものに是れあり）

三に曰く、氣塊。左右脇下、肝経の辺にあらわる。（愚案。所謂、積癥なるものは是れなり。然れども、氣は形なし、塊を成すべからず。但、氣鬱結すれば、近濁・瘀汁^{せきじゅう}、爰に凝滯して塊を成す。

其の処を定めて移らざるものを積とす。展転、痛み移るものを聚とす、といえり。抑、徳本が曰く、「積はつむるなり。水穀の毒積み集るなり」と。此の説、是なり）

四に曰く、血塊。左の少腹にあらわる。（愚案。婦人の血室は、左の少腹に在り。故に左の少腹に在るものを血塊とす。然れども、血塊は左の少腹に限るべからず。余が驗するもの、脇下臍の四辺及び左右の少腹ならびに皆、血塊あるをみる。まさに外證に随つて之を分別すべし）

五に曰く、胎妊塊。臍下・任脈の行、横骨の上にあらわる。(愚案。妊娠七、八十日の後、大きな独栗子の如きものをみる。産論によるべし)

六に曰く、水塊。右の少腹臍傍にあらわる。(愚案。小便不利の塊なり。或は此の辺に結聚するもの、久寒の毒多し)

七に曰く、燥屎塊。右の少腹股際の上にあらわる。(愚案。其の形、磊砢として、宛も囊中の石を探るが如し。此の辺に結集するもの、亦久寒の毒あり。形を以て分つべし。

案するに、燥屎も亦、右の少腹に限らず、左辺にもあらわるを見る。形状を以て分つべし)

凡そ七種。又、大横穴の塊あるもの、左を大便道に係るものとす。痔漏・脱肛の患あるべし。右を小便道に係るものとす。下疳・淋疾の患あるべし。(大横の穴は、臍下すこし下りて、左右各相去ること三寸にあり)

愚、又案するに、此の外、尚、言うべきものあり。

曰く、瘰癧。(久瘥の塊を成すもの)

曰く、虫癖。(虻虫、聚りて塊に似たるものあり。或る人、曰く「左の臍の辺に網を張りたる如く塊りて

痛むもの。虻虫の塊なり」と)

曰く、疝瘕。(水血の二候あり。此の瘕、少腹腰間に在るもの多し。水寒の毒は、右の少腹に在り。血疝

の毒は左の臍傍に在り)

曰く、疝癖。(小児にある塊。俗に「かたかひ」(癖疾)という。左疝、右癖の説あり。

又、小児に限らず、左右肋下に結聚するものをいう。脾積の類なるべし。

或る人、曰く、「右の脇下に塊ありて、心下へさし込み痛むもの、食毒・酒毒、小児は胎毒なり」と
曰く、飲癖（いんへき）。（此れ留飲の結癖なり。水塊に属す。之を捫すれば水声を聞く。左右脇下に在り。又、心下
堅く、大さ盤の如しというもの。水飲の作す所となれば、飲癖の類なるべし）

以上、諸塊の弁、多端なるが如しと雖も、其の妊娠・燥屎・虫・食の外、要するに水にあらざれば、血、
若しくは水血相結ぶもの、皆、腹中の近濁（きんじやく）（滓濁り）瘀汁の凝滯・結聚（凝り結ぶ）するところなり。
之を名づけて陳寒・痼冷（これい）（古くからの寒・解けぬ冷え）というものは、蓋し陽氣の至らざるところ、物必
ず凝結（凝り結び）凍痼（とうこ）（凍り氷る）するを以てなり。

是の故に、今法を仲景に取りて、證を審らかにして之を治すときは、堅塊・癥瘕治せずということなし。
一に攻撃するのみに由るべからず。

今且つ、初学の為に、其の治法の略を開列す。必ずしも、此に止るべからず。（老年、著しくは精虚の者、
腹皮軟弱にして物なきが如きもの、之を診して、腹底中央に長き堅塊を得るものは、脊骨にして病毒に非
ず、誤り認むることなかれ）

生肉、胃脘に留りて化せず、癥瘕を成すものは、橘皮大黃芒硝湯・或は瀉心丹（徳本十九方の一）

諸の食毒、心下若しくは脇下に在りて化せざるものは、まさに之を吐すべし。（瓜蒂散）若しくは、解せ
ざるものは、大承氣湯、或は調胃承氣湯。

（案するに、凡そ吐方は、腹状の虚実を審らかにして、之を用うべし。妄に投すべからず。

或る人、曰く、「食毒久しきを經て治せざるもの、其の當時食せし所の物を起識（憶えている）するときは、之を得て、焼いて性を存し、證に隨うの方内に加え、或は兼用して効あり」と。之れ建殊錄にいう「茄子を食わしむる」の類にして、一案に備うべし）

心下の堅塊は、外證に隨いて方を求むべし。（二編・桂姜棗草黃辛附湯の下に弁ぜり）

飲癖は外證に隨いて、痰飲・留飲の主劑を服し、丸薬を兼用することもあり。（金匱の痰飲の治法を考うべし。或は下すべきものは、十棗湯・平水丸・直行丸の類を用う。或は云く「外台の大輪餘湯を用うべし」と。又、「吳茱萸連大黃中に、鉄砂大。右丸し、飲癖を下す」と）

氣塊・積癥・諸證を分別すべし。蓋し、氣の分あり。（久寒瘧冷の證あるものは、附子を主として溫散すべし。或は吳茱萸輩も亦考うべし）

血證あり。（桃核承氣・芫婦膠艾・抵當・大蟬虫丸の類。若しくは攻むべき者、通氣丸・乾漆丸、試るべし）

実熱あり。（承氣輩を用う。或は瀉心輩も亦あり）

疝癥、亦・此に例すべし。（寒疝・臍を繞り、及び少腹に塊あるものは、烏頭桂枝湯。

或る人、曰く、「疝氣の塊は、多くは右の少腹及び臍下に在りて、牽丸或は股にひきつる。附子粳米湯・真武湯・八味丸・苓姜朮甘湯の類、證に隨つて芫葉甘草湯を各方に合方して用いて功あり」と）

瘡母は、鼈甲煎、若しくは大慶虫丸を用う。

小児の癰塊は、柴胡加龍骨牡蠣湯（玉函の方を丸として用う）或は大黃牡丹湯（丸とす）大慶虫丸、米飲若しくは乳汁を以て送下す。（或は紫円、白餅子、滅毒丸の類、稍々用いて下すべし）

血塊は、大黃牡丹湯・抵当丸・桃核承氣・桂枝茯苓丸・大慶虫丸・下瘀血湯の類、撰び用う。浮石丸・硝石大円も、亦兼用すべし。

（産論に云く「鬼胎・血塊病、臍下の左、或は章門の辺に在る形は、娠の六七月の者に類す。之を按して、其の物尖稜有るに似たり。折衝飲、之を主る」と。

愚、云く。此の證解ぜざる者は、斑猫散を用うべし。又、臍下に塊ありて、之を按すに軟なるものは、帶下の塊とす。桂枝茯苓加大黃丸、或は浮石丸を兼用すべし。

或は、婦人の臍中爛れ膿水を流すもの、亦、帶下の候なり。急に、前法に依りて惡物を取り下すべし）

以上、諸塊を治するの大略なり。

若しくは、其の毒・陳寒痼冷を成すものは、背を按じて、其の毒の凝る所を得、艾灼數句にして、其の毒の動くを候い、機に乗じて之を攻むべし。

或は、熨法を兼ね施すも佳なり。（婦人、脹滿の久年不治のもの、亦其の病を得るの初、経閉して遂に血塊をなし、漸くして満腹石癥をなす者は、妄に攻むべからず。若しくは其の毒、一時に潰崩するときは、勢

過むだからずして死する者あり。其の精氣の虚実を審かにして、之を治すべし。

至りて晩候ばんこうの者は手を下すべからず。之を治するの法、足脚の絡より血を引去るを上策とす。尤も、熨法を兼施し、或は温藥の煎汁を以つて、水蛭丸すゐしづがん・蟻虫丸しやちゅうがんの類を送下すべし。

或る人、云う「男女ともに不容の辺に塊をなし、潮熱を發し、舌に黄老胎ありて、形の勞瘵ろうさいの如くなるもの、先ず、背に當りて灸艾すること數日、達原飲たつげんを用う。其の塊散ぜば、證に随つて之を治すべし。

小兒の乳を吐する者に、間、此の塊をあらわすことあり。亦、前法によるべし」と。

又、案ずるに、諸塊癥かいへき、直ちに其の毒を攻めず、専ら陽を護し、表を救うの法あり。考うべし。

其の他、機を逐い、重を持し、緩急たがい送かつかうに施すの活套かつたうは、善く仲景の書を読み、審かに今の病者に歷試して、其の妙處を感得するに在り。世に妙藥・奇方を好んで轉うつるに万を以つてするものありと雖も、偶、此治して彼治せざるは、其の病證を視察すること明かならざればなり。

徳本翁の言ることあり曰く。「何れ事しく神變不思議の藥ありと、人の云うとも別なることはなし。秘事は隄毛ちちげの如し」と。詩に云く「柯かを伐り柯を伐るは、其の則遠のりからず」と。好んで奇方を索もとふより、退いて術を修するに如かず。術を修するは、己を黽勉びんべん（つとめる）するに在り。

孟子の曰く「人の徳慧術智有るは、常に疚疾きうしつに存す」と。術智を開かんと欲せば、自ら苦思焦心して黽勉せずんばあるべからず。

今、余が試み得るところの奇方を撰みて、左に開列するもの、亦た枝葉のみ。覽る者、固執して機變の術を失ふこと勿れ。

抑、攻撃に僻することなかれ。温補に泥むことなかれ。柔も亦茹す、剛も亦吐す。一に證に随つて之を治し、暗投妄行なからんことを要する爾。

乾漆丸

伏梁氣、横たわつて心下に在り、堅牢にして散ぜず。胸中・背に連りて、多く痛む者を治す。

乾漆・芫花・鼈甲・礞砂（各十錢） 桃仁・木香・烏頭（各五錢） 雄黄・麝香（各二錢半）

右九味、末と為し酢を以つて煮る。麵糊に打つて丸と為すこと、豆の大ききの如くす。

每服十丸、食に先だち温酒にて送り下す。

通氣散

十膈五噎、腹内の久積・氣塊傷力・嘔吐鼓脹、小兒の驚風の痰、中風の不語の者を治す。

皂莢（猪牙）・大黃（各二兩） 礞砂・当帰（各二錢） 巴豆（二兩半）

右五味、末と為し合す。每服一分。好酒にて送下す。

化毒神効丸

癰風・癰毒・癰腫・大腹痛・久瘰・休息痢・偏枯・喘息・留飲・血塊を治す。

松脂（十錢） 髮灰・大黃（各三錢） 丁香・辰砂・鉛丹・雄黄（各一錢） 生牛乳（三錢）

右八味、末と為し丸す。每服五六分。続き服すること七八日。後、梅肉丸を以つて之を下す。（案するに、

此の方を服する者、口中腐爛を度として後服を止むべし）

白餅子（半井家の方）

痰飲結実及び小児の疳癪を治す。

南星・半夏・滑石（各一錢） 輕粉（五分） 巴豆（二十四粒。皮心を去り、水一升を以て煮て三合に至

り、巴豆を取り出し乾し用う）

右五味、末と為し合し、菰豆の大に糊丸す。

生姜湯にて送下す。毎服、五六粒。

減毒丸（鶴泰榮の方）

小児の胎毒諸病を治すに良し。

麝風霜（二錢） 輕粉（一錢） 巴豆（五分）

右三味、蘿蔔子の大きさに糊丸す。児の年齒に隨う、或は倍用す。

水蛭丸（直指の方）

蠱瘕を治す。（医統に云く。「凡そ單腹脹、嘔、下利を経て而も愈ざる者は、蠱瘕を成す」と。此の證、

多くは不治なり。

又、婦人經閉、遂に塊を成し、漸くに大にして通腹脹満し鼓の如く、大さ臨月の胎の如くなるものは、治

せず死せずして五年十年に及ぶ者あり。亦、此の方を用いて可なり。然れども、いずれも容易の治をなすべ

きものに非ず。世医、此の證に誤つて大承氣を用うる者を見る。其の治に非るなり）

三稜（炮）・莪朮（炮）・乾漆（炒りて烟尽せしむ）・牛漆（酒に浸す）・斑蝥（糯米に炒る）・虎珀・肉桂・

礞砂・水蛭・大黃

右十味、各・分つて末と為し、生地黃汁に和し、米の酢に調え、梧子の大きに丸す。

每服十丸。空心、溫酒にて送下す。一

斑猫丸

鬼胎・血塊の痛み、忍ぶべからざるを治す。

斑猫（糯米に炒る）・延胡索（炒）等分。末と爲し、酒にて五分を下す。

大蟾蜍湯（外台より出づ）

腹中の冷癖・水穀の懸結、心下の停痰にして両脇痞滿し、之を按せば鳴転し飲食を逆害するを治す。

大蟾蜍・芒硝（各二錢半）

右、水一盞半を以って煮て、八分を取る。

浮石丸

血塊及び經閉を治す。

浮石・桃仁・大黃（等分）

右三味、末し、糊丸す。毎服一錢。

（或は、三味各四錢・赤石脂四錢・芒硝六錢。以上五味を末し丸するも亦可なり。此の方、腹中に血塊ありて、水滯の者を治す。其の證、經水不利にして少腹塊あり、腹中水声あるもの。或は男女共に腹脹りて背筋を現わすもの。又、帶下・久淋を治す）

（腹證奇覽翼初編上冊終）

腹證奇覽翼 初編下冊

遠江浜松

和久田寅叔亮 著

門人豊前中津

原田成憲子 欣校

88、腹證・診按法並びに図 (翼 初編下冊)

病人を仰臥せしめ両脚を伸せさ、両手を股の側に附けさせ、医者其の左辺に就く。(此れ其の常法を以ていう。病人移し難き者は、便に随うべし)

右の膝臑(ひざ頭)を其の肩髃(肩端)に抵て、膝を開き臍下を張り、右手を其の心上に覆安(俯けに置く)、し、消息・須臾にして、始めて診按すべし。

其の次第、先ず其の覆安の手を徐かに左右に移して、虚里の動及び心胸中の煩悸を候うべし。之を名づけて、「覆手圧按の法」という。

(心胸一面にドキドキと跳りて、其の人・氣難しく、胸の内の悪しきを覚るは、煩悸なり。

又、胸中一等悪しく、嘔せんと欲すれども嘔せず、言うに云われぬ心持なるは、懊惱なり。俱に、胸中・熱ありて煩するなり。

但、ダクダク・ドキドキして心細く、深きに陥るよう覚るは、悸なり。又、之を怔忡ともいう。又、胸中ドキドキと手に応じて、内に物あるを覚るは、心動悸なり。

88-I

覆手壓按込 拊循込図（翼 初編下冊）

圖ハ又覆手ニテ壓按込
心胸部腹内ノ静躁ヲ

候スシ。

又覆手

ニテ輕ク

肌膚ヲ

拊循ス。

滑瀉疝燥ヲ

診ス。



88-II

三指探按法図 (翼 初編下冊)

圖ノハ、ク三指ヲ側テ、指頭ヲ
 微動シテ之ヲ按ス。腹皮内ノ
 凝滯、結聚スルモノヲ審ミシ。
 且其結聚をモク
 痛ト痛ガルトヲ辨ズ。
 若其物微小ナルヲ
 覺ヘバ、中指ノ頭ハカリニテ
 カク撥ルベシ。
 又三指ヲ正シクシテ直ニ腹底ニ按シ到ルニ至
 腹底ヲ候ノ際ナリ。名テ正按法トイフ。



又、心下臍上の動氣強き者、胸中ともにダクダクと跳るものあり。胸腹動なるもの、是れなり。一
凡そ、比等の診察は至微なり。蒼卒に按じ過すべからず。

次に、右手の食・中・無名の三指頭を側て、上缺盆より、次を逐うて左右肋骨の間を細に探り下るべし。
之を名づけて、「三指探按の法」という。(此れ亦、胸中の虚実緩急を候うの法なり。微にても指頭に礙もの
あらば、指を留めて之を按じ、痛むや否やを問うべし。

凡そ、上部に凝結するものは、両乳の上の缺盆までの間、探按して痛み堪え難し。又、両の肘肩際(腕の
つけ際)をも探るべし。痛み甚だしきは、皆、血脈凝結するものとす。

次に、其の手を敝骨(みぞおちの骨なり)に沿いて鳩尾へ下し、一は浅く、一は深くし、心下の虚実を候
う。(鳩尾より上臍までを心下の位と定む)

遂に、其の指頭を左右季肋に沿いて、章門の辺に至る。(此れ脇下の診なり。此の時肋骨の下端より指頭
を深くかかちて、胸脅内の虚実を候うべし)

却って、上臍の辺より臍上に至るまで、左右中・幾行も探按すべし。(任脈より始めて、二行三行及び兩
脇下、章門の下行まで幾行も按し下るべし)

次に少腹の左右中も、亦、前の如く幾行も按し、傍の髀骨(腰ばね)の際、氣衝の脈までに及ぶべし。

(氣衝の脈は、両の股際に在り。妊娠若しくは下焦の湿熱の有無を診することあり。左右の臍傍の間、細

かに按すべし。左の天枢の辺に於て小豆許りのものを得るとも、按して痛み甚しきものは、凝血なり。

凡そ、按して即ち痛むものは、血の凝滯するものなり。

次にまた覆手の法を用い、指頭を浮め、掌側骨（掌の側の骨）に力を用いて、却って心下より臍下まで次を逐いて圧接し下るべし。（是の時、医者（い）の身を前（まへ）がかりにして、微（こ）しく一身の力を右手に及ぼし、徐々に腹を圧すべし。此れ、腹中の動氣を候うの法なり）

其の間、意を用いて其の指頭に礙るところの形状を審らかにすべし。

凡そ、正（垂直）に按して痛まざるも、邪（すじかい）に探りて即ち痛むものあり。（芎藭膠文湯の腹證の如き是れなり）

浅く按ぜざれば、応ぜざるあり。（心下・臍下の悸の如き是れなり）

深く按ぜざれば、徹せざるあり。（腹底の動・堅塊の類）

及び、其の緩急・小大・滑澀・堅脆・寒温までを、始終、実着（念を入れる）に診して、蒼卒に按すること勿れ。病人をして、驚悸（びっくり）せしむること勿れ。

且つ其の間、兼て診すべきもの。

上にしては、顔色・眸子（眼球）・唇・舌。

中にしては、胸・脇・腹の形状（所謂、「其の大小を視る」ものは是れなり）乳頭の萎活（萎る活る）（男女ともに、乳頭の萎むものは大虚なり）

下にしては、股・脛・脚足までに及ぶべし。

（病人、兩股の肉、大いに脱するものは、凶なり。臈腸（こむら）の肉しまり無きものは、下焦の虚なり。内股の肉及び臈腸の肉、之を捫して痛むものは、血の凝滯するなり。

腫氣の有無・逆冷の多少に至るまで、逐一に心を著くべきなり）

若し夫れ、肌膚の循按は、固り其の中に在りて曲尽すべし。

（凡そ、肌膚乾燥するもの・肌肉軟弱なるもの・胸滿腹弱なるものは、其の人、自ら其の患を覺えずと雖も、概するに大虚の候とす。

又、胸腹グサグサとしてしまり無く・爪の色白きものは、其の人瘵を病むの候なり。

其の他、死生吉凶の診の如きは、枚挙するに遑あらずと雖も、大率、右に例して考うべし）

且つ、其の前後・便に随いて、手の寸口、頸の人迎、足の趺陽・少陰の脈をも參診し了りて、扶け起して肉袒（両肌脱ぐ）せしめ、上の頸項より、下の腰尻に至るまでを診し、左右臂臑（力瘡）の肉に及ぶべし。

但し、大病瘳に在る者は、其の便に随いて、此の例に非ず。

（頸項肩背は、三指探按して之を審かにすべし。

凡そ病篤き者は、大率、上突下虚す。故に必ず上部に凝結す。肩背頸項の間に於て之を知るべし。

又、病毒厚き者は背に著く。或は脊骨・屈曲、或は突出す。又、病人大虚の者は、肛門つりあがりて尾骶骨爛るが如し。甚しき者は、肛門竹筒の如し。

又、案するに臂肉の診、内経に見ゆと雖も詳かならず。近時、臂尺の脈診を言う者あれども、一家の診なれば、此に綸せず。但し、両の臂臑の肉を按じて虚実を分弁するは、余が門の捨てざる所なり）

尚、呼吸の長短、氣息の多少。

（呼吸促促として息するに足ざるものは、「短氣」なり。短氣に吸息の短きあり、呼息の短きあり。呼吸ともに短促なるあり。）

又、氣息吸々として、まさに絶せんとするものは、名づけて「少氣」とす。

語声の清濁高下を聴く。

（譫語あり・鄭聲あり・妄語あり・驚呼あり・呻吟ありて、虛実を分弁すべし）

二便及び七竅の通塞、利不利と其の人の患うる所を問うとの如きは固、闕くべからざるところなり。是れ乃ち、四診なり。

或る人、曰く。「万病を候りに三候六診あり。虛と実と虛実間とし、之を三候とす。脈と腹と皮膚と舌色と眼中と腎間の動と、之を六診とす」と。

愚謂らく、其の顔色と語声氣息の診、亦闕くべからず。故に、余が門之を併せて、三候八診とす。若し夫れ、陰陽を分ち、寒熱を弁するは其の中に存せり。

（愚云く、今の世医の病を診する、大率、手脈を切するのみ。偶腹を按する者も、病者と対坐して、僅に心下を按するのみ。所謂「寸を按じて尺に及ばず、手を握りて足に及ばず」なり。安んぞ、其の臟病を知るに足らんや）

89、桂枝湯發明の説 井に、病因・病證の弁（翼 初編下冊）

愚、熟ら仲景の書を読み、其の方劑を考うるに、剛柔相濟し緩急相救い、簡にして洩らさず、易にして失わず、其の旨意尽すべからず、但、日に益々、其の深邃を覺うるのみ。

蓋し、能く修し、善く用うるときは、何の病か治すべからざらん。何の方か功あらざらん。其の功を奏すること能ざるは方劑の罪に非ず。善く其の方を用いざればなり。

余や短才淺学、固り其の任に当らずと雖も、但、方技を嗜むの癖、自ら止むこと能わず。好んで問ひ勉強て思い、歳月を積むの久しく、粗得る所あるが如し。猶且つ、其の奥に入り難きを困しむのみ。就中、桂枝湯の方たる誠に善を尽し美を尽せり。其の味窮りなし。其の応用勝て言うべからず。

今、余が試験する所と發明する所とを記して、以つて同志の士に贈る。亦、唯千慮の一のみ。何を以つてか、其の蘊を尽すに足らんや。

抑、桂枝湯は表證を治するの薬のみとするは、固り膚淺の見なり。又、氣上衝を主治すと定むるも、未だ深く得たるとせざるなり。

然れども、頭痛・発熱・汗出・惡風等の表證と及び、氣上衝を治すとは、傷寒論に明文ありて、一も議す

べきなし。

「何を以ってか、膚淺にして且つ未だ得ざるとするや」と問わば、此に一の難すべきあり。

凡そ古方は、一方毎に各々其の主治する所ありて、後世の如く、内も外も相混じて骨蒸肺（古道具屋）の如くなる薬剤なく、君臣佐使の分ありて、金五体を具したる人の如く造立て、さてそれより證に随つて、一・二味づつの去加増損はあれども、正剂本方（桂枝湯・小柴胡湯の如きは皆正剂の本方なり）は、必ず一官事を管て、他を撰兼することなし。

表證を主治する桂枝湯ならば、其の他を主治することを兼ねべからざるものなるべきに、「又、太陽病、之を下して後、其の氣上衝する者は、桂枝湯を与うべし。若し、上衝せざる者は、之を与うべからず」と、丁寧に諭すの章あれば、則ち表證は解して、之を下すに因りて、但、其の氣上衝するものを治すること、明らけし。

且つ、加桂湯は、本方に桂二両を増したるのみにて、他の去加もなく、発汗後、燒鍼にて又、汗を発し、奔豚氣を発するものを主治すれば、比れ亦、表證は解して、但、衝氣の暴劇を挫ぐものとすれば、愈々、氣上衝のみをも主治すること疑を容れず。

然れども、氣上衝及び奔豚氣は表證とすべからず。腹中の動氣の変を見わすものなれば、格別なり。

是れ、桂枝湯は表證をも主治し、又、氣上衝をも主治する両事を撰兼するというべきか。是れ難すべき所なり。

斯く言へば、今の古医家は、「桂枝は但、上衝を主治するのみにて、他の表證を治するは、技能にして旁治というべし」として、此の難を解かんとすれども、此も但斯く言うばかりにては、少し聞こえかたかるべし。是の故に、今の古医家は上衝を治する所へのみ眼を著けて、「肌を解し表を救う」といえる肝要の所へは、却つて思ひを致さざる故、變通の例が出来かぬなり。又、「表解の主劑」とのみ思ふ者は、表證を見されば、此の方は用いられぬように思ひて、亦活用手段がなきなり。

是れ皆、一等皮上の論にして、末に走りて本を極めざればなり。先ず、此の表證に治すると、氣上衝を治すると、主能の技能のというの論は、姑く捨て、其の本は一帰趣なるの意を了解せざれば、未だ此の方の深意を得たりとは言ひ難し。されば、今一段思を深きに致して、其の一帰趣なるの意を了解すれば、特に此の方の施用が広くなりて、諸病に應じて奇特の功を奏する活套を得るなり。

先達を非議するは、却つて己が醜を售るに似たりと雖も、止むことを得ずして此の弁に及べり。且つ左に愚説を述べて、其の帰趣の一なるを曉さすは、反つて穿鑿の説なりとして笑う者あらんか。兎に角に、広く病病の愈るを以つて、其の実を得たりと謂うべし。

其の他の議論は、固り医の与らざる所なり。余が是までに試験したところは、世に難治と称する天刑病を始として、或は陳痼・壞證の癰毒、或は癰疽惡瘡及び積毒・勞瘵・積聚の類、凡百の氣血壅滯、表位に属するもの、證を審らかにして之を与え、効を奏せずということなし。日に新たに其の妙を覚ゆるのみ。豈・審に桂枝湯のみならんや。

凡そ、仲景伝る所の藥劑、其の方意を得るときは、万病に涉りて変通の妙あらずということなし。初学の士、其の方の簡易を失いて、思弁の勞を致さざらんことを恐れて、敢て煩言を厭わず、其の説を述ぶること左の如し。

夫れ、人身の陽氣は、即ち天の一元氣にして之を我が内に結ぶ所ありて、一身運行の氣となる。(上冊 腎間動の説を併せ考うべし)

此の氣、又、飲食を尅化すること、酒保の酒を造るが如く、胃府に醸成て、其の精液を一身に運し、糟粕を大便に下し水汁を小便に利す。(水汁と精液とを分るは、譬えば、蒸露缶にて焼酎を取り分るが如し)

されば、血精も津液も、概するに皆、飲食の精華にして、陽氣の主宰する所なり。形軀は陰に属して地の類なり。故に、凡そ形あるもの、血精・津液・飲水、皆陰の属にして静なるを常とす。陽氣を得ざれば流動すること能わず。

(氣、血分に在るものを陽氣と名づく。血と俱に流動して止まず。精分に在るものを陰氣と名づけ、静にして命を待つ。精と俱に活く。故に曰く「精は氣を食む」と。

津液は、胃中水穀の生するところ。陽氣を得て、能く四体に達し肌膚を潤おす。故に、陽氣衰うるときは、血液燥きて肌膚に滋潤せず、反りて枯燥するなり)

是の故に、人生れ出て後は、只此の飲食の養にて、天の陽氣を維持ものなれば、養生の道は、飲食を節するを本とす。

(水は、舟を載する所以にして、又、舟を覆えす所以といえるが如く、命を保つべきもの、慎まざれば、反

りて命を伐つに足る。之を水穀の毒と名づく（
并に、氣を暴することなきを要とす。

孟子に養氣の論あり。義と道とに配せざれば飢と云うことありて、道義に合ざることを行い、心を動かし氣を暴し、及び飲食、男女の欲を恣にすれば、内にしては流動運行の本を蹙遏し、外にしては衛榮調和の利を失いて、四肢に達せず、肌膚に充ずして病を生ずるなり。其の道を能する者は、四肢に達し肌膚に充つるのみならず、浩然として天地の間に塞るといえるも、元是れ一氣なればなり。

此の氣や、人身に在りては、常に温々煖々として中和を失わざれば、肌膚・筋骨のしまり良く、虐邪賊風の犯し入ることなし。是れを無病の人とす。

然れども、人に天稟の強弱を称することありて、初より父母の胎毒を受け得て生ずる者あれば、病あることを免れず。況や、養生の道を失えば、必ず病を發す。

是れ、氣即病となるに非ず。氣、其の軀殼に充ざる所あれば、風・寒・暑・湿の氣、外より襲い入りて、或は火を熾にし、或は水を動して陰陽の和を失う故、必ず偏勝をなして、寒熱の病を發す。之を「外因」という。若くは、外邪の犯し入らずと雖も、氣の鬱滯する所あれば、血之に因りて流動せず、及び飲食の瘀汁・近濁停滯し、糟粕下らず、水飲利せずして、病を發す。之を「内因」という。

内外の因は異なれども、病となりては陰陽、寒熱の二つより外に、證に見ることなき故、病證は、必ず陰陽の二途に於て、六位を差して以て之を審弁するなり。

若しくは、陽氣を激して火勢を熾にすれば、日輪の北に逼りて暑氣の漸く甚しきに至るが如く、一身の油が燃^もたものとなりて、水氣を段々に乾かし、後には胃中の津液も乾きて、大便不通・燥屎となり、食する能わ^ず。終に、一身を温め保つべき陽氣の為に、精液を亡して、薪尽きて火の滅^うるが如く、魂^{こん}魄^{はく}の蜣^{せう}殻^{かく}（ぬけがら）となるなり。

若しくは、陽氣の結ぶ処を抑遏して、火を尅するときは、日輪の南を行きて、寒氣の漸に厲^{はげ}くなるが如く、身体冷えて殺氣横行し、水留りて流れず。腹滿・吐利、飲食を欲せず。終に、陽氣の本を蔑^{ないし}にして、再び来りて恵まぬものとなるなり。

之を要するに、病證は、必ず陰陽の二途に分れて、死生は独り一氣の存亡によるなり。

（今の古医家に陰陽を取らざるの説あるは、不稽なり。又、素問家、専ら陰陽を主張して、五行五臟五色五味、一々に配当するに至るも、反りて穿鑿^{せんさく}に過ぎて空論多し。取るに足らず）

抑、證は證拠なり。身の内に故障あれば、其の證拠、必ず外に見わる。其の證を取りて以て之を治すれば、臆斷^{うよくだん}の謬誤^{みうご}なし。

扁鵲曰く、「病の応、大表に見わる。」と。

仲景曰く、「證に随て、之を治す」と。

是の故に、其の内外の因に拘らず見證に随いて藥方を求むること、古の医術なり。

後人、此の理を会せず、病に臨みて専ら病因を論じて其の治法を議す。譬えば、失火の出来て火の燃上るを見て、之を救わずして先ず火原^{ひもと}の詮議^{せんぎ}をするが如し。失火と見たらば、何かは差措^{さしお}き、先ず腐^く・梯子^{はし}・

水盆・噴水等の用器を携えて、火を救うが急務なるべきに、火原の詮議を先にするは惑の甚だしというべし。

夫れ、病因は火原なり。見證は失火場なり。然れども、火原は曾て構ぬというには非ず。其の原は、火を忽せにするに因り出でたることなれば、其の詮議をも究め、并びに其の禁戒をも厳かにすべきことなれども、事に臨んでは、かえつて迂遠なるべし。

されども、失火を救うも・火原を詮議するも・火戒を申告するも、其の帰趣は一なれば、病因も亦知らずんばあるべからず。但、證を捨てて因を論ずるは、臆断にして毫釐千里の過差あらんことを恐れて、古人は慎んで證を弁するなり。

然れども、證を弁するのみにして已まず。

扁鵲曰く、「病の陽を聞けば、論じて其の陰を得。病の陰を聞けば、論じて其の陽を得る」と。

聞くは、病応なり。論じて得るものは、病因と病毒の在る所となり。陰陽は、「猶お、内外と言うがごとし」となり。言うところは、病の外證を聞いては、論じて其の内の斯あるべきを得、病の内状を聞けば、論じて其の外證に斯く見わるべきを得。必ずや、内外一帰趣なるものを得されば措かざるなり。

（仲景、三陽三陰を分ち、中風・傷寒を弁ず。三陰三陽は内より発するもの、等位なり。中風・傷寒は外より来るもの、怪重なり。

又、論中、諸発汗吐下の後をいうものは、病の因りて来る所を弁するなり。然れども、其の治法を論定するに至りては、一に證に随いて之を治すのみ。

是れ乃ち、見證を論ずるのみにして止まざるもの見るべし）

扱て又、火を救うにも、水を防ぐにも、夫々の器用を具備せざれば、其の功を成すこと能ざるが如く、薬方も単味にしては、大病を治するほどの具体の用を成さざる故、数品を合せて一方に隊伍するなり。

然れども、各其の主とする所ありて、火を救うには水。水を防ぐには土を以て主として、其の他の器械の如き皆其の主用に適して之が力を補助くるが如く、病を治するにも各其の主とする所の薬を以て、之が君となし、其の他は皆之が佐として其の用に適するものなり。

(古方の薬味の数少きものは、此の君佐の分別を明らかにすればなり。後世の方、至りて多味なるものは、皆此の分別なしとす)

今夫れ、桂枝湯の方たるや、三陽の首に在りて、百病の始たる風證に用いて解肌救表の主剤たり。其の主とする所は桂枝なり。

蓋し桂枝は、芳香辛甘の気味を具えて、正氣と津液とを肌表に托出することを能とす。正氣肌表に達し、津液・軀殻を潤すときは、衛榮和諧して邪氣自ら解散し、瘀水自ら回降して、上衝の氣随いて平低することを得、病の愈る所以なり。

然れども、正氣已に鬱塞する所あれば、水血之が為に瘀滞し、筋脈急し胃管餘かならず。是に於てか、拘攣・疼痛・乾嘔等の證を見わすもの、桂枝の力、独り此の諸證を解すること能わず。故に芍薬以て臣として其の血分を解き、生姜・大枣之に佐として、以て胸膈胃管の水を捌き、甘草・之に使として以て諸薬に和し、内外の急を緩くし、合して以て胃陽を健かにし、正氣を宣ぶ。

(芍薬・能く血脈の拘攣を解き、甘草・能く諸の急迫を緩くす。二味相合して芍薬甘草湯と分づけて、脚

欒急を治するに於いて見るべし。

大棗、能く胸脇間の停飲ありて欒急するものを治す。

十棗湯・甘麦大棗湯・葶藶大棗湯の類、懸飲・欒急・喘鳴等を治するものにして知るべし。

生姜の辛味・能く胃管の停水を解し、胃氣を健かにし、飲食を進む。抑、生姜・嘔を治すと雖も、古方に生姜を伍するもの専ら嘔を主とせず。加芍薬生姜人参湯に生姜を倍して、嘔吐の證を言わざるにて知るべし。然れども、其の乾嘔を治するも、能く胃口を開き停水を解するを以つての故なり。

案ずるに、礼記の檀弓に、曾子が曰く「喪に病有れば、酒を飲み肉を食うに、必ず草木の鬻に滋するを有つべし」とは以爲、桂姜の謂ならん。

言うところは、喪に居て病あるときは、血氣の衰えてあるもの故、養生の為に酒肉を許すことあれども、酒肉ばかりにては其の氣の滯らんことを恐れて、必ず草根木皮の藥物の、其の酒肉の氣をば滯らさずして、四体へ張り伸すものを添えて、飲食せしめることあることをば、曾子は思ひ桂枝・生姜の謂ならんとなり。滋は、ふやすと訓じて、正氣と津液とを外へ張り出し滋することなり。

是れ、生姜・能く胃口を開きて、飲食をして停滯せしめず、桂枝・能く正氣を助けて、共に飲食の精液をして肌表に滋達せしむるの意にして、古は養生の法に桂姜を用いたることを知るべし。されば、孔子の姜を撤ずして食したまえるも、徒らに嗜みたまえる故にあらず。此の意を以つて食したまえるものなるべし。古方に、生姜を伍するものも、亦併せ考うべきなり。

論に曰く「太陽の中風は、陽浮にして而して陰弱なり。陽浮なる者は熱自ら発し、陰弱なる者は汗自ら出づ。蓄々として惡感し、漸々として惡風し、翕々として發熱し、鼻鳴り乾嘔する者、桂枝湯・之を主る。」と。

① 太陽は、陽氣の表に見わたる病證の位の名なり。太は、はなはだしきなり、思う程より以上うちこしたるの義なり。陽氣の表に浮み出であるを形容したる名なり。

中風は、風にあたるなり。風は外より来りて物を揺すものなり。故に、外邪の冒し入りて發散して解すべきものを、仮に名づけて中風というなり。

太陽の表位にありて、風に中る、と名のつくところの病をいうの義なり。

② 「陽・浮にして而して、陰・弱」とは脈のことなり。

凡そ、傷寒論中に脈候を挙るものは、輕重若しくは陰陽の疑途にあらざれば言わざるなり。陽は外なり、陰は内なり。外へ浮みて、内へ弱き脈なり。

之は此の病證、躁がしく劇しきように見ゆれども、全体に根の浅き病ゆえ、邪氣の内にしじまりいる様子無く、偏に外に発出する勢のみなる故、陽・浮にして、陰・弱なり。

而の字、陽浮の二字をうけて置きたる故、外へ浮なるによつて、それで内へ強味なく弱なるといふのころなり。

③ 「陽・浮なる者は熱自ら発し、陰・弱なる者は汗自ら出づ」の二句は、前の脈状に因りて判斷したる詞なり。

故に、或は註文の僣入なりという説あれども、やはり本文として解すとも害なきなり。之を斜挿の文法といいて、間へ挿こみたる文なり。

言うところは、脈の外へ浮なるものは、熱の自ら外へ発せんとするの候なり。自とは、薬力を仮ざるの謂なり。

内へ按して弱なるものは、汗の自ら出づべきの候なり。之も自の字を下して、発汗剤の力を仮るに及ばざるを示すなり。此の脈状にて隠伏緊縮の根強き邪氣に非ざること明かなる故、中風と名づけて、今、汗出ずと雖も、麻黄の入りたる発汗の剤を用いずして、汗出るの證に用いる桂枝湯を以て治するとなり。

④「畜々として惡寒し、漸々として惡風し、翕々として發熱し」

畜は、しじまる（縮る）なり。惡寒は、寒氣だつなり。ゾクゾクとして、しじまるように寒氣だつなり。漸は、水をかけ注ぐなり。惡風は、風に當るを惡むなり。風に当れば、ゾンゾンとして水をかけそそぐが如く寒きなり。

翕は、合なり。勢の引合て、真中へ寄る義なり。ポツポツとして熱が出るなり。

此の病・外感ゆえ、劇しく見ゆども、うわべに在るの候なり。

⑤「鼻鳴り乾嘔する者、桂枝湯之を主る」

鼻鳴乾嘔は、衝逆の候にして表邪の證なり。

此の證に桂枝湯を用いて治する所以は、所謂、邪氣の虚に乗じて入るものにして、衛榮和諧せず、腠理固密ならずして、外邪の襲い入るものとす。

されども、表に瘀水の壅塞するなく、裡に邪熱の伏隠するなく、陽浮し而も陰弱なるを以て、発散の力を仮ずして外出すべきもの故、桂枝湯を用いて正氣を助け、水血を運利して肌表を和解すれば、邪氣は自ら退くなり。

桂枝湯、固り発汗の劑に非ざる故、大劑に作り、分温三服の法を以て、間を促して服さしめ、尚、熱稀粥を啖らしめ、衣被を温覆して汗を出して、邪氣を解くものなり。乃ち、和解の意にして発散の法に非ざること考うべし。

又、曰く、「太陽病、頭痛・發熱・汗出・惡風する者、桂枝湯之を主る」と。

(これは太陽病自地の證候にして、外邪に非ざるゆえ、但、太陽病というなり。

故に、惡風ばかりにて惡寒せず、且つ齧々浙々翁々の形容にも及ばざるなり。發熱汗出て紛わしき證候なきゆえ、脈状を言ざるなり。是れ、桂枝湯正面の病證なり。陽氣を助け、血分を和して愈るの意を見るべし。)

又、曰く、「太陽病、之を下して後、其の氣上衝する者は、桂枝湯を与うべし。若し、上衝せざる者は、之を与うべからず」と。

(此れは太陽病は表の位なるゆえ、汗を発し、若しくは表を和して治すべきもの、之を下して後に、其の表證は解したれども、下すによりて其の氣上衝する者は、肌表の正氣の虚衰したるものとす。

凡そ、氣上衝する者は、正氣の肌表に充ざるときは、反つて一道になりて腹中を上衝するなり。故に、正氣を助けて肌表に在らしむれば、衝氣は自ら平低するなり。

其の證を見わす所、内外の異ありと雖も、桂枝湯を用いて肌表を和解するの帰趣は一なり。「之を下して後」といい、「其の氣上衝」といい、「上衝せざる者は、之を与うべからず」というにて、太陽病は解して、但、其の氣上衝するのみにして、桂枝湯を用ゆること明らかなり。

凡そ、傷寒論に汗吐下の後をいうものは、病の変化の道途を示さん為に、仮り設けたるものにて深く泥むべからず。但、其の病證の転路奈何といふところに意を注ぐべきのみ。

又、曰く、「桂枝、本、肌を解すと為す。若し其の人、脈浮緊、汗すれども出ざる者は、之を与うべからず」と。

（前に中風にも、氣上衝にも、いろいろの證を用いて紛らわしき故に、此の章に於いて、桂枝湯本分の主治を弁じて誤ざらんことを示すなり。

解肌は、肌表を和解するなり。發表とは異なるなり。乃ち前に述る「正氣を張り出し益し、血脈を調和する」が解肌なり。

緊は、厳しく鋭る脈にて、錐の尖に指を当てるが如しといえり。糸に縫をかけたる如く力あるなり。此れは、表に瘀水あるか、若しくは寒邪、表を閉じて熱が籠るゆえ、脈に力を帯びて強きなり。

麻黄を主として、汗を發すべきの脈なり。汗不出とは、桂枝湯の方下という如く、粥を啜り、或は、溫覆

して、汗を出さんとすれども出ざるものをいうことなり。）

又、曰く、「傷寒、医之を下しむるに、続いて下利清穀を得て止まず。身の疼痛する者は、急に当に裏を救うべし。後、身疼痛し清便・自調する者は、急に当に表を救うべし。

裏を救うには、宜しく四逆湯にすべし。表を救うには、宜しく桂枝湯にすべし」と。

（傷寒は、寒に傷らるるなり。寒は殺腐の氣にて、万物を肅殺するものゆえ、邪氣の外より入りて容易に解すべからざるものを、名づけて「傷寒」という。治を得ざれば、命をも伐つべきほどの病ゆえ、寒を以つて名とするなり。冬、寒に傷らるというには非ず。

此れは、所謂、傷寒、実熱に非ざるものを、誤り下して胃陽ますます衰え、引き続いて下利して、食穀化せずして其の儘下るを清穀というなり。

「止まず」とは、前の下剤の藥力竭くれども、下利は止まざるをいうなり。

其のうえに、身疼痛するものは、表裏ともに病なり。然れども、先ず急に、裏を救いて後、清穀の大便自ら調和して常を得ば、急に其の表に在る身疼痛を解して、表を救うべしとなり。

此の身疼痛するもの、邪氣の致すところに非ず。乃ち下利するによりて、正氣虚衰して血脈の和せざるものとす。

是の故に、急に桂枝湯を用いて陽氣を助け、正氣を肌表に張らしめ、血脈を和解するなり。此れ皆、一時の変に應ずる活用にして、時宜を權りて用ゆるものゆえ、宜というなり。

要するに、四逆は裏に於て、寒邪逼迫して胃陽を亡さんとするものを救う。其の方、甘草を主として急迫を緩くし、姜附の力を合せて下焦の寒を退け、陽氣の將に亡んとするを挽回するを以て、急救の字を下すもの見るべし。

其の桂枝、表を救うの意も、亦正氣を助けて托出するを以て言うものなり。並びに皆、陽氣を助け救うの旨なることを考うべし。

以上五章は、論中緊要の文なるを以て、此に標出して、略その義を解して、以て初学に示す。

是れに因りて推考するに、人身の陽氣健運せざるときは、水血駛流せず。因つて、氣、内に逼り升つて降らず、上寒下虚して、四肢常に乏しく、肌膚常に飢え、六氣感じ易く（風寒暑湿燥火を六氣という）、諸般の表證は是に於て見わる。

（内經に云く。「陽は其の精を上に併す。上に併すれば則ち、上、明かにして下、虚す」と。

又、云く、「陽は外を衛りて固を為すなり」と。

左氏伝、医和が曰く「風淫は末疾す」と。杜預が註、「末疾は四肢の疾なり」と。

愚按するに、人身に於いて、腹を本とし四肢を末とし、肌膚を表とし胸腹を裡とす。表は虚し易く、末は達し難し。

万物を揺すものは風なり。善く其の虚に乗ず。是の故に、四肢に発するもの及び肌表に見るもの、名づくるに風の名を以てするもの多し。内經に「風は百病の始なり」というも、是の旨を以ていうものなり。

是を以て「風を治する」といふは、大率、陽氣をして健運せしむるに在るなり。

独り、六氣のみ感じ易きに非ず。陽氣健運せざるときは、津液・肉理を滋潤せずして、榮血、之が為に乾く。（たとえば、冬月に諸物の枯燥するが如し。是れ、陽氣外に発せざれば、滋潤すること能わざるの證なり）

輕きを血痺とし、重きを虚勞とす。

且つ、陽氣健運せざるときは、血・留連して筋脈を順流せず。乃ち癰疽を生ずと雖も、潰膿速かならず、内消して処々に隱見し、遂に腐壞を成す。其の他、厲病・癰毒の如きも、亦氣血の滯滯による。

凡百の疾病、其の名に惑わず、其の證を審かにせば、桂枝湯を以て治すべきもの、半を過ぎん。但、其の證の變化に於て、去加損益の機を明らかにし、病の淺深厚薄に依りて、作劑の大小進退の度を適するものは、紙上の譚に非ず。要學者の勉めて思弁するに在るのみ。

附

世間に多きものは癰毒なり。古は知らず、今は都鄙の別なく行きわたりて、患ざるもの鮮し。

其の之を治するの法。亦、多端なりと雖も、大率、瀉肝の劑を主として、特に土茯苓大劑を煎服すること、医俗の通弊なり。

其の中、田舎に住める人は、常に蔬食を飯し、身体を勞動するもの多きを以て、自ら養生の道を得て、陽氣鬱塞せず、胃氣衰乏ならざれば、瀉肝燥濕の藥を服し過せども害を受けるもの多からず。

然れども、都下に住する商估は、口、常に滋味を絶ず、或は終日、肆^しに坐して身を動かさず、却つて心を勞して、氣を鬱結せしむるを以つて、胃氣先ず衰え、表虚し肌燥く。之を、誤つて、瀉肝燥湿の藥劑を過料するときは、陽氣は益々衰え、肌膚は益々燥きて、其の毒は外に發出すること能わず、頭腦を攻め、骨髓に迫りて、苦楚疼痛し忍ぶべからず。遂に癰^{おん}瘤^{じゆ}となり、或は命期を促がす。其の偶、天庭を穿ち、鼻梁を折り、咽喉を爛して、以つて命を全うすることを得る者は幸なるのみ。殊に知らず。

芩連龍胆の類は、実火を瀉するものとす。土茯苓は水湿を燥かすものとす。

抑、湿は水氣なり。世俗、癰毒に湿の名を呼び、或は肝經濕熱を稱するにより、其の證を審らかにせず、一玆の表虚陽衰、血枯膚燥のものに、誤つて燥湿瀉火の藥を与うにより、益々陽氣をして衰えしむるに至る。

然れども、瀉肝燥湿の絶えて与うべからずと言うには非ず。一に證を審らかにするにあるのみ。善く其の證に適するときは、土茯苓と雖も、過料に及ばずして其の効を奏するに足るのみ。

世俗、輕粉^{けいふん}^{せき}石^{せき}の類のみを畏れて、此の胃陽を克伐するの害あるを曉らず。哀しい哉。

余、此の誤治を救うに、大率、桂枝湯・黃耆桂枝湯を以つてして、起廢回生の功を奏すること、挙げて數うべからず。豈、密に癰毒のみならんや。万病に此の分弁なくんばあるべからず。読む者、之を思え。

附方二首

（紅毛の医・トインベルゲ、善く古方を試用す。其の舌官・神代氏の伝うるところ、適、愚按に合するものを載す。）

桂枝加桜皮湯

本方の内に於て、桜皮一貼の重さを加う。

桜皮（蘭名コウツル・ハアル。乃ち、本邦の桜の皮を用う。上皮を去りて、堅理の皮を用う）

勞證及び癰疽・惡瘡等、諸の氣血の壅滯の者を主治す。

桂枝加撲椒湯

本方内に於て、撲椒皮の大を加う。

撲椒皮（蘭名、コントンシイシ。本邦、櫟の皮、其のまま剝み用う）

一切の瘡腫・氣分に属するものを主治す。

（彼の説に云う。瘡腫、色灰白にして、痛まず痒からず、黄汁出でて、或は膿ありと雖も快発せず。之を按ずるに熱なきものを、氣分とす。

粉剤・下剤並びに功なく、反つて毒を内陷して処々に隠見し、難治の證となるに此の方を用うべし。

若し夫れ、血分に在りて陽腫をなし、痛・熱ありて膿を成し易きものは、大黃牡丹湯の類を用うべし。一

云云と。

愚、云く。此の氣分の證。黃耆桂枝湯も亦用うべし。

或は、證に随つて薏苡附子敗醬散を用うることあり。考うべし）

90

桂枝湯頭項強痛図 (翼 初編下冊)

付項背強者



90、桂枝湯・頭項強痛の圖 附 項背強者 (翼 初編下冊)

右圖の如く、項より上へ強り頭痛するものを、桂枝湯の證とす。

夫れ、桂枝湯に頭項強痛の證あるは、即ち氣上衝の応なり。

凡そ、病の表に在るものは、氣上衝して其の応を頭項に見わす。之を太陽と名づけて、以つて表證の標準とす。

論に曰く、「太陽の病たる、脈浮・頭項強痛して、而も惡寒す」とは、是なり。

(此の章は、太陽病と名づくる所の脈證を言うものにして、桂枝湯の證を挙るに非ず。

頭項強痛は、頭痛み、項強るなり。然るに之を引きて、桂枝湯の證とするものは、下論に云く「桂枝湯を服し、仍、頭項強痛す」と。仍とは、前に仍(もとのまま)の辭なり。

又、爪蒂散の證に云く「病、桂枝湯の證の如く、頭痛まず項強らず・胸中痞硬・氣上つて咽喉を衝く者は、此、胸に寒有るなり。當に之を吐かすべし」と。

病・桂枝湯の證の如しとは、氣上りて咽喉を衝くを以つていうなり。桂枝湯の證にして、氣上衝すれば必ず頭項強痛す。是れ其の応なり。

今、頭痛まず項強らず、胸中痞硬し、其の氣の衝くところ、心に於いてせずして咽喉に於てす。是れ桂枝

の證に非ず。胸に寒邪水毒ありて致すところなり。吐して之を去るべしとなり。

此の章と桂枝湯の證と、互に相發明するものなり。考うべし。

而して其の頭項強痛は、血の上に凝の致す所なり。

論に曰く。「太陽病。初めに桂枝湯を服し、反て煩して解せざる者は、先ず風池・風府を刺し、却つて桂枝湯を与えれば、則ち愈ゆ」と。是れ、其の證なり。

（煩は、わずらわしきなり。思うようにならぬ所の事を心にもちたることなり。此の煩は頭項強痛して煩するなり。薬力と病毒と相戦いて煩するなり。故に、先ず其の煩する所を刺して、其の病毒を瀉し、却りて前の如く桂枝湯を与えれば則ち愈るなり。）

案するに、此に刺というものは、蓋し刺して血を去るなり、余、此の證に会えば、刺して血を去りて救効を得たり。

若しくは、其の強るところ一等甚しく、項より背に及んで、反顧伸舒し難きものは、乃ち、項背強り凡几たるなり。

桂枝加葛根湯葛根湯

本方内に於いて、葛根を加う。（桂枝加葛根）若し、此の證にして無汗ものは、更に麻黄を加えて、葛根湯と名づけ、葛根之が君となりて、其の方意頗る異なり。

（凡几は、項背強りて、反顧伸舒し難きを形容したる辞なり。其の強るの一等甚しきを言わんが為に、此

の形容の文字を加えたるなり。

案するに、葛根湯は、桂枝加葛根湯に麻黄を加えたる方なれば、他に例せば、桂枝加葛根麻黄湯というべきを、改めて葛根湯と名づけたれば、其の病態ことなるゆえ、葛根を主として別の一方を立てるなり。

其の異なる所は、僅かに無汗の一證なれども、此の無汗は平常の汗無きの謂に非ず。是の故に、桂枝加葛根湯の證に「反って汗出」と言いて、反の字を下したり。是れ則ち葛根湯を本方として、汗無かるべきもの反って汗出るを以て、桂枝湯に加味するの意を示したるなり。是に於いて、古人の病を診し、證を審らかにするの精密なることを見るべし。

抑、汗出る所以を考うるに、汗は水穀の精液にして、熱によつて発越して、腠理に洩れ出るものなり。是の故に、表證の汗は流るが如くならず、所謂、「尺の膚滑かにして其れ渾渾なるもの」是れなり。

今、此の葛根湯の證に、無汗をいうものは、肌表に瘀水ありて、それが為に腠理を閉塞して、汗の出るべき門戸なきを以て、汗の出ることなきなり。

麻黄は腠理を開きて水を逐うの能あるゆえ、此の瘀水も汗となりて去るなり。故に下論に曰く。「太陽と陽明との合病の者は、必ず自ら下利す。葛根湯、之を主る」と。此の合病というのは、両證をあらわしたることにて、凡そ太陽は表を位とするゆえ、腹中の變は有るまじきに、今、項背強・無汗・惡風の證ありて、又自下利するものは、此の下利を太陽病とすべからざるを以て、陽明の證とするなり。故に、「合病は必ず下利す」と、必の字を下したり。

されども、陽明病の正證とするとところは、胃家の実にして大便秘、若しくは通ぜざるものなるに、何を以

って自下利を陽明の證とするとせば、此の下利、固り胃陽の衰えて溜滯するところの水に非ず。熱の勢により、肌表にあるところの瘀水が、裏に走りて下利となりたるものゆえ、下利に拘らずして、やはり表證を主として、麻黄を以って瘀水を汗にし去れば下利は自ら止むべきを以って、葛根湯を用う。是れ、此の下利、熱勢によるものなるを以って、之を陽明に属して合病とするなり。

又、曰く「太陽と陽明との合病。下利せず、但、嘔する者は、葛根湯之を主る」と。

これも、合病とする所以は、前の證と同じことなれども、其の下利すべきもの、却って上逆して嘔を発するゆえ、但、嘔というなり。若しくは、嘔吐・下利両ながらあれば、全く表水ばかりの事にあらざるなり。此の證、前の下利するものよりは、一等劇しきものなり。要するに、其の熱の勢は皆裏に通るところあるを以って、陽明と合せ病むものとするなり。

是れにて、桂枝湯と葛根湯に僅かに無汗の一證を異にして、水氣の有無に与^あかることを考うべし。是れ乃ち、葛根湯を一方として、其の方意の頗る異なる所以なり。

抑、近世古方の盛んに行れるにより、復た其の證を審らかにせず、風邪感冒の證にあえば、輒^{すなわ}葛根湯の證として、誤治するもの住々これを見る。

余、其の跡を考うるに、大率、黄耆桂枝湯を用うべきもの、此の瘀水を逐うの劑を用うるにより、益々、陽氣の衛りを少なからしむ。邪氣去らずして、反って壞證をなす所以なり。

證に云く「太陽病。汗無くして小便反って少なく、氣上って胸を衝き、口噤みて語を得ず、剛瘕^{こうけい}を作んと欲するは、葛根湯之を主る」と。是れ亦、無汗にして小便反って少く、水氣去る所なきを以って、瘕を發

せんとするなり。

瘧は反張（反り返る）の病にて、産後若しくは刀傷瘡口等より、水入り風入るときは、亦此の病を発するにて、表水の致すところなる事を知るべし。

是れより推しひろめて、疥癬・内逼して水腫するものの類に用いて功あること、皆一掃趣にして、瘀水を汗にし去り、兼て氣血を和解することを知るべきなり。

葛根黃連黃芩湯

論に曰く、「太陽病、桂枝の證。医反つて之を下し、利・遂に止まず、脈の促する者は、表未だ解せざるなり。喘し而も汗出る者は、葛根黃連黃芩湯、之を主る」と。

（これは誤治によりて、熱内攻して下利をなすものゆえ、内攻の熱を瀉すれば、下利も喘も自ら治するなり。故に芩連の胸中の熱を解するものを用うるなり。

促は、來ること数にして、時に一止するの脈なり。是れ其の促するものは誤治によると雖も、猶、数なるものは、表は未だ解せざるなり。その喘して汗出るものは、内攻の熱と、下すによって氣逆するとの採め合ひにて発するところのものゆえ、其の喘にて汗出るなり。是れを以って、「喘し而も汗出る」という。間に而の字を挿むものは、喘を主とする意を示すなり。

これ胸中の熱を瀉すと、表を和解するとにて、喘は自ら愈れば、汗も随つて止むなり。然れども、表いまだ解せざるものゆえ、葛根を主として、表を解するなり。

本草別錄に云う。「葛根は肌を解し表を發く。汗を出し腠理を開く。云々」と。

案ずるに、葛根表を解することの明文なしと雖も、其の項背強り凡几たるもの、乃ち表證とす。

他の外台の中にも、葛根単味にして、表邪を治するものあるを併せ考えうれば、亦表證を主治するものにして、項背強を解くものと知るべし。

此の方、甘草あるものは、兼て内外の急を緩むものなり。

要するに、項背強・胸中煩悸して熱あるものを得ば、其の下利及び喘し而も汗出るの證の有無を問わずして此の方を用うべし。

因りて転じて、酒客の病・火證・熱瘡・湯火傷・小児の丹毒等に、此の方の證あることを考うべし。

或云く「脈結促するもの、下利の有無を問わず、此の方を用いて効あり」と。

又、云く「此の方の腹證は、右の不容の辺に結聚するものを得べし」と。

附

項背強急・異同の弁。并せ方一首

或、曰く。「風府の行・強る者は、桂枝湯。風池の行・強るものは、葛根湯。耳後の行・強るものは、麻黄湯。耳後と風池との間に當りて強るもの、柴胡湯。項背悉く強るもの、大青龍湯」と。

愚按するに、此の如く細々分別するもの穿つに似たり。

凡そ、表虛陽衰のものは、大率、上寒下虚して、頭項肩背強急せざる者なし。其の血の凝結するものは固りなり。或は、時に痰水上行して、頭重く項背強るもの、亦唯、脈と證とを審にして、或は以て葛根湯の

之所とし、或は以て桂枝湯および去加諸方の之所とすべし。

但、其の「項背強る」のみを以て、其の證と定むべからず。

(桂枝・麻黄・黄耆の之所の別は、肌膚の診と脈とを以てす。陽氣の旺虚を察すること、口訣あり)

麻黄湯、大青龙湯の如きは、桂枝湯、葛根湯とは、其の方意は格別なり。其の芍薬の有無を以て、発散を専らなると、兼て血分を和解するとの異同あること、考へ知るべし。

柴胡湯の如きは、項背強るに非ず。所謂、頸項強り脇下滿のもの、乃ち脇下滿の応なり。故に、缺盆の行を耳後に及んで強るものとす。

(或、曰く、「脇下、不容の辺にしまりありて、之を按ずに硬きものは、肩のつかえたるものとす。或は眼目の患い、或は頭痛の持病あるべし。若し、胸下攀急して水鳴するものは、痰飲なり。之と異なること知るべし。」と。)

若し、結胸する者は、項も亦強るといふものは、胸硬く張り出るを以て之を分つべし。若し、肌膚乾き、項背凝結して細疹を発するものは、黄耆桂枝湯を用うべし。誤認めて葛根湯を用うべからず。

若し、難解のものは、助くるに艾灸を以てし、時に鍼刺して其の実血を瀉すべし。

(又、案するに、呉茱萸の剂・冷逆の證の項背強るものあるを考うべし)

姜黄湯

(諸の頭項、痛み肩背に引く者を治す。此の方、肩背強急のものに用いて効あり。葛根湯に更え用いて、

一時の患を去るべし

防風（華蔭）・独活（或は羌活に代う）（各五分）
右七味。水一盞半を以って煮て、六分を取る。

桂枝・芍薬・桜皮・姜黄（各三分）

甘草（二分）

心下有水氣
咳喘時冒

91

小青龍湯図

(翼 初編下冊)



91、小青竜湯の図（翼 初編下冊）

図の如く、心下中脘より上不容の辺まで、タフタフとするほど水氣ありて、咳出、或は咳逆喘急し、発熱惡寒、乾嘔するもの、小青竜湯の證なり。

論に曰く、「傷寒、表解せず、心下に水氣有りて乾嘔発熱し、而も咳し、或は渴し、或は利し、或は噎し、或は小便不利、少腹滿し、或は喘する者は、小青竜湯之を主る」と。

（此の證は、心下に宿水留飲ありて、其の上に外邪を感じたるものにて、宿水と外邪とが相激して咳を發するなり。

乾嘔發熱は表證なり。咳は發熱に因りて發するゆえ、發熱に接して而の字を聞るなり。

或は已下の諸證は正證に非ず。皆、心下の水氣より出たる所の変證なり。水氣が去らんと欲すれば、渴することもあるなり。水が胃中に在れば、下利することもあるなり。水が胸中に迫れば、噎ぶこともあるなり。小便が利せざれば、少腹の脹滿することもあるなり。氣上逆すれば、咽喉に迫りて喘を發することもあるなり。一に、是れ皆、水氣の変候なり。「或は」というのは、其のあることを必とせずして、其の変に備えたるなり。

さて、此の方も亦、桂枝湯に本づき、心下の水氣を解することを主としたるものなり。

五味子は咳を治し、半夏・細辛・乾姜並に痰飲停水を解す。麻黄・表を開き汗を發し、余は桂枝湯本方の意にして、兼て氣血を和解するものと知るべし。

此の方、心下の水氣を去るを以てとする故に、また、支飲を治す。

證に曰く、「咳逆、倚息し臥すことを得ざるは、小青龍湯之を主る」と。

(此の證、即ち支飲なり。金匱に云く「咳逆、倚息・短氣して臥すことを得ず、其の形腫るが如し。之を支飲と謂う」と。

支はささえるなり。心下に留飲ありて支慄して開利せざるゆえ、物に倚りかかりて平臥することを得ざるなり。

又、云く、「心下、支飲ある者は、其の人冒眩を苦しむ」と。是を以て、此の證も亦冒するなり。

苓桂五味甘草湯の證に云く。「青龍湯、下し已り、云云。小便難、時に復た冒する者」と。此の「復」の字、小青龍湯を服せざる前に、已に冒する者、青龍湯にて一旦愈えて、今復た、衝氣を發して冒するものというにて知るべし。冒は、おおうなり。物をひきかむりたる如くに面目うつとりとなるなり。冒眩といえは、目くるめきくらむことなり。即ち、水氣の上逆して此の冒眩を發するなり。

又、曰く、「溢飲を病む者。當に其の汗を發すべきは、大青龍湯之を主る。小青龍湯も亦、之を主る」と。(溢はあふるるなり。「飲水流行して四肢に歸し、當に汗出るべきなるも出ず、身重す。之を溢飲と謂う」というものはなり。乃ち亦、留飲溢れて四肢に歸するの謂にて、身体疼痛、或は浮腫するものなり。

其の大青龍との別は、大青龍は麻黄湯より来り、麻黄湯はまた桂枝甘草湯より来るものにして、血分を離れて、専ら肌表に達して発散することを主とす。並びに上衝して上部にこずみ胸満して、心下の水氣少く、だぶつくほどのことなし。わけて大青龍は、内の燥き味あり。其の石膏あるを以って見るべし。

小青龍は前に弁ずる如く、心下の留飲を去るを主として、発散に専らならず。是れ、大青龍は、飲水流れて四肢に帰し、外に在るものを汗にし去り、小青龍は其の本根の水を去るの異なるありと知るべし。故に、溢飲の證に汗を発するには、大青龍を用うと雖も、留飲に用うことを見るべし。

要するに、溢飲の腹に水氣多く、四肢に水氣少き者は、小青龍湯を用うべし。腹に水氣少なく、四肢に水氣多く、或は浮腫するものは、大青龍湯を用うべきなり。

又、小青龍加石膏湯の證に云う。「肺、もようがい脹咳して上氣し、はんそう煩躁して喘し、脈浮なる者は、心下に水有り」と。これ其の煩燥して喘するを以って、石膏を加うと雖も、心下に水あるを以って、亦、大青龍湯を用いざること、前と同じ）

大青龍湯

論に曰く、「太陽の中風、脈浮緊・發熱惡寒・身疼痛・汗にして出ず而して煩燥する者、大青龍湯、之を主す」

（此の章、一体「不汗出」の三字を以って眼的骨子とすべし。

案するに、論中に汗出ざるをいうもの、文異同ありて、其の趣意は各異なる。曰く「汗不出」、曰く「不汗出」、曰く「無汗」、曰く「不發汗」是なり。

「汗不出」は、汗すれども出ずと読むべし。汗を出すし、かけをしても出ざるなり。「不汗出」は、汗にし出ずと読むべし。表にある水氣の汗にし去るべきものが、汗となり出ざるなり。故に、「而して煩躁」というを以て之に接す。汗にし出ざるを以て煩躁するを言うなり。

「無」は有の反対なり。汗の有べき所に、其の汗が無きなり。是れは、表に瘀水（へすゐ）の隔あるを聞かさん為に、無汗というなり。葛根湯・麻黄湯、是れなり。「不発汗」は、発汗剂にて汗を発せぬをいうなり。

扱、此の大青龍の證は、首に冠らしむるに「太陽中風」を以てすれば、素り重病に非ず。肌表の水を、汗にし去れば愈ゆべきものなれども、今其の水が汗になりて出ざる故、腠理を閉塞いで、脈中にも勢をもちて、浮緊をあらわし、発熱惡寒、身疼痛して煩躁するなり。

煩の解、前にあり。躁は、静の反対にて、じっとして居られぬことなり。

以上の諸證、劇しく見ゆれども、一体に汗さえ出れば、内熱も解して、諸證ともに解するなり。是れ重きに似て反って軽く、名に「中風」を以てするところなり。

此にて、大青龍は肌表の水氣邪氣を汗に発するを主として立てたるの意を見るべきなり。

「若し、脈微弱・汗出・惡風する者は、服すべからず」

（是れは、前の煩躁をうけたる文なり。若し脈微弱、汗出、惡風し、一々前證と相異して、それに煩躁があれば、此の煩躁、汗出ざるによらざるゆえ、虚證とするなり）

「之を服すれば、則ち厥逆し、筋惕・肉瞤す。此れを逆とするなり」

（誤つて大青龍を用うれば、陽氣を亡して手足厥逆し、筋惕肉瞤するなり。
惕はおそるるなり。筋惕は、筋を引きつめてびっくりするなり。瞤はうごくなり。肉瞤は、肉のビクビク
とうごくなり。）

此れ治を逆して致すところにして、茯苓四逆湯の證なり）

又、曰く、「傷寒、脈浮緩、身疼重、但重く、乍ち輕き時有り。少陰の證無き者は、大青龍湯之を發す」

（此の證は少陰真武湯の疑途あるところの傷寒にして、前の中風よりも劇しからずして、反つて深きなり。
扱、此れは但身重の一證が疑途にかかり、傷寒と名の所にして、大青龍を用うる所以なり。）

少陰真武湯の證は、四肢沉重疼痛すれども、此の證は身疼まず、但だ重きばかりにて、時に乍（ひつと）
輕きこともあれば、裡水の致す所の重きに非ざることを知る。

是れ、邪氣の肌表の間に隱伏し、未だ發せざるものとす。大青龍は肌表の水氣の邪氣を發する為の主方た
ること前に弁するが如くなるを以て、今審かに少陰真武の證に非ざるを徹察せば、大青龍にて隱伏の邪氣
を發して汗にし去るべしとなり。

「主之」といわずして、「發之」というにて、此の方の發汗の主劑たることを知るべし。

余・曾て一病婦・此の如き證ある者、數日愈ざるに、大青龍湯一貼を服せしむれば、一炊頃ばかりにし
て、汗流るが如く出で、病一掃するが如く、不日に常に服することを得たり。古方の妙なること試て知るべ
し）

麻黃湯

麻黃湯の證。前に略弁すと雖も、未だ其の蘊を尽さざるを以つて、更に左に詳釈す。

論に曰く、「太陽病。頭痛發熱・身疼腰痛・骨節疼痛・惡風・汗すること無く而して喘する者は、麻黃湯之を主る」と。

(此の證も亦一体に凡て、「無汗而喘」の四字が骨子なり。無汗の弁は、前の「小青龍湯」の下に詳らかにす。

扱、此の病、冠らしむるに太陽病を以つてすれば、外來の邪氣の如く劇しからず。發熱惡風して、惡寒せざれば汗出るべき筈なれども、これ亦肌表の瘀水に隔てられて、腠理を閉塞して汗の出るべき門戸なきゆえ、周身へ分布するところの氣が、外に漏ることを得ずして、一道にすばみ逼りて、氣道を衝逆するなり。其の採め合いて喘を發するゆえ、「無汗而喘」と、中間に而の字を挿むなり。

言うところは、表を閉て汗すること無きを以つて、其がために喘を發するなり。たとえば、茶街の湯を滾沸すれば、缶口より出る湯氣が一道になり、虎尾の如く立上るとき、其の蓋を取れば、其の氣忽ち平なるが如く、肌表の水氣を汗にし去れば、腠理へ氣が分布するゆえ、上臑の勢平になりて、胸滿喘息は速に平愈するなり。

さて又、小青龍の證には、身疼痛という。此の證には、身疼・腰痛・骨節疼痛と、逐一に其の処を詳かにするは、彼は中風の證ゆえ、外來の邪氣にて、身軀一面に疼痛するなり。此は太陽病にて、自地の病にして、其の表を閉るものは、瘀水なるゆえ、其の疼痛するもの多く骨節にあるなり。其の惡寒と惡風との別も、亦是のゆえなり。

凡そ、三陽三陰、自地の病と、中風傷寒外來の邪氣とは、其の證を見ず^{ある}に劇易緩急の差別あること、前の諸章を參考して例し知るべし。

又、案するに、大青龍と此の方との主意の異なるところは、彼も表閉じて氣衝逆すと雖も、胸喉に逼るところの水氣少く、内にこもるところの熱勢つよきを以って、煩燥するなり。是の故に、石膏を佐として、其の熱を解す。或は渴して飲を引くの證あるべし。

此の方は、胸喉に逼るところの水氣あるを以って、亦胸滿して喘を發するなり。是の故に杏仁^{あまごころも}を佐として、其の喘を解く。是れ、其の二方の意の別なる所なり。然れども、桂枝甘草ありて芍藥なく、并に麻黄を君として、肌表に達し、汗を發し水を逐うの意は、二方一帰なりと知るべし。

又、曰く、「太陽と陽明との合病、喘し而も胸滿する者、下すべからず。麻黄湯に宜し」と。

（此の證の喘も、乃ち「無汗而喘」するなり。其の「無汗」を言わざるは、前の章に困りて折略するなり。是れ古文の法なり。もし、今文の法を以って書かば、「無汗而喘。喘而胸滿」と書くべきところなり。

掎、此に合病という所以は、胸滿するを以ってなり。此の證は一段熱勢劇しきを以って、胸滿するに至るゆえ、合病とすれども、此の滿するもの、実滿に非ず。但、衝逆逼塞して、水氣上り、こずみ、胸滿するゆえ、喘して胸滿するものなれば、胸滿は主證に非ずして、喘が主證となるなり。故に亦、而の字を以って其の證を連接す。

されば此の證も前の如く、肌表を開いて汗を發すれば、其の氣腠理に分布して、喘息は自ら平低して、胸滿隨いて愈ゆべし。故に、誤認めて実滿として下すべからずというなり。是れ蓋し、大承氣に「腹滿し而し

て喘す」というの疑途あるを以って、之を言うならん。

凡そ太陽・陽明の合病は、其の治は皆表を發して、熱の勢を外に解するを法とするなり。

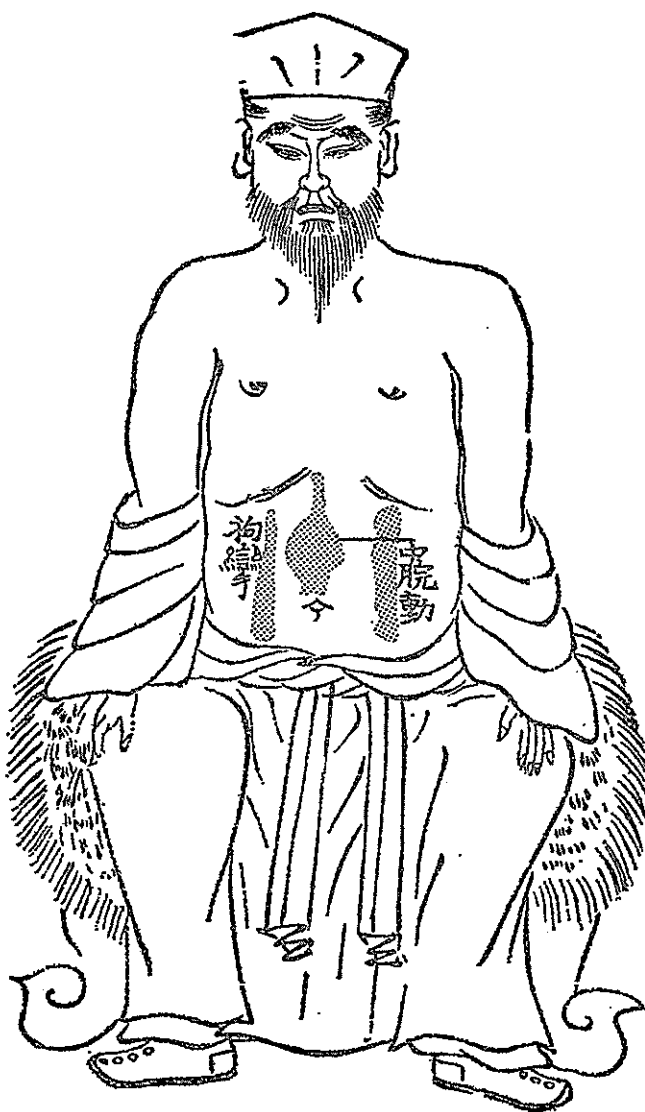
右、二章の義を釈して、麻黄湯の方意詳明なり。

其の他、「煩を發し・目瞑し、劇しも者は必ず^い劇す」といい、「汗を發せず、因て^い劇を致す」というものの類、概するに皆衝逆の致すところにして、發汗すれば諸證隨いて愈ゆること同意なり。故に、其の無^い汗して衝氣劇しきものは、喘せずと雖も、亦此の方を用うるなり。

桂枝湯
けいしとう

氣上衝腹拘急図
きじやうはらこきまうのづ

(翼 初編下冊)



92、桂枝湯

氣上衝・腹拘急の図

(翼 初編下冊)

右図の如く、臍上中脘の辺、動氣ありて、之を按すに浮にして築々（下キドキとする）たるもの、桂枝湯の腹證なり。

氣上衝というも、此の動氣、築するの謂なり。「上衝心」というは、此の動氣上騰して心に迫るなり。但、氣上衝といいて「心」を言わざるは、此の動、腹に在りて、心胸まで上衝せざるなり。輕重の別なり。

さて、其の腹皮は少し引張りて力あり、所謂、拘攣の微なるものなり。然れども、之を正按するに、硬からず実せずして、底にこたえるものなし。動氣も亦按して力ありと雖も甚しからず。乃ち「陽浮にして陰弱」なるもの、亦此に於いても同じきことを得べし。

（凡そ、腹證を診して、人毎に此の動氣あらざることを無く、陰病陽病ともに同じ。之を分別するものは、外證に於いて察すべし。妄に動氣のみをとるべからず）

抑、腹證を診するもの、先ず此の図に本づき、桂枝湯の正腹證なるものを定むべし。其の大同小異あるものは、時に取りて斟酌すべし。徒らに図を按じて鑒を求むること勿れ。

若し此の腹狀にして、腹拘急して時に痛むものは、加芍藥湯。

若し、大実痛するものは、加大黃湯。

若し、拘急甚しく急痛するものは、小建中湯。

若し、心下痞硬拘攣するものは、加芍藥生姜人參湯。

若し、渴して口乾くものは、加栝實根。

若し、却つて腹拘攣せず、之を按すにぐさつきて、胸さきより上・張りみちて心惡きは、去芍藥湯。

若し、心下滿、小便不利せば、去桂加苓朮湯。（医宗金鑑は「去芍藥」に作る）

其の他、悉く本方に就いて、去加増損するの意を審らかにし、或は陽或は陰、其の變化を明らかにせば、以つて大過なかるべし。

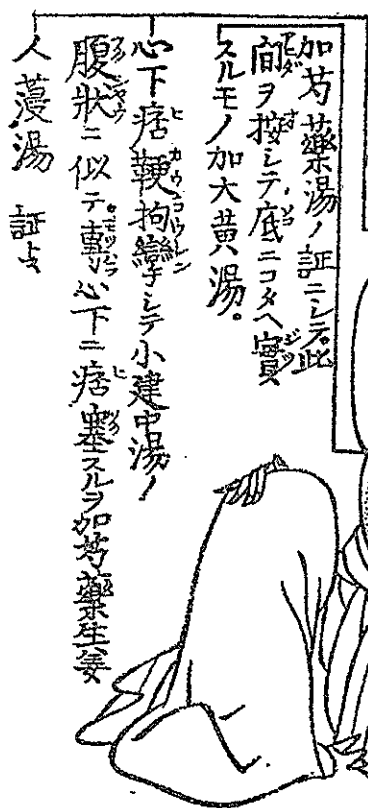
（又案するに、氣上衝するもの、瓜蒂散の證あり。吳茱萸湯の證あり。厥陰の證あり。或は少陰病四逆真武理中の證と雖も、此の動氣の變なしというべからず。

所謂、心下悸・目眩・煩燥等、亦、此の動氣に係るもの多し。但、其の陰陽を審らかにして、大表の応見を分明に診し得ること肝要なり。学ぶ者これを思え）

桂枝加芍藥湯（翼 初編下冊）

加大黃湯加芍藥

生薑人參湯



加芍藥湯ノ証ニシテ此
向ヲ按シテ底ニコタヘ實
スルモノ加大黃湯。

心下痞鞭拘攣ニシテ小建中湯ノ
腹狀ニ似テ重シ心下ニ痞塞スルヲ加芍藥生薑
人參湯 証也

腹ハリテ之ヲ按ニスジハリテ痛モノハ
加芍藥湯。至熱惡寒下利スルモノ
誤証アリ。

腹痛甚
シキモノハ
此方ニ木
香ヲ加ス。

93、桂枝加芍藥湯の図（翼 初編下冊）

前に図する所の桂枝湯の腹状にして、一等張り強く、三指探按するに、筋ばり引つるものあり、此の證、腹満を言えども実満に非ず、腹皮拘攣して張満るなり。是の故に、正按して底に應えるものなし。

論に曰く、「本太陽病、医反つて之を下し、腹満、時に痛む者は、太陰に属するなり。桂枝加芍藥湯之を主る」

（太陰病とは、内に冷水溜まりて腹満、溢れて水を吐き、食下らず、自利益々甚だし、時に腹自ら痛むものをいう。是れ、陽衰え、陰盛んにして、其の吐利腹痛等の太甚なものあるを以て、太陰という。

此の證は、本太陽病にして、発汗若しくは和解して治すべきもの、反つて之を下して、津液を亡し、精氣を虚し、爾に因りて血分かち、筋脈攣急して腹はり、時々痛むものなり。今猶、太陽の表位とすべからず。故に之を太陰の位に属するなり。属は、此れを以て彼が手下につけることにて、正證には非ざるなり。之を太陰の属證とはすれども、陽は固り陽にして、陰に転入することなきゆえ、治方はやはり太陽の例を用うるなり。

その故は、本桂枝湯の方中芍藥ありて、血分の不和を解する意あるを以て、今但、下すに因りて、其の血分不和なるもの、「等甚しくなりたるまでのことなるゆえ、芍藥を増し加えたるなり。此にて本方に芍藥

の腹證あることを推知るべし)

加大黃湯

「若し、大実痛する者は、加大黃湯之を主る」

(此に実というものは、大黃を加うるを以って考へるときは、腸胃に停滯して、下して去るべきものあるをいうなり。是を以って腹證も亦此の意を以って、心下より臍上までを正按して、底に應えるものあるを得て、実とすべし。)

これ其の實して痛むもの、血分筋脈の事のみに非ず。其の痛みも亦大なるを以って、更に大黃を加えて、其の実を下すなり。然れども、但その実のみに非ず。乃ち、前の加芍藥湯の腹状にして、此の実痛を致したるものと知るべし)

加芍藥生姜人参湯

論に曰く、「発汗の後、身疼痛、脈沈遅なる者は、桂枝加芍藥生姜人参湯之を主る」と。

(此の證、発汗の後といえは、亦津液を亡して、筋脈掣急。この疼痛を発するものとす。芍藥を加える所により。

此の證、本、表證脈浮なるべきもの。反りて沈遅なるは、心下胃口を痞塞するものあるを以っての故なり。是を以って、生姜人参を加えて、痞塞を排開するなり。是より推して、桂枝加芍藥湯の腹状にして、心下痞硬するものには、身疼痛、脈沈遅の證を得ずとも、此の方を以って治すべし。

要（初編下冊）

又、案するに、方中に生姜あるものは、胃管の停水あるものとす。必ずしも嘔のみを以つて、之を増し加うるに非ざるなり）

小建中湯図

(翼 初編下冊)



94、小建中湯しょうけんちゅうとうの図（翼 初編下冊）

図の如く、腹一面に筋張り引つり、宛も大鼓の上を撫るが如し。

（鼓脹とは異り、鼓脹は腹張り膨れて急なり。此は上下へ筋張り引きつること甚だし）

二行通り二大竹を立てるが如く、三指探按すれば上下に引張るもの弓弦を張るが如く、之を正按すれば腹底に実せず、但だ中脘の辺より上、動氣つよく、圧按するに胸中までドキドキと躍り、さて四肢の肉ひすばり、瘦せて、手足の心に熱を生じ、脈浮大にして力なきものを、小建中湯の正證とす。

或は二大竹を立つが如く、鼓皮を循るが如くならずと雖も、腹皮一面に筋張り引つりて、三指探按すれば、其の人痒笑（こそばゆがる）して按すに堪えざるものあり。

（其の痒笑するもの一定し難しと雖も、此の證多きを以て、此に記す）

是れ亦、所謂、拘攣急逼するものにして、四肢痠削するの虚候に至らずと雖も、亦の此の方の腹證とす。夫れ、本方は桂枝加芍薬湯より来るものにして、更に血結拘急の甚だしきものとす。是れ其の甘草を増し、膠飴を加うる所以なり。

此の證、腹痛するものあり、せざるもありと雖も、若し腹痛するときは、前の加芍薬とは緩急の別あり。彼は時に痛むと云う、痛み休作あり。此は急痛と云う、休作なく痛むものとす。

又、実痛とも異り、彼腹内に実するものあり。此れは裡急りきゅうといいて、腹皮の裡手りてにてひっぱりつける如く痛むなり。是れ亦、桂枝湯本方の意を審らかにし、其の去加の由つて来る所を考え互に相發明せば、惑を生ずることなく牽強臆断ならざること得べし。

證に曰く、「虚勞。裡急りきゅう悸き顛てんし、腹中痛み、夢に精を失し、四肢痠痛し、手足煩熱し、咽乾き口燥く」と。
(虚勞は病名なり。然れども、古人の名を命ずる、一も證に取らざるものなし。

虚は、場所ありて其の内に物なきをいう。皮骨は場所なり。其の内に実べきものは血肉精液なり。今、精液は肌肉を潤さずして、血も亦流動の勢すくなく、肉ひすばり、筋ひきつりて、顔面血色なく薄白くて、但、皮骨を存して其の内に充つべき物なきを以つて、名て「虚」という。

證に曰く、「男子、面色薄き者、渴及び亡血を主る。卒に喘悸し脈浮なる者は、裡虚するなり」と、是なり。「亡」も、亦有るべきものの無きものになりたることにて、血のひすばり乾くのいいなり。「勞」は疲なり。

血その肉を榮えず、精その骨を守らざれば、虚熱骨髓に入りて、手足の心・熱し四肢だるく痛み、夢に精をもらし、手足削るが如く瘦せて遠行くこと能わず。名て「勞」という所以なり。

裡急の「裡」は、即ち表裏の裏にて、皮膚の裏手にて引張るなり、筋脈のことなり。

「悸」は、乃ち心中悸なり。胸の内ダクダクと躍るなり。

「顛」は、鼻血なり。これ衝逆するによるなり。腹中痛は、裏急によるなり。夢に精を失するは、妄想なり。精は靜かにして内を守るものなり。今、内虚して守を失うゆえ、夢に失するなり。下焦の虚なり。

手足煩熱は、手足の心・炎き熱くして心悪しきなり。痠痛は、痠せ牽りてだるく痛むなり。

咽乾口燥は、血氣衝逆、虚熱の候なり。口舌乾燥とは違ふなり。口舌乾燥といえは胃中の実熱によるの候とす。故に、わざと舌を除いて、曲に咽乾口燥というなり。乃ち、ただ、咽口中の躁ぐことになり。

総べて、是れ虚勞の證なり。

又、論に曰く、「傷寒。陽脈微り陰脈弦、法・当に腹中急痛すべき者」

又、曰く「傷寒二三日、心中悸する者」

これ皆、傷寒外來の邪氣によるものにして、一時の変證なれば、悉く其の證を具せずと雖も、大率、前に演るところの腹證に従いて之を考うべし。

（小柴胡の腹痛の差別は、二編に詳らかなるを以て略す）

其の他、何の病名、何の病因を問わず、此の腹證に拠りて考え得べし。

黄耆建中湯

若し、此の腹證にして、肌膚の乾くこと甚しく、或は自汗盜汗あるもの、黄耆建中湯を用うべし。
證に曰く。「虚勞裡急、諸の不足」

（諸不足とは、氣血ともに充足せざるの謂なり。）

案するに、黄耆は正氣を肌表にはりて、津液を循らすの能あり。諸、肌表の不足するものは、皮膚乾いて潤なく、衛氣腠理を固めざるゆえ、津液泄れて自汗盜汗となり出るなり。黄耆、正氣をはり津液を循らし、

瘀理をして固からしむれば、瘀水は自ら回り降りて、小便に通利し、肌膚滑かにして潤沢を得るなり。

抑、黄耆は自汗盗汗を治すと雖も、一に正氣の不足によるものとすれば、是れを以て主能とすべからず。余が門の黄耆を用うる、汗の有無を必とせず。但、肌膚の正氣の乏しきものを診し得て誤たずとす。

当帰建中湯

若し小建中湯の腹状にして、少腹拘急、痛み腰背に引き、或は腹中刺痛、吸吸少氣の者、当帰建中湯の證とす。

(刺痛は、鍼にて刺す如く痛むなり。血氣の痛みなり。吸々少氣は、ひく息短く・弱くして息切れするなり。急迫なり)

此の證は、左の臍傍の上下を三指探按するに、結るものあり。之を邪按(すじちがい)に庄すするに、痛み腰背若しくは股際陰器へひきつり筋張るものを得べし。余は小建中の腹證に併せ考うべし。〔(当帰芍薬散・芍薬膠艾湯の腹證、略相似たり。四編に詳らかにす)〕

大腹虫丸

小建中湯の證に似て、虚羸甚だしく肌膚乾きて腹滿急、之を按すに堅くして痛むもの、乾血とす。大腹虫丸の證なり。

(今の金匱、誤りて大黃廩虫丸に作る。大黃廩虫丸は下瘀血湯の本名なり。證類本草に詳らかなり)

證に曰く、「五勞。虛極まり羸瘦、腹滿し飲食すること能わず、内に乾血ありて肌膚甲錯、兩目黯黒するは、中を緩くし虚を補う。

（甲錯は、鮫肌の如く粗れ乾きたるをいう。黯黒は、黒白分明ならざるをいう。

此の證は、小建中湯より一等血の干窄り乾くものとす。方中の四虫および乾漆・桃仁、皆血結の癥瘕を破るものとす。

愚案するに、桂枝湯の方中に芍薬あるもの、先ず此の兆を成したるものなり。其の漸、加芍薬湯に至りて、已に腹滿の状をあらわし時痛の患を發す。小建中湯に至りて、遂に虚勞の形狀を成し、裏急の攀結を致す。其の極まりを大廣虫丸の乾血證とす。并に皆、正氣乏しく、健運し難きよりして、血分洩りて調和せざるものにして、其の病の淺深厚薄の等差ありと雖も、其の證に由來るところは一掃趣なり。

読む者、桂枝湯本方の意を審かにして、其の流れに廻りて其の源を究め、其の流れに沿いて其の末を求めば、河源の出る処を知り、又其の礪石よりして海に入るの勢をも、親しく観ることを得んものとせんか）

此の方、転用して、鼓脹・血瘕（温薬にて送下す）・産後の血腫水脹（若し解せざるもの、證に隨いて此の方を兼用す）・瘰癧（意苡附子敗醬散もしくは排膿黃耆の輩を兼用す）・小児の癰癧等に考試すべし。

或・曰く。「勞咳、白沫中に血線（血のすじ）を雜え吐くものに試効あり」と。

附 虚勞勞咳の弁

虚勞の解は、小建中湯の下に詳らかにす。

此の證は少壯の者に限らず、五六十以上の人にもある病なり。

（金匱に云う「人生五六十。其の病、脈大なる者の痺・背を挟んで行き、腸鳴を苦しむもの、馬刀、纓を挟む者、皆、勞に之を得たりと爲す」と）

然るに今、小兒に疳勞の名あり。又、男女十五六才より以上、三十才の前後までに、勞咳と名るものを患う。之を金匱に求むるに合せざるものあり。

其の證、大率、咳嗽・痰沫を吐き、日晡・潮熱を發し、或は痰血を雜吐す。之を金匱に考うるに、所謂、肺痿なるもの、此の證と合するものあり。

證に曰く、「肺痿の病たるは、口中辟々として燥くを苦しむ、欬すれば即ち胸中隠々として痛み、脈、反つて滑數なり。此れを肺痿と爲す。

咳すれば膿血を唾にし、脈數にして虚なる者は肺痿と爲す。數にして実なる者は肺癰と爲す」と。

（案するに、肺癰と肺痿とを分つに、脈の虚実を以つてするときは、肺痿は即ち肺疽なり。

凡そ、内外ともに熱実、痛み甚しく、膿を成すものを癰とす。陽腫なり。熱微にして痛痒を覺えず、膿を成さざるものを疽とす。陰腫なり。

此に疽といわずして痿というものは、「痿」はな、えるなり。氣血の巡らざるところの名なり。肺は内にあ

りて見るべからざるを以て、疸といわずして瘰癧というなり。瘰癧は膿を吐するを以て、其の物を定指すなり。

古人の病に名るもの、皆臆断を以てせず、是に於て見るべし。

此の證、肺痿の治法に隨いて効を得べし。虚勞は桂枝加茯苓湯（前に出す）・黄耆桂枝湯・小建中湯・黄耆建中湯・大瘰癧丸の證を考え用うべし。（此の證に伯州散を兼用して功あり）

若し、骨蒸熱・解し難きものには、地骨皮散に方丹を兼用すべし。若し、少壯の勞證、血癖によるものは、刺絡（血を去る）すべし。

（岡塾大通曰く。「勞熱の妙薬は、いかにも地骨皮なり。然るに今、勞咳というものに用いて効なきは、其の證が違ふゆえなり。眞の勞證には、徳本の地骨皮散、濟世の地仙散に、宝丹潤体円・牛黄清心円の類を用いて効あり。若し夫れ勞咳は、肺痿の治に従いて多くは効あり。云々」と。

徳本翁の曰く。「男女によらず、氣を尽し心を勞して、榮血滯りてなるものあり。或は房事を過し腎水虚耗してなるものあり。或は氣虚して肌肉うすき人、風寒にあたりたるに發散の薬を屢用い過ごしてなるものあり。以上、此の如く種々の分別ありと雖も、男女老少によらず、血の道のわづらいなり、熱して血減るゆえに、色黒く瘦せて數脈生じ、又、熱に依りて虫を生ずるなり。只、宝丹よく勞瘵を治す。云云」と。

高陽朴翁の曰く。「女子十五六才より二十才前後までに發する勞證、男子二十才の前後より三十才までに發する勞證は、大率、其の人、天稟篤実謹厚にして色欲を慎しむ者、或は女子深閨の内に長じて天癸の旺至りて、情欲を遂ぐるこゝ能わざる者、此の病を生ず。腎精の開かんとするもの、鬱滯して、息すべきもの却

って消す。任脈の瘀血日々に厚くして心に迫るもの、刺絡にあらざれば効なし。兼て導引して、氣血を和すべし。云云」と。

愚案するに、凡そ男女少壯の間に於て、勞證を発するもの、其の天稟篤実謹厚なる者は、大率胎毒あるものとす。是を以て心氣鬱塞して開かず、篤実なるゆえんなり。

多くは、小兒の疳證一たび愈えて、少壯の時に至り精開け氣旺ぜんとするの時、鬱滯して此の證を発す。

所謂、肺痿の證と雖も、亦下焦の虚衰、氣血上に迫り、凝滯して成るところのものとす。是を以て、灸鍼を以て其の治を助くべし。其の刺絡の術ごときは、亦、一家言なり。余、積年試み得たるところあれども、此に贅せず）

附方

地骨皮散（徳本）

地骨皮・柴胡（各大） 知母・秦皮（各中） 黄柏（小）
右、五味。末と為し服す。

地仙散（濟世）

地骨（二両） 防風（二両） 甘草（炙二両）
右、三味。末と為す。（毎服四錢）

以上二方、並に勞熱を治す。

方丹（信州湖岸・武田子胖の家に伝わるところ。徳本翁・神秘方なり。子胖數用いて骨蒸熱および癲狂等を治す。委くは口授あり）

黑鉛（五錢） 水銀・沈香・真珠・龍腦（各三錢） 麝香（二錢） 金箔（百枚或は百五十枚）

右六味、末し蜜丸、土中に埋むこと三句以上、取り出し服す。

（若し、急に製せば、則方中に黄土一錢或は五分を加う。黄土は清淨の地下三尺に得るもの、水飛す）
毎服二三分、若しくは七八分。冷水にて送下す。

（狂證は丁香三錢或は二錢、牛黃二錢を加う。後、玉丹を用いて之を下す）

當歸四逆湯図

(翼 初編下冊)

并
加茱萸薑生薑

脇下拘急 吳茱萸ノ証多シ

心下水氣
腹拘急



95、とうき しぎやくとう当帰四逆湯の図

并に加呉茱萸生姜（翼 初編下冊）

図の如く腹皮拘攣すること、桂枝加芍薬湯、小建中湯の腹状に似たり。且つ左の臍傍天枢の上下に攣痛するものあること、当帰芍薬散・当帰建中湯の證に似たり。右の少腹腰間に於いて結聚するものあり。手足冷え、脈細にして力なきもの、当帰四逆湯の證とす。

案するに、此の方は桂枝湯方中の生姜を去りて細辛に代え、更に当帰・通草を加え、大棗を増したるものなり。

下焦の寒氣上りて心下にあり。正氣抑塞せられて、肌表に充ずして四肢に及ばず、血脈澁滯して駛流の勢なきものとす。

細辛、能く中焦の冷氣を散じ、胃口に抑塞せる水氣を排く。

通草、能く其の水を引いて小便に利し、關節を通じて、陽氣を導くに便す。

余は血脈を和し、正氣を滋達すること、桂枝湯の旨意なるものと知るべし。但、当帰は之が主となりて、芍甘の二味に和し、腹中の結血攣引するものを解くことを能くす。

論に曰く、「傷寒。手足厥寒、脈細にして絶えんと欲する者は、当帰四逆湯之を主る」

（これは平素氣虚の者、外邪襲入りて心胸にあり。正氣之が為に抑遏せられて、四肢より厥逆す。脈細にして絶えんと欲するもの、此の方を以て心胸間の寒邪を排き、水氣を下に導きて、正氣を舒暢すれば、厥寒復温まり、脈に陽氣を帯びて愈るなり。

三味の四逆湯との別は、彼は既に内に在りて、下利清穀の證をあらわすものとす。故に四肢に於ても厥冷をいう。

冷は、つめたきなり。内に属する詞とす。寒は、さむきなり。外より来る氣のさむきを覺ゆることなり。外に属する詞とす。

此の證、心胸間に在りて、未だ腹内の變をあらわさず。故に文を變じて厥寒と書き、其の異を示すなり。細は、幅のなく糸の如き脈なり。故に「絶えんと欲す」という。切れそうに思ふなり。

又、曰く「下利、脈大なる者は、虚なり。其、強く之を下すを以ての故に、設、脈浮革し爾に因りて腸鳴る者は、当帰四逆湯之を主る」

（脈大とは、所謂、洪大無倫の謂なり。淺按すときは大きく幅あれども、深按すときは細くして蜘蛛糸（くもす）の如くなる脈なり。

革は、弦大にして戾なる脈をいう。戾は、中うつろにして葱の切口に指を当るが如しといえり。虚寒の候なり。

さて、此に言う「下利、脈大なるは虚なり」の一句は例なり。「其の強く之を下すを以て」以下が此の證をいうものなり。言うところは、凡そ下利の脈大なるものは、虚寒の例なり。今病人其の強く之を下すを

以つての故に、胃陽衰えて、設、脈に浮革をあらわさば、以つて実とすべからず。

「爾に因りて」とは、強く下すに因りてなり。強く下すに因りて、下利はせずとも、脈浮革にして、腸中水鳴するものは、虚寒とすべし。

「此の方、之を主る」なり。此の證、前章と脈、細大相反するが如くなれども、其の帰は一なり。而して、此の脈、彼よりは一等虚の甚しきものとす。

愚案するに、凡そ虚寒の證にして、脈浮大なるもの、腹候・動氣心下に迫りて浮大の状あり、誤りて陽證とすべからず。

又、案するに、三味の四逆湯は、下すに因りて下利清穀を致すもの、此の方は下すに因りて但腸鳴り、脈に虚證をあらわすもの。亦内外の異なるあり。

加呉茱萸生姜湯

又、曰く、「若し久寒ある者、当帰四逆加呉茱萸生姜湯之を主る」

久寒は、水毒の寒をなしたるものなり。乃ち下焦の虚寒・疝毒・宿飲の類、胃口にあつまり、陽氣を抑塞して飲食剋化の利を妨げるもの是なり。此の證、但久寒とのみ言いて、其の證を詳らかにせざるを以つて、或は吐利を指すの說あれども、今予が試験するところを以つてするに、或は宿飲中焦に滯りて、吐酸・吞酸等の證を成すもの、或は冷氣衝逆して心下に迫り胸脇を攻め、乾嘔涎沫を吐するもの、或は腹痛、或は吐利、或は転筋、婦人の積冷血滯・經水短少・腹中拘攣、時に心下脅下に迫り、肩背強急・頭項重痛の類、概するに久寒の致すところなり。

其の脈證を審らかにして、外手足寒く脈細なるを得ば、本方を用いて効あらずということなし。一に吐利の證のみにあらざるなり。

吳茱萸・生姜・細辛、力を殺て、胸膈の宿飲停水を排き胃口を豁かにし、冷氣を散じ衝氣を下して、桂枝諸薬の氣血を調化し、陽氣を宣達するものをして、其の用を利せしむるもの考うべし。

湖南老翁、浪華の堂州に僑居するの日、一夕転筋を患う。其の證、胸腹拘急・背膊強・頭腦痛・口舌乾燥す。舌を弄して唇を濡さんとすれば、忽ち転筋し脈直にして死せんと欲す。

門生の傍に侍する者をして、方を処せしむ。桂枝加芍薬、或は括蕤桂枝湯を作りて進むと雖も寸効なし。因つて鶏屎白二錢を服す。亦、効なし。近隣に湯村生なる者あり。招きて診せしむ。

生が曰く。「脈洩りて転筋す。当帰四逆加吳茱萸生姜湯を用うべし」と。

其の口舌の燥くものは、舌筋転ずるによつて、血分動いて津液をかわかすもの、以つて熱候とすべからず。乃ち、本剤を作りて服さしめ、且つ鍼治を加えて、病勢すこしくゆるむ。続服一昼夜、翌夕にいたりて愈て常に復す。

翁、大に湯村生の偉効を称歎して、以つて予に語れり。因つて、其の事を附記して参考にそなう。

或、曰く。「腹皮一面にすじはり、板の如くにして一点の間隙なく、四肢冷え脈洩るものは、当帰四逆湯の方内に烏頭一錢を加うれば効あり」と。

又、療治茶談に云く。「年久しく疝を病む人、脾胃虚寒すれば、多くは反胃膈噎となる。疝氣の反胃は、医書に方論なし。此の見分けは、腹中雷鳴して心下へさしこみ、少腹へ横すじかに下り、腰に陥りて止ま

要（初編下冊）

る。当帰四逆湯を用う」と。愚案するに、これ亦、久寒というべし。呉茱萸生姜を加うを可とすべし。
或、曰く。「凡そ、呉茱萸を用うべきの腹状は、両の脇下・章門の行引つり、之を按して痛む」と。これ
亦、「一案に備うべし」

芍薬甘草湯の證 (翼 初編下冊)

腹中拘攣
四肢攣急



96、芍藥甘草湯しゃくやくかんそうとうの證（翼 初編下冊）

右図の如く、腹二行通り、内外上下に引はりたる筋ありて、之を按するに強し。或は脚脛、或は手臂攣急して伸び難く、或は手足の患なしと雖も、腹皮攣急して腹痛するものあり。小建中湯・桂枝加芍藥湯の腹證に相似たりと雖も、彼は桂枝を主として、氣上衝等の證あること、前に具論するが如し。此の方は、但筋脈の攣急を治するを主とするのみ。

論に曰く。「脚攣急。芍藥甘草湯を作り、之を与う。其の脚、乃ち伸ぶ」と。他の治に及ばざるなり。若し、此の腹證にして、惡寒若しくは骨節疼痛する者は、附子を加う。

芍藥甘草附子湯

論に曰く「汗を發して病解せず、反つて惡寒する者は、虚する故なり。芍藥甘草附子湯、之を主る」と。（表證の惡寒は、汗を發すれば解するなり。今、發汗して反つて惡寒するものは、病解せずとする所以なり。

「虚する故なり」とは、此の惡寒は邪氣の実するにあらず、精氣の虚するゆえなり。凡そ、發汗吐下の後、脈微にして惡寒するものは虚する故なり。病解するものは、消息して陰陽自和すれば、惡寒も隨いて愈ゆ

るなり。故に「病不_レ解」という。

然らば則ち、其の虚して惡寒するもの、所謂虚寒にして、附子にあらざれば愈えず。然れども、此の惡寒の外に、別に虚寒の證候、内外の変を見わすものなし。但、此の惡寒、發汗の後に得。

さて發汗すれば、津液を亡して血脈の不和なるを以って、芍薬甘草之を和して、附子その惡寒を解するなり。その發汗後、身疼痛・脈沈遅なる者、桂枝加芍薬生姜人参湯を用いたると一例なるべし。

或、曰く、「疝氣、少腹臍傍に凝結するもの、之を按すに腰脚に引つり、或は股に引つりてだるく痛むもの、證に隨いて、附子粳米湯・真武湯・苓姜朮甘草湯の類を用い、芍薬甘草湯及び加附子湯を合方して効り」と。

又、曰く。「芍薬甘草湯は、腹氣鳩尾先へ迫りつけたるものあり。又、兩の脅下の腹底に引はりたる筋あれども見われず、臍の通りに至りて塊りたる筋あり。高く皮上に見わるるもの、芍薬甘草附子湯の腹證なり。云々」と。

文化六己巳秋八月刻成（一八〇九年）

腹證奇覽翼初編下冊終

日本橋中通新右衛門町

東都書舗 前川 六左衛門

心齋橋北久太郎町北へ入

浪華書舗 柳 原 喜兵衛

心齋橋南久宝寺町北へ入

高橋 平助

腹證奇覽翼二編上冊

遠江浜松

和久田寅叔虎 著

（門人）豊前中津

原田 成憲子 欣校

97、風引湯の證・發明并に図解

（翼 二編上冊）

（附・紫石寒食散の説）

嗚呼、風引湯の方たるや、誠に奇なり。妙なり。医家の常に製して以て急救に備えずんばあるべからざる所のものなり。

曩に吉益東洞、類聚の方を撰びて、此の方を遺せしより、後の古方に従うもの、復未だ之を試験するものあるを聞かず。

（吉益氏は唐後の方として選舉せざるもの、今奇功を得るもの多し。本書に就きて試用すべし。安永年間、瓊海の岡塾文台なる者、此の方にて諸の暴卒病を救うことを聞く。其の後、療治茶談続編に載せて、滴證の試験を記す。其の他は、未だ之を聞かず）

余が友、京師の延生堂、仲景に心酔して、診腹に苦刻せるものなり。此の方を試効して危急を救うこと鮮なからず。敢えて其の美を私せず、以って余に語る。余、雀躍として已まず、之を数人に試みるに果して妙なり。因って其の本文を釈し、併せて發明の説を記し以って同好の士に貽り、濟生の一助たらんことを欲すること左の如し。

證に曰く、「寸口脈、遲にして緩。遲なれば則ち寒となし、緩なれば則ち虚となす。榮の緩なれば則ち血を失うとなし、衛の緩なれば則ち風に中るとなす。邪、經に中れば則ち身痒くして癩疹あり。心氣足らざるに、邪入りて中れば則ち胸滿・短氣す」と。

(案するに、寸口脈より癩疹までの三十五字は、風引湯の脈證に非ずして、邪風に中るの由を論ず。心氣不足以下の文、始めて風引湯の證に及ぶなり。遲は、おそきなり。一息三動の脈をいう。緩は、ゆるきなり。按えて引き張らぬ脈をいう。遲脈は寒氣勝の候にして、緩脈は血氣虚するの證なり。

榮は、さかえるの義にして、血の脈中に榮えるの称とす。中に按えて緩きを覺ゆるは、榮の緩なり。是れ血を脈中に亡うの候とす。衛は、まもるの義にして、皮膚に張り出たる氣の称とす。淺く按えて緩脈を得るは、風に中るの兆なり。故に此の脈をすべて、「緩なれば則ち虚と爲す」といふなり。然らば則ち、邪氣虚に乗じて入るべき脈狀を論じて、風脈というにあらずと知るべし。又、此にいう中風は、傷寒に対するの中風に非ず。即ち、手足癱瘓不仁するの中風なり。

さて、全文の意は、下焦に寒ある人、陽氣を剋せられて舒暢せざれば、經絡をめぐる血も不足して、筋脈に寒さるゆえ、血が亡たるになり。随つて、陽氣が肌膚に達して腠理を固め衛らざるゆえ、邪風が虚に乗じて冒入りて中り傷るなり。

若し、其の邪が外にして經脈に中れば、身痒くして癩疹を發す。隱疹は、隱起するところの疹にして、即ち風疹なり。俗に「かざほろし」といふものは是れなり。此れは輕病なり。發散して治すべし。

若し、其の人、衛榮の虚のみならず、心氣も不足なるに、邪氣内に入りて臟に中れば、則ち胸滿短氣して

危急の證を發するなり。胸滿は、胸一ぱいに脹るなり。短氣は、呼吸みじかく息せかせかとするなり。此らの、心に中るが乃ち風引湯の證なり)

「風引湯にて、熱・癰癧を除く」

(抑、邪風内に入りて、胸滿短氣するに至れば、熱氣内におこり、加うるに手足を引伸べ引縮めして、其の證・休作(起りさめ)あるなり。癰癧とは、即ち是の謂なり。癰は癰瘻なり。瘻は病の間ありて發するなり。

案するに、他の例に依らば、「胸滿短氣・熱癰癧の者風引湯之を主る」と書くべきを、本文の如く顛倒して書きたる故、金匱綱注にも、古文に非ずというも、是れは未だ深く考えざるの説なり。此の如く顛倒して書きたるが古文の辭なりと知るべし。何如となれば、風引湯は、諸暴卒病の上焦に迫るものを挫拉するところの方にて、熱癰癧を除きて胸滿短氣をしづむるが風引湯の主治にて、其の證、除いて後の心氣不足および虛寒等の自地の病を治するところに非ずの意を示したるものなり)

又、曰く。「大人の風引、少小の驚癰瘻癰・日に數十発、医の療せざる所の熱を除く方」

(此の文は金匱の正文に非ず。林億等、他書の文を引くところのものにて、千金・外台などの文体なり。外台に深師の方とし、瘻を癰に作る。

風引は、風入りて手足を引くの名なり。少小の驚癰は、即ち驚風なり。瘻癰は、搐搦というが如し。筋の急にして縮むを瘻と云い、伸びるを癰という。是れ邪氣心に迫るの致すところなり。

日に數十発、故に癰癩驚癰の名あり。此れ亦、前章と同意にして、医の療せざる所といえ、古より此の方に優れる救急良方なかりしことを見るべし。

巢氏が曰く「脚氣、風引湯に宜し」と。

(此れ亦、方下に引くところの文なり。)

案ずるに、此に但、脚氣とのみいうもの、其の證を弁せず。今、方に依りて證を考うるに、即ち脚氣衝心なり。脚氣衝心するもの、亦胸滿短氣・心中疼煩、前章の證と一揆なることを知るべし。

延生堂曰く。「古人、脚氣衝心を治するに、大率、吳茱萸・檳榔の劑多し。是れ、仲景・吳茱萸湯の意に本づき、更に降氣の諸品を合したるものにて、至れるの方とすべからず。

夫れ吳茱萸は、病の中焦に在りて上衝するものを治して、既に上りて上焦に属するものを治すること能わず。宜なる哉。其の篤劇に至りては、手を束ねて斃るを見ること。

論に曰く「穀を食して嘔せんと欲する者は、陽明に属すなり。吳茱萸湯、之を主る。湯を得れば反つて劇する者は、上焦に属すなり」と。

陽明は胃家。胃家は中焦なり。湯を得れば反つて劇する者は、上焦に属する故とすれば、是れ吳茱萸湯の上焦を治すること能わざること明けし。然らば則ち、其の上焦に属するもの、何の方か之に処せん。唯、風引湯あるのみ。今、用いて以つて効あるときは、復、何ぞ疑わん。

此の方、大人の風引、少小の驚癰および脚氣衝心を治するのみならず、諸般の暴卒急劇の病、上焦に迫

り、心肺を干して胸滿短氣・乾嘔喘息・肩膊強急・頭脈怒脹して死せんと欲するもの、何の病名を問わず、之を投じて暴を挫じき、急を緩め危篤を挽回す。其の功の速やかなること、湯を雪に沃ぐが如し。是れ医家常に製して救急に備えずんばあるべからざる所以なり。

然りと雖も、此れ唯、危篤を挽回するのみ。既に危篤を免ることを得ば、続いて後治の方を考え処せずんばあるべからず。但、一を知りて二を知らずんば、偶、奇方を得ると雖も、僅かに一旦の功を得るのみ。何を以てか全九の土工を庶幾することを得んや。初学の士、豈勉めざるべけんや。

此の方、石薬多品、時に臨みて作り難し。予め製して収め貯うべし。但し其の中、氣味脱し易きものは、時に臨みて之を合するを宜しとす。

寒水石は、塩鹵汁（にがしお）の底に凝成るもの。方解石に非ず。赤石脂は華舶の物、真に非ず。本邦羽州秋田の産、真の赤石脂と呼ぶもの良し。余薬も亦、精品を採り用うべし。

98、風引湯の證（翼 二編上冊）

右図の如く胸一ぱいにはり満ち、動氣奔馬の如く上りて心を衝き、肩息短氣、乾嘔、若しくは喘急、劇しきものは直視（目を据え）・上竄（そらめづかい）・瘳瘳搐搦、水飲咽に下らざるもの、何の病因を論ぜず一切に以って、風引湯の證とすべし。余は前に詳らかにし。

或、疑う、「此の方許多の石薬、既に熱を除くの方という。何を以ってか寒熱虚実を問わざる」と。

答えて曰く。諸病寒熱の因を問わず、上って心肺に迫るものは、必ず熱煩を發す。彼の厥陰の心中疼熱、少陰の乾嘔煩、皆上部に迫るによるものを見るべし。況んや其の他をや。其の熱を除くを主とするもの多くして、寒を退くるの意少なきもの、是れがためなり。既に以って急を救うことを得ば、其の寒熱虚実、豈審弁せざることを得んや。是れ志を同じくする者と論ずべくして、道を異にする者と語るべからず。

紫石寒食散

紫石寒食散の方下に曰く。「傷寒を治し、愈えて復せざらしむ」と。此れ其の證を詳らかにせず。闕文あるに似たり。

愚案するに、此の方も亦、許多の石薬および上部の病を治するものを伍す。但、其の附子・禹余糧の二

味、以つて下焦に達すべしと雖も、大低風引湯の方意に類して、暴卒病を救うの方に似たり。

且つ、金匱雜療中に載せて、篇章の次序を問うべからざるが如しと雖も、其の前に承くるに備急丸の心腹諸卒暴の百病を主るの方を以つてし、其の後に次ぐに卒死を救うの諸方を以つてするときは、其の意なきに非ず。蓋し闕文ならんか。

岡塾氏が曰く。「此の方、婦人の子痼・子煩に用う」と。

又曰く。「此の方及び風引湯、並に丸とし用いて、小児の五疳を治すべし」と。
此に標記して云う。「以つて他日の試験を俟つ」と。

99 桂枝加龍骨牡蠣湯の證 (翼 二編上冊)

失精脈沈
小腹痛急
氣急目眩
加味可戰

部位
上候
下之



99、桂枝加竜骨牡蠣湯の證（翼 二編上冊）

図の如く臍上中腕の辺に動氣つよく、小腹に弓弦を張りたる如く引きはるものあり。常に衝逆（のぼせ）、目眩（めまい）の患ありて、上実下虚、上熱下寒。脈虚乳なるもの、桂枝加龍骨牡蠣湯の證なり。

證に曰く、「夫れ失精家、小腹弦急・陰頭寒え・目眩・髮落ち、脈極めて虚乳遅なるを、清穀亡血・失精と爲す。脈・諸を乳動にして微緊なるを得れば、男子は精を失し、女子は夢に交わる。桂枝加龍骨牡蠣湯之を主る」と。

（失精は、夢に交りて精を失すなり。男女を別つは、互文にして其の実は一なり。小腹弦急は、強くすじばること弓弦の如きをいう。其の證、小腹にあるものは、下虚の候にして、氣血の不和なり。失精あるものは、それによるなり。

陰頭寒・目眩・髮落・并に皆、衝逆の候にして、下降の氣すくなく陽氣下部に旺ぜざるなり。髮落ちるもの、皆上実にして、瘀血頭部に集るによるなり。

「脈極めて虚・乳・遅なるは、清穀・亡血・失精となす」とは、脈例をいう斜挿の文なり。

言うところは、凡そ脈に、虚・乳・遅の三證を極めてあらわすは、下利清穀か、亡血か、失精か、此の三病の中の脈證の例なりとなり。

虚は、場所ありて物なきの義にて、浮大にして根のなき脈をいう。扞は、中の空なる脈をいう。遲は、おそき脈。三脈ともに氣血の虚に属して、陽氣の衰えたる脈證なり。

「脈の虚……」以下を、此の方の脈證に取るなり。言うところは、以上の脈例に就いて言うときは、其の三脈の中にて、之を扞動にして微緊なる方に得れば、失精夢交の脈とするなり。動は、关上にありて上下に首尾なき脈といえり。蓋し、臍上の築動、之と応ずるものなるべし。此の方、虚寒の意なし。微緊にして遲ならざる所以なり。

此の方を按するに、龍骨・牡蠣の二味を加うるは、動氣衝逆を鎮むるのみにして、其の余皆、桂枝湯本方の与るところ。陽を助け、榮衛を調え、衝氣を平らかにして氣血相和せしめば、諸證自ら愈るものなり。初編、桂枝湯本条の下に弁ずるの意と同じ。併せ読むべし。因って此の方の用を弘むるときは、特に失精家のみならず、所謂、虚勞・瘵證・赤白濁・小兒の胎驚・夜啼・客忤・驚瀾の等、證に随つて試効あり。或曰く、「故なくして頭髮脱尽すること、麻風の如くなるものに試験す」と。

愚謂らく、亦證に隨うにあり。或は桂枝湯、或は大柴胡湯（加石膏）、或は黄連解毒湯、亦皆、前證に試験す。豈、但此れのみならんや。」

天雄散

天雄散の方。亦、失精家を主る。而して桂枝加龍骨牡蠣湯との別は、天雄散も桂枝・龍骨ありと雖も、朮・天雄之が主となりて、下焦に達し寒を温め、水を利用するの意あり。

腹證亦之に随つて、腰腹冷え・小便數・臍上動つよく・衝逆・脈之を乳動にして遲なるに得て、失精夢交あるを以つて、此の方の證とし別つべし。

吉益家に龍骨牡蠣を分ちて、臍上臍下の動を主治すというものは、余之を知らず。

案するに、此の方は諸虚・内傷瘧冷・遺尿及び小兒の漫驚・漫痺等に考え用うべし。

或、云く「疸を治す」と。

100

烏頭桂枝湯の證（翼 二編上冊）

部位
少腹而
及表位

寒痛之誤
逆冷絞痛
峻削瞑眩
背脊乃中



100、烏頭桂枝湯の證（翼二編上冊）

図の如く臍下に大筋をあらわし、弓弦を張るが如く、其の筋、舉丸或は股際（股のつけね）へ引き、或は上腹へも引つり腹痛すること、譬えば絞め切らるるが如くなり。或は臍を透して塊を成すもあり。是れ所謂、寒疝なるも皆、氣血の不和を兼るものにして、烏頭桂枝湯の證なり。

證に曰く、「寒疝。腹中痛み逆冷・手足不仁、若しくは身疼痛し灸刺、諸薬の治する能わざるは、抵当烏頭桂枝湯之を主る」

（寒疝は、下焦の寒毒凝結するの名なり。逆冷は、手足逆しまに冷ゆるなり。手足逆冷といわざるは、此の證の冷ゆるところ、手足に止まらざるゆえ、腹中を承て言うなり。

不仁は、痛痒を知らざるなり。身疼痛は、氣血不和によるなり。

抵は「あたる」と訓す。物にうちつけあたるなり。此の方は膜胲剤にして、病毒の凝結するものにうちつけ当るゆえ、抵当というなり。故に、「刺灸諸薬も治する能わず」と言いて、篤劇の病状を示したるものなり。

案ずるに、此の方は烏頭煎と桂枝湯とを合方したるものなり。合法する所以は、身疼痛にあり。身疼痛

は、肌表のことにして氣血の不和によるなり。

論に曰く、「身疼痛する者は、急に当に表を救うべし。宜しく桂枝湯にすべし」と是なり。而して、烏頭煎の證は、更に下章の證と併せ考え、其の意を審らかにすべし。

大烏頭煎

證に曰く。「腹痛。脈弦にして緊。弦なれば則ち衛氣行かず、即ち惡寒す。緊なれば則ち食を欲せず。邪正相搏ち即ち寒疝となる。寒疝、臍を遶りて痛み、若し發すれば則ち、自汗出で、手足厥逆、其の脈沈弦なるは、大烏頭煎之を主る」

（弦は、つよく引きはるなり。緊は、よりの掛りくるなり。衛氣は、表を衛る氣なり。弦脈は衛氣の行らざる所へ寒邪の干したる候ゆえ、即ち惡寒すというなり。緊脈は内にありて寒邪胃陽を干して、穀食を停滯せしむるところの候なる故「食を欲せず」というなり。

例に曰く、「脈緊、軋索の常無きが如き者は宿食あるなり」又曰く、「脈緊、云云、腹中に宿食ありて化せざるなり」と是なり。

此の脈、弦にして緊なるは、寒邪外にして衛氣を干し、内にして胃陽を干して、正氣と相搏つの候なり。邪正相搏ちて戦争の勢ある故、腹痛も劇しきなり。之を名て寒疝という。正氣と立ちならぶところの邪にして、眞の虛寒に非ざるを見るべし。

然れども、寒は下焦より干すものゆえ、其の毒臍をとりまきて凝結び、或は小腹に弦急をあらわしめ、其の毒より痛を發するなり。痛發すれば自汗出で、手足逆冷して、弦緊の脈沈伏するに至る。この故に寒を退

け水を逐うところの烏頭を煎じ、更に蜜を和して、其の急迫の毒を治するなり。

右一章、烏頭煎の證を弁じて、詳らかに寒疝の脈證を説くもの。前の烏頭桂枝湯の證と併読みて其の意を得べし。又、烏頭湯なるものあり。亦、烏頭煎を以つて本方とし、更に麻黄・芍薬、黄耆・甘草を加う。其の證の別、下文に詳らかなり。

烏頭湯

證に曰く、「寒疝、腹中絞痛し、賊風入りて五臓を攻め、拘急し転側するを得ず、発作時にあり、人をして陰縮り手足厥逆せしむるを治す」

（此の章は外台の文なり。）

絞は、搾り締めるのを義にして、絞痛は絞り切るように痛むなり。此の「絞痛」の二字、烏頭煎を用うる腹痛の状を善く形容せり。前の二章ともに、此の意を思ふべし。

此の證は、寒疝の持病ある上に、賊風が入りて五臓を攻むるゆえ、身体拘急し転側するを得ざるなり。此れ賊風の入りたるを以つて、麻黄等の四味を合したるなり。

「発作、時に有り」とは腹痛のことなり。陰囊縮むは、寒疝の毒に締めつけらるるなり。

又、曰く、「身体羸瘦、独り足のみ腫大し・黄汗出で・脛冷ゆるは、仮令、発熱するとも便ち歴節と爲るなり。歴節を病みて、屈伸すべからずして疼痛するは、烏頭湯之を主る。烏頭湯の方、脚気疼痛し屈伸すべ

からざるを治す」

（此の章は金匱の古文なり。但し、「脚氣疼痛」以下は後人の補添なるべし。身体羸瘦は表虚の候なり。独り足のみ腫大するは、水血の凝滯なり。蓋し、足膝腫るなるべし。屈伸すべからざるにて知るべし。黄汗出で、脛冷ゆるは、表虚と下焦の寒とに因るなり。

以上の諸症を具するものは、仮令・発熱すと雖も、其の発熱にかかわらず、そのまま歴節とするなり。歴は「へる」と訓す。一々に経て通ること、節々に、あたりて痛むゆえ、歴節と名るなり。例に曰く、「歴節して黄汗出る。故に歴節と曰う」と。

然れども、此れ疼痛を以って主とすべし。疼痛するゆえ、歴節黄汗も出で、且つ発熱もするなり。故に、「歴節を病みて屈伸すべからずして疼痛す」と曰う。

此の證、寒疝の致すところに非ずと雖も、表虚して水血凝滯し、寒氣相搏ちて疼痛するもの、前證と一揆にして、正氣を張り、邪氣を散じ、血脈を和しめ、寒氣と瘀水とを去るの意なることを知るべし。脚氣疼痛も、亦是の意を以って考うべし。

凡べて古方は病名に拘らず、證に隨いて治するもの、此等に於ても見るべきなり）

以上三方、皆烏頭煎を以って本方として、更に外證に隨いて加味するところ、各々其の意趣を異にす。之を要するに、桂枝湯は、表を救い榮衛を諧^{とよ}うるを以って力を合せ、麻黄・黄耆・芍薬・甘草は、邪風を祛り・瘀水を逐い・筋脈を和せしめ・正氣を宣^{のほ}さんが為に、隊伍を為すものなり。

烏頭煎、独り之が先鋒となりて、凝寒を散じ結水を解く、其の勢の猛なること尋常の材に非ず。是の故に

其の之を服するもの、量少しと雖も、惡寒・身痺（しびれ）・口舌燥（さんしょう）を嘔む如く・温々（むかむか）吐せんと欲し、起れば則ち頭眩す。

多服するときは、身体冷え自汗流るが如く、吐瀉・嘔逆・脈沈伏、甚しきは死狀の如し。怪るきは一二時、重きは半日許にして乃ち解すべし。

故に方下に曰く、「知る者は醉狀の如し。吐を得る者は病に中ると為す」と。是れ實に、瞑眩の劑なり。慎まずんばあるべからず。若し夫れ瞑眩するや、駭きて妄りに他藥を与ること勿れ。遽て火を以て之を煖むること勿れ。静かにして醒むを待つべし。醒めて後、吐を得るもあり。瞑眩に方りて吐瀉併せ至るもあり。但、醒後渴して飲を欲せば、冷水を与えて將息すべし。

若し誤って烏頭附子の毒に中るものは、味醬汁を服し、或は黑豆甘草湯を服し、或は乾姜甘草湯を服すべし。是れ亦知らずんばあるべからず。

或曰く、「若し其の緩きを欲せば、川烏頭を用うべし」と。然れども、其の劇しきものに於ては、草烏頭に非ざれば功を取るべからず。但し、其の分量および蜜水の煎法を差錯すること勿れ。之を慎め、之を慎め。

以上の三方、疝家偏墜の證に施すべし。

（或云う、「小腸偏墜、證に随い、烏藥五錢、天門冬三錢を加う」と。經驗を案するに、此れ吳球・活人心統の方なり）

桂枝けいし芍薬湯しやくやくとうの證しやう（翼 二編上冊）

部位
表位而胸

下後表虛げごうへうしよ
鬱氣うき變へん雲うん
胸滿腹減きよまんぷくげん
大考だいこう堪裁かんさい



101、桂枝去芍藥湯の證 （翼 二編上冊）

右図の如く胸滿して、心下より下、自ら力なく覚え、之を按ずにも亦痞硬拘急（ひっぱる）せざるもの、桂枝去芍藥湯の腹證なり。

論に曰く、「太陽病、之を下して後、脈促・胸滿するは、桂枝去芍藥湯之を主る」

（脈、來ること數、時に一止することを促と云う。案するに、脈促するものは胸中に事あるの證なり。

太陽病之を下し表は解した後も、脈促して胸はるもの、邪氣の実に非ず。之を下して其の氣上衝するもの、胸中に迫りたるなり。而して其の上衝するもの直ちに滿して、筋脈に攀急せざるは、之を治するに、正氣を發張し、衝逆をゆるくすれば、胸滿自ら去るべし。是れを以て芍藥を去り、桂枝の力を専らにして、之を用うるの意なり。

是の故に、其の胸滿するもの、実邪の致すところに非ざるを以て、但、心下より下に腹力なく、筋張るものなくして、胸前より上へ一ぱいになりて、上下の鈞合悪しく覚えるなり。この上下の鈞合悪しく覚ゆるが、去芍藥湯の胸滿とすること。診察の肝要なり）

或、問いて曰く、「へ太陽病、之を下して後、其の氣、上衝する者は、桂枝湯を与うべし」とあり。一

此の證も亦、其の由るところを同じくし、氣上衝を曰ずして胸滿をいう。然るに、吾子皆へ下して後、氣衝逆して致すところへというときは、其の別なきに似たり。何如？」と。

答えて曰く。「其の氣上衝するもの、劇しきときは必ず其の衝くところの位を挙げ。曰く衝心、曰く衝胸、曰く衝咽喉と。此れ但だ「上衝」というときは、其の衝くものは心胸に至らずして、尚、腹に在り。是れ其の衝逆の劇しからずして、肌表の和せざるを見る。仍、芍薬を去らずして、氣血を和諧して愈ゆべし」と。

若し夫の胸滿するものは、其の氣直ちに胸位に迫りて鬱悶していまだ散ぜざること、譬えば炊烟の升りて屋梁を遶るものは、上窓を開かざれば鬱悶して露々たるが如し。故に其の衝くことを覚えずして、但其の満のみを覚ゆ。然れども、其の満は裡證にあらず、表閉に非ず、但衝逆の氣の致すところなること、他の喘、若しくは心煩・嘔逆・脇痛等の證なく、却つて脈促して衝逆鬱悶の候あるを見るべし。

其の治、猶上窓を開きて鬱煙を散ずるが如し。桂枝の芳氣、一たび肌表に達せば足る。何ぞ更に、芍薬の筋脈を和することを煩わさんや。是れ其の二證の由るところを同じくして、其の治方の異なる所以なり。

此の方、必ずしも脈促を問わず。胸滿して腹中力なく覚え、胸中痛むものに用いて効あり。因りて考うるに、へ外台に卒心痛を治するに、桂心八兩、水四升を以つて、煮て一升半を取り、分ちて二服するの方あるを見る。是れ正に、此の方を試効するの意と同じくして、並びに氣逆の心痛なり。是に於て又、桂枝枳実生姜湯の證と疑似することあり。

然れども、彼は痞満心痛、飲懸りて下らざるの意あり。故に、枳実以て之が主となり、生姜・桂枝相伍して、以て懸を解き、痞を破り逆を下し痛乃ち去る。是を以て、胸中痞満して腹中には特に力なきを覚え。却って、心下に妨悶するの状あるべし。

嘗て験する一男子、膈内痛みて忍ぶべからず、休作時あり。愈えざること数日。一医、停滞あるものとして、投ずるに備急丸を以てするに、痛み益々甚だし。之を診するに、胸中痞満衝逆の状あり。桂枝枳実生姜湯を与えて一服するに、痛失するが如し。

桂枝枳実生姜湯

論に曰く。「心中痞し、諸逆・心懸痛するは、桂枝枳実生姜湯之を主る」

(心下に痞せずして心中に痞す。此の病は胃口に迫らず、但心に懸りて痛むものなり。其の懸るものは水飲なり。其の逆するもの、痞するものは氣なり。故に、枳実以て痞をやぶり、桂枝以て逆を下し、生姜以て飲を解く。宜なるかな、下剤の応ぜざること)

桂枝去芍藥加皂莢湯

若しくは、桂枝去芍藥湯の腹状の如く胸満、腹中力なきを覚えて、濁唾(濁るつばき)、涎沫を吐するもの、桂枝去芍藥加皂莢湯の證なり。

證に曰く。「肺痿、涎沫を吐くを治す」

(比れ千金の文なり。故に、其の證を挙ぐるに詳らからず。肺痿に「涎沫を吐く」もの、此の證に止ま

らず。傍例を考うるに、皂莢丸の證に曰く「欬逆上氣し、時々濁を唾し、但坐して眠るを得ず」と。是れ皂莢・大棗の主治するところなり。

然らば則ち、此の方も胸滿して濁を唾し涎沫を吐し、若しくは咳逆上氣等の證あるものと知るべし。因りて小兒の滯頤・涎沫を流し、口吻糜爛するものにも効あり。大人の痰核、若しくは濁唾粘痰を吐するもの、或は痛風に考え用うべし。

桂枝去芍藥加蜀漆龍骨牡蠣救逆湯

若し、桂枝去芍藥湯の腹状にして、上中脘の辺、動氣つよく跳り、驚狂起臥安からざるもの、桂枝去芍藥加蜀漆龍骨牡蠣救逆湯の證なり。

此の方、火逆はいうに及ばず、瘧病動氣あるものに用いて効あり。或曰く、「宿痰の胸中に聚まり、胸滿して胸腹ダクダクと跳るものを治す」と。

論に曰く、「傷寒し脈浮、医、火を以て迫り之を劫かし、陽を亡すれば、必ず驚狂す。起臥の安からざるは、桂枝去芍藥加蜀漆龍骨牡蠣救逆湯之を主る」

劫は、脅かして物を出さすことなり。凡そ表邪の輕證は、初めに湯藥を用いずして、燒鍼を肌当て、威して汗を出さすこと、当時の医者の術にあり。此の病、名るに傷寒を以てす。固より輕證に非ず。然るを医、火を以て肌に迫り、劫して汗を出さしめ亡陽するなり。

亡は、其処にもぬけ無きをいう。汗を出すと却すにて、表にはるべき陽氣をもぬかしたるにより、衝氣劇しくなりて胸腹の動氣つよく、必ず驚きて狂の如くなる證を発するなり。「起臥安からず」とは、起ても

臥てもいられぬなり。乃ち驚狂の状を詳らかにする辭なり。

此の證、亡陽して衝逆を致すもの、之を下して胸滿を致すとは内外異なるが如しと雖も、其の掃趣は一なり。

龍骨牡蠣を加うるの意は、動氣を鎮むるにあり。且つ、其の蜀漆を加うる所以は、痰を去り水を逐うにあり。亦衝逆によりて、痰氣の胸に迫るを逐うものなり。

附 胸滿諸證の弁

夫れ仲景の方に於ける、胸滿をいうもの少なからず。而して、各々其の旨趣を異にす。読むもの、審らかにせずんばあるべからず。

近時、古方に依り診腹を言う者ありと雖も、大率疏略にして、其の極を究め其の精を研かず。是のゆえに、胸滿を診し得れば、輒ち以つて柴胡の證とし、復た寒熱虛実を弁せず、見證の主客あるを察せず、表裡の係屬あるを審らにせず。何を以つてか、仲景を信じ古方を執りて、腹證を診すということを得んや。

殊に、柴胡の胸滿は、胸脇苦滿の略辭にして、苦滿は、心煩し喜く嘔き、若しくは脇痛等の證に対する辭なるを、知らざるにおいてをや。(詳らかに下冊柴胡の条に弁す)

麻黄湯及び呉茱萸湯の胸滿の如きは、客にして主に非ず。「喘して胸滿」「嘔して胸滿」というもの、並びに喘と嘔とを主として辭を措くの意を見るべし。

茯苓飲の胸滿は「虛氣の滿」をいうと雖も、尚、痰氣ありて存するものとし、半夏厚朴湯の胸滿は、亦痰と氣とを主として、「咽中、炙臍の有るが如し」を其の準的とす。

人參湯・橘皮枳實生薑湯の胸滿の如きは、結氣・痞滿・衝逆・心痛の證を併わせ致すこと、本文言うところの如し。

凡そ此の諸方は、明らかに胸滿の證を舉るものにして、風引湯の胸滿短氣、桂枝去芍藥湯の脈促胸滿、亦各々趣を異にすること、前に詳らかにするが如し。

其の他、明に胸滿を言うもの無しと雖も、亦類に触れ例に依りて之を言わんに、言うべきもの少なからず。或は、寒升りて胸滿し、熱結して胸滿し、飲停つて胸滿し、氣痞つて胸滿し、或は先天の胎毒、或は氣血兩衰、上實下虛、胸硬く腹弱きものの類は、明には「胸滿」を言わずと雖も、其の診は尤け胸部に於いて審らかにせずんばあるべからず。

余、頃、都下の名医にして古方を執る者の療する所を見るに、病人、氣血衰虚し枯燥、瘦癯して胸腹滿するものに於て、大柴胡に承氣丸を兼ね用い、下を取ることを四五日、忽ち關格を成して飲食藥汁胃に入ること能わずして死す。

此の證、固不洽に属すと雖も、其の命期を促すもの、誰が咎ぞ。此れ妄りに古方を執るの過なり。豈、歎息せざらんや。

要するに、結胸および胸脅苦滿を除くの外、諸胸滿するもの、氣逆によらざるもの少し。氣逆の由て發する所は、陽氣の衰うるに在り。陽を助け氣を降すことを謀らずして、徒らに其の滿を消せんと欲せば、其の効を見ざるのみならず、殃を招かざるもの幾希なり。學ぶ者、之を思え。

102

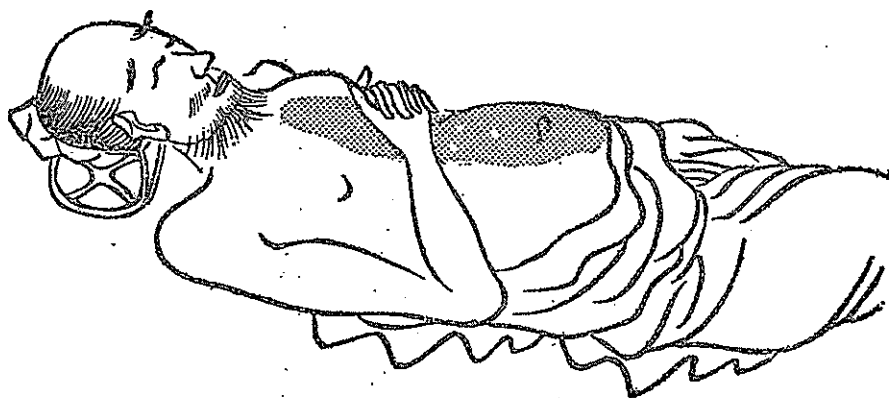
桂枝甘草湯の證

(翼二編上冊)

發汗過多
衝氣暴
頻服和劑
胸腹如掃

部位

表位
而衝
逆候
在胸
腹



102、桂枝甘草湯の證（翼 二編上冊）

右図の如く臍上より心胸までの間、動悸強くタクタクと跳りて安からざるもの、氣衝逆して急迫するの劇證なり。

論に曰く、「汗を發すること多に過ぎて、其の人、手を又し自ら心を冒えども、心下悸して按を得んと欲する者は、桂枝甘草湯之を主る」

（又は、両手の指と指とを組み合せるなり。此の證は發汗し過ぐため津液を亡して、正氣肌表に張ること能わずして、内に窄み、衝逆し急迫を致すものなり。

其の衝逆するもの、心胸に迫まりて安からざる故、其の病人手を組み合せて、自ら心を冒いて落付かせんとすれども、尚其の心下ダクダクと悸して、更に他人の按を得んと欲す。是れ臍より上心胸までは、一面に跳りて落付かざるの意を見るべし。

是れ乃ち衝逆急迫の然らしむる所ゆえ、桂枝にて肌表を和し、甘草にて急迫を緩くすれば、心腹の悸は自ら愈るなり。一服にして速に愈るの證ゆえ、方下に、「水三升を以って煮て一升を取り、頓服す」というなり。

凡そ古人の作劑煎法、病の輕重に従つて、大小の劑および頓服、分服の法あり。其の分服の法を立つるも

のは、劑小なりと雖も、速に愈るべからざるの意を示すものなり。此の方、劑大にして頓服するものにして、病劇しと雖も、速に愈るの意を示すものと知るべし。

案するに、心下悸するもの、水氣によるものあり・急迫によるものあり。此の證、水氣に非ずして衝逆の氣急迫するの致すところなり。之を桂枝去芍藥湯と比するに、急迫の證多とす。故に、氣上衝を曰わずして心下悸をいう。蓋に心下悸するのみならず、心中も亦悸す。自ら心を冒うことを見るべし。是れ以て、單方大劑を頓服するを以て急を一時に解くのみ。

桂枝甘草龍骨牡蠣湯

若しくは桂枝甘草湯の證にして、其の衝逆急迫の狀劇しからずして、却って胸腹間の動氣つよく跳りて煩躁するものは、桂枝甘草龍骨牡蠣湯の證なり。

前の救逆湯に比するに大同小異にして、此れは但、痰を退け水を逐うの意少きを異とするのみ。

論に曰く、「火逆之を下し、燒鍼に因りて煩躁するは、桂枝甘草龍骨牡蠣湯之を主る」

(案するに、此の證は三逆二因とし見るべし。火逆一、之を下す一、燒鍼一、凡べて三逆なり。「之を下す」と「燒鍼に因る」と凡べて二因なり。「煩躁」の語は上の二因を承く。分頭の句法とすべし。

火逆は、例に曰く、「脈浮なるは、汗を以て解く宜し。火灸を用うるも、邪從い出づること無く、火に因りて盛なり。病、腰より下必ず重くして痺す。火逆と名づくりなり」と是なり。火逆は猶表を和して救うべきを、反つて之を下して煩躁を發するなり。燒鍼も亦發汗の正法に非ず。因りて亦煩躁を發する。是の

要（二編上冊）

二因並びに一の煩躁を致すもの、桂・甘もつて表を和し急を緩めしむ。龍骨牡蠣にて驚恐の動気を鎮めて、煩燥自ら治するの意なり。

案するに、桂枝甘草湯および救逆湯・桂枝加龍骨牡蠣湯の三方は、湯火の傷・灸の逆、證に隨いて用うべし。又、諸驚を治す。

甘草附子湯の證（翼 二編上冊）

部表位
逆而衛

濕家之病
微腫如肥
更感風邪
骨疼諤々



103、甘草附子湯の證（翼 二編上冊）

右圖の如く腹臍上の動氣つよく、息セカセカとして心下くるしく、之を按せば腹皮軟にして力なし。外證は、骨節疼、掣痛して屈伸すべからず。手を近づければ痛み劇しく、衣被のさわるをも懼れ、汗出、小便利せず、惡風若しくは惡寒、身微腫するを、甘草附子湯の腹狀外證具るものとす。

證に曰く。「風濕の相に搏ち、骨節疼煩掣痛し屈伸するを得ず、之を近ければ則ち痛み劇しく、汗出で、短氣、小便利せず、惡風し衣を去ることを欲せず、或は身微腫する者は、甘草附子湯之を主る」

（濕は、しめるなり。水といわずして濕というは、水の如く腫れても、之を按すに其の痕は凹まず、但皮肉のしまり無くグサグサとし、肌脂を湿すが如くなるを以って、濕と名づく。俗に呼んで「わるぶとり」というの類、皆濕證とすべきなり。是れ亦、正氣のはり、弱きを以って水氣之に乗ずるものゆえ、後世・氣虛の候とするなり。

さて、風濕相搏つというは、其の人、素に濕氣あるところへ風邪を感冒して、風邪と濕氣と相斗うを以って名くるなり。

骨節疼煩は、節々疼き痛みて熱れもやつくなり。掣は「ひく」なり。後より引き止むる如く痛むなり。び

つくりとする痛みをいう。

「屈伸することを得ず」の句は、骨節疼痛と応ず。「之を近づく」とは、手を疹所に近づけるなり。（註）屈折できない骨節を無理に屈げること。）汗出るは、風邪相搏てばなり。短気は、呼吸短かく急迫するなり。小便利せざるは、氣・衝逆して下降せざるによる。

惡風尋常より重きを示さんが為に、「衣を去ることを欲せず」の一句を補添したるなり。

微腫は、何となく腫れたるようなるをいう。乃ち濕氣の候なり。

いづれも風邪濕氣相搏つの證なり。此の證、汗出・短気、表證にして衝逆急迫するを以て、桂枝・甘草あり。

惡風・骨節疼痛・小便不利等の證あるゆえ、朮・附を相伍す。而して、附子の分量多きは、外證劇しく内寒あるを以てなり。

凡そ内寒あるものは、右の小腹結聚し腹皮軟弱なるものなり。

桂枝附子湯

若し前方證に似るも、短気衝逆急迫の状なく、身体疼痛、転側すること能わず、その腹候は、腹皮軟弱にして四逆の腹状に近く覺ゆるもの、桂枝附子湯の證なり。

論に曰く、「傷寒八九日。風濕相搏ち、身体疼痛して自ら転側すること能わず、嘔せず渴せず、脈浮虚にして濇る者は、桂枝附子湯之を主る」

（案ずるに、風濕相搏の四字と上下の文理とは相に承接せず。恐らくは、後人の身体疼痛の文あるに依り

て僣入するものならん。如何となれば、傷寒とは外傷の邪氣の名なり。八九日、又更に風濕相搏つものを加うるの理あらんや。不通というべし。

身体疼痛は、骨節疼痛と異なり、身体悉く疼痛するなり。故に、「屈伸すべからず」といわずして「自ら転側すること能わず」という。

「嘔せず渴せず」というのは、凡そ傷寒八九日は、表證の裏に及ぶ時なり。日数によるときは、大柴胡に至るの疑途あり。故に、「不嘔」という。若し然らざるものは、七八日にして白虎の證を発するの疑途あり。故に「不渴」という。

又、身体疼痛は、発散すべきの疑途あり。故に脈證を挙げて其の疑途を弁するなり。

さて、傷寒八九日、邪氣裏に及びて裡證を見わすべきに其の證なく、但身体疼痛、仍、発散すべきに似て脈浮緊ならず、但浮虚にして力なく洩り滞るの状あるは、仍お、表證ありて、内虚寒の相応するものとす。

蓋し、脈浮は表證にして、虚にして瀯るは下焦の虚寒あるの候なり。日数を経れども、熱の裏に迫ること能わざる所以なり。故に桂・附を主として、寒を退け陽を助けて、内を温め外を和すれば、外傷の邪は自ら去りて治するの意とするなり。此れ、附子の分量多き所以と知るべし。

桂枝去桂加朮附湯

若し、「大便秘く小便自利する者は、桂枝去桂加朮附湯之を主る」

（大便秘は小便自利による。小便自利は上衝せざるによる。是れ、桂枝を去りて朮附を加うる所以なり。自利は、薬力によらずして利するの謂にして、常より多きの意を知るべし。是れ、下焦の寒あるのみなら

ず、水氣のあるものとすべし。更に朮を加えて水氣を逐う所以なり。故に、此の方は水病虚寒の候あるものに試用すべし。

案するに、此の方は乃ち近効の朮附湯なり。彼に曰く「風虚・頭重の眩・苦極りて食味を知らざるを治し、肌を暖め中を補い、精氣を益す。」と。宜しく併せ考えて、其の意を審らかにすべし。

此の方、法の如く煎服すれば瞑眩劑なり。亦知らんずばあるべからず。方下の文に詳らかなり。

案するに、此の方、桂枝去芍薬加附子湯と薬味を同じくして、分量の異同あるのみなり。彼の方中、附子朮枚を加えて而して曰く、「若しくは微惡寒する者」と。此の微惡寒なるものは、しやう々惡寒と異にして、外邪の證に非ずして内寒の応なり。

(微は、有るようで無きの義なり。皮表にあらずして深微なるを見るべし)

又但、発汗吐下の後、精氣虚して微惡寒するもの、陰陽和して自愈するものもあれども、彼れ精氣の虚のみに非ざるをもつて、附子を加えて、中を温め寒を退くるの意なり。然れども、其の寒、外に於て邪氣と相搏つに至らず。故に、其の證僅かに微惡寒にして、身体疼痛に至らず。附子の分量少き所以なり。

此の證、内寒多くして外邪と相搏ち、身体疼痛、自ら転側すること能わざるもの、桂附力を發せて、肌表に達するに非ずんば、解すべからず。是れ、桂附二味の分量、去芍薬加附子湯より多くして、胸滿を曰うして身体疼痛を曰う所以なり。

桂姜棗草けいきやうそうそう黄辛おうしん附湯ぶとうの證（冥 二編上冊）

部位

心ラ下マ而ニ及ニ小マ腹ニ

神陽之衰オロヒ
心下如盤ハシ
氣分所鬱オロヒ
在逐盛寒オロヒ



104、桂姜棗草黃辛附湯の證（翼 二編上冊）

右図の如く心下に塊物ありて、其の形円（杯をふせたる）なること覆杯（杯をふせたる）の如く、之を按ずるに堅きこと骨を循なづるが如し。然れども、此の證にして病慳けんきものは、堅門けんもんを成さず、但心下痞硬するものに似たり。

其の分弁を知らんと欲せば、心下を按じれば、痛を知り、且つ心下自ら痛むものを得べし。痛甚しきものは、心背に徹するものあり。然れども、此の心下痛も亦有無あり。且つ他證にも疑似するものあつて混し易し。要するに、心下結聚して、腹時に滿し、脇下水鳴升降し、微惡寒、身冷え、骨節疼痛の證ありて、脈沈微しやくじゆう澁滯結しやくじゆうの状あり。たとい熱状にして浮數の意ありと雖も、澁滯を帶ぶものを此の證として分弁すべし。

是れ乃ち所謂、「氣分」なるものにして、其の義は則ち本文に詳らかなり。

證に曰く、「寸口の脈、遲にして澁、遲なれば則ち寒と為し、澁なれば血の不足と為す」

（澁はしるるなり。譬えば刀を以て竹の皮をこそぐるか、或は鉄の銹さびを循なづるが如き指触りなる脈をいう。）

脈遅くして數少かずきは、内寒の候にして、澁りて滯るは、血の不足するものとするなり）

「趺陽の脈、微にして遲、微なれば則ち氣と為し、遲なれば則ち寒と為す」

（跌陽は足趺の脈なり。凡そ脈は外に在るを陽となす。

微はかすかに応ずるなり。「氣と為す」の下に、不足の二字を折略す。血氣の対名にして、上の文に因りて省くものとす。寸口に於いて血を伺い、跌陽に於いて氣を伺う。亦互文なり。但寒なるは、常に下焦に盛んにして、氣、常に足趺に旺じ難し。故に手足を分ちて血と氣とをいふと知るべし）

「寒・氣不足なれば、則ち手足逆冷す」

（寒・氣不足は、寒と氣と血の不足との三因なり。此の四字にて上の六句を束たるもの故、之を文章の束法というなり。

此の病、寒氣盛にして陽氣を尅するを以て、氣・血の不足を致すものなるゆえ、寒を主として之を言ふなり。

さて四肢は末にて、別けて陽氣の屈き難き処ゆえ、寒氣尅つときは、手足の先より逆しまだ冷えてくる故に逆冷という。冷はつめたくなることなり）

「手足逆冷すれば、則ち榮衛利せず」

（榮はさかえるなり。衛はまもるなり。血は脈中を行きて一身に榮える故「榮」と称し、氣は脈外にはり出して腠理を衛る故「衛」と称す。榮衛は肌膚筋脈の間に於て、血氣に称するの名なり。

此に血氣を曰ずして榮衛をいふは、血氣は其の物を指し寒に於けるの名にして、榮衛は其の働きを指し用に於けるの称なり。

言うところは、手足逆冷すれば、血氣の用の肌膚を循り筋脈に榮えるものが、其のはたらきが出来ぬようになるなり。故に、不利という。利は滯らずして行くの義なり。

「榮衛利せざれば、則ち腹滿、脇鳴りて、相逐う」

（血氣の用が不利となりたる本は、陽氣の剋せられたるによるゆえ、肌膚に分布すべきところの陽氣が滯滞して、腹内に熱るゆえ、寒氣と戦いて腹滿脇鳴りて相逐うなり。

例に曰く、「腹滿・時に減じ、故の如く復す。此を寒と為す」と。

此の腹滿は寒を得てはるもの故に、之を按えて寒せず痛まず。此の脇鳴は陰陽相逐うものなる故、雷鳴せずして脇腹を上下する声、但グズグズと聞ゆるなり。「相逐う」の字にて、或は上り、或は下るの状を知るべし。

案するに、此に特に「脇鳴」というは、心下は既に寒飲相結びて堅塊を成したるゆえ、之を避けて、「脇」の字を下すなり。古文の簡明を見るべし。

「氣、膀胱に転ずるは、榮衛俱に勞するなり」

（転はまろばすなり。転失氣の転と同じ。膀胱は尿管なり。膀胱は下部に位す。下焦の寒盛んにして陽氣益剋せらるる故、下部に転ずる氣は外に失すること能わずして、内に転ず。よって、血氣の用とする榮衛は、俱に疲労して發暢の勢なきを見るなり。

案するに、転失氣は放屁なり。此は放屁すべくも、放ず、但膀胱にてグズグズとする氣を転ずるものにし

て、陽氣の發勢^{はつせい}なきものなり。「氣勝脱に転ず」の句は、前の「脇鳴相逐う」と応ず。「俱に勞」は前の「不利」より來り、「相逐う」と応ず。言う心は、不利なるもの相逐いて俱に疲勞するに至り、益々衰うるを見るべし）

「陽氣通ぜず即ち身冷え、陰氣通ぜず即ち骨痛む」

（陽氣は生活の元氣なり。人の腹内に結して榮衛を利し、一身を煖むことを主る。陰氣は殺腐^{ころれい}の氣。其の物たる寒冷を主る。陽氣の通ぜざる所の處、皆陰氣の居る處なり。故に陽氣不通なれば、其の通ぜざる處即ち冷るなり。

身とは軀殼なり。前の手足逆冷と応じて、其の手足に止らざるもの、益々其の侵^{おさ}す所の深きに及ぶを見るべし。「即」とは即座の義にて、其の場がすぐに陰氣の持場となる故、即身冷ゆというなり。

陰氣は固^こより寒氣を主とするものと雖も、常は陽氣と相和して煖々^いの中に存するものなれども、陽氣鬱滯して陰氣と相阻隔^{さくかく}するときは、内に凝りて骨髓を痛めるに至る。是れは陽氣の鬱するもの、其處に阻み隔る故、却って痛ましむるなり。

此の二句は直前の「俱に勞す」と接承して、陰陽二氣の乖離阻隔、相驅逐して、勝負未決の間に於いていうものにして、尤^{もつと}げ解し易からず。読む者焉^なを思え）

「陽、前に通すれば則ち惡寒し、陰氣、前に通すれば則ち痺不仁す」

（陰陽阻隔して相逐うもの、若し陽氣が勝ち進みて陰より前に通すれば、前条にいう「身冷」は一等軽く

なりて惡寒するに至る。是は陰氣の持ちきりたる場所へ陽氣が進入したる故、身冷が却つて惡寒となりて、やがて陰陽和せんとするに至るなり。如何となれば、身冷は、陰氣の持切りて独居する処ゆえ、按えれば氷の如く冷ゆるなり。惡寒は、陽氣進みて陰氣を熾^はてるゆえ、自ら寒を覺ゆるなり。是れ輕重の別なり。

陰、前に通ずるとは、若し陰氣が勝ち進みて、素より衰えたる陽氣の処へ入り通ずれば、陽氣相逐われて保つことを得ず。陽氣を体して其の名としたところの榮衛が、全敗を成してしまふ故、身冷ゆるのみならず、痺不仁するに至るなり。

痺は、しびれる。不仁は、我が身の如くならずして痛痒を覺えざるをいう。陽氣の恵が少しなりとも有るうちは痛痒を覺ゆれども、其の恵を受けざるゆえ不仁と名^{なづ}くるなり。是れ前の身冷骨疼よりも、一等重くなりたるを見るべし。

此の段は陰陽の勝負の決たる所を論して、病の輕重の分るる所を示す。説き得て妙々。

「陰陽相得れば、其の氣乃ち行る」

(若し、陽氣前に通じて惡寒を發すれば、やがて陰陽相得て和融するに至る。其の相得たところの氣は、鬱滯することなきゆえ、流動して運行することを得るなり。

元來、此の病は寒を主として、陽氣之が為に剋せられて鬱滯するにより、遂に陰陽乖離阻隔をなしたるものゆえ、今陽氣が力を得て陰盛の中に進入することを得れば、必ず陰陽相得て相和するに至るなり。

此の句から次句の「実すれば則ち失氣」までの文は、陰陽相得て病の自ら愈ゆるの途^{すぢ}を論ず。前の「陽前に通ずれば則ち惡寒」の句を承け来る。「其の氣」は相得るの氣を指す。「行」は運行の義なり)

「大氣一転すれば、其の氣乃ち散ず」

(さて、陰陽相得て和氣運行すれば、前に鬱滯して膀胱に転ずるところの氣、今大氣となりて一たび転失すれば、其の鬱滯する所の氣は、乃ち散し失せるなり。譬えば、天の陽氣、地形に隔てられて鬱滯するも、風雨雷霆となりて発散すれば、其のあととは天氣晴明なるが如し。

此の二句は、前の「氣、膀胱に転ず」の句に応ず。彼れは陰盛に陽衰うるの間に於て、小氣屢転ずれども、発散すること能わず、却つて榮衛俱に勞するの情、是に於いて見るべし)

「実すれば則ち失氣し、虚すれば則ち遺尿す」

(実は陽氣充実なり。失はとりはづすこと。失氣は即ち放屁なり。陽氣内に実すれば、鬱滯の氣・勢を張りと、大声一転して肛門より外に失出(とりはづす)す。世俗に、大屁を失れば腹の空くをいうものはなり。虚は陽氣の虚するなり。陰、前に通ずれば陽氣其処に虚す。外にしては痺不仁し、内にしては膀胱のしまり無きゆえに遺尿するなり。遺尿は小便を洩らすなり。

「虚すれば則ち遺尿す」の句は、前の「陰、前に通ずれば則ち痺不仁」の句を承け、遺尿の二字は「氣、膀胱に転ず」の句に応ず。彼の其の氣を転ずるもの、榮衛の勞を知ると雖も、未だ陽氣の虚に至らず。此れ已に虚す。遺尿すべきを見るべし。此の一句は、此の病の極證をいうものと知るべし)

「名て、氣分と曰う」

(以上論ずるところの病證は、一に是れ皆、陰盛んにして陽氣を尅するところなり。而して、其の證の輕

に之き・重に極まるは、亦皆、陰陽の二氣、前後進退の際にあり。名て氣分という所以なり。

而して其の全体の意を統ぶれば、榮衛俱に勞すと雖も、陽氣いまだ其の虚を致さざる時に當りて、温中解肌の劑を投じ、寒を内に退け陽氣を外に達すれば、陰陽和して諸證皆去り、病自ら愈ゆべし。若し其の治を惰り、陰氣前に通じ陽氣の虚を成すに及びて、痺・不仁・遺尿の極證をあらわさば、容易には治功を奏すべからず。是の故に、陰陽相逐うの状を詳らかにし、進退輕重の機を明らかにす。読む者、深思し其の微を顯らかにせずんばあるべからず。

「氣分にして、心下堅なること大さ盤の如く、辺・杯を旋ちすが如きは水飲の作す所にして、桂姜棗草黃辛附湯之を主る」

（此の「氣分」は、前の「名て氣分と曰う」を承け、乃ち前文に詳らかにするところの病證を統べたる名なり。

盤は円器の名。或は酒肴を盛り、或は水を容れ、或は物を載す台等に用う。辺はふちなり。盤の如き堅塊の縁なり。旋はめぐらすと訓じ、指頭にて撫でまわして見ることなり。

心下の堅塊の大ささ盤の如く、其の辺端を撫でまわすに杯の形の如し。猶、心下に覆盃のあるが如し。所謂、氣分にして此の塊物をなすもの、水飲の作す所なり。其の成るは寒氣にて、凝結すること、譬えば堅水の成るが如きものなり。

此の方、附子を以て君薬とし、細辛の力を發せて、心下の飲塊を温散し、桂・麻諸薬相佐けて、藷を散じ氣を和し、以て肌表に達す。其の病は少陰を主として太陽を兼ねるものなり。方意を審らかにして考

うべし）

右金匱の文、僅かに百余言に過ぎず。陰陽の体用虚実および進退輕重の弁、照応錯綜し曲尽して復た遺さず。古文辭の妙と謂うべし。唐以後の方技家の書体と齊しとして看過すべからず。学ぶ者、若し此れらの文を熟読翫味せば、古人の病に臨みて證を鑑み、陰陽進退の機を審らかにし、「證に隨いて之を治す」の意を得んこと、思い半ばに過ぎん。

案ずるに、此の方、先達の曰く「桂枝去芍藥湯・麻黄附子細辛湯、二方の證相合する者なり」と。所謂、気分なるもの、少陰の證許多なりと雖も、其の心下堅塊を成すもの、二方の證の未だ言わざる所、且つ古方は藥味を同じくすれども分量異なるときは、其の主治する所も亦同じからず。

稻葉翁、疑つて謂えらく。附子芍枚を本邦省略の分量に充つるときは僅か三分許りにして、本方煎水の分量に比較するに、附子の分量少きに似たり。且つ用いて其の効を見ず。因りて省略の方中一貼毎に附子一錢五分を増加して、堅塊速かに解したりと。（其の説、奇覽初編に詳らかなり）

然れども、金匱の載する所の方は、但二方相合するものにして水量の多を異とするのみ。以つて徴するに足らざるを憾む。後、余、外台を読むに、深師附子湯と名るものあり。即ち此の方にして、大附子一枚、細辛・麻黄各三兩、余薤は金匱と同じくして心下堅の證を記す。

此の方附子湯と名て、其の分量多きもの主薬たること明にして、稻葉翁の考うるところ、暗に古人の意と符合し、以つて徴するに足れり。爾來、余此の證を得るごとに、病の輕重に隨いて、一貼の附子一錢より二錢に至るまでを用い、手に隨いて功を奏せずということなし。

枳朮湯

若し此の腹證にして氣分の證なく、小便不利、若しくは水腫するもの、枳朮湯の證なり。（此の證、後世、分消湯の本くところなり。併せ考うべし）

證に曰く、「心下堅、大さ盤の如く辺は杯を旋らすが如きは、水飲の作す所なり」

（「心下」の上、「氣分」の二字なきを以て分別す）

又、一證。「心下覆杯の如くにして、腹滿し背筋を見すもの、甘遂半夏湯の證なり」

（鼓脹の證、大黃甘遂湯の腹に似たり。心下と小腹とを以て、其の位を別つ）

其の他、水腫病にして心下覆杯の如く、氣急息迫して実に属するものあり。外台の黑豆湯効あり。」

105

桂枝加黃耆湯の證（翼 二編上冊）

勞氣黃汗
衝逆胸窒
肌膚無潤
久成食噎

部 位
表位
而通
上部



105、桂枝加黄耆湯の證（翼 二編上冊）

右図の如く衝逆して、頭部より項背に及んで強急し、胸前缺盆の辺も亦凝結するものあり。水氣、心胸より上頭項に聚り、肌膚潤沢なく滑淖ならず。甚しきものは、皮膚甲錯枯燥し、腠理密ならず。

是れ陽氣盛んならずして、正氣皮膚に達し難く、却って上升して下降すること少く、表虚して下衰えて、諸證ここに見わる。桂枝加黄耆湯の證なり。

其の腹状は大率、桂枝湯によるべしと雖も、此の證は特に循按（撫でて診る）の法を用いて、肌膚の診を審かにすることを要とす。但し其の肌膚の診は、図画の貌すべきなく、文辭も尽くべきに非ず。之を手にて心に応じ、黙して識るべきのみ。

古えに所謂「尺の滑濇を循て肉の堅脆を審かにする」もの、其れ斯の謂いなる哉。抑、其の略を言わんに、医の掌を平らかに肌に当て、心胸より腹に至り、輕く循で下ること幾遍もして、肌膚の正氣の旺衰を察すべし。

肌膚温々たる中に、何となくむづくりとしたる意を含みたるものは、正氣旺するものとし、何となくガサガサとしたるように覺えて肌膚腠理のしまりなく、別けて胸肺の間は隱然（どこともなく）として水氣ありて満（はる）するの状あり。夫れより肩背項頸より頭中にさしこみたる水氣あるもの、或は項背に、きびの

如き細疹を發するもあり。

凡そ此れ等の診に心をつけて、數人に試み得ば、自ら正氣の旺衰虛実の状を了解すべし。而して脈を對診して衛氣の旺盛を察すること、亦微々の間にありと知るべし。

丹溪が謂う所の「肥白にして汗多きもの黃耆に宜しく、黒瘦のものに用い難し」の説も、一偏にして其の要を得たりと言ひ難し。黒瘦肥白は皮膚の水氣の有無による。且つ自汗・盜汗は正氣の勞より出づ。是れ皆、黃耆の治するところと雖も、偏に水氣のみを去るに非ず。但、正氣の勞を助けて肌表に旺せしむるもの主とする所なり。故に表和して汗自ら止み、肌寒して水自ら去る。何ぞ當に、皮膚の水氣のみ是れを主とせんや。尚、本文を見るべし。

證に曰く、「黃汗の病、兩脛自ら冷ゆるは、假令發熱するとも、此れ歷節に屬す」
（黃汗の病は、表虛によるなり。兩脛冷ゆるは、陽氣下に旺せざればなり。

凡そ、表虛するものは氣衝逆するものは、下部自ら冷ゆ。是れ、内因病の常情なり。假令發熱するとも、外因の邪氣に非ざることを知る。此の病は、汗・歷節より出るを以って、歷節病に屬するものとするなり。

属は、手下につくの意にして正證に非ざるを示す。歷節は、歷節痛で黃汗出るの病名。前の烏頭湯の證下に注す。併せ讀みて其の意を審かにすべし）

「食し已り汗出て、又身常に暮に盜汗出るは、此れ勞氣なり」

（「又」は、一つある次にする助字にて、「それにまた」と訳す。食事が已むと汗出る、それに又身より常々不斷に日暮になると煩躁して、寐中に盜汗出るは、此れ勞氣の然らしむところなり。盜汗は、睡寐の間に出る汗の名。）

勞氣は、前の柴衛俱に勞するの「勞」と同意にして、正氣の肌膚を衛り固めて、津液を内にめぐらし、腠理へ漏さぬ筈のものが、疲れ勞れて其の守衛を失いたるをいう。心氣の勞と誤認すべからず。

暮に出るといふのは、蓋し熱によりて出るところの汗、虚熱は多く午後より日暮に出る。且つ盜汗は寐中の汗ゆえ、故に暮の字を下すなり）

「若し、汗出て已りて、反つて發熱するは、久々其の身必ず甲錯す。發熱止まざるは、必ず惡瘡を生ず」

（凡そ發熱するもの、汗出で已れば解するを常とす。今出已るも發熱するは常と反す。故に「反」といふなり。然らば則ち、此の發熱は表證に非ずして、氣血の滯による。氣血の滯は、乃ち正氣の勞なり。）

此の汗・此の熱、久々止まざれば、津液枯竭して、其の身は必ず甲錯す。甲錯は、肌膚あれて皸皮となるなり。發熱止まざるは、氣血の滯が散ぜざるがゆえ、必ず惡瘡を發して癰膿を成すことを知るなり）

「若し身重く、汗出で已りて軋ち慳き者は、久々必ず身軋し、即ち胸中痛む」

（若し汗いまだ出ざる前に身重く、汗出で已りて軋ち慳なるものは、其の身重、肌表の瘀水あるによるなり。）

此の證、久々止まざれば、必ず身躍動す。躍は、ビクビク・ビリビリと動くなり。此れ水氣の經に入りて衝逆するの候なり。さて、身躍動すれば、その度毎に、即時に胸中痛む。是れ其の躍すること、水氣の衝逆するものなるがゆえに、同時に氣上りて胸を衝けばなり。身躍の下「即」の字を以て相接するは、胸・痛の間を容れざるの意を見るべし。

此の段、較虚候を見るは、前段より重きこと一等なり

「又、腰より以上必ず汗出で、下は汗無し。腰脇弛痛し、物有りて皮中に在る状の如し。劇しき者は、食すること能わず、身疼重煩躁・小便不利なり。此れを黄汗と為す。桂枝加黄耆湯之を主る」

（此の一段は前の四段を承けて、又一等の劇證を論ず。故に、「又」字を以て上に接するなり。「腰より以上、必ず汗出で、下は汗無し」の二句、前の「両脇自ら冷ゆ」と応ず。下部冷えて汗出ることなきなり。腰以下に及ぶもの脛冷より一等重きを見る。弛は、だるむなり。腰脇は、軀の処ゆえ、弛みたる如く痛む。是れ、瘰癧と鬱熱とによるなり。

「物の皮中に在る状の如し」とは、麻痺の状なり。肌を循るに、皮中に一物を隔てたる如く覚えて、吾が身のように覚えぬなり。此は瘰癧に聚りて、陽氣下部に循り下ること少きがゆえなり。

「劇しき者は食する能わず」とは、衝逆劇しく胸中窒塞して、食せんとすれども食すること能わざるなり。「能わず」とは、食氣なきを言うにあらす。食を欲すれども能わざるの意を見るべし。

例に曰く「身腫れて冷え、状周痺の如く胸中窒り、食すること能ず、反つて聚り痛む。暮に躁して眠ることを得ず。此を黄汗と為す」と。是れなり。乃ち前の「胸中痛」の句と応じて一等劇しきを見る。

身疼重も、亦瘀水と鬱熱とによるなり。前の「身重」に応ず。煩躁は、前の「暮盜汗出る」に応じ、例に謂う所の「暮に躁」も是れなり。盜汗は、是れ睡中の汗にして、未だ煩躁するに至らざるの意を見る。今は煩躁、亦其の一等劇しきことを知る。例に謂う所の「暮に躁して眠るを得ず」は是れなり。小便不利は、氣下降せざるによるなり。

以上の表證を加えて、汗出るものを、真の黄汗病と名するものとするなり。而して其の治法は、榮衛を和諧し血氣の鬱滯をなからしめ、衝氣自低するところの桂枝湯を本方として更に表托して肌膚を寒にするとところの黄耆を加えて服さしむれば、陽氣は肌膚に旺じ、衝氣は自ら低降し、腠理は自ら固密にして、瘀水止ることに能わず。少便は自利し、諸證悉く退くこと信にして徴あり。案ずるに、黄耆二兩は、外台・五両に作るを是となし、今は之に従う。

案ずるに、此の章は分ちて五節となし、首より「歴節と爲る」までを第一節とす。黄汗の病、未だ劇しきを致さざるものは、汗・歴節より出るを以て、歴節の属とするを論ず。

「食已りて」より「勞氣なり」までを、第二節とす。汗出るの食已にあるもの、胃腸の發越を見ると雖も、固、正氣の肌表に旺ぜざるに因るものにして、又常々、暮熱盜汗出るに至るは、陽氣の已に疲勞に堪ざるに因るものなることを論じ、證より因に及ぼす。前節より重きこと一等なり。

「若し汗出已り」より「惡瘡を發す」までを第三節とす。勞氣の宣暢せざるにより、氣血の鬱滯を致せば、鬱熱がに生じて身甲錯し、因って又惡瘡膿癰を發することあるを論ず。是れ、素勞氣に因ると雖も、其の鬱をなし瘡を發するもの、陽氣の尚勢を張ることあるを見る。

「若し身重」より「胸中痛む」までを第四節とす。労氣の肌表をして虚せしむるや、痰水、経に入りて身騖し、即ち胸中痛むもの、衝氣胸に迫りて危うきを致すを論ず。此の一節、前の第三節の惡瘡を發する者とは、自ら血と水との異候ありて、彼は血の瘀する惡瘡を發し、此は水の逆する身騖をなすに至りて、較虚候の甚を見る。真武湯に身騖の證ありて、其の病、少陰に位するものと併せ考えて其の意を得べし。

「腰より」以下章末までを第五節とす。前の四節を承け、各證の劇しきを致すを論ず。其の両脛自冷のものは、腰以下汗無く、物を有りて皮中に在るの状の如きを致し、胸中痛むものは、窒塞して食すること能わざるを致し、身重に疼を加え、發熱するもの煩燥を致すに至りて、脛中汗出るもの、却つて眠ること得ず、下焦の不利となり、衝逆の劇しく小便不利を致すを、黄汗の正證たるものとして、桂枝加黄耆湯の主る所とす。

而して、其の病因を示すものは、労氣の二字にありて、前後皆、是れ労氣の由るところに非ざることなし。労氣の由るところを要すれば、乃ち表虚衝逆、上盛下衰、是れなり。

其の文は簡、其の旨は遠し。照応の間、微意含蓄、一節一節より重し。学ぶ者、此の章を読みて其の微意を得るものにして、始めて与に医を言うべきのみ。

又、案ずるに、本文胸中痛といい、劇しき者は食すること能わずというもの、之を黄汗の例に考うるに、胸中窒して食すること能わず、食すれば反つて聚痛し、暮躁にて眠ることを得ずというものと同じくして、傷寒論・梔子豉湯の證に曰く、「発汗吐下の後、虚煩し眠ることを得ず、劇しきものは反覆転倒・心中懊懣す」。又曰く「煩熱し胸中窒す」又曰く「心中結痛」と。其の證を同じくす。

是れ蓋し、黄汗も亦其の汗に因つて、此の煩熱胸中痛及び胸中窒を致すこと一揆にして、暗に梔子豉湯の證を兼ね見わすものなることを知る。且つ後世、「黄耆を服すれば、其の人をして胸滿せしむ。」というの説あり。

（丹溪曰く「黄耆は元氣を補えるも、面黒く形寒する者之を服せば、人をして胸滿せしむ」と）

偶、黄耆の神なることを知れども、其の妨害を退けて之を用いることを知らず。蓋し、黄耆の材輕浮、能く正氣を助けて肌表に達すと雖も、胸中の滯を解くことをせざれば、其の氣の升騰するもの胸中に留まり變（たなびく）として發散すること能わず。是を以つて、胸滿若しくは妨食の患を致すのみ。

今試みに、其の見證あるに隨いて、黄耆方中に梔子豉湯を合し之を与うるに、仮令、黒瘦多氣胸滿の人と雖も、復た妨害あるをみず。是に於てか、広く施し多く試み、黄耆の能を窮尽することを得たり。

此の考、友人延生堂の發明に出て、予も亦試験すること少なからず。因りて其の美を擅にせず、併せ記し以つて同志に示し、以つて延生堂の嘉賜を分たんことを欲すと爾云う。

黄耆桂枝五物湯

黄耆桂枝五物湯の方は、血痺身体不仁するものを治す。

其の方たるや、桂枝加黄耆湯の方内に甘草を去りて生姜を増加するもの。余竊に其の去加する所に就いて方意を考うるに、血痺といひ不仁をいうもの、亦勞氣の然らしむる所にして、之を桂枝加黄耆湯に比するに、其の全体の病状急迫の證なし。（発熱煩躁・汗出身疼の類、急迫の状を見るべし）甘草を去る所以なり。

而して其の陰陽微なるもの、内抑遏する所あるを見る。其の抑遏するもの、蓋し下焦に在らずして上中二焦の間にあり。胃上の寒飲是なり。生姜を増加する所以なり。

生姜は能く寒を下し、水を去り、以って胃口を豁かにして陽氣を升顯し、桂耆芍力を發せて、身体に分布し、肌膚に宣暢せしむ。血脈之に因つて活潑流動し、痺不仁の患、随いて去る所以なり。是れ亦、桂耆の功なり。知らずんばあるべからず。

（方極に云う「桂枝加黄耆湯の證にして、急迫せず嘔する者」と、愚謂らく、此れ但、去加に就いて之を言うのみ。本文の證に考うる所なし。此の證、桂枝ありと雖も、衝逆の證なし。痺不仁の外證にして嘔を發すべき候なし。嘔を以て生姜を増加するにあらざることを知るべし）

證に曰く、「血痺、陰陽俱に微、寸口关上微・尺中小緊、外證は身体不仁にして風痺の状の如きは、黄耆桂枝五物湯之を主る」

（血痺は、血脈滯滞して麻痺するの名なり。此の血脈滯滞する所以は、陽氣の宣暢せざるによる。陽氣宣暢せざれば、陰氣其の虚に乗じて身体冷え、手足厥逆惡寒等の證を發するを常とす。今血痺すれども、陰氣も亦微なり。故に、陰陽俱に微というなり。

或曰く、「此の一句は脈證を挙るもの」と。然れども、傍例に依るときは、脈證を特起せず、必ず「脈」の字を冠らしむ。若し脈證をいうものならば、陰陽の上に「脈」の字を脱するなるべし。但し二氣俱に微とするもの、其の意の優なるに似たり。

案するに、寸口关上微・尺中小緊の九字は、正文に非ず、注文誤りて正文に混するもの。若し然らざれば

叔和の補添なるべし。古文、脈證を挙ぐるは、但だ其の疑途を弁ずる為に梗概を言うのみにして、寸関尺を細別せず、他に例して知るべし。

風痺は、正氣虚して邪氣犯し入りて麻痺不仁するの名。此の證、外来の邪の致すところに非ず。但、正氣疲労して血脈行らざるもの故に、「風痺の状の如し」と曰て、その異なるを示すなり。此の病證、金匱虚勞と並べ論ず。所謂、勞氣なるもの推し考うべきなり。

黄耆桂枝苦酒湯

黄耆桂枝苦酒湯は、黄汗、身体腫れ、發熱汗出るものを治す。

此の方たるや、黄耆以て之が主とし、桂芍以て之が佐として、之を煮るに苦酒を以てするもの。前の五物湯に比するに、其の去るところのもの生薑大棗にして、其の加うところ苦酒なり。而して其の證たる身体腫れ汗出るは、肌表の水多くして正氣の旺少きを以て、黄耆を主とすることは前に詳らかにするが如し。其の發熱汗出るは、亦桂枝加黄耆湯と其の旨趣を同じうすと雖も、其の異るところは、黄汗尤け黄にして藥汁の如くなるにあり。是れ蓋し血脈の鬱結、熱氣内に蒸じて其の色を成すもの、苦酒能く其の鬱を解き筋脈を和するを以て、其の熱自ら消散するものか。

(案ずるに、黄汗・黄疽は其の病自ら異にす。黄汗は出るところの汗衣を沾して黄色を見、黄疽は一身面目悉く黄色を發す。故に發黄ともいう。黄汗は表虚鬱熱、黄疽は飲食女勞にして、其の因同じからず。金匱を讀みて審かにすべし)

證に曰く、「黄汗の病たるや、身体腫れ、発熱、汗出て渴す。状風水の如く、汗衣を沾し、色正黄なること膿汗の如し。脈自ら沈、云云。黄耆桂枝苦酒湯之を主る」と。

（身体腫るは、肌表の瘀水多きなり。肌表の瘀水多きは、正氣の衰虚に困るなり。黄耆の分量多きは之が為めなり。

発熱するは、血氣の鬱なり。発熱するが故に汗も亦出る。汗出るに困りて、内その渴を致す。故に「発熱汗出て渴す」と曰う。

風水は、身腫・脈浮・汗出、其の状相似たり、故に、状・風水の如しと曰う。然れども、風水は其の汗黄ならず、其の脈沈ならず。故に、汗色と脈状とを挙げて其の疑途を弁するなり。風水は外邪の感ずるもの、脈浮なる所以なり。

此の證は、陽氣の宣暢し難きもの、発熱すれども脈沈なる所以なり。「自ら沈」というは、本分の脈證にして、他の妨害によらざるの意見るべし。

案ずるに、前後の問答の文は後人の補綴なり。故に之を刪る。

以上三方、皆桂枝加黄耆湯より来るものにして、一は汗出るの證なく、一は汗出るの證あり。其の勞氣を因として、汗出るの有無によらざるの意見るべし。其の肌肉の診法、まさに前に依りて照し得べし。

防已黄耆湯

防已黄耆湯の方、水氣皮膚に在りて腫るが如く、或は腫るものを治す。

其の方、防已を以て君とし、黄耆・朮之が臣たりと雖も、其の黄耆を伍する所以は一律ならざることなし。而して其の意、専ら正氣を健運せしめて、浮行の水氣をして回降（めぐらしくだす）せしむるに在りて、他の氣血の鬱滯を解和するの意なし。桂芍を伍せざる所以なり。

其の表虛水氣を診するの法。病人肌膚肥白にして、之を捫（ひねる）するに、其の肉軟虛にしてしまり無く、ぐさぐさとするは是れ正氣表に旺せずして、浮水泛濫するものなり。腫るに非ずと雖も、以て表虛の水氣とすべし。

此の證、男女老女を問わずと雖も、多くは室女（むすめ）、許嫁（よめ）の年齒（とし）より以上、廿歳（はたち）の前後までに、卒に肥満をなして、衝逆（のぼせ）つよく、兩脇（ほほ）紅にして、經水短少、心氣鬱して開かざるは、此の證あり。

是の肥満を成すは、成長の時に当りて可なるに似たりと雖も、其の実は表虛に属し、以て佳候とすべからず。医、若し其の經行不利なるを見て、誤って通經破血の劑を投せば、徒に効を奏せざるのみならず、反って禍端を啓くことあらん。

又、嘗て記す一男子、癰冷を患うること年あり。夏月も衣を重ね襪（たび）を着け、遍く溫熱の劑を服すも寸効なし。京師に來りて名医の診を請えども効を見ず。一医生あり。深く考え以て此の方を与うこと一月許りにして宿病全く愈ゆと。其の證たる一概にすべからずと雖も、見るところ無きに非ず。故に併録し以て一案とす。

證に曰く、「風濕・脈浮・身重く、汗出て惡風のするは、防已黄耆湯之を主る」

(脈浮・汗出・惡風は、是れ風感の證なり。身重は、肌表に濕氣あるの候なり。

此の方、風邪發散の藥劑に非ず。専ら肌表を突にして、水氣を回降し小便より利し去れば、素濕氣と相感ずるところの風邪なれば、治せずして自ら去るものと知るべし。

又案するに、此の證、汗出るは風氣によるなり。故に汗の有無は必とすべからず。

又、此の方、風水にも用う。然れども、濕を治するの意、多きに似たり。風濕及び濕水の弁は前に在り。

防已茯苓湯

防已茯苓湯は、皮水の病、四肢腫れて衝逆肉瞤するものを治す。

是れ亦、正氣の皮膚に達せずして腫滿し、加うるに水氣衝逆して肉瞤するに至るは、茯苓の主治するところ多きを以て、茯苓を君とし、防已・黃耆・桂枝・甘草、相伍し以て之を佐け、以て正氣を宣べ衝氣を低げしめ、水氣を利し去るの意見るべし。

(或曰く「腫滿堅硬にして、之を循るに潤沢なきこと、譬えば革囊に水を盛りて其の口を紮りたるが如く、カサカサとして堅く腫るは、陽氣の脱するなり。或は十分に水氣ありながら其の腫肌表に達せず皮膚に皴あるもの、亦陽氣の脱にして、多くは不治に至るものなり。此の方を用い、或は附子を加う。云云」と)

證に曰く、「皮水の病たるや、四肢腫れ水氣皮膚の中に在り。四肢蠱蟬として動くは、防已茯苓湯之を主る」

(蠱蟬は、微動の貌ビクビクビリビリと動く、即ち肉瞤の狀態なり。此の證、正氣皮膚にとどかずして、

水氣泛濫するもの皮表に在り。皮水と名る所以なり。聾々として動くは、水氣経に入り、且つ衝逆するに因りて發す。是れ皆、表虛多水の候なり。

以上二方、黄耆主薬に非ずと雖も、表水を去り全功を収るは、黄耆を伍するに在り。是を以て黄耆諸剂の下に標出して、之を前の諸證に隸属す。読む者、歴観して其の旨を得べきなり。

この處にとどかずして、

翼（二編上册）

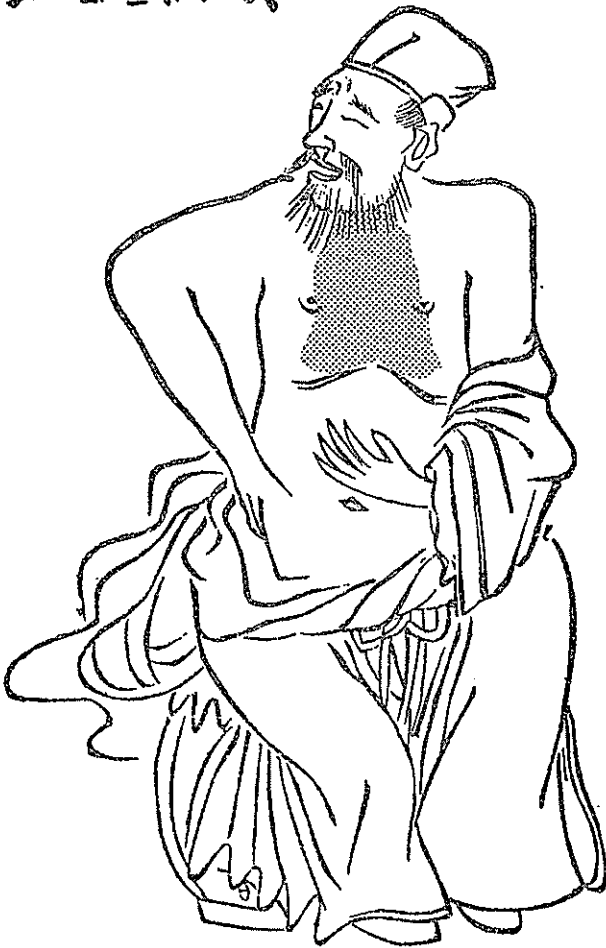
106

越脾湯の證

（翼 二編下冊）

位部表位
集而上

浮腫喘咳
心胸伏熱
激水上焦
脚弱蹠趺



106、越婢湯の證 (翼 二編上冊)

右図の如く水氣上部に聚まり、喘咳氣急、一身腫れ、脈浮、自汗出或は汗なく、其の心胸の間を覆手圧按するに、皮膚を隔てて熱状を知ること、譬えば熱灰を袋に盛り其の上より按ずるが如くなるを、伏熱の候として、越婢湯の正證とす。

證に曰く、「風水、惡風、一身悉く腫れ、脈浮、渴せず。続きて自汗出て大熱無きは、越婢湯之を主る」(比の證は、風邪表を閉じて開かず、水氣発越し難きを以て、一身悉く腫るなり。惡風・脈浮は風邪の證なり。渴すべくして渴せず、故に「渴せず」と言うなり。此の證、心胸の熱伏す。渴を發すべき候あれども、水氣専ら上部にて積み集まるを以て、渴を發せざるなり。

続きて自汗出るは、切れ間なく出るなり。此の汗、表證の汗出ると異なり、風邪表を閉て開かず、水氣之に溢れて伏熱となり、發散せんとすれども發すること能わず。因りて蒸蒸(むしたてる)して汗出る、故に切れ間なく出るなり。此の汗の分弁は、熱臭く粘りあるを以て知るべし。

大熱は表熱なり。皮表にハツハツとする熱なくして、肌肉の内に底氣味惡しき熱を伏したるの謂を「大熱無し」というなり。此の熱が汗をも出し、水氣をも積みあげしめ、喘をも生ず所以にして、石膏を伍するも之がためなり)

案するに、此の證風水をいうと雖も、前の防已黃耆湯の風水とは虛実の異なるものと知るべし。

其の方意を考うるに、麻黄・主として表閉を開き、大棗・佐として喘咳をゆるめ、石膏・心に入りて伏熱を解すれば、水気は汗と小便とに去り、風邪は発散して治すべし。

若し夫れ、水気専ら胸中に聚るものは、腠理緊閉の勢によるものと知るべし。是の故に、表に於ては邪氣の實を攻去るの意、専らなるを見るべし。

越婢加朮湯

若し前證にして小便不利、或は脚弱きのもの、越婢加朮湯の證なり。

脚弱とは、脚膝ガクガク・ブラブラとして力なく、動もすれば蹶仆（つまづき倒る）せんとするものをいう。脚氣痿弱などにも、前に弁ずるが如く胸滿喘咳等の證あらば、此の方を用うべし。

證に曰く「裡水。越婢加朮湯之を主る。麻黄甘草湯も亦を主る」

又、曰く、「裡水。一身面目黄腫、其の脈沈、小便不利。故に、水を病ましむは、越婢加朮湯之を主る。」

（裡は心胸の位なり。心胸間に聚るところの水気、小便利すれば自ら去るべし。今小便不利なるが故に、専ら上部に聚り一身に溢れて水腫となるなり。上部を空かし表を発し、兼ねて小便を利すれば愈ゆるなり。故に、朮を加えて小便を利す。

麻黄甘草湯は、表閉じて水気胸中に聚まり、喘急息迫のものを治さず。伏熱・小便不利等の證なきものを其の別とす。

黄腫は、淡黄にして黄疸の色と異なる。

案するに、「水を病ましむ」の下、「仮し、小便自利の如くなれば、云云」の十四字は正文に似ず。故に之を削る）

又、曰く、「内・熱することを極め、則ち、身体の津液脱し・腠理開き・汗大泄して、風氣の下焦・脚弱を厲ましむを治す」

（此の章は千金の文なり。内は心胸内なり。熱は伏熱なり。極は、とまりまでやるなり。

越婢湯の證にある熱は裡熱なる故、内より蒸したてて自汗が出るなり。其の熱を解かざれば、遂に身体の津液を脱す。津液脱すれば、腠理開いて汗大いに泄れ出るに至る。汗大いに泄れば、表虚して邪風の入り来ること測るべからざるをおそる。厲は、向うの我に衝り来る按配の底知れぬを氣づかうの義なり。

以上は、越婢湯の治を怠りたる成行を論ず。越婢湯の證を説くに非ず。

「下焦・脚弱」四字は、語を成さざるに似たり。恐らくは、上下脱誤あらんか。姑く、文に従いて解せば、越婢湯は表閉じ熱伏して水氣専ら上部に聚るゆえ、其の勢にて下焦に氣降らず。因りて脚弱をなす。下焦に氣乏しければ小便も利せず。故に方内に朮を加うるの意なるべし。然らずんば、「津脱し腠理開きて汗大いに泄る」の後、此の麻黄剤を用うるの理あらんや。読む者、焉を思え）

越婢加朮附湯

若し前方の證にして、腰脚疼痛、或は脚氣痿弱麻痺する者は、越婢加朮附湯を用うべし。此の證、腰脚の

冷を得べし。

越婢加半夏湯
えつひかはんげとう

若し前の越婢湯の證にして欬して上氣喘急の者、半夏を加う。

證に曰く、「欬し而して上氣す。此を肺脹となす。其の人、喘し、目脱狀だつじやうの如く、脈浮大なるは、越婢加半夏湯之を主る」

（上氣は、氣頭面に上るなり。上衝と異なり、例に曰う「上氣すれば、面浮腫し肩息す」と、是にて推考すべし。

「咳して上氣す」とは、せきのほせなり。咳は肺部の不利より出る。故に肺脹とす。痰飲の上に迫るを思ふべし。此の證、表閉ゆえに必ず喘す。

「目脱狀の如し」とは、咳上げて面腫れ、咳に因りて目珠も脱出る容子に見ゆるを云う。脈浮大なるもの、亦上氣の応なり。

此の證、専ら痰飲肺位に迫り膨れて、喘咳上氣するは、表閉じて熱裡にあるの候なり。因りて、越婢湯に半夏を加えて治するなり）

麻黄杏仁石膏甘草湯
まわうきんしんせつこうかんざうとう

若し越婢湯の證に似て、脚弱・疼痛及び水腫等の證なく、表閉じて水氣心胸に聚り、喘急・汗出て渴し、或は渴せず、其の腹状は腹脹りて皮上に癰うみとしたる力あり。之を按ずるに大熱なくして、身熱を覺ゆるこ

と、白虎の如く越婢に似たるものを、麻黄杏仁石膏甘草湯の證とす。要するに、大低白虎の腹状に似て、表證多く上部に聚りて喘するを以て、此の證と定むべし。(白虎湯の腹状、下冊に詳かなり)

論に曰く。「発汗後は、更に桂枝湯を行ふべからず。汗出るも喘し、大熱無きは麻黄杏仁石膏甘草湯之主る」

(発汗・汗出て表解して後、更に桂枝湯を行ふべからず。若し発汗・汗出で喘し、反って大表の發熱なく、裡熱の伏するあるは、此の方の主る所とするなり。此に「汗出るも喘」というは、越婢湯の「続いて自汗出る」と其の證を同じくして、熱臭を蒸蒸するの自汗なり。故に、汗出れども表解さずして喘を發す。是れ、麻黄杏仁を主とする所以なり。自汗出て大熱なきは、是れ石膏ある所以なり。渴をいわざるは、表證多く水氣胸膈に在ればなり)

麻黄杏仁薤白甘草湯

右、此の方内の石膏を去りて、薤白に代うるときは麻黄杏仁薤白甘草湯なるものにして、風濕身疼み、發熱するを治す。

此の證、裡熱なく、表閉喘急し、皮膚の水氣発して出ること能わざるを以て、一身疼み發熱す。蓋し、麻黄・表を發し、杏仁・喘を治し、薤白・濕を去り、甘草・急を緩めて、風除き濕乾く。凡そ此れ等の方、皆表邪の實證に属するもの、一に發散を以て主とするにありと知るべし。

證に曰く、「病者、一身尽く疼み、發熱の日晡所に劇しきは、風濕と名づく。此の病、汗出で風に当りて

傷られ、或は久しく冷を取るに傷られて致す所なり。麻黄杏仁薏苡甘草湯を与うべし」

（一身尽く疼むは、風濕相搏つなり。発熱・日晡所に劇しきは、表閉じて風邪去ること能はざるによるなり。久傷は、まさに「傷らること久し」に作るべし。字の顛倒なり。久しく冷を取るときは、湿と風とを両感するゆえ、風濕を病むの意なるべきなり）

或、曰く「此の方は、瘧病の動気なく、渴せず、水状ありて日晡に発するものを治す」と。
又、曰く「創瘡家、発熱・喘満のものを治す」と。

文蛤湯
ぶんかくとう

若し、越婢湯の證にして、喘咳渴して飲を食するものは、文蛤湯の證なり。

此の方たるや、越婢湯の方内に文蛤・杏仁を加うるものにして、文蛤・渴を治し、杏仁・喘咳を治す。而して、文蛤石膏之が主たれば、其の渴を治するの意、尤多と知るべし。

證に曰く、「吐後、渴し水を得んと欲して飲を食するは、文蛤湯之を主る。兼ねて、微風・脈緊・頭痛を主る」と。

（「飲を食する」とは、水を飲めども渴の解せざるをいう。「微風・脈緊・頭痛」は、表證なり。此の方、表證あつて渴するを治すること、前に弁ずるが如し）

腹證奇覽翼 二編下冊

連江浜松 和久田寅叔虎 著

門人豊前中津 原田 成憲子 欣校

107、柴胡湯諸方の弁並びに図解 (翼 二編下冊)

夫れ柴胡湯の輩、傷寒論、金匱に載する所、凡べて九方。

(小柴胡、大柴胡、加芒硝、去半夏加枳實、加龍骨牡蠣、柴胡桂枝乾姜湯、柴胡桂枝湯、四逆散、柴胡飲子、凡べて九方。

或曰く、「柴胡加桂枝湯は、小柴胡に桂三兩を加するものにして凡べて十方」と而して小柴胡を以て、元方として出入去加する所なり。

(小柴胡方後の加減法は古に非ず。諸家の弁・詳なれば、ここに贅せず)

抑、柴胡の主とする所、胸脇苦満を以て準拠とし、診腹家も亦、皆之を以て、其の證を取り定ること勿論のことなれども、其の微を顯かにして、幽を開いて、仲景の玄旨を究むるに至りては、幾ど希なり。

吾らが儕、小人亦其の變を分ち、其の汁を吸るもの、何を以てか其の玄旨を管味わうことを得んや。唯其の好古の癖の自ら已むこと能わずして朝夕苦思し、ほぼ得るところあるが如きに逢えば、亦黙止すること能わず。妄りに以て之を言い、敢て大方家の笑いを避けざるは、これ其の癖たる所耳。読む者怒せよ。

夫れ仲景の脈證治法を弁ずるは、文簡にして旨遠し。照応含蓄、一字の褒貶を言うべからず。之を読むもの、亦苦刻して以て、其の微意を探らずんばあるべからず。之を今文平々の例に倣い読まば、其の旨を失すること少なからず。仮令ば、胸脇苦満の如き、一字の苦の字を補添するもの、下文に所謂、心煩し喜く嘔し、黙々として飲食を欲せず、或いは胸中煩、及び脇痛等に応じ、其の意を含蓄して言うところのものにして、胸脇満のうち苦悩煩悶の状あるを見るべし。

是れ、柴胡の證の由つて來たるところは、傷寒五六日、中風日を経て、邪氣表より裡に入り、水氣胸脇に聚り、邪氣之れに迫つて、この胸脇満を致すものなるを以て、苦悩煩悶の意なくんばあるべからず。

（他、柴胡の証に於て胸脇満、胸満を曰うて、苦の字を下さざるものは皆、本方正證に依りて、折略するものとするべし）

是れ其の一字といえども、等間に読み過ぐべからざるを知るべし。

近時、古方を玩用するもの多き、胸脇満するものを診し得れば、また密かに思い明らかに弁せずして、すちわち以て柴胡の腹状とするを見る。甚しきに至りては、寒熱虛実の弁無きものあるに至る。豈嘆ぜざらんや。是れ、吾儕小人の憤懣して已こと能わざる所以なり。（胸満諸證の弁、上冊に詳かにす）

小葉胡湯の證 (翼二編下冊)

部位
上焦而胸
脇上及頸項
下通背脊
是表裡間

寒熱迭來
表裡是半
邪氣所湊
胸脇爲痞



108、小柴胡湯の證（翼 二編下冊）

右圖の如く、胸脇苦満、若しくは脇下痞硬し、或は頸項強るもの、小柴胡湯の腹證なり。

要するに、柴胡の腹状は一体にしまりあって、両の脇下肋骨のはずれの処に、手指頭に支えるものありて、之を按せば、胸中に応じて痛みを覚えるべし。但だ、心下は満すれども、之を按して却つて痞硬せず、深くおせば動氣は指頭に応うことを得べし。而して胸上を圧按すれば、心煩の状を得べし。（手掌に應じてドキドキとして、いきれもやつくきみあるなり）

若し、夫れ外證は、往來寒熱するを正とすといえども、其の輕重に随つて一定すべからず。

本文詳かに且つ尽せり。熟読すべし。其の方意は則ち、柴胡・半夏相い並びて、以て熱を解し水を降す。

黄芩・人參之を佐けて、以て熱を解し痞を開らき、生姜・大棗亦相伍して、飲をさばき胃口を豁にす。甘草相和して急迫を緩む。

其の位は胸脇・脇下、其の病は熱邪水飲、之を解し・之を散じ・之を降すの外、他の技能なしと知るべし。

論に曰く、「傷寒五六日、中風」

（傷寒と名つくるの邪は重し、故に五六日を期とす。中風とするものは軽し、故に日数を期せず）

「往来寒熱」（熱往き寒來り、寒往き熱來り、須臾に迭いに相い往来す。時を期するに非ず）

「胸脇苦満、黙々として飲食を欲せず」

（胸脇は裡の位なり、邪氣之に迫れば、水飲玆に聚まり、因て苦満す。苦はじゆつながること。満は張りみつること。黙々は言わざるなり。是れ熱氣と飲水と、胸脇を塞いで、精神爽やかならず、且つ、飲水食穀ともに欲しがらぬなり。邪氣胃口をふさぐなり）

「心煩して嘔を喜み、或いは胸中煩して嘔せず」

（胸は、膈上の總名。心は、胸位の中央をさす。中央にてもやつくもの、衝逆の意あるを以て、嘔を喜むなり。喜嘔は嘔せずに居られぬきみにて、又しても、えづくことを喜むなり。胸中煩は、胸一面に煩する故、つきあがるころもちなくて、えづかざるなり。「或いは」は、有るを必とせざるの辞。已下の諸證は、あることもあり、無きこともありて、一定せず、正證に非ざるなり）

「或いは渴し」

（此の證、胸脇水多く、飲を欲せざれども、水少きものは、熱に因りて渴することもあるなり）

「或いは腹中痛む」

（邪氣、裡にせまる故なり。是れ熱痛なり）

「或いは脇下痞硬し」

（胸脇の余波、脇下に及びて痞硬するなり。両脇の肋骨の下端を按せば、つかえてかたし。是れ此の證の目じるしなり）

「或いは心下悸、小便利せず」

（心下は、鳩尾の下なり。ダクダクと、おどりでたよりなきようなるを悸という。是は小便不利して、水気ここにあつまるなり。故に二句連言するなり）

「或いは渴せずして、身に微熱有り」

（身は肌膚を指していう。微熱はうわべになく、肌膚にある熱なり。即ち身熱のことなり。越婢・白虎などの所謂、大熱無しというもののことにて、渴すれば白虎の證、いずれ石膏の主るところとなるゆえ、不渴というなり）

「或いは咳する者」（水氣胸肺をおかせば、咳もあるなり）「小柴胡湯之を主る」

右一章、小柴胡湯の正変を悉具して、其の熱あり水あるの多少輕重、是に於て概見すべし。然れども其の主證を取り得るときは、必ずしも其の余を問わす。

例に曰く、「傷寒中風柴胡の證但た一證を見せば、便ち是なり。必ずしも悉具せず」と、これなり。

案ずるに此の方、和解を以て主として、汗吐下の剂に非ずといえども、偶肯柴にあたるときは、発汗して解すことあり。是れ其の邪の素表裡の間に在ばなり。

又、此の證にして發黃するものあり。是れ所謂、瘵熱・裡に在れば、必ず發黃するものなり。又、頸項強ばること、表證に似るものなり。左の本文に就いて分弁すべし。

論に疊く、「病を得て六七日、脈遲浮弱、惡風寒するも手足溫」

（脈、遲浮弱にして、惡風、寒まじへ起こるもの、虛寒に似たり。虛寒は必ず手足冷ゆ。今其の溫なるを以て、其の寒に非ざるを弁ず）

「医、二三たび之を下して、食すること能わずして、脇下満痛し、面目及び身は黄、頸項強、小便難なる者、小柴胡湯を与う」

（此の證、初め惡風寒あり。法に於いて發汗すべく、下すべからず。蓋し医、其の脈遲を以て誤り認めて、之を下すこと、二三に及んで、反つて邪氣内陷して、胸脇にあつまり、食道に窒して、食せんと欲すれども、食すること能わずして脇下に満痛み、熱癢して面目より一身に及びて黄色を發し、上頸項に強り、下すに因りて、小便通じ難きを患るものは、小柴胡湯を与えて後治あるをまつなり。

頸項強ばるは、項背強ばると異なり。兩の耳後の行を下りて缺盆に至るもの、是れ表に属せずして、裡に属するをみるべし。乃ち脇下満の応にて、上下に及ぼしたるものと知るべし）

論に曰く、「諸黄、腹痛而して嘔する者」

（此亦胸脇満、腹痛而して嘔、黄色の發するものとすべし）

論に曰く、「傷寒四五日、身熱惡風、頸項強、脇下満、手足溫にして渴する者は、小柴胡湯之を主る」

（傷寒四五日にして、已に裡に及びて身熱惡風す。身熱は發熱にあらず、肌膚にあるの熱なり。故に惡寒せずして惡風す。頸項強ばり脇下満するもの前證と同じ、手足溫煖にして渴するもの、是れ蓋し外證劇からず。内胸脇にあつまるところの水氣、少きを以て、熱多く寒少く、且つ嘔逆を發せざるもの見るべし。唯其

れ嘔逆せず、是を以て手足厥冷せず。其の裡證まつた全からず、是を以て身熱して手足熱せず。此の両義を含みて、手足溫をいうものか。

而して其の主證を要するときは、頸項強、脇下滿、柴胡の位にあらわる。是を以て、小柴胡湯の主とするとするなり。

此の證、一転すれば、白虎の證に至るの機あり。読むものの之を審かにせよ

凡そ表裡げんの分を明らかにし、熱の深淺を知り、寒熱虛実ぎょの疑途を弁ずるに、之を舌上に診すること有り。小柴胡の舌のごときは、所謂、白胎はくたいなるものを得べし、是れ心胸の熱候にして、未だ深に及ばざる者なり。

論に曰く、「陽明病、脇下硬滿、大便せずして嘔し、舌上白胎ある者は、小柴胡湯を与う可し。上焦、通を得れば、津液下すことを得、胃氣因つて和し、身しん然ぜんとして、汗出て解するなり」

（陽明病は、胃家実を以て正證とす。胃家実する者は、必ず腹滿す。今、腹滿せずして脇下硬滿す。外證にして胃実いじつに非ざることを知る。胃実いじつに非ざるを以て、大便せずして嘔を發す。此れ上焦の熱水氣を逆して、津液胃中を潤さずして、大便通ぜざるなり。

舌上の白胎は、舌上の色、白く盛りあげたる如きをいう。是れ上焦熱あり、水氣あるの候なり。若し胃家実すれば、必ず黃胎なるを以て之を分つ。此の證、陽明病にして、胃実いじつに至らざるを以て、權はかりりて小柴胡湯を与うべしとなり。蓋し承氣の後治あるを以て、主證とせざるなるべし。

さて柴胡にて上焦の熱を解して、正氣通ずることを得れば、津液下りて胃中に入る。胃氣因りて和すれば、胃陽ここに旺じて、一身いしん渾然（ジツトリ）と汗出て病解す。大便も自通するとしるべし）

又、婦人經行中に、邪氣を得るか、或いは邪氣を得て後に、適經行來れば、其の熱、血室に入りて胸脇滿す。其の候、左の脇下に得べし。

論に曰く、「婦人中風七八日、続いて寒熱を得て、發作時に有り。經水適して断つは、此れを熱・血室に入ると爲す。其の血、必ず結ぶ。故に瘧狀の如く、發作時に有らしむなり。小柴胡湯之を主る」

(適は、ちやうど其の時に、出くわしたる詞なり。断は行べきがきれて、後から続かぬなり。)

例に曰く、「胸脇下滿、結胸狀の如く、譫語する者は、熱・血室に入ると爲す」と。此れによるときは、胸脇下滿、寒熱發作・時に有るもの、小柴胡の證なるを以て之を主るもの。亦、證に隨いて、治するの意なり。其の血、結ぶもの、胸脇下より小腹に硬滿す。故に結胸の如しという。婦人の血室、左の小腹にあり。故に左腹に於て、得べきなり)

又、小柴胡湯の腹痛は、所謂、熱痛なるものにして、邪氣裡に迫るの及ぼすところなり。而して小建中湯は、裡急の腹痛なるものと疑似して、前後緩急の治法あり。且つ心煩、二方の證の疑似するものあつて、其の異同を弁す。

論に曰く、「傷寒、陽脈洪・陰脈弦、腹中・法として當に急痛すべき者は、先ず小建中湯を与う。差ざる者は、小柴胡湯之を主る」

(陽脈・陰脈の説、諸家一定せず。而れども、腹背をわかつて言うものも、穩やかならざるに似たり。此れ蓋し、寸口に於て、之を言うものなるべければ、其の拳按に於いて、言うもの穩やかなりとす。

窃に謂。陽は氣なり。陰は血なり。故に、浅く按して之を知るは、氣の盛衰を察するにあり、陽と言う

ゆえんなり。深く按して之を得るは、血の虚実を伺うにあり、陰というゆえんなり。

今、浅く按して渋滞なる、陽氣の健行せざるものにして、深く按して弦緊なるもの、陰血の和緩ならざるを知る。是れ、乃ち氣血渋滞弦緊、法に於て、腹中急痛すべきの候にして、適腹中・急痛する者は、先ず小建中湯を与え、其の差るや否やを試みるなり。

小建中湯は、是れ氣血を和し、緊急を緩めるもの。若し、其の證に對せば、一服、即ち差べし。差は、病の一段慍くなりたるなり。若し差ざるものは、再び前方を服すべからず。是れ、傷寒の邪・裡にせまるところの熱痛にして、定めて小柴胡の證とすることを知るなり。

かように、二方を試用するものは、明鑑なきに似たりといへども、小柴胡の腹痛なる者ならんも、固り旁證なれば、姑らく脈證に隨いて小建中湯を試用するも、亦、古人、病を治する緩急の法なりと知るべし。此の章、前の或いは腹中痛の句に就いて、之を詳かにするもの。

又、曰く、「傷寒二三日、心中悸而煩する者は、小建中湯之を主る」

（傷寒二三日、表にある時に當つて、心中悸して且つ煩するもの、熱、裡に迫るの致すところに非ず。是、外襲に因つて、氣血が内に迫つて、此の衝逆急迫の状をいたすもの。是の故に、證に隨いて小建中湯の主治と定むるなり。

若し外邪、裡にせまりて煩悸する者は、此の方の證にあらず。其の異なるところ、心中悸を主として、煩を旁とするにあり。若しくは、裡證の致すところは、前に所謂、傷寒五六日、心煩喜く嘔。或は胸中煩して嘔せず。或いは心下悸し、小便不利なるものにして、小柴胡の證なり。

此の章、小柴胡の證にいうものなしといえども、小柴胡に就いて、疑途を弁ずるものなるを以て、此に抄出して、二方の證の相似て、方意の各別なることをしらしむ。読むもの審かにせよ。

以上、諸章、論中、小柴胡湯の正變證を審弁するものを抄して、愚解を付し、以て初学に示す。其の旁枝を生ずること、多端なるが如しといえども、其の本根を尋ねるに至りては一なり。読むもの、前後の文理を紬繹して、其の玄旨を求めば、以て大過なかるべし。其の余、小柴胡の證を弁ずるもの少なからずといえども、推考し得べきを以て、此に枚舉せず。

附方 小柴胡加櫛皮湯

本方に櫛木皮（大）を加う。婦人一切の乳腫を主治す。

109

藥さい胡こ桂けい枝し乾かん姜きやう湯とうの證（翼 二編下冊）

位部

表裡間
而候在
胸脅腹

半夏はんか代だい粉ふ
候こう在在燥そう渴かつ
胸きやう滿まん微い結けつ
動どう藥やく震しん頻ひん



109、柴胡桂枝乾姜湯の證 （翼 二編下冊）

右図の如く、胸脇満して、臍上心下の動氣つよく、虚里の動も亦応じ、心煩、衝逆、口舌乾きて渴し、嘔せざるもの、柴胡桂枝乾姜湯の證とす。

（或曰く、「左の脇下に結聚し、虚里の動つよく、腹中の動、及び右の臍傍小腹に応じて微結あるを、此方の腹證とす」と）

此方や、小柴胡湯より去加し來るものといえども、其の意、頗る異なる所あり。其の異なる所は、半夏を去り括蕤に代うるにあり。半夏・括蕤其の治相反す。

半夏は、痰を去り湿を燥し、寒飲、嘔吐を治す。括蕤は燥を潤し渴を解し、虚熱を治す。此の證、水氣すくなく、渴して嘔せず、去加する所以なり。其の桂枝を加うるもの、肌表を和するにあり。肌表和せざるものは、氣衝逆す。動氣の亢激、職として是れ之に由れり。牡蠣ある所以なり。乾姜以て生姜に代るものは、頗る溫散の意あり、則ち、上焦の熱邪を解すことを主とすといえども、亦兼ねて以て下焦の寒に及ぶものとす。其の意、寒瘕を治するに於てみるべし。

論に曰く、「傷寒五六日、已に汗を發して復た之を下し」

（傷寒五六日、固より柴胡、之を主治する所にして、已に發汗して解せざるを以て、又、之を下す。並びに其の治を得たりとせず。是を以て、内外・津液を亡して邪氣仍在り。枯渴、衝逆の病證を加える所以を見るべし）

「胸脇満、微結、小便不利、渴して嘔せず」

（胸脇満は、傷寒五六日にして必見の證なり。微結は、蓋し脇下に結ぶなり。小便不利、渴して嘔せずは、汗下に因りて津液を亡するの候なり。此の渴、乃ち津液枯渴。括蕪を用いて、石膏を用いざるの意みるべし。括蕪、実熱の渴を治せざるなり）

「但、頭汗出て往來寒熱、心煩する者は、此未だ解せざると為すなり。柴胡桂枝乾姜湯之を主る」

（汗下に因つて津液を亡し、微結すれども結胸をなさず、又、裡に迫りて内実の機あらず、却つて陽氣衰え衝逆を致す。小便不利、頭汗出るものは是れなり。而して往來寒熱心煩するものは、胸脇満、微結と照して、傷寒の邪は、いまだ解せざるとするなり。故に其の方、仍お柴胡を主として、其の佐とするもの、水を逐うものにあらずして、却つて燥を潤おし、氣を和し、動を鎮め・逆を低し、寒を溫め・陽を回らすの意あるものを隊伍するの旨をみるべし）

證に曰く、「瘧、寒多く微熱有り、或いは、但寒して熱せず」

（此れ外台の文なり。故に其の證、具らず。瘧は、寒熱発作時に有るの病、寒多を治するは、乾姜あるを以てなり。是れ白虎加桂枝湯、反対の證なり。然れども柴胡の腹状を得ずんば、妄りに用いるべからず）

案ずるに此の方、近世諸家に流行するところ、病人・胸脇満、腹中動あるものを見れば、輒ち以て此の方

を用い、復た表裡虚実を審かにせざるもの多し。むべなるか宜哉、其の治効の著明ならざること。学ぶ者焉こゝを思え。

柴胡去半夏加栝蒌湯

若しくは、小柴胡湯の證にして、渴して嘔せざる者、柴胡去半夏加栝蒌湯の證なり。而して、其の二味を去加するの意は、前方と同じ。

證に曰く、「瘧病、渴を發する者、亦勞瘧も治す」と。

(此れ亦、外台の文なり。故に其の證、詳かならず。但本方の去加する所に就いて、其の方意を審かにすべし。勞瘧は、瘧病久しく差いよずして、疲勞するもの。亦、渴の證なくんばあるべからず)

或は曰く、「瘧・此方に牡蠣湯合方を用いて効あり」と。

紫胡加桂枝湯

若しくは、小柴胡湯の證にして、表證去らざるものは、桂枝湯を合方して柴胡加桂枝湯と名づく。

(或曰く、「柴胡加桂枝湯は、本方に桂枝三兩を加えるものをいう。此の方は、柴胡桂枝湯と呼んで可なるべし」と)

論に曰く「傷寒六七日、發熱微しく惡寒、支節煩疼しせつはんとう」

(傷寒六七日、表證裡に入るものは、往來寒熱、胸脇苦満を正候とす。然るに、此の諸證あるものは、惡寒微なりといえども表證とす)

「微嘔、心下支結、外證未だ去らざる者は、柴胡加桂枝湯之を主る」

（支は、ささえるなり、つっぱりになりてあるなり。此の心下に支結するもの、結胸を成すに非ずして、内実の漸^びあり。然るゆえんは、嘔氣微にして、水状少なきにあり。是已^すに下すべきに似たれども、發熱、微しく惡寒、支節煩疼の外證、未だ去らざる者は、下すべからず。又、微嘔支結、表證に全からず。故に二方を合して、表裡を兼治するなり。

表證と書くべきを、外證と書きたるの意は、外は、内に対する辭。心下支結するものを、内実の漸あるものとして、内より外は表裏とも通じて、外證というなり。其の弁、初編に図解す。併せ見るべし。内は胃内なり、外は、胃外より表位までを通ずるところの称なり。或いは曰く、「心下支結は、心下はすぎて、上中脘の辺にて、つかえるものあり」と。是れ胃の位にして内実に似るなり。」

以上三方。其の去半夏加括蕤湯は、外台より取り来りて補うところのもの、其の余二方は、傷寒論太陽篇に次序して、之を論ず。而して、前後の相接承する章旨を通觀するに、皆、結胸疑似の證を弁ずるもの。故に、其の胸脇滿、微結、心下支結を以て相接応す。其の意の全を知らんと欲せば、本書に就いて審かにすべし。

悸動之躁
且驚且狂
胸滿眩萌
加味足康

部位
胸脇而
上候及臍

110

柴胡加龍骨牡蛎湯の證
(翼 二編下冊)



110、柴胡加竜骨牡蠣湯の證（翼 二篇下冊）

右図の如く、胸脇滿して、臍上心下の動氣つよく、胸中ダクダクとして心安からず。因って心煩、驚狂するもの、柴胡加龍骨牡蠣湯の證なり。

之を柴胡桂枝乾姜湯の腹中動あるものに比するに、此の方、寒なく、却って水氣多きを見る。凡そ腹中動氣つよく、煩驚するものは、水氣の候多しと知るべし。

論に曰く、「傷寒八九日、之を下し、胸滿煩驚、小便不利、譫語、一身悉く重く、転側すべからざる者は、柴胡加龍骨牡蠣湯之を主る」

（傷寒八九日、いまだ内実せざるもの、之を下して、内躁擾して、胸滿、心煩、驚狂を發し、衝逆して小便不利し、熱、内に入りて譫語し、水氣去ること能わざるを以て、一身悉く重く、束るに、外邪を以てして転側すべからざるもの。仍、柴胡の地位にして、是の諸證を致すものとす。故に鎮驚、利水の藥を加えて、熱を解するを主とし施すなり）

案するに、此の方劑、諸家の說一定せず。

或の曰く、「小柴胡湯にして、龍骨牡蠣を加えるもの」。或の曰く、「大柴胡湯にして、此の二味を加えるもの」として、今の傷寒論、及び玉函に載する所の、十一味なるものは、却って之を疑いて取らず。

其の説、皆、方名に依り、他に例して之を言うものにして、見るところなきに非ずといえども、亦、別に徴するに足るものなし。何を以て定めて、其の方とすることを得ん。

然れども、本文の小便不利、譫語、身重等の證に依るときは、茯苓・桂枝・大黃あるも、亦不可とすべからざるに似たり。且つ、余が門、往々、玉函の方を用いて、試験あるを見るときは、復た何ぞ疑わん。抑々大小柴胡も亦、證に随いて此の二味を加えれば、徴するに足らずといえども、敢えて議すべきに非ざるものか。

(或曰く、「婦人、瘀血を兼ね、動氣強く、大便不通、心志安からざるもの、大柴胡加龍骨牡蠣、効あり」と。愚曰く、男女を問わず、動氣つよく、胸滿、便秘、心志・安からざるもの、玉函の方も亦、しばしば経験すること有り)

111

大葉胡湯の證 (翼 二編下冊)

部位
心下為
正候

轉進之邪
心下見實
嘔吐外證
下不可疾



心下痞鞭
拘攣

111、大柴胡湯の證 (翼 二編下冊)

右図の如く、胸脇滿して、心下急^{ひつぱ}り筋^{すじ}ばりて、腹底^{ふくぞこ}に応じ、之を按ずに力あり。或いは硬くして息にかかり、上腹は一体にしまりて微滿し、或いは腹痛す。(とりしまりなく一面に痛み、或いは心下、或いは臍傍と、一定せず。是、所謂、滿痛なり) 大柴胡湯の腹證なり。

此の方や、小柴胡に就て、人參・甘草を去つて、芍薬・枳実・大黃を加え、生姜を増す。其の病態、腹狀、較大なるを以て、大柴胡の称あり。

而して其の方意に於いては、所謂、心下急、若しくは痞硬するもの、内実^{ないじつ}の漸^{ぜん}ありて、尚、水氣胃外に止まり嘔止^{おうし}ざるもの、柴胡・半夏・黄芩・枳实・芍药、故^{もと}の如く、更に枳実・大黃の、陽明に於けるものを少しく加え、以て内外に及ぼす。其の芍薬あるもの、滿痛、拘急の證あるを以てなり。

論に曰く、「太陽病、過經十余日、反^{かえ}つて二三之を下して、後四五日、柴胡證の仍お在る者、先ず小柴胡湯を与う」

(過經の經、經絡の義に取りて、十二日を過ぐるの名とし、或いは経歴の義とす。いずれにも十日以上まで変ぜずして、ゆき過るの義なるべし。

日数久しきに及べども、證に隨いて治すべきを、日をへるを以て一度ならず、二、三度も之を下すは、其の治に反するなり。其の之を下すの後、又、四五日もたてども、柴胡の證は、旧に仍て在るものならば、やはり是も日数をかまわず、證に隨いて、先ず、小柴胡を与えて、其の病の行すじを見るなり。仍は、已前の通りあることにて、下さぬ前かたより柴胡の證であつたる義を示すなり。

「嘔止まず、心下急、鬱々として微煩する者は、未だ解せざるなり。大柴胡湯を与えて、之を下せば則ち愈ゆ」

（初めある所の嘔、小柴胡にて止ず、心下ひっぱり、初めにある所の心煩、鬱々として微なるものは、小柴胡を与えても、いまだ解せずとするなり。其の心下急、煩・微に至るもの、内実の候にて、下さざれば愈えがたし。然れども嘔止まざるもの、承氣の之所にあらざ、仍お柴胡の證あり。故に、柴胡の方中に枳実・大黃あるものにて、之を下せば則ち愈ゆるなり。嘔止まざるの證、生姜を増すの意、見るべし。嘔、煩ともに、前よりある柴胡の證なりと知るべし。大柴胡も「与う」といいて、「之を主る」といわざるは、真の内実にいたれば、承氣の後治あるを以てなり。然れども、是れ太陽の緩病、深く攻むるに及ばず。之を下せば愈ゆべし。方中、枳実・大黃の分量少きもの、考うべし、又、案するに、此の論を讀みて、胃実の漸なき間は之を下せども、益なきを知るべし）

又、大柴胡の腹證は、既に心下に及ぶを以て、結胸の疑途を弁ず。

論に曰く、「傷寒十余日、熱結びて裡に在り、復往来寒熱する者は、大柴胡湯を与う。但、結胸し大熱無

き者は、此れを水結びて胸脇に在ると爲すなり。但、頭、微しく汗出る者は、大陷胸湯之を主る」

(傷寒十余日、熱裡に結ぶは、進漸の常數なり。若しくは、結胸を成すものは其の熱、沈、伏して外に出ず。此の病、前に往來寒熱するもの、一旦歇みて、熱、裡に結ぶの候を見るといへども、復前のごとく寒熱するもの、眞の結熱に非ざるを以て、心下に結ぶものありといへども、見證に對察して、大柴胡を与えて、基の愈ゆるや、結胸を成すや見合すなり。

「但、結胸、大熱無き者」の一句は、錯簡にして、下文の「但、頭、微しく汗出る者」の一句と、いれかえて義通すべし。但、頭微しく汗出るものは、結熱に似たりといへども、結熱にあらず。尚、衝逆外に出る候あるものとすれば、此を、水結びて胸脇に在り、として結熱とはせざるなり。

但、結胸、心下硬滿して、肌表の大熱なく、沈伏するものにして、始めて眞の結胸なるものとして、大陷胸湯之を主る、となり。然して則ち、復た、往來寒熱するものは、心下に結ぶことは結胸に似たるとも眞の結胸とはせず、是、大柴胡・大陷胸二方の弁なり。

然れども、此の證、大柴胡にて解せざるときは、眞の結胸をも成すべきものか、其の与うるというにて見るべし。又、案ずるに、此れに熱結びて、裡に在るもの、明らかに其の位を言わずといへども、其の心下に於けるもの、推し知るべし)

又、大柴胡の本分は、心下急、大便せず、を主とするものなれども、變に應じては、下利するものに用いることあり。此の證、疫邪、若しくは痢病などにもあり、邪氣、裡に迫る勢いにて、水氣内に走りて致すところなり。

論に曰く、「傷寒発熱、汗出て解せず、心下痞硬、嘔吐して下利する者は、大柴胡湯之を主る」

（傷寒の邪、發熱表証なるを以て汗を發し、汗出て解すべきもの解さず、心下痞^つえ、之を按ずに硬きもの、結熱に似たり。結熱するものは嘔吐せず、且つ下利すべからず。

今、此の二證あるもの、邪氣、胃口に迫るの熱にて、水・胃に走つて下痢をなす。然れども其の邪、尚、胃外に在るを以て、水氣、胸脇にあつまりて、嘔聲ありて吐出す。是の故に、下痢にかかわらず大柴胡を用いて、其の熱を内外に導下す。

是れ其の腹證は、心下痞硬をとると雖も、發熱、嘔吐して下利するものに非れば、以て実として、更に之を下すの劑をば用いざるなり。古人、診察の密^みなるを見るべし）

證に曰く、「之を按して、心下満痛する者は、此を実と爲すなり。大柴胡湯之を主る」

（此の章、金匱・腹滿病篇に挙げて、外證を言わずといえども其の満痛を按して、虚実を知るもの。此れに於いて見るべし。前の諸證、心下を診するも、亦此に取りて考うべし。

又、案ずるに、例に曰く、「病者、腹滿之を按して痛まざるを虚と爲す。痛む者を実と爲し、之を下す可し。舌黄、未だ下さざる者、之を下せば黄自ら去る」と。又、曰く、「腹滿、時に減じて復故^{またもと}の如き、此を寒と爲す、当に温藥を与^{あた}ふべし」と。是れ亦、虚実、寒熱を知るの法なり。

凡そ大柴胡は、腹滿の状ありといえども、心下滿を主として腹一面に滿たず、但、上腹微滿して心下に至つてつよく、底にも硬く力ありて、按して息つむほどのものとしるべきなり）

右の數章を歴觀するに、曰く、心下急。曰く、熱結裡に在り。曰く、心下痞硬。曰く、心下滿痛。並びに

大柴胡の腹状をいうもの、併せ考えて其の意を得るべし。而して其の外襲に因るものは、所謂、往來寒熱、胸脇苦満、心煩、嘔吐等の證より来るものを以て、併せ取りて其の腹状に及ぶべし。

(疫邪より来るものは、往來寒熱、胸脇苦満、口苦く、舌の白胎^{うけ}、耳少しく聾、脈弦・數なるものを小柴胡とし、往來寒熱、口乾、舌白胎厚く、或いは微黃、問^{きこ}識^し言^{げん}あり、心下満、便秘、脈洪実、或いは沈・実・弦・數等の證を加うるもの、大柴胡とす)

若し夫れ緩病に於けるものは、之れを見證に得るべからず。金匱に腹證のみを挙げて、其の虚実の診を弁ずるもの見るべし。是れ腹診の要訣なりと知るべし。

(或る人曰く、「肝^{かん}積^{せき}、心下痞痛、腹満拘急、腹底動つよく、任脈の行を上り痛むもの、此の方、及び半夏瀉心、白虎加黃連の證を分別すべし」と。愚謂えらく、桃核承氣の證も亦疑似す)

附方

大柴胡加蘇木通湯 (本方内二味・大を加う)

眼目の赤脈を生じ、洩り、痛んで明を差じる者を主治す。

大柴胡加甘草湯 (甘草・中を加う)

周身、豊満、膨脹する者を主治す。

大柴胡加石膏湯 (石膏・大を加う)

頭髮脱落、及び齒痛を主治す。

(愚案するに、右の附方三方、名家の試験に出づといえども、其の證を審かにせざれば功なし。但、予も

亦一、二、經驗あるを以つて此に附記するのみ）

柴胡加芒硝湯

若しくは、柴胡湯の證にして、潮熱を發するものは、柴胡加芒硝湯の證なり。而して此の方も亦た、小柴胡、二方の異説ありて、傷寒論に載るところは、小柴胡湯なり。但し、論中、「潮熱は実なり」の語に拠るときは、大柴胡湯に加うるもの、優なるに似たり。

（或曰く、「小柴胡湯の證にして心脇の水氣解しがたきものは、小柴胡方中に硝石を加う。硝石は白焰硝なり、利水の功あり」と。是亦一説なり）

論に曰く、「傷寒十三日、解せず、胸脇滿し而して嘔し、日晡所・潮熱を發し、已にして微利するは、此れ、本柴胡の證なり。之を下せども、利することを得ず。今、反つて利する者は、医、丸薬を以て、之を下すことを知る。其の治に非ざるなり」

（傷寒にして十三日解せず、内実すべきの時、腹滿を成さずして、仍胸脇滿して嘔するもの、外證なり。然れども、往來寒熱せずして、日晡所に潮熱を發するもの、又、内実の機あるに似たり。潮熱を發するものは、大便通ぜざるべきに、已に潮熱を發してより微しく下利す。

此の病、本柴胡の證にして、内実に近いものなれば、之を下せども容易に下利すること得ざるべきに、今、反つて下利するものは、煎湯にて下したるに非ず。医、丸薬を以て之を下したることを知る。

凡そ熱実するものは、湯薬にて下すを法とす。丸薬にて下すは、其の治に非ずとするなり。潮熱は内実の

證なり。然れども外證あるものは、先ず、其の外より解して、後に其の内を攻むるを順とす。外を解するは、小柴胡に宜し。内を攻むるは、加芒硝之を主なるなり。内実は承氣を主とすれども、此の證は、潮熱内実の機を見るのみにて、柴胡の證、多を以てやはり柴胡に芒硝を加用す。亦、略承氣の意を兼ねると知るべし。案ずるに本文に曰く、「之を下せども利を得ず」と。之を下すは、大柴胡なるべし。大柴胡、大黃の分量少き故に、内実の機あるに臨んでは、利を得ざるなるべし。然れば則ち、後に之を主とする所の柴胡加芒硝も、大柴胡なるべきか。前に下して利を得ず、潮熱を發す。大黃芒硝・力をあわせるにあらざれば、其の実を攻むべからず。

或曰く、「大柴胡の腹状にして、臍上の動氣、按せば按すほど強くなるもの、芒硝を加う」と。又、奇覽・二大竹を立つというもの、加芒硝の腹證に當つべからず。

四逆散

若しくは胸脇痞満、脇下鬱急するものは、四逆散の證なり。

此の方や、近時、京師・巨擘家の試効に出て、一、二加減して、痞積家の通劑とす。蓋し、柴胡・枳実にて、胸脇の痞満を解し、芍薬・甘草にて、胸腹の拘攣を和す。動氣を兼ねるものは牡蠣を加え、疝を兼ねるものには劉奇奴を加う。

愚、謂らく、此の方、専ら胸脇の痞満、鬱急を主治するの意ありて、水を逐い、寒を退げ厥を復し、冷を温むるの意あることなきに、其の方、四逆と名づけて、之を少陰に付すること、其の意、審かならざるに似たり。姑らく愚按を記して、以て後賢の發明を俟つ。

論に曰く、「少陰病・四逆、其の人、或いは咳し、或いは悸し、或いは小便利せず、或いは腹中痛み、或いは泄利下重の者、四逆之を主る」

（愚案するに、少陰病四逆の下、疑うらくは、闕文あらん。凡そ論中に病證を言うもの、先ず其の主證を挙げて後、其の傍證に及ぶ。小柴胡湯に例して知るべし。）

今、此文、但、四逆と曰いて、直ちに旁證を枚挙するもの、審かならず。闕脱なしというべからず。且つ、其の或いは咳、或いは悸、或いは小便利、或いは泄利下重と云うもの、水氣の変なり。而して本方に水を治するの意なし。但、方後の加減法に於いて、其の意をみるべしといえども、加減法、固より正文にあらざれば、本方に於て取るべきにあらず。姑らく闕疑して、以て來者の明弁を俟つ

愚、近頃、清の人、周士稱が著わす「嬰兒論」を読む。其の書、傷寒論・全匱に擬して作るものにして、古方を用いるもの多し。

此の方を載せて曰く、「病態、時に隨いて變動し、仮令、朝に劇しく暮に安し、若しくは、胸脇攣急劇しきときは則ち四肢厥冷す、此病厥と爲るなり。四逆散之を主る」と。而して其の方、散とし、或いは膠飴を和し丹とし服す。

此の論、四逆散の證を言うこと審かにして、四逆、急迫によるの證とす。蓋し見るところなきに非ず。豈、自から試効する所にして爾か云うものか。抑々また其の伝を受ける所のかは知るべからずといえども、偶々以て闕を補うべきを以て、此に附記して一案とす。

柴胡飲子は、金匱雜療中に載せ、其の文、古ならず。蓋し後人の附録するものか。所謂、五臓の虚熱を退ぞく、及び四時加減の法、大いに仲景の「證に随いて之を治す」の旨に背けり。且つ余が輩、未だ試みざる所故に、其の弁を闕と云う。

(一方、虚熱潮作するを治す。地骨皮散。柴胡・知母・炙甘草・人參・地骨皮・茯苓・半夏、(各等分)右、毎二錢。生姜五片。水煎し一盞を八分に取り、食後服す。

門人、上原宗甫云う、「此の方、小柴胡の證ありて、自汗出るものに試験す」と)

功理心勞
在中海倦役
著氣神疲之邪

部
位
裡
在
診
及
裏

112

附
補中益氣湯の證（翼 二編下冊）



112、 附 補中益氣湯の證 (翼 二編下冊)

図の如く、心下、両脇下に痞塞すること、柴胡の證に以て、一体にてうすく、其の皮膚の診は、前の桂枝加黃耆湯の證のごとく、正氣の宣暢しがたきを見るものは、益氣湯を用いるべきの腹證なり。

夫れ益氣湯は東垣李氏の立方にして、後人、之を貴びて、医王の称あり。医俗、競いて此方を用いるより、遂に坊間(まち)の売薬となりて、復其の證を問わず、漫然として亂服するに至る。是に於いて古方を執るものは、一に之を選ざけて用いずといえども、李氏を信ずるの徒は、今に之を尊びて捨ず。

愚、謂えらく、彼の李・朱の二氏、後世の巨擘にして、其の立方持論、亦巧ならざるに非ず。然れども、仲景の室に入りて古方の奥妙を窺わず、穿つて以て、自ずから足れりとするもの少なからず。是を以て其の言浮誇、実に過ぎるもの多し。是れ好古の士の取らざるところなり。

而るを李氏を信ずるの徒は、尊崇・仲景に過ぎ、却つて其の言の浮誇を覺えず、妄りに以て玄奥窺則しがたきが如く思うも、迷えりというべし。抑々当今、好古の士、古方を信ずるの一途にして、反つて之を近きに失し、李朱の徒の笑いを受けるものなきに非ず。

是亦愚に近きに似たり。余、近ごろ諸家の口訣を問ひ、並びに、立方の意を考えて之を試用するに、輕重ともに効を取ること少なからず。因つて、之を古に考えるに、李氏の本づくところ、柴胡湯にありて、柴

胡、固より実邪に施すべくして、所謂、勞氣の人に用いたきを以て、中にして脾胃を温補するに、人參白朮を以てするもの、理中の意を以てし、外にして正氣を滋養するに黃耆を以てして、以て之が君となし、加うるに升提・利氣・解熱・和血の諸品を以てして、相い共に胸脇・心下の鬱結を消して、以て正氣を肌表に宣暢し、方名の如く、「中を補い氣を益し」て、邪氣自ら去るように工夫し、立てたるものにして、さりとは點（小賢）く巧みなる方なりと思わる。

是れ、元、李氏の勞役、傷寒の爲に立たる方にして、脾胃論、弁惑論に其の旨を詳かにすといえども、却つて高遠に過ぎて虚飾多し。余を以て之を見れば、此の方の功、諸薬の和するころの力にありといえども、其の実は、黄耆を君薬とするにあり。是の故に仲景の諸方を考え、黄耆諸剂を用いる微意を自得せば、是等の方といえども、運用自由ならざることなけん。

其の勞役の證を言うもの、李氏の説を本として、本邦名家の口訣も少なからず。大抵、邪氣、表裡の間に在りて、柴胡、若しくは白虎の證にも疑似すべくして、いかにもてうすく、精神沈溺・手足倦怠・脈洪大無倫等の證を見わし、發表攻裡涼解の正法も施しがたく、なりこじれたる壞病ともいいうべく、又は、危殆にも趣かんとするものには、前に詳かにする表虚肌膚の診を自得して、桂枝加黄耆湯を用いんとすれども、較表裡の證多くして、施しがたきものに用いて、効を取ることに速かなり。

怪きは、風邪の日数を経て解しがたきものより、重きは疫熱・傷寒の類にも考え用うべし。
（療治茶談にも口訣を載す。併せ見るべし）

其の他、癰疽瘰癧の壞證、久々愈え難く、常に惡水沾溺、膿を排せず、若しくは虚腫の漸あるもの、或い

は俗に呼んで、蠟燭下疳とするものの類、之を腹證に對して試用すべし。大いに奇効をうることあらん。是れ亦、黃耆の効、許多なりと知るべし。

113

呉茱萸湯の證 (翼 二編下冊)

部位

中焦而上及胸脅
傍及兩脇下至小腹

冷氣上衝
為滿為痛
謀在中焦
出上及動

或曰。元陽下冷者。酒客多此病。又曰。元陽下上衝。



113、吳茱萸湯の證 (翼 二編下冊)

図の如く、冷氣、心下に聚るを覚え、胸脇へ逆滿して乾嘔からえつ、若しくは涎沫を吐し、頭項強痛し、手足逆冷するもの、吳茱萸湯の證なり。

故に腹状に於いては、胸滿、心下痞硬、脇下攣急わきしたれんきつ(両の章門の行、上下に攣急す)。右の小腹結聚し、按して痛む等の證を得べし(当帰四逆加吳茱萸生薑湯の證と併せみるべし)。而して此の證あるものは、やや冷を感じ、或いは天雨あめふらんとする時に当れば、或いは腹滿、或いは氣・衝逆して顛項強り、頭額重く、若しくは頭痛し、劇しきものは嘔氣、涎を唾す。或いは平常、吐酸・吞酸・饒雜さうざつ等の患うれいあるべし。是れ皆、下焦の寒冷、相感して衝逆を致すもの、表證の劑を誤り投ずべからざれ。

(近世の粗医、項背強急等の證にあえば、妄りに葛根湯の用いて、其の證を弁ぜざるもの多し。内にしては吳茱萸の劑、外にしては黃耆の劑、項背強るも却って多し。誤るべからず)

論に曰く、「穀を食して、嘔を欲する者は、陽明に屬するなり。吳茱萸湯之を主る。湯を得て、反って劇する者は、上焦に屬するなり」

(嘔は、えづく声なり。物を吐くに非ず、嘔を欲するはえづきたく思うことなり。陽明は胃家の実證なり。

穀食は胃府におさまる。食後に嘔気あるは、胃府の病たることを知る。然れども正證に非ず、故に陽明に属すというなり。属は其の手下につくこと。

夫れ食後、嘔気あるもの、下焦の寒上りて胃陽を犯すところありて、食物のおちつきあしく、頓て逆氣を起して嘔を發せんとするなり。吳茱萸の辛溫なるもの、人參の苦味を佐とし、更に生姜・大棗の水飲をさばきひらくものにて、胃中に送り下せば、冷をあたため、逆を平かにして嘔氣さり、食物おちつきて消化を得るなり。

外台に此の方をのせて曰く、「延年、食し訖れば醋咽し、暖を多くするを療す」と。是の證と同意なるを見るべし。醋咽は、吞酸と同じ、咽まで酸おくびが逆するなり。暖は、おくびのことなり。俗に「むねのやけ」と云うの類なり。湯を得るの湯は、乃ち吳茱萸湯なり。此の湯を服し得れば、嘔氣止むべきものが反つて劇甚するは、中焦・胃府の病にあらず、一段上りて、上焦に属する病なればなり。上焦は、膈以上、心胸の位に属するもの。吳茱萸湯の主治する部位にあらず。故に、湯を得れば反つて劇しきをいたすなり。劇は、てしげくくすることにして、嘔を欲するが、乾嘔するようになるをいう。

又、曰く、「少陰病吐利、手足厥冷、煩躁死せんと欲する者、吳茱萸湯之を主る」

（少陰病は下焦の寒なり。下焦の寒、上りて中焦を犯す。是を以て吐利、併せ至るなり。吐は物をはくくなり。吐利に因つて、手足厥冷を致す。衝逆して煩躁して死せんと欲するなり。吳茱萸は、中を温めて逆氣を降すものにして、之を主治するなり。是れ、四逆湯の證に似たり。四逆は急迫を緩くすることを主り、此の方は逆氣を降すことを主る。吐利後の煩躁、氣逆をみるべし）

證に曰く、「嘔而して胸滿する者は、吳茱萸湯之を主る」

（嘔而して胸滿は、嘔逆して、胸中、氣滿を致すなり。胸滿、其の病位に非ず。嘔を主として之をいふもの、亦、其の病、中焦にあるの意を見るべし。案するに小柴胡湯證に曰く、「胸脇滿而して嘔す」と。是、胸脇滿を主として之をいうもの。胸脇、其の病在る所の位なることを知るべし。夫れ柴胡は、表より軀じて、裡に入るもの。表位は頭項にして、裡位は胸脇なり。是、上よりして下に及ぼし、いまだ中焦・胃府に至らざるものなり。吳茱萸は之と反して、下よりして、上に逆するもの、中焦にせまれば、逆氣嘔を發し、嘔氣胸滿をいたす。

其の主證の相反するもの、二方證を併せ讀みて詳かなり。是に依りて之を觀れば、吳茱萸は、熱迫の嘔を治すること能わず。柴胡は、冷逆の嘔を止ること能わず。各々、其の主るところあり。其の位にあらざれば、其の政を謀らざる、方意・味うべし）

又、曰く、「乾嘔、涎沫を吐き、頭痛する者、吳茱萸湯之を主る」

（乾嘔、涎沫を吐く者は、中焦、冷氣衝逆するなり。衝逆に因りて頭痛するなり。故に亦、乾嘔を主として、頭痛の字、下句に綴るもの、其の意・見るべし。太陽表證の頭痛は、頭痛を句首に置いて、頭痛、發熱、汗出、惡風などと書き下したる文に照して、其の意を弁ずべし。是、所謂、厥陰、痰飲・頭痛などの證なりと知るべし）

以上、四章の論、吳茱萸湯の主治を詳悉して、其の冷を溫ため、逆氣を降し、中焦を和し、穀食を安じ、

以て嘔を止め、満を消し、煩を解し、痛を退くるの意、自から明かなり。読むもの玩味すべし。

附方

腎氣・腹中より起り上つて咽喉に築き、逆氣連属して出ること能わず。或は數十声に至って上下し、喘息することを得ざるを治す。

呉茱萸・橘皮・附子

右、三昧、等分を末と爲し、糊丸す。梧子大、毎に姜湯にて七十丸を下す（孫氏仁方）

豁胸湯

腫病一切上りて心を衝き、胸滿短氣する者を治す。

呉茱萸・桑白皮（各一錢半） 犀角（五分） 茯苓（一錢）

右、四味、水煎し服す。（此の方、風引湯と併せ考うべし、其の弁、上冊に詳かなり）

胃上之寒
爲痞爲瀉
中焦得理
水穀化

位部
上 下 胃 心 焦

114

人參湯の證 (翼 二編下冊)
一名理中丸



114、人參湯（にんじんとう）の證

一名、理中丸（翼 二編下冊）

右図の如く、胸中痞すぎ、心下を按するに硬かたく、胸腹若しくは腰脚冷え、小便しげく、大便秘たり、或は、常に驚おど渇（やわらかに下る）し、或は心腹痛み、或は胸痺し、或は喜こゝろよで唾つばはき、胸中・心下、こころよからざるもの、人參湯の證なり。此の證、心下痞硬を以て主とすといえども、一体の腹状、大柴胡などちがい、力なく、満すといえども、按して痛み引きつらず、臍下は殊に力なく覚えるべし。

是れ、中焦冷えて、胃上の寒飲さばけず、胃陽衰へて尅く化の利・乏しく、因って胸中・心下の患いを致すものとす。故に霍亂かくらん・吐瀉して渴せざるの類、いづれ脾胃の運轉健やかならざるを以て、見證に對察して之を知るべし。

此方は人參・朮・乾姜・甘草・其の分量を等しくして、痞を開き、飲を退ぞけ、冷を温ため、水を利用し、急を緩めて、以て胃陽を盛んにす。是に於て水穀分利し、穀化し飲とく停とどまらず、中焦の理化を得るを以て、理中の名あり。其の能を別ち材を論ずるに、痞塞を開き停水を去るは、參・朮の主る所にして、冷を温ため急を緩くするは、乾姜・甘草の力を致いたすにあり。

而して其の病の在る所を審かにすれば、主として胃口に痞塞す。是れ人參、之が先鋒をなすに非ざれば、其の功を得べからず。因て又、人參湯の名あるもの、其の將師の任を示すものなり。

（乾姜甘草湯、冷を溫め、急を緩め、下焦に達す。其の意、彼の方下に於いて之を弁ず）

論に曰く、「傷寒、湯藥を服して不利止まず、心下痞硬し、瀉心湯を服し已り、復た他藥を以て之を下して利止まず。医、理中を以て之に与うるに、利・益々甚し。理中は中焦を利す。此の利は下焦に在り、赤石脂禹余糧湯之を主る」

（傷寒、初め誤り下して止まざるもの、湯藥を服して止めんとすれども、下利止まらず。心下に痞硬するを見て、瀉心湯の證として、之を服すれども下利止ず。因つて又、実邪攻むべきものとみて、復たび、他藥を以て之を下すに、下痢止まず。一医前の誤治、中焦虚冷を致すものとして、理中を以て之に与えて、中焦を調理せんとすれども、利止まず、却つて益々甚しきに至る。理中と名づくる所以は、中焦を理するの義にとるものなれども、此の利は、中焦にあらずして、下焦にあり。赤石脂禹余糧湯の、下焦に達するものに非ざれば、主治すること能わざるとなり。

瀉心湯は、甘草瀉心湯なるべし。復の字、初に誤下あるの意を見、理中以下は論者の判断、補中といわずして理中というもの、蓋し古義ならん）

右の一章、理中丸の主治を論するに非ずして、却つて、理中を用いるの弁甚だ明らかなり。之を呉茱萸湯、上中二焦の弁と併せ読みて、病毒・一なりといえども、其の在るところの位に随つて、各々、其の主藥を異にするの義を見るべし。

又、曰く、「霍乱、頭痛、発熱、身疼痛、熱多く、水を飲まんと欲する者は、五苓散之を主る。寒多くし

て、水を用いざる者は、理中丸之を主る」

（霍乱は揮霍^{ふくかく}撩乱^{りょうらん}の病名。揮霍は、ふるうなり。撩乱は、とりみだすなり。此の病、吐利^{とれい}転筋^{てんしん}す。是の名を称する所以なり。頭痛、発熱、身疼痛して、渴するもの、表證多くして、熱勝つ。五苓散・桂枝を主として、利水の薬を伍す。表を和し、水を治するの剂なり。寒多きものは、吐利・逆冷・転筋等の證を發して、水を飲むことを欲せず、理中丸、之を主るなり。是れ、霍乱、吐利、寒熱の治法を并せ論ずるもの、其の別あきらかなり）

又、曰く、「大病差^{いさ}て後^{のち}、喜んで唾^{つば}し、久しく了^{りよう}たらざる者は、胃上に寒有り。当に丸薬を以て之を温むべし。理中丸に宜し」

（了は埒^ちの付くことなり。大病は一段差^{いさ}て後、喜んで唾^{つば}をはき、久しくあとのさっぱりと埒^ちのつかざるは、胃上に寒飲あるものとす。是は温剂の丸薬にて、漸々暖めて愈ゆべし。其の丸薬は、理中散が其の場に宜しきを得るなりとなり。喜唾は、俗にいう生唾^{せいだ}を吐くこと。胃上は、即ち、心下の位にして、人參の主ところなり）

枳實^{きじつ}薤白^{けいはく}桂枝^{けいし}湯^{とう}

證に曰く、「胸痺・心中痞し、留氣結んで胸に在り、胸滿、脇下逆して心を搶^うく、枳實^{きじつ}薤白^{けいはく}桂枝^{けいし}湯之を主る。人參湯も亦之を主る」

（胸痺は、胃前の皮しびれ、胸中痞がり痛むところの病名なり。千金論に言う、「胸痺の病、人をして心中堅痞、急痛、肌中痺を苦しみ、絞急刺すが如く、俛仰することを得ざらしむ。其の胸前の皮、皆痛み、手犯

すことを得ず。胸中・徧々として満るが如く、咽塞り習々として痒く、喉中乾燥して、時に嘔吐を欲し、胸満短氣、欬唾引痛、煩悶、自汗出て、或いは背腹に徹引して痛む。即ち之を療せざれば、數日にして、人を殺す」と。此れ詳かなりというべし。

又、徳本云う、「胃中冷へて、痰結・宿飲ありて痛むもの、是れ胸痺なり。理中散によるし」と、併せ考うべし。

此の本文に胸痺というもの、右の意を以てみるべし。心中・痞を覚えるは、鬱留の氣が結んで、胸に在るが故なり。是を以て心中痞して、つまるようになり、胸中一ぱいに張り膨れて息急しく、脇下よりは逆して心をつくもの、鑰などにて衝く如くに痛むなり。衝心と書かずして、搶心と書たる意を見るべし。

是れ、胸中冷えて痰結・宿飲あり。加うるに、氣、鬱結して散ぜず、却つて逆するものと知るべし。枳実・薤白桂枝湯も、痞を開き、痰を退ぞけ、冷を温して、逆氣を下すものにして、其の異るところは、喘息・咳唾の證あるを別とす。人參湯は涎を吐せども、喘息・咳唾せずして、逆冷・急迫等、較冷寒の證多きを以て分別すべし。

右の諸章の意を審かにするに、中焦を理すといひ・胃上の寒を温たむといひ・寒多くして水を用いずといひ・胸痺というもの、皆、此の方の主る所にして、其の患うる所、或いは下利・或いは吐利併せ至り・或いは喜く唾し・或いは胸痛等の證を発するもの、要するに、是れ寒飲冷水、胃陽を犯し、中焦の理化を妨害するもの。痞を開き、冷を温ため、飲を去り、急を緩めて、諸證自ずから愈ゆるの意、明かなり。

是の故に、所謂、中寒・痞冷・疝氣・積聚・諸嘔吐の證、噦逆・噎氣・心腹痛・滯食・不食・泄瀉驚瀉、遺溺・小便不利・吐酸吞酸・痢證等、及び小兒の魘病・疳證・滯頤・凶陷の病、諸般、中焦の虛寒に属して、胸中痞滿、心下痞硬等の腹證あるものを對察して、此の方の證を定むべし。

（或曰く、「飢えて食を欲し、却つて多く食すること能わざるもの、俗に『近飢え』という。世医、以て積の致どころとす。人參湯の證多し。若しくは、飢えて食を貪り、多食して止まざるものは、所謂、藏燥にして、甘麥大棗湯の證なり」と。）

又、曰く、「諸病、卒に心下に迫り痞閉、急痛、短氣の者を治す」と。又、徳本に曰く、「心痛、背に徹して、乍ち冷え、汗出、脈結し、少氣（いきぎれ）の者、甘草湯にて、理中散を送り下して妙なり」と。是亦、急迫の證多きもの考うべし。

附方 四方

一、若しくは、本方の證にして、自利嘔逆、手足厥冷、拘急、若しくは心腹絞痛するものは、附子を加う。即ち、所謂、附子理中湯なるものなり。

一、若しくは、本方の證にして、魘虫證を兼ねるもの、茯苓、烏梅、蜀椒を加う。即ち、理中安魘湯なり。

（或曰く、「小兒疳證、面青白、胸腹痞滿、食を食するもの、此の方妙なり」と、試むべし）

一、若しくは、心中結滿、兩脇痞塞、胸中氣急、厥逆絶えんと欲し、心胸高く起り、手、近づく可からざるもの、寒実結胸とす。本方に枳実・大黃を加うときは、崔氏が増損理中丸なり。又、案するに、傷寒論寒

実結胸の文に誤りあり、疑うべし。取用するべからず。

一、若しくは、羸老の冷氣に惡心、食飲消せず、腹虛滿、拘急、短氣、及び霍亂、嘔逆。四肢厥冷、心煩氣悶、流汗のもの。茯苓、附子、麦門冬を加えて、小品の扶老理中丸と名づく。

右、後人の加減する所のもの、一、二を附す。其の他、枚舉するに遑あらず。

人參去朮加桂湯

一、若しくは、本方の證にして、臍上動氣築するもの、朮を去って、桂四兩を加う。

加減法に曰く、「臍上築する者は、腎氣動すなり」

(加減法は、後人の補なうところ、然れども、證に隨いて之を加えるところ、仲景の意と合するものは、敢えて、棄つべきにあらず。ここにいう臍上築するものは、奔豚氣の微なるものにて、只、築々とおどりて、心を衝くに至らざるゆえ、上衝をいわざれども、其の桂を加うるの意は一なり。朮を去るものは、蓋し、其の泥滯せんことをおそるるものか。然れども、此の方、參・朮主藥なり。之あるも可ならんか。或曰く、「此の加減法、痞積家、腹中の動つよきもの効あり」と)

桂枝人參湯

一、若しくは、本方の内に桂枝を加え、甘草を増すときは、桂枝人參湯の方にして、心下痞硬、下利して表證あるものを治す。或曰く、「此の腹状は、小建中湯の腹に似て、心下痞硬甚しく、動氣つよくして、発熱・下利するもの」と。

論に曰く、「太陽病、外證未だ除かず而、數之を下せば、遂に協熱して利す。利止まず、心下痞硬、表裡解せざる者は、桂枝人參湯之を主る」

（外は胃の外なり。内に対するときは、表裡ともにすべて外證というなり。凡そ陽病は、胃内の実證を見わざれば、下すべからず。たとえ内実の漸ありとも、外證未だ除かざるものは、先ず、其の外より治するを法とす。今、外證未だ除かざるに、數回之を下して、遂に表の熱を裡して、水氣をおもひ合わせて下利となりて、藥氣はつくれども、不利は止まず、心下痞硬して、表裡の證、並びに解せざるもの、此の方の主治するところなり。

表證は發熱、惡風等なり。裡證は心下痞硬なり。凡そ、表熱裡に入るときは、表證は解して、裡證をあらわす。其の熱結ばざれば、必ず下利す。今、表證も解せず、裡證も解せず、もちあいて下利を致す。故に協熱という。協は、おもいあうの義なり。此の方、桂枝を加うるのみならず、甘草を増すもの、二味を主として、桂枝甘草湯の意あるは、下利して氣衝逆し、急迫の證、甚しきを以てなり）

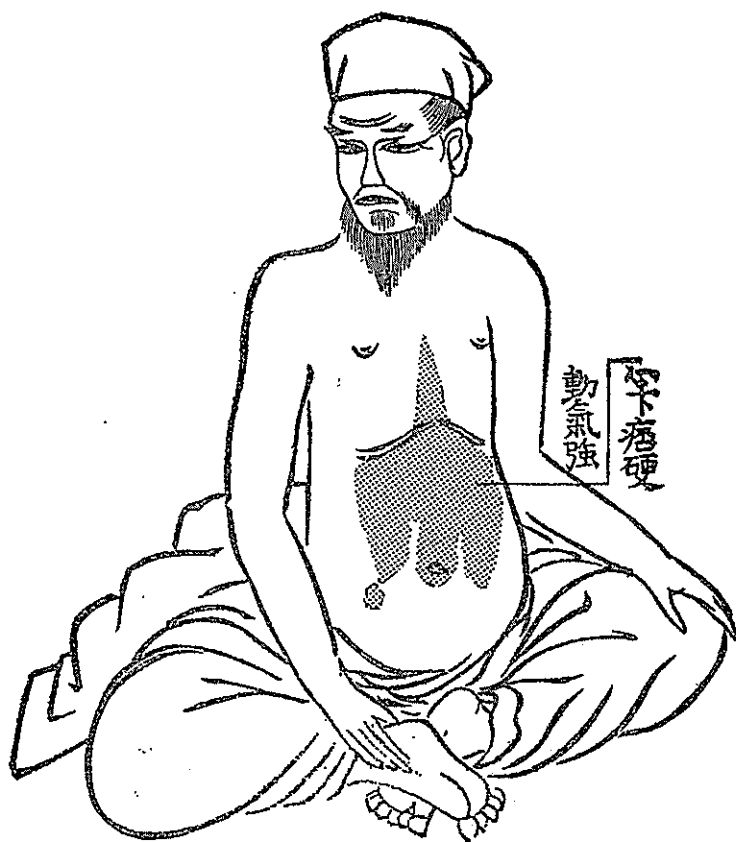
案するに、此方は表裡解せずして、下利するを以て、天行痢の初めに用いるものあり。囊時、本邦の丹水翁、自製する所の逆挽湯、亦、此の方に本づくものとす。彼の翁、痢源を以て、寒濕・鬱熱を結んで、腸胃

にあるものとす。故に溫補かんぽを主として、解肌かいきを兼ね、内より表に出すを以て、逆挽と名づく。愚が見るところを以てするに、痢源は、鬱熱を主として寒湿に非ず、此の方、桂枝ありといえども、溫補の劑なり。天行痢の宜所よろしきにあらず。余が門、大率、疏滌そてきを主として、溫補に従わず、別に説あり、此に記すに違いあらず。

桂枝人參湯の證（翼 二編下冊）

部位 表裡俱病
而下候在心

心下痞鞭
表裡俱有
協熱為利
見謬下後



心下痞硬
動氣強

115、桂枝人參湯の證

附心下痞硬諸證の弁、並びに人參說（翼二編下冊）

夫れ人參、心下痞硬を治すというの説、近世、東洞子の藥徴に論定して、至當の説なり。然れども、心下痞硬も亦、諸證あるを、一概に以て人參の主治する所と定むるも、善く仲景の書を読む者と謂うべからず。

今、其の著しきものを言わんに、大柴胡湯は、人參を去つて、却つて心下痞硬の證あり。且つ、嘔吐、下利併せ至る。此れ其の脈證の間に於いて、寒熱・虛実を弁ぜずんば、則ち、理中・柴胡、何をか別たん。

十棗湯は、甘遂・芫花・大戟の水を逐うものにして、亦、心下痞硬満の證あり。其の異るところ、脇下に引痛し、乾嘔の證ありといえども、人參湯にも胸痺引痛の證あれば、卒かに診せば、別ち難きに似たり。

抑々、傷寒論：金匱に載する所、人參を伍するもの二十六方に於いて、其の心下痞硬・心下痞・心下痞堅等の證を言うもの、僅かに七方のみ。其の余、之を言わざるもの、却つて多きは何ぞや。是し其の旨を弁ぜずんばあるべからず。

愚謂えらく、大柴胡の心下痞硬は、之を其の本文に、所謂、「心下急、鬱々微煩、及び熱結びて裡に在り、及び之を按ずに心下滿痛する者は、此を実と為すなり」の諸證に照らして、之を考へるときは、自ら其の弁を得るべし。

十棗湯の、「痞・硬・満や、乾嘔、短氣、汗出て惡寒せざる者は、此の表解して裡未だ和せず」と曰うに

因り、傍ら懸飲、支飲等の證に照らし、之を「脇下に引き痛む」と曰うに考うるときは、亦、自ら其の弁を得べし。

且つ、半夏瀉心湯・生姜瀉心湯・甘草瀉心湯の類、心下痞硬、若しくは、心下痞の證を主とす。

則ち曰く、「心下滿で、而して硬く痛む者は、此を結胸と為すなり。但、滿して痛まざる者は、此を痞と為す。柴胡之に与うるに中らず。半夏瀉心湯に宜し」

又、曰く、「之を下し、其の痞益々甚し、此れ結熱に非ず云云」と。

是れに依るときは、其の結胸、痞硬、胸脇滿等の腹状、各自其の別ありて、固より同じからずといえども、庸医は、之を混じて、分別すること能わざることを知る。是、傷寒論は篇章の次序を立つるに、其の疑似し誤まり易きものを、相い接承して以て論を弁す。金匱は證例を詳かにして、其の異同を弁する所以なり。

然らば則ち、医の腹證を診して、陰陽・表裡・内外・及び三焦の分界よりして、寒熱・虛實・淺深・緩急・進退の機度を審かにし、氣血の分・水飲の別・食穀酒色の変を究め知るに至りては、明哲も其れ猶諸を病めり。況や凡庸に於いておや。勉めずんばあるべからず。

竊に案するに、人參、心下の病を主ること、固より其の分なりといえども、其の隊伍する所に随つて、各、其の旨趣を異にす。

蓋し苓連・柴胡・石膏に伍するものは、熱に於けるものなり。乾姜・附子・吳茱萸・半夏・生姜に伍する

ものは、寒に飲に於けるものなり。防已・朮・茯苓に伍するものは、水に於るものなり。桂枝に伍するものは、氣に於けるものなり。橘皮・枳實・厚朴に伍するものは、氣に痰に於けるものなり。芎藭・芍藥・牡丹等に伍するものは、血に於けるものなり。

然らば則ち、人參獨り其の能を達しくするもの、得て知るべからざるか。惟うに人參の能は、胸膈間及び胃上に於いて、逼塞閉痞するものを開排し、胃中の真氣を舒暢宣通せしむるにあるなり。而して其の逼塞閉痞するところ一ならず。或は熱、或は寒。(白虎・四逆并に人參を加うるを見るべし)

或は水飲、或は氣血、各々其の旨趣を異にす。

蓋し人參の性、偏なれども僻ならず。能く諸藥に和して、之が為に其の要路を開排し、先驅たらざることなし。何則、胃口は水穀の道路にして、神氣往來の機關なり。開通を好み閉塞を惡む。諸、逼塞壅遏するものに逢えば、飲食を妨ぐるのみならず、神氣・鬱結衰微して、身体の不利、立ちどころに至る。

試みに思え、諸病寒熱を問わず、物ありて心下に逼塞するを覺えれば、忽ち神氣衰微し、面唇青白・手足厥冷・少氣・自汗・脈結伏等の諸證を見わす。是の時に方るや、藥汁咽を下り逼塞を開排すれば、卒かに真氣旺盛、厥温たまり色生じ、汗止み脈出て、故に復することを得る。是に於いてか其の要路に當り、先驅して鋒を交え、賊を破り、邪を退け、胃口を開通し、神氣を宣導するもの、人參の功、最も其の上に居れり。是を以て後世、此の草を以て、元氣を補なうの神藥とし、貴重、金玉の上に出るに至るのみ。

殊に知らず、人參固より其の功の上に居るといへども、獨り其の能を達しくするに非ず。且つ其の急に臨んでは、熊猪の胆汁、若しくは龍麝・香竇の剤の如きも、亦以て一時の功を奏するに足る。何くんぞ、人參

独り其の功を擅はしにすることを得んや。但、人參の性僻ならず、能く諸薬に伍して、以て通塞を開排す。

是を以て、香川秀菴、「其の効を試みて、人參、頓虚を治すれども、漸虚を治すると能わず」といへり。此れ、其の言いまだ參能を極むるに足らずといえども、暗に此の旨を得るといふべし。且つ人參、若し果して元氣を補うべくんば、仲景何んぞ之を言わざる。其の勞氣虚勞、人參を主とせずして、却つて柴胡瀉心、氣虚に非ざるものにして、其の人參を伍するの多き。

抑々當時、人參の貴重、金玉の上に出るものならば、何を以てか大剂多量、之を人に施くすことを得んや。

夫れ人參、味わい苦きこと胆汁に類す。是の故に源順・和名を載するに、「クマノイ」を以てす。徒に其の苦味をのみ仮用かりいるに非ず。蓋し當時の俗に、其の之れを用いること、熊胆に比するを以て、其の名を称するものならんか。今の古方を執るもの、本邦・山谷に生ずる直根及び竹節ちくせつの參を用いて、其の効を棄すること千古の發明にして、濟生の仁鮮すくならずと謂うべし。

其の古に徴するもの、仲景固より言うに及ばず、本朝、千歳の上にして源順、和名鈔しやうを錄き羊として、二百年の前、長田徳本ながた とくほんが自ら之を試用し(徳本、和參を用いること、其の門人・馬場氏の説に見たり)其の後、香川秀菴かうが しゅうあん之を薬選やくせんに發明し、吉益東洞之を薬徴に論定して、天下庸医の目を刮けつり、其の翳膜えいまくを去るもの、半を過ぐ。

願うに、香川・吉益二家の説、其の材能を論するに至つては、いまだ尽さざる所ありといへども、其の續を称するに至つては、小ならざるものと謂うべきのみ。余が門、止仲景ただち けいの方のみならず、後人の製するところの益氣湯、四六の君子に至るまで、和參を用いて功あらずということなし。復、其の偏苦の害あるを見

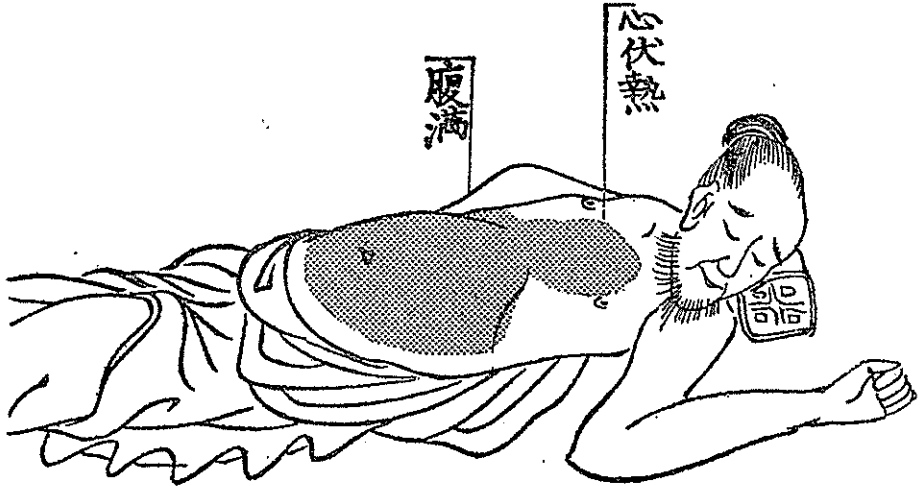
ず。是れ、後世立方者の、意に反するに似たりといえども、其の則を取る。一に信を仲景に考うるときは、流れに遡りて、之を用い惑うべきにあらず。学ぶ者これと思え。

116

白虎湯の證（翼 二編下冊）

部位 上焦而候
在胸と腹

欲知伏裡
要辨身熱
厥冷疑似
須診口舌



116、白虎湯の證 ひやつこう
(翼 二編下冊)

図の如く、腹皮りと張り、之を按ずに、力ありて底に堅満せず。覆手圧按するに、胸腹肌膚の熱狀を得ること、熱灰を囊の外より循るがごとく、漸くにして掌心(てのひら)に應じて、烙がごときを覚えるもの、所謂、大熱無きものにして、白虎湯の腹證なり。又、熱厥とて、手足逆冷すること、四逆湯の見證に似たるものあり。

之を分弁するの法。其の腹狀の如きは、前に倣い、眼中赤脈を生じ、舌胎あれども、乾燥して斷までカサカサとして潤いなく、且つ、渴して水を得ることを欲し、其の全体をすぶるに、病人何となく勢い強く見えるものは、熱厥なり。且つ白虎の渴は、勿論のことなれども、四逆の證にも亦、間に渴を發して疑似することあり。

熱飲冷飲を以て、分別するの説あれども、一定し難し、但、其の中、些の分弁あり。先づ試みに、水一盞を与えて、其の形狀を見るべし。須臾に額上、及び眼中に潤いを生ずるものは、熱渴なり。

若しくは、冷水咽に下れば、忽ち舌ヒリヒリとして、手足振るること、寒を得るに似たるものは、寒渴なり。然れども、此の手足振るものにも亦、寒熱の狀ありて疑似し。熱證は、手足をふるわすといえども、拘急して、自由ならざる狀あり。寒證は、力なくふるえて、所謂、沈重の狀あり。手を揺せども、医の手に、

もたる様子あるべし。且つ、四逆の腹にはしまりなく、熱瓜を按ずに似たり。偶、拘急のものあれども、腹皮には力なく、腹底にすじばり、脹満すれども空虚を覺う。

是れ二方を分別するの大略なり。

(或曰く、「白虎の腹は胃経・肝経の行、拘急す。是れ厥陰の経にかかる故に、四肢厥逆す」と。未だ試さず)

論に曰く、「傷寒、脈浮滑。此れ表に熱有り、裡に寒有るなり。白虎湯之を主る」

(滑脈は、まるみありて、グリグリとして力ある状をいう。是れ白虎の熱に対したるところの脈證なり。

然るに、「此の表に熱有り、裡に寒有り」の二句、解き難し。表熱・裡寒は、四逆の證に見ゆ。正に白虎と相反す。疑うらくは、表に寒有り、裡に熱有りの訛誤か。然れども、僅かに一脈證を以て、此の表裡、寒熱を判するは、此の書の例に非ず。蓋し、闕如として可なり。読むもの思え)

又、曰く、「三陽合病、腹滿、身重く以て転側し難く、口不仁にして、面垢つき、譫語、遺尿す。汗を發すれば則ち譫語し、之を下せば則ち額上に汗を生じ、手足逆冷す。若し自ら汗出る者は、白虎湯之を主る」

(三陽合病は、表裏の證を合せ見わし、其の位を分別しがたきを以て名づくるなり。此の病、以て転側し難きもの、太陽に似て、又、腹滿、身重の證あり。以て陽明とすれば、遺尿あり。其の口不仁するもの、少陽に似て、又、腹滿等の證ありて、其の位、弁別しがたき故に、三陽合病とす。

不仁は、食味を知らざるなり。面垢は、すすけたる如くなるをいう。此の一句、陰陽の疑途を弁す。陰病なれば、口中に五味を知りて、面垢のことなし。

さて、身重く以て転側し難き者は、表證として汗を發すれば、津液を亡して譫語はげしく、又、腹滿、譫語、内実するものとして、之を下せば、氣衝・急迫して、額上に汗を生じ、手足逆冷するに至る。

案するに、發汗已下逆冷までの十六字は、斜挿の文にて、仮りに、汗を發し、内を攻るの不可なるを弁明するなり。若し、自ら汗出る者の一句、前の遺尿に接してみるべし。若しくは、前證ありて、自ら汗出る者は、伏熱あるの候にして、其の熱を内外の中間に制すべし。是れ乃ち、三陽合病の證にして、其の熱、慳々しく解すべからず。白虎湯の主る所とするなり。

又、曰く、「傷寒、脈滑にして厥する者は、裡に熱有るなり。白虎湯之を主る」

(厥逆するもの、陰陽の二途あり。外に於て弁ずべからず。故に、脈に於て之を審かにするなり。今、脈滑にして力ありて、手足厥逆するもの、裡に熱あることを知る。是れ熱厥なり。案するに、厥は急迫なり。諸々の厥證を治するもの、皆、甘草あるを以て考うべし)

右三章、前の一章は、脈のみ取るべくして、證審かならず。三陽合病、及び傷寒熱厥、並びに、白虎の證にして劇しきものを論ず。煩渴固より白虎の證にして、其の渴を言わざるものは、劇證却つて其の渴を覺えざるなり。

(或曰く、「酒毒のもの、此の方、及び五苓加石膏を撰用すべし。又、此の方、陽毒赤斑せきはんを發するものを用い、泄洩熱によるものに此方の證あり。又、齒痛熱證に用いて可なり」と)

白虎加人參湯

若しくは、本方の證にして、心下逼塞痞硬する者、白虎加人參湯の證なり。而して、其の痞硬するもの、之を按ずに痛まず、但、腹脹り力あること、前に弁するがごとし。

論に曰く、「桂枝湯を服し、大汗出で後、大いに煩渴して解せず。脈、洪大なる者は、白虎加人參湯之主る」

（凡そ発汗、汗出で後、小煩渴はあるうちのことなり。其の時は、脈を診して察すべし。其の脈・方幅なくして緩やかなるものは、病愈の候なり。若し渴せば、水を飲ましむべし。若しくは、汗大いに出るといへども、大いに煩し、且つ渴して、其の洪大ならば、汗出で表證は解し、裡熱は解さざるの候なり。此の證、大汗出で後、心下逼塞するものか。或曰く、「加入參」の三字は衍なり」と）

又、曰く、「傷寒病」（此の三字、他に例せず、病の字衍に非ざれば、傷寒二字、まさに太陽に作るべし。或は曰く、「太陽病に作るを、義に於て優と為す」と）

「若しくは吐し、若しくは下して後、七八日解せず。熱結びて裡に在り、表裡俱に熱し、時々惡風、大渴、舌上乾燥して煩す。水、數升を飲んと欲する者、白虎加人參湯之主る」

（熱結裡に在りは、心下痞硬するなり。心下痞硬、何を以て熱結なることを知るかは、煩渴乾燥すればなり。表熱は發熱なり、惡風あるを以て之を知る。然れども、惡風は常にあらず、時々に減ずるもの、表證は、解するに近きを見るなり。舌上乾燥して、満口に及ばず。是れ、吐下は津液を亡すの候にして、胃実にあらずるを見ゆ。胃実すれば、口舌乾燥す。承氣の證なり。

此の病人、大渴すれども、舌上のみ乾燥して煩し、其の意、常に水數升を飲みて、其の欲を逞せんとす。実に數升を飲むに非ず。但、此の意あるを形容して、大渴の狀を示すものなり。

此の證、吐下すれども解せずして、心下に逼塞するもの、熱結べども、いまだ胃實に及ばずして、但、煩渴するもの、白虎湯の正證にして、其の人參を加うるの意、明らかに見るべし。

又、曰く、「傷寒、大熱無く、口燥、渴、心煩、背微惡寒の者、白虎加人參湯之を主る」

（大熱なきは、發熱なきなり。其の解、越婢湯、麻黃杏仁石膏甘草湯の條にあり。並びに、裡の伏熱、同候なりとしるべし。口燥は、口中燥きて舌乾かざるなり。前章は、舌上乾燥して、口乾かず、吐下の後なればなり。此の章は、口燥きて舌乾かず、吐下を経ざるによるなり。要するに、皆、胃實に至らざるの候、故に口舌乾燥せざるなり。心煩、熱裡にあるの候なり。背微惡寒は、初め遍身惡寒するもの、今僅かに背微惡寒するに至るは、表證解するの候なり。大熱無しと応ず。

案するに、此の章に依るときは、前章、時々惡風というもの、初め發熱、惡風常々あるもの、稍減じて時々に至るの意を示す。彼の惡風の字を下すを見るときは、章首、傷寒病の三字、太陽病の訛誤なるを推し知るべし。

又、曰く、「傷寒、脈浮、發熱、汗無く、其の表、解せざる者は、白虎湯を与うべからず。渴して水を飲んと欲し、表證無き者は、白虎加人參湯之を主る」

（脈浮、發熱汗無きは表證なり。表證あるものは、稍渴を見わすといえども、先ず、其の表を解するを法

とす。故に、白虎湯を与うべからず。夫れ表解して、裏に至るときは、発熱歇みて、身熱、若しくは大熱無きの證を見わす。汗無きもの、却つて自ら汗出て、脈浮なるもの、進んで滑となり、渴して水を飲んと欲す。此れを表證無しというなり。前の二章、惡風寒ありて、表證あるに似たり。然れども、彼皆、表證解せんとするの候、表證解せずというべからず。故に此の章、重ねて其の疑を弁ずるなり。

以上四章、皆、「加人參」と曰う。而して、其の熱結・裡に在るの章を除くの外、加人參の見證なし。且つ千金、外台、並に「加人參」の三字無し。是、以て先達の多くは、加人參の三字を削る。

愚竊に、傷寒論の次序考えるに、白虎加人參湯の前に承るもの、皆、裡證を治するの論にして、其の部位、大率、心下を以て言うものなるときは、白虎の主治する所も亦、其の微意なしというべからず。但、其の桂枝湯の論後に次するもの。接承する所なきに似たれば、加人參の字なきも可ならんか。其の説を審弁するが如きは本書に非ざれば悉し難し。

（證に曰く、「太陽の中熱とは、暍是れなり。汗出て惡寒、身熱して渴す、白虎加人參湯之を主る」と。是れ亦、加人參の證、詳かならず。故に先達も亦、削去するもの多し。或曰く、「肩背急、渴、鼻中・膿血出る。或いは小便不利して膿血を出す者、白虎加人參湯之を主る」と。未だ試さず）

白虎加桂枝湯

若しくは、白虎湯の證にして、骨節疼痛、氣・衝逆して、嘔せんとするものは、白虎加桂枝湯の證なり。此の方、桂枝を加うるの意は、兼ねて以て肌表を和し、衝逆を低するにあり。

論に曰く、「溫瘧、其の脈平なるが如し。身に寒無く但熱し、骨節疼痛、時々嘔するは、白虎加桂湯之主る」

（瘧は、寒熱發作・時に有るの病。例に曰く、「陰氣孤絶、陽氣独り發す。則ち、熱して少氣煩冤、手足熱して嘔を欲するを名づけて曰く、瘧瘧と。云々」瘧瘧は、即ち溫瘧なり。瘧は、やせつかるるなり。）

此の病、人をして消鑠肉脱せしむ故に瘧瘧ともいう。熱、独り發する故に溫瘧ともいう。此の病、邪氣内に蔵れる故に、白虎を本方とす。外、分肉の間に舍りて、骨節煩疼す。故に、桂枝を加う。時に嘔は、数々嘔するに非ず。其の熱、發する時に嘔するなり。是、但、氣逆の致すところ、亦桂枝の主治するところなり）

白虎加黄連湯

若しくは、痙癇熱證、血氣衝逆、眼目赤熱、或は肝積、脇下に迫もの、本方に於て黄連を加うべし。

案するに、凡そ白虎の通治。陽明脈洪大にして長く、惡寒せず。反つて惡熱、頭痛、自汗、口渴、舌胎、目痛み、鼻乾き、臥すことを得ず、心煩躁乱、日晡潮熱、或は陽毒發斑等の證は、本方、若しくは加人參を證に随つて試用すべし。

117

竹葉石膏湯の證（翼 二編下冊）

邵位上焦

氣逆執煩
差後殘餘
白虎維實
竹葉認虛



117、竹葉石膏湯の證 (翼 二編下冊)

右圖の如く、胸滿、氣逆して喘咳を發し、虛里動跳り、少氣し、吐せんと欲し、腹中軟弱、或は物なきが如く背につき、動氣亢り、脈虛數。午後日西(暮れる前)、熱潮し、五心煩熱、渴して水を飲むことを欲し、虚羸肉脱(ひどくやせる)、肌膚枯燥するもの、竹葉石膏湯の證なり。

此の方や、白虎加人參湯に、知母を去り、竹葉・半夏・麥門冬を加えるものにして、前證の如きものを治す。

其の加味する所の三味、痰を退ぞけ、咳を止め、煩を解し、燥を潤おし、氣を降すものなり。抑々白虎湯は、表證解して裡に至り、邪氣心に在って、熱狀を見わすこと、前に詳かにするが如く、全体の病狀、其の人に邪勢あつて、虚候なきものとす。

此の方は、邪熱の大勢、既に去りて、余熱未だ解せず。因つて、精氣故に復することを得ずして、此の煩熱氣逆を發するもの。方を執るもの、先ず是の大要を得て後、病者に臨んで審弁すべし。

論に曰く、「傷寒解して後、虚羸少氣、氣逆して吐せんと欲する者は、竹葉石膏湯、之を主る」

(傷寒の邪熱、大抵解して後、精氣いまだ復せず、肉脱虚羸、余熱、尚存して、心胃にあり、急迫して氣

息吸々絶えんと欲す。氣衝して物を吐せんと欲す。少氣は息ぎれすること。吐せんと欲すは、俗にいう、むかつきなること。其の余は前文に詳らかなり。

麦門冬湯

若しくは、竹葉石膏湯の證に似て、煩渴の證なく、痰氣肺部を犯し、咳嗽あれども痰出でがたく、咽喉不利して声朗らかならず。或は、声啞かひて出ざるもの。其の腹状は、胸滿して腹部上に迫り、氣上衝して、少腹力なきもの、麦門冬湯の證なり。

此の方や、麦門冬を以て、主薬として、特に分量多し。燐きを潤おし、煩を解し、疹を去り、咳を止め、逆気を低（さげる）するの意を見るべし。

或曰く、「虚勞、咳嗽、痰出でがたく、若しくは、咳血、衄血（はなぢ）のもの、本方の證に随つて、地黄石膏を加う。若しくは、狂癪にして衝逆するもの、石膏黄連を加う」と。

證に曰く、「大逆上氣、咽喉利せず。逆を止め、氣を下すは、麥門冬湯之を主る」

(大逆は、大いに咳嗽、氣逆するなり。上氣は、氣逆して上部に迫るなり。衝氣、或いは氣上衝とは、意自ら異なるなり。衝氣は、氣上つて胸をつくなり。上氣は、但、逆氣上部にのぼりあつまるなり。例に曰く、「上氣、面浮腫、肩息云々」見るべし。咽喉不利とは、のどぶえの、かよいあしく、音声出がたく、痰がかわかず、きれがたきの類をいう。是れ、虛火炎上して、肺部をおかすゆえ、咳逆を止め、上氣を方の主治する所なり)

腹證奇覽 翼二編下冊 終

文政六癸未年（一八二三）九月官許
天保四癸巳年（一八三三）孟春発閱

書肆

江戸浅草茅町

尾張名古屋本町通

京都三条通

大坂心斎橋博労町北へ入る

同 久太郎町北へ入る

須原屋伊三郎

永楽屋東四郎

吉野屋仁兵衛

塩谷平助

河内屋喜兵衛

翼（三編上冊）

118

大承氣湯の證Ⅰ（翼 三編上冊）



腹證奇覽翼 三編上冊

遠江浜松 和久田寅叔虎 著

門人豊前中津 原田 養賢 校

118、大承氣湯の證 (翼 三編上冊)

夫れ大承氣湯は、実熱・陽明正證を見すものを、主治する所の寒劑にして、其の施治の変に應ずるもの多端、長沙の論至れり尽せり。

然れども、善く読まざるものは、或は之を畏ること、蛇蝎の如く、或は之を狎すること、茶飯の如し。之を畏るものは、用うべきを見て、敢て之を用いず、坐して其の斃を見るに至る。之を狎るものは、用うべからざるに於て、妄りに之を用い、従に病者をして、困苦せしむるのみ。

余、世の妄りに古方を玩ぶものを見るに、大率、放蕩無頼の徒・朝に産を失なえば夕に医となり、其の業を肆い術を脩するの違あらざるに、直ちに肆に之き、書を買ひ、私に以つて糊口の資として、以て世の営みをなすもの。一は其の簡便施しやすきにとり、一は其の過高眩し易きに取り、妄意に人を療じて、生命を戕賊するに至るもの多し。

若し夫れ、世家世祿の医は、旧習に因仍し、固く空論を守り、偏に補益に僻して、終に仲景の心事を知らざるもの多し。是れ、余が諄々として方意を弁じ、章句を釈するゆえんなり。

固より大方の君子に示すにあらず。読むもの、其の老嫗師の兒女子に誨告するに似たるを笑うことなかれ。抑々仲景の大承氣を論ずる遺闕なしといえども、頗る深邃の旨多くして、初学に便ならず。

呉有可、之れを述べて、其の施用を弘るもの、大いに後進に益あり。故に併せて、其の要領を掲挙して、加うるに試験の説を以す。

119

大承氣湯の證Ⅱ
(翼 三編上冊)



119、大承氣湯の證 (痰 三編上冊)

右図の如く、心下硬く実満して、もしくは心下高く起りて、塊に似たり。覆盂の如きものとは異なり、二編「桂姜棗草黄辛附湯」の図と併せみるべし。

腹一面に脹して、之を按ずに底にこたえ、実して痛み、心下張り痛み、若しくは、腹痛之を按ずに愈々痛み、臍上の動氣、水分の辺にありて、之を按ずに、また実して力あり。

右の少腹に、石を囊に入れたる如き塊物ありて、指頭に応ずるものは燥屎なり。但し燥屎は、腹證にあらわるるを必ずとせず。其の少腹にあらわるるものは、燥屎腸にあるものなり。若し、胃中の燥屎は指頭に探り弁ずべからず。外證に於て之を察すべし。下に詳かにす。

或は、腹脹満するに至らずといえども、心下より臍上迄は、之を按ずれば必らず実して力あり、これを大承氣湯の腹證とす。然れども、腹證のみを取るべからず、必ずや之を外證に對察すべし。

潮熱あり。潮は、うしおのさすことなり。海水の満るが如く、時を期して熱を發す。其の熱、表證の發熱と異なり、惡熱する所なり。然れども潮熱は、他の證にもあり、腹證に對察すべし。

譫語あり。譫語とは、たわごとを言うなり。但し、これにも鄭聲、妄語等の異りありて、勢いなく、分りがたく、グズグズと小言するものは鄭聲なり。

例に曰く、「実なるときは譫語し、虚なるときは鄭声す。鄭声は妄語なり」

口舌の診、もつとも審らかにすべし。唇燥裂、焦色、若しくは唇口皮起り、口臭く咽乾き、氣あつく、舌の白胎は漸く黄色に変じ、或は、黒胎に芒刺を生じ、或は舌裂、或は縮まり、或は硬く、或は卷き、或は白胎にして乾硬砂皮の如し。

舌胎厚くして乾燥するは、危篤なり。純黒なるものと同じ。黒色中に微し紅色あるは吉とす。又、黒胎に虚寒のものあり。然れども、芒刺を生ぜず、乾燥せず、却って滑涎あり。又、一證、舌乾燥するもの大虚あり。然れども、亦、胎なくして乾燥し、皺よるものあり。よくよく診すべし。

鼻孔は煤黒く、目は赤く、或いは頭脹痛、善く大息し、小便赤黒く、涓滴痛みをなす。或いは、臭氣が鼻をつき、手を揚げ、足を躡うち、衣を循で、牀を探る。

手を循で、牀を探るにも虚実の二候あり。

もし、小便利せず、大便せざること、五・六日以上十余日に至り、失氣を転じ、極めて臭し。或は大便秘閉。大便膠の如くにして惡臭す。或は熱結、旁流、下利純臭水にして全く糞便なく、毎日三・四行、或は十余行あるなり。結糞下るを度として、頻りに本方を用う。

不食、大便をせざること、五・六日以上にして善く食するものは、瘵熱裡にあり、善く穀を消するものとす。抵当湯の證にして、本方の證にあらず。

本方は、大便せず、燥屎となるをもつて食すること能わず、燥屎を候うの法、数条あり。下に詳かにす。腹候を第一とす。

以上、大承氣湯の溫疫、傷寒等の患に於ける腹狀外證の大概とす。

その他、天行痢、この方を以って、疏瀉第一の法とす。腹狀、亦た心下硬滿し、腹實滿するを以って、この方を与うべし。もつとも、裡急後重、臭惡の赤白を下利し、脈滑なるを以て、外候とすべし。その他、施用は多端なり。宜しく下の文に照して、考試すべし。

論に曰く、「陽明病、脈遲にして、汗出づると雖も、惡感せざる者は、其の身、必ず重く、短氣、腹滿して喘す。潮熱ある者は、此れ外に解せんと欲すなり。裡を攻めるべきなり。手足濇然として汗出づる者は、此れ大便秘に硬きなり。大承氣湯之を主る」

脈、浮にして數なるもの、熱内攻すれば沈実にして遲にいたるなり。汗出て惡感するもの、表證とす。

今、汗出づといえども、惡感せざるものは、亦熱内攻するなり。熱内攻すれば、其の身は必ず重きを覚う。是、表水の身重きと異なり、熱氣内に実して、外に発せざるによるなり。短氣も内実して、息がこもりてせわしくなるなり。腹滿して、氣咽喉に上攻するゆえ、喘するを以て腹滿し、而して喘すという麻黃湯の「喘して胸滿す」とは、主客の異りありと知るべし。

さて又、此の腹滿は、心下より一面に脹滿して、之を按ずに、底に力ありて硬く、且つ痛みを知るなり。潮熱は内実の證なり。汗出、若しくは喘するものは胃外の證なれども、今已に腹滿、脈遲、潮熱等の内実の證を見すものは、外證は解せんと欲するものとすれば、裡を攻めて下すを可なりとするなり。

澱然、汗のジトジトと流る貌をいう。手も足も一体に、ジトジト汗が流れ出づるものは、胃中に熱入り

て津液を乾すに因つて、津液が外に走つて、油のごとき汗がいつる。此れは、大便已に硬くなりて、燥屎となるの候とすれば、大承氣湯を主として之を攻め下し、実熱を瀉すべしとなり。

「若しくは、汗が多く、微発熱・悪感する者は、外は未だ解せざるなり。其の熱、潮せざるは、未だ承氣湯を与うべからず」

若し汗が多くとも、微熱、悪感があれば、外證いまだ解せざるなり。此れにては内に対するゆえ、すべて表證を外と云うなり。且つ其の熱、表證の發熱にして、潮し來らざるものは、内実燥屎の候とせざるゆえ、未だ大承氣を与うを可とせざるなり。

未だ、と言うときは、此の證はやがて外解して与うべきに至るをいう。

「若し、腹が大いに満して通ぜざる者には、小承氣湯を与うべし」

外證解せず、熱潮せざる間は、裡を攻め下すことをせず、外を解するをまつが法なれども、若し腹が大いに満して、大小便の通ぜぬときは、之を攻めて下さずんばあるべからず。

なれども、燥屎の候なければ、芒硝を用うべからざるを以て、小承氣湯を与うべきなり。

是も「之を主る」といわざるは、外證があるゆえに、此の證があれば与うべしとなり。

「陽明病。潮熱、大便の微硬する者は、大承氣湯を与うべし。若し硬からざる者は、之を与えず」

潮熱あれども、大便秘からざるものは、大承氣湯の證にあらず。大便の微硬を見れば、与えて可なる者なり。

「若し大便秘せざること六七日は、恐らく燥屎有り」

此の證は、陽明病にても劇證にあらざるゆえ、潮熱の一證ばかりにして余證なければ、むざと大承氣をも与えられず。されども、大便が通ずるを見て、微し硬を詳らかにすれば与うべけれども、若し、六七日も大便秘せざるときは、恐らくは燥屎となりて、通ずることを得ずにあるべしとなり。已に大便通ぜざれば、硬や否やを知るべからざるゆえ、試法を用るなり。

「之を知らんと欲するの法は、少しく小承氣湯を与え、湯・腹中に入り、失氣を転ずる者は燥屎有り。乃ち之を攻む可し」

失氣を転ずとは放屁なり。小承氣を少しのめば、薬がぬるきゆえ下利するほどに至らず、放屁するものは、燥屎あるの候なれば大承氣にて攻むべきなり。

「若し、失氣を転ぜず、此れ但、初頭硬の後、必ず漉するは、之を攻むべからず」

初頭硬は、初めに通ずる所のひとときは、硬くして、其の後通ずるものは驚漉するなり。此れは、燥屎とらざるゆえ、少しの小承氣にても、やわらいで通ずるなり。是は攻め下すべからざるなり。

「之を攻むれば必ず脹満し、食すること能わざるなり。水を飲まんと欲する者は、水を与うれば則ち嘔す」

大承氣を以て之を攻むれば、水氣が却つて胃中にあつまりて、必らず脹満するなり。脹満すれば、食事もできぬなり。攻め下すによりて、咽喉かわき、水を飲まんと欲することあれども、水を与うれば、腹に水氣あるゆえ嘔逆して受けざるなり。並びに、胃口の水氣あるによるものなり。

「其の後、發熱する者は、大便復た硬くして少しなり。小承氣湯を以て之を和す」

其の後、潮熱を發するものは、腹中の水氣去つて、大便復た硬なるの候なり。

然れども、一旦下るの後なるを以て、其の大便秘といえども大承氣を与うべからず。やはり小承氣にて之を和して、大便をやわらげ下すべきなり。

「失氣を転せざる者は、慎んで攻む可らざるなり」

此の證は内実の熱劇からず、熱少きを以て、妄りに攻むべからざるを以て、再び此の語を以て結ぶなり。されども燥屎あれば、大承氣を用いずんばあるべからざるを以て、此の試法を設けて之を審かにするなり。前後大承氣の證具つて疑うべからざるものは、此の例にあらざるなり。

「傷寒、若し下後も解せず、大便せざること五六日以上、十余日に至り、日晡、潮熱を發する所・悪感せず、独語し鬼状を見る如し」

独語は相手なしに語るなり。鬼は鬼神なり。独語中に鬼を見るの状の如きことあるなり。状は、ありすがたなり。

「若し劇しき者・發すれば則ち人を識らず、衣を循で、牀を摸り惕れて、而して安からず。微喘、直視、脈弦なる者は生く。濇なる者は死す。微なる者は但発熱す。譫語する者は、大承氣湯之を主る」

前證、若し劇しきものは潮熱を發すれば、人事を識らず、衣を循でて牀を摸りて恐惕して、席に安臥せず、微し喘し、直視して目瞶かず。

此の證、脈弦なるものは生くべし。濇なるものは死すべし。生くとは、承氣を以て起しむべきをいう。死すとは、之を攻むとも益なきをいうなり。微は沈微なり。実熱抑遏して脈、沈伏してなきことくなるをいう。発熱は潮熱を發するなり。

言うところは、脈微なるものも、但、潮熱を發し、譫語する者にして、余證なきものなり。

案ずるに、前の二章は、陽明病にして外證の有無に拘わるもの、前後輕重ありといえども、尚、大小承氣の二途にわたりて、其の病勢、較緩なりとす。

此の證は、傷寒日數を経て、内実するに至り、劇しきものは、昏冒して人事をしらず、死生の機に關る尤も危篤のものとす。故に「之を主る」といいて、復小承氣の試法を施すに及ばず、始めより攻め下さすんばあるべからざる所のものなり。但、脈證澀澀にして力なきものは、攻むるとも益なしとす。是れ死生の機なるものなり。

「陽明病 譫語、潮熱ありて、反って食能わざる者は、胃中に必ず燥屎有るなり。大承氣湯に宣し。若し能く食する者は但だ硬のみ」

譫語、潮熱あるは、内熱あれば善く穀を消して食を能くすべきに、反って食能わず。此れ、胃中にぜひ燥屎ありとす。然れども食能わざるものは、燥屎のみにあらず。前の之を攻むるに、脹滿し食能わざるものは、水氣の致す所なり。故に、此の一證にして、大承氣の正證とすべからざるを以て「宣し」というなり。

言うは、燥屎あれば大承氣によるしきなり。宣しきは、ふさい相應するという義なり。若し能く食する者、但は硬のみは、是れ小承氣を与ふべきの證なり。

「陽明病。之を下し、心中懊憹して煩。胃中に燥屎有る者は、攻む可し。腹微滿、初頭硬く、後、必らず瀉

するは、之を攻むるべからず。若し燥屎有る者、大承氣湯に宜し」

此の章は、梔子豉湯ししきとうの疑途ぎとを弁ずるなり。

之を下して心中懊憹おなうするものは、梔子豉湯の證なり。然れども、梔子豉湯の證は、心下濡じゆにて実満せず。此の證は、腹実満して心中懊憹す。故に其の実満を按じて、胃中燥屎あるの候とす。大承氣にて攻むべきなり。もし腹実満すといえども、其の満微なるものは、いまだ燥屎とならず。是、小承氣にて和すべきものにして、大承氣にて攻むべからず。

若し燥屎あらば、其の燥屎を攻むるだけに大承氣を用ゆべし。故に「宜し」というなり。

「病人、大便せざること、五・六日、繞臍痛にようさいつう、煩躁し、発作時に有る者は、此れ、燥屎有るが故大便をせざら使むるなり」

此れは、燥屎有るを知るの一法なり。此の證、亦腹実満に対して、之を得べきなり。

大い下し、後六・七日、大便せず、煩して解せず、腹満痛む者は、此の燥屎有るなり。大承氣湯に宜し」

此の證、前の二章の證をあわせて、燥屎を候うかの法をあぐ。煩解せずは、前の心中懊憹して、煩及び煩燥、発作時に有りと応ず。腹満は、前の腹微満云々、攻む可らずと応ず。痛みは繞臍痛と応ず。故に燥屎の候とす。

「病人、小便不利、大便秘と乍り・易と乍り、時に微熱有り、喘冒ぜんぼうし臥すこと能わざるは、燥屎有るなり。大承氣湯に宜し」

小便不利にして、水気胃中すいきいちゆうに入るときは、大便通じ易し。然れども、此の病人内熱あるを以て、乍ち通じ難しと思えば、乍ち通じ易くして、一定せざるなり。

時々微熱を發し、發するときは水氣胸咽に上衝して、喘息鬱冒して、安臥すること能わず。起きて、物に倚りて息するなり。

夫れ、既に大便難、微熱ありて喘するものは、表證にあらず。内熱の候とす。短氣腹滿して喘するもの、承氣の證とすれば、此の證も亦、燥屎ありとするなり。此れ皆、一時の変證、故に宜しといいて、「之を主る」といわざるなり。

「病を得て二・三日、脈弱く、太陽柴胡の證無く、煩躁して心下硬きは、四・五日に至って能く食すと雖も、小承氣湯を以て少々与え、微しく之を和し、小安にせしめ、六日に至り、承氣湯一升を与う」

病を得て二・三日、脈弱にして実ならず。然れども、太陽柴胡の證もなく、煩躁して心下硬きものは、内実の候とするなり。夫れより四・五日に至りて、食も能くすすみ、大承氣を用うべきほどの実熱に至らずといえども、小承氣を少々与えて、微しく之を和して、其の煩躁をして小しく安からしめ、六日に至りてなおらぬ病人ならば、此れにて決して、大承氣一升を与えて下すべきなり。

「若し大便せざること六・七日、小便少き者は、食能わずと雖ども、但、初頭のみ硬く、後は必ず溼す。硬の未だ定成せざるに之を攻むれば、必ず、溼す。小便利し・屎の定まり硬くなるを須らて、乃ち之を攻む可し。大承氣湯に宜し」

此の病人、若し大便せざること、六・七日、小便なきものは、食すること能わずして燥屎を成すがとしいえども、小便少きを以て胃中に水氣ありとすれば、未だ便を定り成すものとすべからず。小便利するまでは、小承氣にて微しく和して、尿定って硬をまっつて、乃ち攻め下すに大承氣を用うべしとなり。

此の病人、腹證は心下硬、煩躁あれば、承氣の證にとるべしといえども、其の脈・弱なるを以て直に之れを攻めずして、其の便の硬澁を審らかにするもの、慎しみの至りなりと知るべし。

「傷寒、六七日、目中了々たらず。睛和せず、表裡無きの證、大便秘、身に微熱する者は、此れ実と爲すなり。急に之を下す。大承氣湯に宜し」

目中了々たざるとは、睛子の明了ならざるをいう。睛和せずとは潤沢なきの謂なり。「表裡無きの證」とは、六・七日は表證、及び裡の時にして、寒熱往来、胸脇苦満等の證あるべき日数にして、其の證なく、大便秘なく身に微熱あるものは、此れを邪氣直ちに内実するものとするなり。

外證劇しからずといえども、内実の勢い已に迫る。急に之を下して、忽にすべからざるなり。

「陽明・發熱、汗多き者、急に之を下すに、大承氣湯宜し」

陽明病・發熱、惡感無くして、汗多く出づるものは、胃中の津液、熱に驅られて出づるものとす。内実の機、已に迫る。攻め下すを忽緩にすべからず。

「発汗解せず、腹満痛する者、急に之を下すに、大承氣湯宜し」

発汗して、熱解せずして、腹満痛するものは、亦内実の候なり。其の來ること速きを以て、急に下すべきなり。

「腹満減せず、減ずるも言うに足らざるは、当に之を下すべし。大承氣湯に宜し」

腹満するもの、之を下すも減せず、減ずれども、其の減が言うに足るほどのことなきは、之を下すに相

當のことにて、腹滿の消するまでは大承氣湯を用うべしとなり。此れは前の腹滿を受けて言うものとす。

「陽明・少陽の合病必ず下利す」

此の下、「其の脈不負者云々」の十九字、後人の僥入なり。故に之を刪る。

「脈滑、而して、數なる者は、宿食有るなり。當に之を下すべし。大承氣湯に宜し」

陽明・少陽の合病は、惡寒無く、但熱して心下痞硬、下利するもの。其の脈、滑にして、力ありて數なるものは、下利すといえども、宿食停滯してあるものとすれば、下して之を去るを當れりとするなり。

「少陰病・之を得、二・三日口燥き、咽乾く者、急に之を下す。大承氣湯に宜し」

少陰病は、熱なく惡感する病なり。其の病を得て、二・三日経つか経ぬに、口燥き、咽乾くものは、是、少陰の正当にあらず。内、氣血のせまるもの、胃中の津液を乾かすものにして、尤も篤劇の證なり。故に、急に之を下すべきなり。此れ、外熱状なくして、専ら内迫の候とす。故に但、口、咽に於て之を知るなり。

「少陰病・清水を自利し、色純み青く、心下必ず痛み、口乾燥の者、急に之を下す。大承氣湯に宜し」

少陰病、自から下利して、其の下利するもの消たる水ばかりにて、食便通ぜざるなり。顔色純青になりて、心下痛む。此の痛みは、心下痞硬して痛むなり。故に、顔色純青になりて紅色なきなり。故に「必」の字を下すもの見るべし。

口乾燥するものは、是れ食便胃中に結実して下らず、氣血内迫して、胃脘に実するものとす。これも外證が少陰病ゆえ、口中にて内実の状を候うものとするなり。

「少陰病・六・七日、腹脹すくも 大便せざる者は、大承氣湯に宜し」

これも、外證は少陰病なれども、腹満して脹り、大便せざるものは、胃中の実熱ありとするゆえ、大承氣を与えるなり。是れ三證、少陰内攻の熱にて、邪熱の致すところにあらざるなり。

以上、傷寒論・大承氣湯を用いるの證を論ずるものなり。

而して、其の「之を主る」というものあり。是れ、其の脈證全く具わりて、復た疑うべきもなく、正證たるを以て言うものなり。

或は云う、「与う可し」と。大承氣兩途にわたたりて之を言うものなり。大便硬きものは与うべし。硬からざるものは与うべからず。是なり。

或は云う、「宜し」と。其の脈證全くは具そなわらずと雖も、他方に於てせずして大承氣湯に宜しきをいう。

或は云う、「乃ち之を攻む可し」と。小承氣湯を少し与えて、和すべきに對して之をいうものなり。攻撃すべからざるの疑途に於て、之を審かにするものなり。

或は云う、「急に之を下す」と。其の證を発すること次序なく、迅速なるを以て緩慢なく急下すべきを云うなり。他、大小承氣の疑途にわたるもののごときは、その日數ひかず並びに大小便の候を審かにして、是を用いるもの、急遽きゅうそならずとす。此の證、其の來ること次序なきを以て、陽明・少陰・表裡の證を問わず、之を見て便下らざれば、壞證とならんことを恐れて、急に下すべしというなり。

或は云う、「當に之を下すべし」と。其の證、大承氣を用いて之を下すというに、其の病證のはずが合いて、あることなり。

或は云う、「乃ち之を下す可し」「以て之を下す可し」と。其の病證のなりゆきが、今之を下すというに、は

りあつてたつということにて、其の病證の時刻が、之を下してよき時分に、はりあいたるをいうものなり。或は云う、「之を下せば愈る」と。其の病、之を下せば愈えて後、治に及ばざるをいうものなり。

是、其の変證多端にして、其の緩急輕重の応用、挙げ尽すべからざるが如しといえども、之を要するに、外にしては潮熱、譫語、内にしては心下硬、腹滿痛、大便秘、若しくは尿燥の候を審かにして、内外相応するときは大承氣湯を与うべきなり。

但、少陰の変證、尤も急劇にして、内外相応せざれば、専ら之を口燥き、咽乾き、腹滿に取るのみ。然るときは、他に、口燥き咽乾く等を言わざるものといえども、並びに此の口舌の変あること推して知るべし。読むもの、参互錯綜して、其の要領を自得すべし。委しくは、本書に就いて之を審かにすべし。此に論ずるに遑あらず。」

又、専ら下利の病に於て、大承氣を用いるものあり。金匱に其の證を詳かにす。

此の下利、後世所謂、痢病の謂にして、熱実疏滌すべきものに於て之を言うものなり。故に其の便、皆必ず、腸垢、臭穢、赤白、惡濁。然らざれば、所謂、熱結、純臭水を旁流す。或は臭穢中に結糞を雜え下すもの、皆、実熱胃内にあるものとす。

是を以て其の證、必ず心下硬く、腹実滿す。此の心下硬きこと甚だしきものは、実熱胃口を閉塞するの候にして、下利窘迫、食進まず、脈滑実、或は噤口危きに至り易し。必ず承氣を用うべし。

不食、脈滑実、或は緊大にして実、或は遲にして滑、或は微にして実なるを以て、之を候うべし。若しくは、夫の口舌の診、亦前に例すべし。或は下利、熱毒、当に其の時之を尽さざるもの、差て後、其の月日

に至れば復發するものあり。此亦、大承氣湯の證なり。

案ずるに、近世痢病の治論（さちまじ）区（く）区（く）なり。或は曰う、熱なり。或は曰う、熱に非ず、寒湿なり、と。遂に疏（そ）疎（そ）温補（うんぽ）、千里の差（ちが）い過あるを致す。

其の證を密かにするに、初め泄瀉より来るといへども、数十行の後、帯血或は赤白、裏急、後重、身熱し煩、渴、腹痛、舌苔等の證を見わすもの、熱候にあらずということなし。

但、其の初めに表證あるものは、或は葛根湯、或は桂枝加大黄を以てして、軽きものは愈えを告ぐ。若し其の度数倍加し、窘迫（きんぱく）頻りに至り、腹痛甚だしく、口乾き、舌乾くものは、先ず之を腹に候う。其の邪、心下にあつまりて、之を按ずに硬く、脈滑実をあらわすものは、初めより大承氣湯を用うべし。較輕（やうけい）ものは、檳榔（びんろう）承氣湯、瀉下（しゃげ）の丸薬を兼用して可なり。鯉胆丸の方、尤も妙とす。然れども、製法密なるを以て、口授にあらずれば伝えがたし。或は紫円玉丹、或は杏巴円、一粒丸等巴豆あるものを佳とす。

若しくは、純膿血を下し、痞硬甚だしからざるものは、三黄瀉心湯。少腹急結するものは桃核承氣湯。心下痞、腹拘急して痛むものは黄芩湯。或は熱利下重・渴し水を飲まんと欲するものは、白頭翁湯の類・證に隨いて、之を用うべし。

若し渴して水を求むものは、厭（いと）まで之を与うべし。決して温薬、及び止瀉（しりやう）の劑を投することなかれ。

民間・市鄕（いちやう）に瀉（しゃ）と云ふところの、如神丸、痢病丸と称するものの類、大率、阿片（あへん）、鴉粟（おうえき）殺の類。止瀉（しりやう）の薬は忽ち惡證を生じ、救うべからず。此の薬、近ごろ深山幽谷の民家までに及び、知らざるものを用いて、以て害を致

すもの少なからず。偶之を得て愈ゆるものは、内熱薄きもののみ。慎んで服すべからず。他の温物、食餌、皆禁す。

若し噤口痢に至りては、尤も熱毒上攻し、胃口を閉塞するものとすれば、誤つて温補せば万に一生なからん。此の證、水を欲せば、頻りに井華水を与ふべし。煎湯は尤も承氣にあらざれば可ならず。若し小兒、湯液を飲むこと能わざるものは、丸菓を以て下すべし。或は井華水一鐘、蘿蔔、自然汁少し許りを加えて、黄金水と名く、之を与ふを可とす。或は蘿蔔汁一味、一大盞を喫するも佳なり。

余 龔に遊歴するの日、下毛野州檮木郷に到り、上原宗甫の家を主とす。

宗甫、余に従いて、診腹及び刺絡の術を問うこと深切なり。一日宗甫、余に語りて曰く。

「予家、天行痢を療する試験の良法あり。其の初め水瀉救行、血を雜えて肛門窘迫を覺えるときは、直ちに新汲水を飲ましむること數十碗、殆んど腹に滿つるに至つて止むときは、忽ち利止み、熱解して常に復す。若し猶尚止まざるときは、直ちに流水に起き、腰以下を漬すること一小時計、治せずということなし。

小兒、噤口、危篤に至るものは、浴盆中に新汲水を満しめて、全身を漬して解すべし。万に一を失せず。但、世俗に、其の大奇を驚きて敢てせざるを憾むのみ。其の近隣、見聞に慣うものは、亦能く此の法を以て救うことを得」といへり。

此れ正法に非ずといえども、痢の熱毒たる、是に於て考え得べし。

又、瘧病に大承氣湯と葛根湯との之所あり。

「其の汗無く、而して小便反つて少く、氣上つて胸を衝き、口噤して語を得ざる」ものは、葛根湯。

「胸滿、口噤、臥して席に著かず。(反張して席に著かず)して、脚蹙急必ず斷齒」のものは、大承氣を与うべし。又、産後惡露尽きざるものに用う。

證に曰く、「産後七・八日、太陽證無く、少腹堅痛するは、此れ惡露尽きざるなり。大便せず、煩燥、発熱。切脈は微実、再倍す。日晡時に發熱・煩燥して食せず。食すれば則ち譫語、夜に至って即ち愈ゆるは、大承氣湯に宜し」

太陽の證・惡感、發熱の類の表證なり。脈微実は、沈微にして実なり。再倍發熱は、二度目は初めより發熱一倍つよきなり、日晡時に煩燥するは、日晡時に發熱するゆえ、煩燥するなり。不食は、大便せず・燥尿を成すによるなり。

此し文、脈經に云う、「煩燥する者は、能く食せず。譫語之を利すれば則ち愈ゆ。」と、彼の文を以て是とすべし。

「夜に至り即ち愈ゆる」は、夜に至って、熱退くときは譫語せざるなり。

此の證、血證なり。若しくは能く食して大便秘といえども、反って易きものは抵当丸を用うべし。今、大便せず、譫語するを以て大承氣湯の證とするなり。乃ち、前の諸證と一例なりと知るべし。

又、「痘毒劇しく、煩して渴し、譫語、寒戰咬牙、角弓反張・紫黑陷伏は死に向うもの、此の方を用うべし。

或は云う、「痘瘡・天庭起脹せざる者を、陽明食毒の候とす。大承氣湯に「さふらん」を加えて功あり」と。或は曰く、「小兒、前齒の遅きものを食毒ありとす。此の方を丸とし、用いて効を得たり。又、數骨斂す

るものに用いて効を得たり。亦、陽明の与る所による」と。

案に、此の方、厚朴枳実を以て、胸腹の間の痞満を開き、結水を解き、胃口を豁にし、芒硝堅を更け、燥を潤し、大黃よく実熱を蕩滌（除き去る）す。

吳有可、曰う。「芒硝は堅を更け燥を潤おす。下を失することを久しく病めば、結糞然たるもの無しと雖ども、粘膩結し・惡物を臭わしむ。芒硝・大黃を則するを得ば、蕩滌の能・有り」と。此の言、之を得たり。



120

厚朴大黃湯の證 (翼 三編上冊)

并小承氣湯

120、厚朴大黃湯の證（翼 三編上冊）

図の如く、胸満して心下に支飲あり。結実して大便硬く、或は秘閉して、時に心下痛み、或は水を吐くもの、厚朴大黃湯の證とす。

枳実・胸膈間の痰飲結実するものを治し、厚朴・痞満を開く。大黃之に和して、宿食硬便を利して腸胃を疏滌す。

證に云う、「支飲胸満する者は、厚朴大黃湯之を主る」と。此の方たるや、小承氣湯と藥味を同じくして、但、分量の差あるのみ。厚朴大黃湯は、厚朴を君とし、枳実を臣とし、大黃を佐とす。故に胸満を治するを主として、疏滌を主とせず。

小承氣湯は、大黃を主とし、枳実を臣とし、厚朴を佐とす。故に、大便硬く、若しくは不通を利するを主として、腹證は但、腹微満、心下硬をいうのみ。是れ、古方の分量を詳かにする所以なり。

論に曰く、「陽明病。其の人汗多く、津液外に出るを以て胃中燥し、大便必ず硬し。硬きときは則ち、譫語す。小承氣湯之を主る」。

汗多く出づるを以て、津液外に出て、大便必らず硬きものは、内実に至るといへども、其の硬きもの、汗出るによるものは、内実の熱勢甚だしからず。全く実熱の致すところにあらず。故に大便硬といへども、燥

尿にいたらざるなり。

「陽明病。譫語、潮熱を發し、脈滑にして疾者は、小承氣湯之を主る」

譫語、潮熱を發するもの、内実の證に似たりといえども、脈滑にして、疾速なるものは、結実せざるの候とするゆえ、大承氣湯を用いず、此の方の主治とするなり。疾は、はやき脈なり。

以上二證を合して、小承氣湯の脈證とすべし。其の小承氣の弁の如きは、大承氣湯の下に詳かなり。要するに、心下硬く・腹微滿して・大便硬通するもの、或は譫語・或は潮熱等・内実の證ありといえども、小承氣湯の證とすべし。

此の方、檳榔・芍薬を加えて、檳芍順氣湯と名づけ、痢病の腹痛・裡急後重を治す。瘟疫論によるべし。

121

厚朴七物湯図
こうぼくしちもつとう
（翼 三編上冊）



121、厚朴七物湯の證 (翼 三編上冊)

図の如く、腹一面にはり満ちて大便硬く、発熱、脈浮なるものを厚朴七物湯の腹證とす。

但、腹満すといえども、鼓脹の腹状と異なる。鼓脹は、必ず青筋あり。別に詳かにす。此の方、厚朴大黃湯と桂枝去芍藥湯と合方するものとす。故に、表裡を兼ねるの治あり。

證に曰く、「腹痛を病み、発熱十日、脈浮にして、飲食し、故の如きは、厚朴七物之を主る」

病、発熱してより十日に至り、腹満すれば、不食して承氣の證にも至るべきもの。脈も、表證の浮にして、飲食も已前の如くにて、不食にも至らざれば、表證もあり。又、腹満すれば、肌表ばかりのことにあらざるゆえ、桂枝にて肌表を和し、厚朴大黃湯にて、腹満を解するを以て、二方を合するの意なり。

此の方、夏月の下利、腹はり・痛み、裏急後重して発熱するものに用いて効あり。或は疝氣にて、腹痛甚だしく、腹満するものを治す。此れは、方中、生姜の分量多きを以て、寒を散らすの意あり。若しくは、嘔するものは半夏を加う。

或云う、「丸として、食毒あるものに用いて可なり」と。

厚朴生姜半夏人参甘草湯は、胸腹脹満、痰飲あるものを治す。

論に曰く、「発汗後、腹脹満する者、厚朴生姜半夏甘草湯之を主る」

発汗後というは、表證ありて解したること明かなり。而して、腹脹満するは、熱実の致すところにあらず、胸腹の間、痰飲水気あるもの、加うるに氣逆して脹満をいたすものなり。故に、厚朴を以て脹満を解し、半夏・生姜を以て、胸腹の間に水を逐い、人参・心下を開き、甘草・急をゆるくす。相和して、以て脹をゆるめ、満をとくなり。

此の方、胃虚・嘔逆・痞満・不食のものを治す。此れ腹脹満をいうといえども、前の厚朴七物・厚朴大黄湯のごとく、之を按すに、実せざるものと知るべし。此の満、全く氣満なり。故に本文、腹脹満をいうといえども、胸腹痞満するものと知るべし。

附 古今録驗 遊氣湯

厚朴・茯苓（各八分） 人参・牡蠣・甘草・梔子（各四分） 桂枝・半夏（各二分） 葛根（六分） 生姜（一錢六分）

右十味、水一合八勺を以て、六勺に煮、頓服す。

證に曰く、「厥逆は蔵氣余り有り、寒氣虚勞、憂氣驚氣、其の人善く悸、胸中或は上下を塞ぐこと無常、悲傷多く、四肢に流る。臍の四辺核有り、遊腫、大便不利を治す」

案ずるに、此の厥逆は、氣逆して胸腹にせまるゆえ、手足に達せずして厥逆するなり。

「蔵氣」は、腹内の氣なり。「余り有り」とは、胸腹に満ちてもあまりあるゆえ、痞満するに至るなり。

「寒氣」は厥逆して寒きなり。虚勞は四肢やせて「疲勞」するなり。「憂氣」は、ものを苦にするなり。「驚氣」は、物にびっくりするなり。「其の人善く悸」は、とかく物に驚き、物を苦にしては胸騒して、胸中心下ダクダクと躍るなり。「胸中或は塞」とは、時に氣満して胸一ぱいになるなり。「上下無常」とは、氣痞のことゆえ、或は上にふさがり、或は下につかえ、常になきなり。「多く悲傷する」は、憂氣、善悸の応なり。「四肢に流る」とは留飲が四肢に流ることあるなり。「臍の四辺核あり」とは、結核のかたまりたるものあり。「遊腫する」とは、あちらこちらと腫があるくをいう。蓋し、四肢にながれて遊腫するなり。「大便秘」とは、大便もこころよく通ぜざるなり。

此の方、前の厚朴生姜半夏甘草湯に、桂枝・茯苓・牡蠣・黄芩・梔子を合せたる方にして、其の氣滯り、痞滿の證あるものは、前方と同意にして、加うるに心下悸、腹中動氣有りて、衝逆、心煩するの證あるものとす。

是に因つて考えるときは、前方の證、氣鬱滯、痞滿を主治するの意を知るべし。

此の方、予、いまだ試験せざるといへども、原の方、厚朴生姜半夏甘草湯に出て、其の證を挙ぐるもの、詳かにして用いて、以て氣滯、痞滿、氣上衝悸して煩すること、本文の言うところのものに用いて功あるべく、且つ前方の證と参考にするに足るを以て、此に付記して他日の試験をまつ。読むもの審思して施用すべし。

122

調胃承氣湯図（要 三編上冊）



122、調胃承氣湯の證 （翼 三編上冊）

図の如く、腹微滿して、心下より臍上までの間、之れを按すに硬くして、微痛を覚えるものを、調胃承氣湯の腹証とす。然れども、此の方、外證に審かにして、胃の氣の和せざるを知ることを肝要とす。徒らに腹証のみを取るべからず。

論に曰く、「発汗後、惡寒するは虚する故なり。惡寒せず、便ち熱するは、実するなり。当に胃の氣を和すべし。調胃承氣湯を与う」

発汗後、表證解して惡寒するものは、汗によって津液を亡ぼし、精氣虚して惡寒するなり。これは、消息して時を移せば不治して、自ら愈ゆるものとす。

惡寒せず但だ熱ばかり発するものは、胃内実熱の候なり。凡そ、發熱惡寒すれば表證なり。往來寒熱すれば裡症なり。今、汗の後、熱ばかりなるは、内実なり。然れども、汗の後、津液外出して、此の内実は候あるものとすれば、容易に攻むべからざるを以て、此の方を用いて燥を潤し、急をゆるめ、大便を通利して、胃中の氣を調和すれば愈ゆべし。

若し愈えずして、真の内実の證をあらわすときは、大承氣を与うべきを以て、後治を含みて、調胃承氣湯

を与うというなり。」

「太陽病、経を過ぎて十余日、心下温々吐せんと欲して、胸中痛み、大便反って澹、腹微満、鬱々微煩す。先づ此の時、自ら吐下を極むる者は、調胃承氣湯を与う」

太陽病、十余日を過ぎて、柴胡の胸満を致すべきころに、心下温々として吐せんと欲して、其の度ごとに胸中痛み、大便硬かるべきもの反って澹く、腹微満し、鬱々微煩するものは、病の自然にあらず。

此れより先に、自ら他薬を服して、吐下を極めたるより、氣逆して其のあとにまだ調和せざるものとす。

吐後、薬氣いまだ尽きざるゆえ、温温吐せんと欲するなり。下後、薬氣尽きざるゆえ便澹し。且つ柴胡の満なれば胸満すべきに、腹満して微煩するは、吐下後の胃氣調和せざること、明らかなるゆえに、調胃承氣を与うべきなり。此の證にて調胃承氣の腹候を知るべきなり。

「若し尔らざる者は与う可らず」

吐下を極めざるものは、此の證をあらわすといえども、調胃承氣の證にあらず。此れにて、此の方を調胃と名づくるの意を知るべし

「但し嘔を欲し、胸中痛み、微澹する者は、此れ柴胡の證に非ず。嘔を以て故に、吐下の極まるを知るなり」

但し嘔を欲せば、前の温々なり、胸中痛み、微澹するもの、煩胡の證にあらず。嘔を以ての故に、吐下を極むるを知るとなり。此の文、蓋し注文諺て正文に入るものとす。

「傷寒十三日、解せず経を過ぎ、譫語する者は熱有るを以てなり。当に湯を以て之を下すべし」

譏語するものは、内熱あると候とす。凡そ内熱実するものは、湯藥にて下すを法とす。丸藥にて下すときは、水氣のみ去つて、熱氣は退かざるものなり。

「小便利する者は、大便当に硬かるべし。而るに、反つて下利す。脈調和する者は、医・丸藥を以て之を下すを知る。其の治に非ざるなり」

凡そ、自ら下利のものは、脈に微脈みけつの状をあらわすべきに、脈は調和して、居ながら下利するゆえ、自然の下利にあらざるを知るなり。是れ、丸藥にて下したる故、其の治法に非ずして胃氣の不和を致すなり。

「若し、自ら下利する者は、脈当に微脈すべし。今、反つて和する者は、此れ内実と為すなり。調胃承氣湯之を主る」

厥脈は、之を按して初めに來ること大いにして漸々小さく、便すなわち來つて漸々大いなるをいう。是、調和せざる脈なり。脈厥せずして下利し、脈證相反すれば、自然の下利にあらざることを知る。此れ下利ありといへども、内実熱ありとす。法に因つて、湯藥にて下すべきものなり。然るに今、誤治の後に於てするものなれば、其の實を瀉し、兼ねて胃の氣を調ととうべきものゆえ、調胃承氣湯之を主治するなり。若し、之を下さざるものにして、譏語、大便秘きものは、小承氣湯の證なり。

「陽明病、吐せず下せず、心煩する者は、調胃承氣湯を与う可し」

これ亦、前證と同意なり。「吐せず」とは吐劑を用いて吐せざるなり。「下せず」とは下劑用いて下らざるなり。而して心煩するものは、前後にかまわず調胃承氣湯を与えて胃氣を和すれば、吐くべきものは吐かし、下るべきものは下利して、急迫をまぬがれるなり。此の心煩は、急迫によるものとす。「与う可し」と

いうもの、時にあたつての差略なることを見るべし。此の方、甘草ありて、急をゆるむるゆえ、此の治あるなり。考うべし。

「太陽病、三日発汗し、解せず。蒸々として発熱する者は、胃に属すなり。調胃承氣湯之を主る」

「胃に属す」とは内実に及ぶなり。然れども、発汗解せずして、直ちに蒸々発熱して、いまだ潮熱にも至らざれば、胃実の正證とすべからず。故に属すという。此れ亦、発汗後にして余證なし故に、調胃承氣の主治として、誤治のあらざるものなり。

「傷寒、吐して後、腹脹滿する者」

吐して後、腹満消すべきもの、反つて腹満するは、胃氣の和せざるをしるゆえ、此の方を与うるなり。

「調胃承氣湯を与う」

然れども、腹満は此の腹證にあらざるゆえ、若し、此の方にて解せざるときは、大承氣湯を用うべきを以て、之を主ると言わずして、与うるというなり。

以上、諸章を参観するに、或は発汗の後、津液乾きて胃実を見わすもの。或は、丸薬にて誤つて下して、内熱去らず、胃氣和せざるを致すもの。或は、吐下を極めて熱退ず、胃氣和せざるを致すもの。或は、吐下の薬を服して吐下せず、急迫して煩するもの。或は吐して後、腹脹満して病い解せざるものの類、其の内実の證ありといえども、大・小承氣の如き次序によつて来らず、且、内実甚だしからず、但だ治を誤つて、胃氣の調和せざるもの。此の方を用いて内を和緩し、結を解して、以て内熱を去るものなり。故に之を下剤を

用いて後、大便自調せざるもの。法の如く、調和して下後、二、三日も下利止まず、しぶり下るもの、しば數功をとる。吐下の劑を用いて、快く吐下せず、煩悶するものの類、効を得ずということなし。是、予が屢々試験するところなり。

或いは云う、「臍下氣海、石門の辺、左右にぐりつくものあるは、燥屎なり。證、表邪少きを見わすを此の方の證とす、云々」

又、案ずるに、太陽篇乾姜甘草湯を用い、次に芍藥甘草湯にて脚を伸ばし、胃氣和せず、譫語するものに、此の方を用いるも、厥逆煩躁して急迫、胃実を致すところのものゆえ、此の譫語、実熱として攻むべからざるを以て、但、胃の氣不和として、此の方を用いるの意、亦前の諸章と一軌轍なりと知るべし。

又、中焦消渴好んで大食し、身体瘦せ、自ら汗出で、大便硬く、小便數なるもの、此の方に芒硝を倍加し用う。此の證、甘麦大棗湯の證あり。併せ考うべし。

又、久しく年、齒痛、齒斷紫黒、爛水を含みて痛齒を覚えるもの、此の方、及び大柴胡加石膏白虎加黃連湯等之之所を考うべし。齒痛、寒熱二證あり。誤診すべからず。

桃核承氣湯図（翼 三編下冊）



腹證奇覽 翼 三編下冊

123、桃核承氣湯の證 (翼 三編下冊)

図の如く、左の臍傍、天枢の辺より上下、二・三の間、三指探り按するに、結するものあるを得、之を邪按するに、痛み甚だしく、上へ引つり痛むことを覚えるものを桃核承氣湯の腹證とす。

或は臍上、或は臍下も亦結ばるものありて、之を按して痛むといえども、此の左の臍傍に得るものを以て正候として、臍上臍下に及ぶものは其の結の甚だしきものと知るべし。

但だ、之を按して結ぶものを得るといえども、痛み覚えざるものは、急結にあらず。又、之を按して痛み甚だしといえども、其の結ぶもの、指頭にさわりて要なるきみを覚えるものは、血結といえども、此の方の證にあらず。

又、之を按して、痛み腰背少腹に引くものは、此の症にあらず。当帰建中湯、当帰芍薬散、芍薬膠艾湯、猪苓湯の類の腹證とまぎれやすし。各方に委しくす。

且つ、其の結、大小ありて、一定すべからず。蒼卒に診過すべからず。此の結、乃ち瘀血にして、胸腹に逆上す。甚だしきものは、脇下に迫り、胸脇より背に徹して痛み、其の證発作あり。

男女を問わず肝積と称して、左の肝経を攻めのぼるもの、此の證多し。血氣上衝して急迫するを以て、其の人をして性急にして、事に堪えがたからしめ、或は白服多く、其の人狂の如く、事に触れて憤怒し易く、或は器物を擲て其の怒を洩散するの類、常に心腹の間をして急ならしむ。

或は時に頭痛、頭重く、鯁血、鯁血等の患いあり。或いは其の毒、下部に及んで痔疾、脱肛。婦人は經水不利の患いあり。若しくは劇しきものは、作るとときは胸脇逆滿急して、痛み甚だしく、噤口、齧齒、卒倒するものあり。或は心胸に攻め、胸背微痛して、時々苦酸水を吐くものあり。

此の證、左の脇下を上衝するもの、水氣に似て、転下降するときは、左の臍傍に至りて治まる。此の證、或は熱酒を得て治まり。或は牡蠣末・辛廩末等を得て、一旦治るとえども、時を経て、又発すること、留飲に似たり。留飲は、心下に止まり、此の証は、左の臍傍に留るを以て分弁すべし。動氣も多く左にかたよる。

此の方、服して応ずるときは、動氣任脈の行に復す。是れ病に引きよせられたるもの、知るべきなり。其の他、傷寒・瘟疫・痢病等、諸般の雜病、産前後、或は落馬墜損等に、此の方を用いるの證ありといえども、亦、但、腹證を審かにするにあるのみ。

論に曰く、「太陽病、解せず、熱・膀胱に結び、其の人狂の如く、血自ら下る。下る者は愈ゆ。其の外、解せざる者、尚未だ攻む可からず。当に先ず外を解し、外を解し已って、但少腹急結する者、乃ち之を攻む可し。桃核承氣湯に宜し」

これは、表證にして、血證を兼ねるものを論ずるなり。

太陽病解せずして、其の熱が少腹膀胱の辺に結ぶときは、其の人、たとえ此の血證の変を見わすといえど

も、其の表外の熱、解さざるものは、尚未だ攻む可らず。まず外を解すべきなり。外解し已って、他の表證等なく、但少腹急結するものは、乃ち之を攻めて、熱血相結ぶものを解すべきなり。

此れ、少腹急痛するものばかりか、此の方を用いて宜しきを以て、「之を主る」といわざるなり。

外^いというは、表證の事にして、内^{うち}に対するの詞とす。此れ、急結、胃内の事にあらずといえども、熱血相結ぶものは、亦内に於てするものにして、攻めて之を下すべきを以て、内外の詞を用いるなり。

「熱・膀胱に結ぶ」というは、少腹急結と応ず。然れども、外證解せざるものは、其の熱外にあるを以て、血も亦凝結して、急をなすにいたらず。

此の方、甘草多くして急をゆるめ、大黃・芒硝・相和して凝血を^や栗^ちげ、桃仁を以て、之を血分に及ぼして其の血を破り、桂枝を以て血氣の上衝を平低す。相和して急結の血證、衝逆し狂の如きを治するの意みるべし。

此れ本文の主意は、表證血證を兼ねるもの治するの法を示すのみにして、其の熱血相結ぶの緩急あるに於けるものとす。若しくは、血證劇しきものに至りては、外解するをまつべからず。

古今錄^{ここんりく}に云う、「往来寒熱、脇胸逆満の者、桃仁承氣湯^{とうじんじやうきとう}之を主る」

此れ、往来寒熱、胸脇満。柴胡の證に似たり。然れども、其の逆満というもの、表より裡^{うち}に及んで満を致すに非ず。乃ち急結するもの、上衝して胸脇に逆満するゆえ、此の方の主治とするなり。

予^よ嘗て、一病人、表邪発熱、惡寒、頭痛甚だしく、乾嘔あるものを療す。

之を診するに、脇下臍上、逆満急結して、之を按すに痛み甚だし、因って此の方を与うること一貼^{もつ}飲み

要（三編下冊）

訖^{きつ}し、須臾^{しゆんぐ}にして苦酸水^{くさんすい}を吐^はし、病證^{びやうしやう}大いに減ず。連服^{れんぷく}二・三貼^{てい}にして下利^{げり}三・四行、愈えて常に復す。
始めて信ず。其の已^いに急結^{きゅうけつ}の状を得るものは、外證^{がいしやう}の已^いに解^かすること、まづべからざることを。

大陷胸湯図
(翼 三編下冊)



124、大陷胸湯の證（翼 三編下冊）

図の如く、胸高く起り、心下硬満して、手の近づくことを怖れ、心下より少腹まで、一面に硬満して、纔に身を動揺すれば腹にひびき痛みて、困むこと甚だしく、舌燥きて胎を生じ、心中懊憹、脈沈遅なるものを大陷胸湯の證とす。

卒に診ずれば、大承氣湯の證に似たり。速やかに下さざれば、死す。危篤の證なり。

此れは、表熱裡に薄るとき、熱水結実して此の證となるなり。

論に曰く、「太陽病、脈浮にして動數、（此の下、「浮なる則は風と為す。云々」十六字後人の僞入なり。故に刪去る）頭痛、發熱、微盜汗出でて、反つて惡寒する者は、表未だ解さざるなり。医反つて之を下し、動數變じて遲、膈内拒み痛み、胃中空虛、客氣動膈、短氣燥煩、心中懊憹、陽氣内に陷り、心下因つて硬きは、則ち結胸と為す。大陷胸湯之を主る」

動、膈上にありて、上下首尾なき脈をいうなり。微しく盜汗出るは、表證裏に及ぶの候なり。而して惡寒止むを裏に全きものとす。今、反つて惡寒す。表未だ解せざることをしるなり。其の上、又、盜汗微なるも、表未だ解せざるによるなり。

然るを、医反つて之を下すは誤りなり。表未だ解さざるに、之を下せば其の虛に乗じて、表熱内に陷する

ゆえ、下すべからざるなり。動數の脈、遲に變ずるは結實の候なり。下すによって氣上衝す。膈内を拒み痛めるなり。此れ氣・上衝の機あるゆえ、脈に動をあらわすなり。乃ち、腹中動氣、奔騰（ばんとう）の候なり。

「胃中空虛、客氣動膈」の八字は、直に上の膈内拒み痛むを積するの文なり。故に、或は注文僣入（ちやうふんにゅう）と云う説あり。

「短期燥煩」は、心下水氣ありて、短氣・氣衝逆して、燥煩するなり。「心中懊憹」も、氣心中にせまるなり。陽氣は乃ち熱氣なり。外に發出すべきところの義にとりて、陽氣というなり。内に陷れば、心下の水氣と相結んで外に発せざるゆえ、外熱なくして心下に結び、硬くなるゆえ、「結胸」と名づくるなり。

此の方、大黃、芒硝にて熱結をとき、甘遂にて其の水を下して治するものなり。

「傷寒六・七日、結胸熱実、脈沈に而て緊、心下痛み、之を按すに石硬の者は、大陷胸湯之を主る」

此の證は、傷寒の邪ゆえ六・七日。柴胡の證より誤り下すによらずして、直に結胸をなすなり。脈沈に而て緊、裡に熱実して水氣あるの候なり。凡そ緊脈は、水氣の実脈なり。心下自ら痛み、之を按せば石のごとく硬きなり。これは、前章より一等重き症なり。

「太陽病、重ねて発汗而、復之を下し、大便せざること五・六日舌上燥き而渴し、日晡所小しく潮熱有り、心下從り少腹に至り、硬満して痛み、近づく可からざる者は、大陷胸湯之を主る」

太陽病を、一度ならず重ねて汗を發して、又、其の上に、之を下すによりて、胃内の津液を尽くして、大便通ぜざること、五・六日。舌上とて燥きて渴があるなり。舌上といえは、口は燥かざるの意を示すなり。

口燥き、若しくは、口舌ともに燥くときは、内実の候にて、大承の證なり。此の渴、亦、津液亡びるによるゆえ、甚だしからざるなり。故に「舌上燥き、而して渴」と、一句につらねたるの意をみるべし。

大便せざるよりして、日晡所潮熱を發すれども、微小にして大熱に至らざるなり。これみな、大承氣の疑途を弁じたるどころの證候なり。

此の證、汗下の変によつて、津液を亡して大便せず、潮熱を致し、よつて其の熱、水氣を結んで結胸を成したるものなり。故に其の水、心胸、心下に結ばずして、心下より少腹までに結ぶなり。これ亦大陷胸の一變證と知るべきなり。

以上三章、初めの一章は、心中懊憹して、外證梔子豉の疑途あり。然れども、梔子豉湯は、水氣なくして、胃中空虛、客氣動膈のみなるを以て、其の腹候、心下濡にして物はなし。此の證、水氣あるを以て、熱氣と相結びて、心下硬滿を致すものにして、虛実の分ありとす。

次の一章は、傷寒の邪氣、直に結胸を致すものにして、疑途あるものにあらず。結胸の正候とすべし。

後の一章は、大承氣の證に至るべき水氣あるによつて、結胸を成したるものゆえ、其の證、大いに承氣に似たるを弁じたるものなり。

其の他、大柴胡の疑途あるものは、往来寒熱、頭汗等を以て之を弁ず。又、半夏瀉心湯との疑途を弁ずるものは、心下滿而して硬痛するものを「結胸」とし、但、滿して痛まざるものを「痞」とす。其の外に、寒実、結胸、熱證なきもの、増損理中丸の證あり。

二編・人參湯の下に弁ず。又、脚氣衝心して、結胸に以たるものあり。此れ二證は、脈證によつて之を弁ず。凡そ脈沈緊にして遲なるは、結胸、熱実なり。四肢厥逆、脈虚微なるものは、寒実結胸なり。脈浮虚にして脚腫より来るものは脚氣衝心なり。誤るべからず。

又、病人、心下痞硬甚だしからず、胸高起せぬといえども、心下鳩尾の処にあたつて僅かに一指頭のあたるばかり、之を按さんとすれば、びっくりして按すことを得ず。痛み発するときは、急痛して死せんと欲するなり。是れ亦結胸なり。

余、此の證を療するに、徳本の直行丸を以て、瀉下をとりて即効を得たり。右、諸證の分弁亦審かにせずんばあるべからず。

125

大^{だい}陷^{かん}胸^{きゅう}丸^{がん}図
（要 三編下冊）



125、大陷胸丸の證 （翼 三編下冊）

図のごとく、胸骨高く起り、心下も亦、之を按ずに硬くして痛まず。常に項背強り、俗に鳩胸はとむねというものの、所謂、龜胸かめむねなり。此の證、多くは胎毒に得るところにして、一時の劇證にあらざるものなり。故に伏熱、或は、手近づく可からずの痛みなし。

論に曰く、「結胸の者、項亦強り柔瘕じようけ状の如く、之を下すときは則ち和す」

柔瘕は身体強ばり、凡々たるをいう。凡々は項背強ばるの貌、俗に猪頭いのこをのばし、或は反顧しがたきをいう。此れ、結胸の毒、項背におよぶを以て、亦項背強ばりて柔瘕の如くなるなり。

之を大陷胸丸にて下せば、其の強ばるものをして、常人のごとくに至るなり。愈ゆといわずして和すというものの、結毒にして、形状にかかわるの意みるべし。

抑々、此の湯と丸とを用いるの別は、亦、抵当丸と一例にして、外邪、熱実より来って、一時に成るところの劇證の如きは、湯を以て之を攻め、兼ねて熱を解するを法とす。

論に白く、「此れ本柴胡の證、医、丸薬を以て之を下す。其の治に非ざるなり」というもの。亦意を以ていうなり。

若しくは、胎受の病、或は血塊等陳癰の證を攻むるは、湯藥却つて其の結毒を攻むるに専らならず。故に、丸藥を以て之を治するを法とす。是の故に所謂、龜胸、龜背、及び啞癰等の胎毒に得て、漸々其の毒を増し、佝僂廢疾となりて生涯を終るものの類。

佝僂文人莊子に見ゆ。俗にいう背虫なり。此の證、奇覽に以て葛根湯の證とす。恐らくは非なり。既に結胸項亦強るといふときは、結胸にして項背強り、若しくは龜背を成すもの、結胸の毒大なるものなりと知るべし。

皆、大陷胸丸の治するころなり。然りといえども、此の方、攻撃劑なるを以て、日々用いるべからず。

是に於て、之を外證に審かにして、或は小陷胸、或は旋覆花代赭石湯、或は半夏厚朴湯、或は厚朴生姜半夏人參甘草湯の類を日用とし、加うるに灸灼を以てす。

龜背は三椎骨節の下、兩傍各々寸半、七椎兩傍各々寸半、兎の中指の中指の寸を以て之を度す。灸數十日、或は龜尿を取り、曲骨上に塗るも亦可なり。龜胸は、肩に於て之を按すに、徹するものに灸すべし。小兒尤も可なり。

五日七日を隔てて、大陷胸丸を以て之を攻むべし。小兒は、紫巴滅毒丸を用いて下すも亦可なり。啞癰も亦、大率、此の例に準ずべし。或は、瓜蒂散を以て、吐を取ることありといえども、精工にあらざれば、妄りに施用すべからず。却つて害を招くに足るのみ。

奇覽に云う、膈噎反胃大陷胸丸の證ありと云々。愚謂う、膈噎反胃実満にあらず。妄に此の方を用うべからず。之を慎しめ。

附 大陷胸湯一方

桂枝・甘遂・人參（各八分） 大棗（六分） 枳實かき（四分）

右五味、水一合四勺を以て、六勺に煮取る。

右、此の方、玉函に載せたり。今の金匱、傷寒論、此の方を載せざるを以て、此に標出しるしだす。亦一方なり。前の大陷胸湯丸より較緩なり。他の例を以て之を考うるに、痰飲、胸中に結實して氣上衝、心下痞硬、壅痛等の證あるものに試用すべし。

小陷胸湯図
（翼 三編下冊）



126、小陷胸湯の證 しょうかんきょうとう
(翼 三編下冊)

図の如く、心下より下脘の辺までの間、硬くはりて、これを按せば痛み甚だしく、身を動かせば腹にこたえて痛み、甚だしきものは肩背強ばる。熱、胸中に聚るゆえなり。

此の證、水氣、熱と相結ぶといえども、大熱実堅硬を成さず。故に小結胸の名あり。半夏・括蕤実は、痰飲水氣を解し、黄連は心胸間の熱を去る。他の大黃・芒硝・甘遂等、攻撃のものを伍せざるを以て考うべし。故に、心下硬といえども堅硬をなさず、胸満すといえども高起するにいたらず。

論に曰く、「小結胸、病正しく心下に在り。之を按せば則ち痛み、脈浮滑なる者は、小陷胸湯之を主る」

小結胸の病も、其の位は、正に心下に在りとす。然れども、大結胸の如く、石硬硬満し、痛むこと手近づくべからずほどに至りて、但、之を按せば痛むなり。脈も沈遅等の結実の状に至らずして、浮滑にして力あるものは但、水氣と熱氣と胸膈の間にありて、小しく結ぶものなり。

其の小結という所以は、心下之を按して痛むにあり、凡そ大・小結胸ともに、之を心下にうかがうを法とするなり。

此の意を推し考えて、痰飲壅塞、胸中心煩するもの、此の方、之を主る。又、痰飲ありて、噎膈のもの

治す。

飲食、胃脘にとどまりて、消化しがたく、吞酸するものは、呉茱萸湯の證あり。

又、案ずるに、傷寒論に、「寒実結胸、熱証無き者、三物小陷胸湯を与う。白散亦服すべし」というもの、疑うべし。寒実結胸は、枳実理中丸の證なり。小陷胸湯は、熱を治す。此の證に与うべからず。蓋し誤りあらん。読むもの諸を思え。

127

甘遂^{かんづい}半夏^{はんげ}湯^{とう}図
(翼 三編下冊)



127、かんぜいはんげとろ甘遂半夏湯の證（翼 三編下冊）

図のごとく、心下堅く、腹満して、青筋あらわるるものを、甘遂半夏湯の腹證とす。

其の心下の堅なるもの、枳実湯・桂姜草棗黄辛附湯の腹に似て、覆杯のごとし。各外證に依って分弁すべし。

又、其の青筋をあらわすもの、大黄甘遂湯の證に似たり。彼は、心下の堅満を成さず、是れ其の別なり。或は、腹脹満して、青筋をあらわさずといえども、心下堅満するもの、此の方の證あり。此れ、堅満亦留飲の作す所にして、加うるに、血結するものとす。

半夏・甘遂、痰飲留つて心下にあるものを逐い下し、甘草・芍薬、血結鬱急するものを解す。是故に、外證必ず短氣、あるいは痰飲の変、脇下攣痛等の證をかぬべし。

論に曰く、「病者、脈伏して、其の人自利せんと欲するも、利反つて快し。利し難きは、心下続いて堅満す。此れ、留飲・去らんと欲する故なり。甘遂半夏湯之を主る」

案するに、本文錯置あり。「此為留飲欲去故也」の八字まさに、「利反快」の下にあるべし。

言うところは、病む者、脈伏してあらわれず、其の人、薬をのまざるさきに、自利せんことを欲す。

凡そ自利するものは、快利することあるべからず。如何となれば、病によって下利すればなり。然るに、其の自利反つて快きは、この下利を留飲去らんと欲するゆえ、とするなり。留飲胃中に下りて、自利して去らんとするものなれば、病毒自ずから解すものゆえ、利反つて快きなり。

若しくは、心下、初めより堅満するもの、下利すといえども遂げずして、いまに続いて堅満なるものは、下利すといえども留飲独り自ら去らざるの候とするゆえ、甘遂半夏湯にて、その心下の堅満の留飲を下すなり。

伏脉は、絶脈にあらず。沈伏して、かすかに応ずるを云う。又、案するに此の下利、水瀉なり。

或は曰く、「脇下はり痛み、息にかかり、痛む所をちよいとおせば、びっくりして痛むものに、此の方を用う」と。

愚案するに、此れ十棗湯の證に似たり。彼亦、心下痞硬、引痛す。懸飲なり。宜しく二方の證を考うべし。

十棗湯は引痛を主とす。此の方は、心下堅満を主とす。是れ其の別なり。

大^{だい}黄^{おう}甘^{かん}遂^{づい}湯^{とう}図

(翼 三編下冊)

鼓^こ脹^{ちやう}見^み青^{せい}筋^{きん}



128、大黃甘遂湯の證 （翼 三編下冊）

図のごとく、腹脹満して、身体瘦せ、皮下に青筋をあらわすものを、大黃甘遂湯の證とす。

所謂、鼓脹、青筋を生ずるもの、之を鼓脹と名づくるは、腹皮急脹して鼓のごとく、これを按ずるに、内空にして甚だしく硬実ならざるを覚えること、宛かも、鼓皮を循るがごとし。甚だしきものは、腹皮緊張るほどに張りて、息急しく、心下急痛して、煩悶苦惱せしむ。

是の證、水血相結んで成すものとす。而して其の本は、血證より變じ來たるものにして、男女ともにあるなり。

證に曰く、「婦人少腹滿、敦狀の如く、小便微しく難し、而して渴せず。生後者は、此れ水と血、俱に結び、血室に在るなり。大黃甘遂湯之を主る」

敦たふ（音は対）は、祭に黍稷を盛るに用うる器にして、腹の脹りたるに似たり。故に「敦狀の如し」という。

小便不利にして渴するものは、猪苓湯の疑途あり。故に渴せずという。生後者とは、子を生みて後なるものをいうなり。これ亦、妊娠の疑途を弁じたるなり。これは産後の惡血、快く下らず、血室に凝結して、そ

れに水を結びて、かくのごとく腹満したるものゆえ、甘遂にて結水をとき下し、阿膠にて血結をとき、大黃甘遂に和して、水血を下すなり。此れは、婦人の病ゆえ少腹満をいうものなり。

此の證、少腹満なるものは輕し。重きものは、通腹脹満す。初めて得るものは治し易し。一旦下してのち再脹のものは、治し難し。且つ老人、及び久しく病み、晩候のものも、亦、救いがたし。

此の方を用いるときは、大いに瘀血惡濁水を吐瀉して、腹脹忽ち減ず。將息調理して、ふたたび之を用い、二、三次にして病毒尽るものは、愈ゆべし。

其の間、精氣虚脱して、死するものあり。或は、氣力疲れて、再三攻むるに堪えざるものは、治しがたし。八診を審かにして、虚実を察して、これを治すべし。

青筋、皮下に見わるるものは瘀血なり。急なるものは、刺して血を出せば、一旦の苦惱を緩む。害あることなし。兼ね施すも亦可なり。余は奇覽に詳らかなり。

十棗湯図
（翼 三編下冊）



129、十棗湯の證（翼 三編下冊）

図のごとく、心下痞硬して満、脇下に引つり痛み、指頭にて之を按ずに、心下脇下の辺、僅かにさわればびつくりして痛み、或は咳すれば脇腹ひきつり、或は身を動かし手を挙げれば、其の拍子にきやりと痛み、或は息にかかり痛むもの、皆かくのごとし。

是、胸間心下に水飲かかりて、下らずにあるの致すところなり。故に懸飲と名づく。懸は、宙にかかるなり。

例に曰く、「飲後、水流して脇下に在り。欬唾すれば引痛す。之を懸飲と謂う」是なり。或は支飲、或は咳家、皆、胸間、脇下、心下の水飲引痛するものを主治するの方なり。

論に曰く、「太陽の中風、下利、嘔逆、表解する者、乃ち之を攻む可し」

太陽の中風、表邪に因つて水氣裏に走りて、下利・嘔逆を致すもの、表證未だ解せざるものは下利、嘔逆を治せずして、其の表を治すれば、表邪散じて、下利・嘔逆は自然に止むべし。

若し、表證解して仍下利・嘔逆あるものは、水飲あるものとすれば、すなわち之れを攻めて其の水を去るべきなり。

「其の人^{ひと}熱々として汗出で、発作時に有り、頭痛、心下痞硬満し、脇下に引きて痛み、乾嘔、短氣、汗出で惡寒せざる者、此れ表解して、裏未だ和せざるなり。十棗湯之を主る」

其の人は、太陽の中風裏症を兼るところの病人なり。

熱々と汗出では、汗至つて微なるの貌なり。^{かた}（熱は、ぬちぬちと出る汗の意）。遍身^{へんしん}熱々として、微しく汗有るに似たり、というにて知るべし。其の汗、発作時に有りて、常には出ず。表證ならば発作なく、常に汗出つべきなり。

頭痛も表證にあらず。水氣逆して痛むなり。心下痞硬、満するものより、脇下へ引きつりて痛むときは、熱結の心下痞硬にあらず、水飲の心下にあるの致すところなることを示すなり。

是れ心下痞硬、満ありて乾嘔するもの、表邪に因るにあらざるをみるべし。

短氣も亦、裏実の候にあらず、水留心氣の致す所なり。

「汗出で惡寒せず」というにて、表證解したること明らかなり。此の汗出づるは、熱々と汗出るの謂にあらず、表證の解しぎわに、一旦、汗出で惡寒やみたるをいうなり。此の證、水氣裏に在りて、表證解して、其の裏水いまだ解せざるものとするなり。

十棗湯は、裏熱を解するの劑にあらず。裏にある水氣を下して、表裡を和諧^{わがく}せしむるところの方なり。故につつまるところは、心下痞硬、満して脇下に引き痛むもの。此證の眼目となりて、之を攻めて、水瀉すれば、余症は随^{したが}いて解するものとするべきなり。表解というにて、頭痛、乾嘔も表證にあらず、皆、裡水の致すところなることをしるなり。

比の證、本中風にして、裡に薄るといへども、熱実を致さざるゆえ頭痛・汗出づ等の外證ありて、其の水結びて、結胸に至らず、病狀僅かに裡和せざるといふべし。是れ、十棗湯の水を下して治すべきゆえんの意を見るべし。

證に曰く、「脉沈に而して弦なる者、懸飲・内痛す。懸飲を病む者、十棗湯之を主る」

懸飲の解、前にあり。

又、曰く、「欬家其の脈弦なるは、水有りと爲す。十棗湯之を主る」

欬家にして、其の脈弦なるもの、亦懸飲水氣ありて、引痛の證あるべし。故に十棗湯之を主るとするなり。

又、曰く、「夫れ、支飲家・欬煩し胸中痛むもの有るも、卒死せずして一百日、或は一歳に至るは、十棗湯に宜し」

凡そ心胸痛むものには、急卒危きを致すものあり。夫れ本心下に支飲あるもの、欬いて煩し、其の咳する毎に胸中痛むものは、急卒の證にあらず。然れども、久しく治せざれば死するなり。これ亦、引痛するものゆえ、十棗湯を用いて宜しきなり。

以上の諸證を參観するに、其の懸飲、咳家、外襲を問わず、胸間心下に水氣ありて、引き痛むものを以て、此の方の證準とす。

故に、心下脇下のみならず、或は背脊骨間に於て、之を按して直に引痛するもの、若しくは手臂・腰脚・

變痺のものを得ば、此の方を考え用うべし。

其の證、輕きものは、其の痛むところを刺して、血を出すも可なり。是は、背脊に得るものに施すべし。心下は不可とす。

蓋し、大棗・能く水氣摺引するものを和す。此の方、甘遂・芫花・大戟の三味、並びに、水を逐い、水を下すものといえども、其の摺引して按して痛むものは、大棗の和解する所とす。

又、案するに、此の方深師朱雀湯と名づく。論中、白虎・青龍・玄武の名あれば、朱雀も亦無くんばあるべからず。是れ蓋し、朱雀湯と名づくるもの、古名にして、其の大棗十枚を用いるを以て、亦、十棗湯の名あるものか。

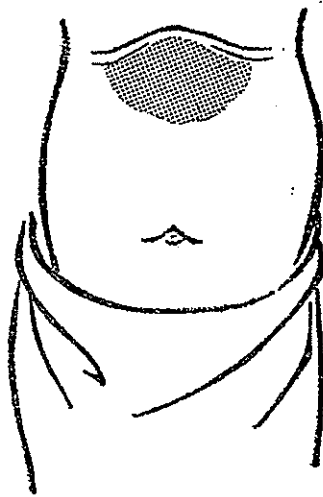
其の四神の名も亦、主棗の色を以て命ずるものにして、深意あるに非ず。白虎は石膏の色白きにとり、青龍は麻黄の色青きにとり、朱雀は大棗の色赤きにとり、玄武は附子の色玄きにとるものと知るべし。

證に曰く、「久病にして、癰飲・停痰消えず、胸膈に液在るを療す。時に頭眩痛・苦欬し、眼睛・身体・手足・十指甲・尽く黄ばみ、亦、脇下支満し、飲めば輒ち脇下に引きて痛むを療す」と。

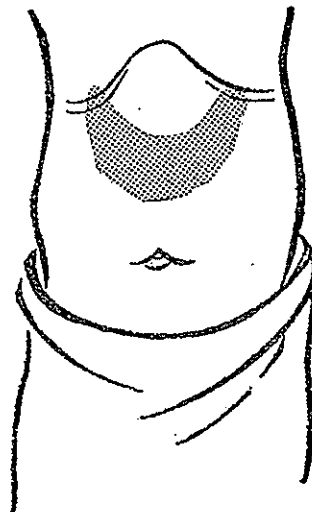
これ亦併せ考うべし。

130

虚實診腹図（翼・四編上冊）



心下痞ヲ覺ヘ按之鞭モ
為実又心下鞭動氣居之
脐下脱者為大虚



心下痞按之滯有為虚按之
鞭弱如絮者アリ又按之痞
テ漸散スルモノハ水氣ナリ

腹證奇覽 翼 四編上冊

遠江浜松

和久田寅叔虎 著

門人豊前中津 原田 養賢 校

130、梔子豉湯の説 併せ図解 虚実の弁付 (翼 四編上冊)

夫れ世医、虚実を言うもの一ならず。羸弱なるものを虚といい、健強なるものを実というは、医言に非ず。徒らに外より望観して、以て仮に其の名を設くるのみ。

医の虚実をいうものは、内経に云う、「邪の湊る所、其の氣必ず虚す」又、云う、「邪氣盛んなれば、則ち実す。精氣奪われるれば、則ち虚す」と是れなり。邪の湊る所、胸滿腹滿、心下脇下痞硬の類、皆、之れを按じて硬きもの名づくるに実を以てす。若し夫れ、精氣之に奪い去らるるときは、必ず虚す。故に、病盛なれば則ち正氣衰虚す。

医の之を療するは、正氣の虚を見わすといえども、邪氣実なるものは先ず其の邪氣を攻む。邪氣去れば正氣自ら復す。

故に内経に、又曰く、「病を攻むるに、毒藥を以てす。精を養うに、穀肉果菜を以てす」と。

然りといえども、人に天稟の強弱ありて、陰陽虚実一に例すべからず。故に発汗吐下の後、諸證を發すること有りて、亦、其の變に備う。

管誤つて、汗吐下を経るのみに非ざるなり。何となれば、発汗・吐下は、病を攻むるの術なり。病独り去らず、併せて其の津液を亡ぼし、其の精氣を虚す。是に於て、病毒いまだ全く去らざるに、精氣先ず虚するときは、薬を以て其の變に應ぜずんばあるべからず。

是に於てか、又、病症に命ずるに、虚を以てするものあり。則ち、虚を以て命ずといえども、其の指さすところは、正氣の虚なり。則ち、正氣の虚を以て、病に命ずといえども、後世の説の如く、虚を補うを以て、之を治せず。一に證に隨いて方を処するのみ。是れ虚といい、実というも皆、診し得るところの象形に就いて、其の名を命ずるものにして、臆度にあらざるなり。

證に曰く、「下利後、更に煩す。之を按して、心下濡なる者は、虚煩と為す」と。

是れ煩するは、尚、病の致す所といえども、之を按すに、心下濡かにして、物なきときは、以て実煩とすべからず。故に命ずるに、虚煩を以てするなり。

又、曰く、「虚なる者は、乃ち愈ゆ。実なる者は、三日に復発す」と。

此れは、心下痞堅に於て、虚実をいうもの、亦、心下を按し、其の象形を審かにするところの名なり。是れ一は、虚して病、尚お存するものとし、一は虚して、病乃ち愈ゆるものとす。亦、唯だ其の證を審かにするにあるのみ。

其の他、虚勞と名づくるものの如きも亦、虚煩の例に同じ。病ありて外形虚し、肌肉瘦削、顔面色薄くして、煩熱、疲勞するを虚勞と名づけ、一病の紀号とするものなり。

然る則は、医断の説のごとく、病を實に一なるものとして、虚には養を以て言い、實には攻を以て言う

の説に僻すべからず。

虚実、並びに病證の上に於て、之をいうものある時は、亦、其の診按する所に据して、其の象形を審かにするにあるとなり。

故に梔子散湯の證に於て名づくに、虚煩を以てするもの、亦取りて以て腹證を按ずるの準拠とすべし。

夫れ既に名づくるに、虚煩を以てす。豈之を攻むるに、実邪煩躁の例に因ることを得べけんや。若し誤ちて、之を攻むるときは、則ち其の害を救うべからず。是、名教之道に貴ぶところのものなり。

華佗曰く、「病、虚煩し熱有る者は、傷寒と相似る。然るに惡寒せず、身疼痛せず。故に傷寒に非ざるを知る。発汗せず、頭痛まず、脈緊数ならず。故に、裡実に非ずして下すべからざるを知る。此の如きは、内外、皆、攻むべからず。しかるに師、強く之を攻むれば、必ず遂に損竭して、死せん」と。

古方を執るもの、亦此の義を知るべし。

131

梔^し子^し豉^し湯^{とう}図

（翼 四編上冊）

心煩懊懣

心中結按之痛



心下空
虚按之如

131、梔子豉湯の證 (翼 四編上冊)

図の如く、心胸に結聚するものあつて、指頭を以て骨間を探按するに痛み、心下は、鳩尾より下臍上までの間、之を按すに、濡弱にして物なきがごとく、腹底までこたえるものなく、くさくさとするもの、梔子豉湯腹證の顯然たるものなり。

而して、胸中煩熱して眠ることを得ず、劇しきものは、煩悶安からずして、反覆顛倒、心中懊憹す。或は、身熱手足温、或は胸窒ぎて食すること能わず、或は結痛す。

皆、病、心胸に聚りて、煩するものなり。名づくるに、虚煩を以てするものは、凡そ、病邪裏に入り、心煩するものは、之を心下に候うに、必ず痞す。或は、之を按して濡なりといえども、腹底に至つて必ず凝るもの、あるべし。

大黃黃連瀉心湯の證のごときは是なり。

若しくは、然らざるものは、必らず之れを按して硬く、或は痛むもの、皆実邪の致すところの煩にして、其の之を治するもの、或は柴胡輩、或は調胃承氣。其の劇しきものは、大陷胸湯、或は瀉心輩、大率、脇下・心下に於て、其の実なるものを得て、以て準拠とするなり。

其の煩を以て名づくるに、虚を以てすることを得ず。此の方の如きは、熱の結ぶ所、心胸にあつて、心下

却つて物なし。是れ、心胸の煩を候うもの、必ず心下に於てするを以て、心下の虚実を以て之をいうものなり。

其の本は、病、胸中にありて、以て窒塞、若しくは結痛するものを以て之を定むべし。

以上は其の劇しきものに於て之を言うものなり。其の劇しからざるものといえども、心胸骨間に於て、已に結聚するものを得、之を探按して痛むものは、心下濡弱に至らざるものといえども、亦、此の方の證とす。

二編・桂枝加黄耆湯の下に詳らかにす。併せみて、其の旨を明らかにすべし。

或は世に謂う所の、膈噎なるもの、亦、胸中窒ぐものとす。此の方を用いて、胸間鬱結を開くべし。

其の他、虚人老羸の輩、肌表の正氣乏衰なるもの、誤つて、汗下の劑を服して、心胸結窒して煩悶し、飲食を思わず、壞證を成すもの、亦、此の方の證あることを考うべし。

或は、薬氣を惡みて服せざるもの、大率、此の證を兼ねるの致す所なり。

本方を用いて、心胸の結熱一たび解け散ずるときは、復、薬氣を惡まず。是れ亦知らずんばあるべからず。

論に曰く、「発汗・吐・下して後、虚煩して眠ること得ず、若し劇しき者は、必ず反覆顛倒、心中懊憹す。梔子豉湯之を主る」

発汗・吐・下の間に、「若し」の字を挿まざるものは、汗吐下の三つながら之を施して、此の證を致すものとす。此れは、劇證を言わん為に、此の三法を併せ施す後をいうものと知るべし。

虚煩の解は前文に詳らかにす。

反覆は、うつむけになるなり。顛倒は、さかしまになるなり。此れ心中懊憹して、安臥を得ざるなり。懊は於・刀の切、憹は奴・刀の切。心乱るるなり。憹は痛悔の声なり。

楊子方に言う、「愁懣懣々と毒して、発せざるを之を氏憹と謂う」郭璞、注に曰く、「氏憹とは、猶お懊憹のごときなり」

又、曰く「毒藥を飲み、癰ゆるを、之れ氏憹と謂う。」亦、「之を懣状と謂う」蕭中、「眠眩と言う」と。

此等の説を併せ考えるに、むねいきれあしく、嘔せんと欲して嘔せず。いうにいわれぬあしきを覚えるもの、懊憹なり。是れ、汗吐下によりて、外に発すべきの陽氣、内に陥り、胸中に鬱結して、もやもやとしてさばけざるゆえに、味く心中の鬱熱を治するなり。

「発汗、若し之を下して、而して煩し、熱、胸中に窒ぐ者は、梔子豉湯之を主る」

此の證は、或は発汗、或は之を下して、汗吐下並びに施さざるゆえ、前證のごとき劇證を致さざるなり。

但、心中煩熱して、胸中窒塞を覚えるなり。窒は、間がつまりて物をうけつけぬことにて、食物などのつまるをおぼえるなり。これ亦、熱・心胸に鬱結するの致すところなり。

「傷寒五六・日、大いに之を下して後、身熱去らず、心中結痛する者は、未だ解せんと欲せざるなり。梔子豉湯之を主る」

傷寒五・六日、熱・心胸にあるときに当って、大いに之を下して、津液を亡ぼし、水氣去って熱・独りあ

り、身熱して去らず、心中に結痛するものは、此れ之を下すといえども、其の熱、いまだ解すことを欲せざるなり。

然れども、水氣去りて、熱氣独り心中に鬱結して痛むもの、心中結状ありといえども、心下必ず虚滿にして硬からず。是、水氣なきを以て、結胸の実證を致さずして、却って、此の結痛を致すなり。又、前證と同意なり。

「陽明病、脈浮に而して緊、咽燥、口苦く、腹滿而して喘し、發熱、汗出、惡寒せず、反って惡熱し、身重く、若しくは、發汗するときは則ち煩す。心憤々反って譫語す。若しくは、燒針を加うに必ず怵惕煩躁して、眠るを得ず。若し之を下すときは、則ち心中懊憹、舌上胎ある者、梔子豉湯之を主る」

陽明病、熱実胃内に結ぶものは、其の脈遅なるを正候とす。今、脈浮にして而して緊。是れ結実の候なくして、却って外出の趣きあり。故に「脈浮緊」と言わずして、「而」の字を挿むなり。

言うところは、沈遅なるべきもの、却って浮数にして、緊なるを見わすなり。咽燥・口苦きは、熱胸中にあるの候なり。腹滿而して喘するは、此れ大承氣の證に似たりといえども、彼は熱・既に胃に結び、水氣・心下にありて、腹滿して喘する故に、短氣の證ありて咽燥、口苦の證なし。

此の證は咽燥、舌苦して短氣の證なきを以て其の熱の在るところ、上下の差別あることを考うべし。

「發熱汗出で惡寒せず」とは、大承氣は汗出づるといえども、惡寒せずして潮熱あり。潮熱は胃実の候なり。

此の證、胃に実せず、故に發熱汗出るなり。然れども、本太陽表證にあらず、故に發熱汗出れども、又惡

寒せずして、反つて惡熱するなり。惡熱は溫熱の物を惡むをいうなり。衣被を去つて、裸になりたく思うの類なり。

「身重き」は、亦陽明の證にして、熱胃に結すといへども、腹滿するを以て身重きこと、承氣の證と同候なり。

此の證は、發汗ともによろしからず、渴を發するをまつて白虎を用い、其の熱を中間に挫べきものなり。然れども、脈・浮緊なるを以て、誤つて發汗すれば津液を亡して、心中の熱勢いよいよ劇しくなりて、咽の燥くこといよいよ強く、心中憤々焉としてとりみだれて、反つて譫語を致して病愈えざるなり。

若し燒針を加えて、汗を出さんとすれば、驚動を致して必ず怵惕煩躁して眠ることを得ざるなり。若しくは、之を下すときは、胃中空虚にして心中熱尚去らざるを以て、懊々して舌上胎を生ずるもの、梔子豉湯の證をなすこと前と同じことなり。

「陽明病・之を下し、其の外に熱有りて手足溫、結胸せず、心中懊懣し飢るも食すること能わず。但、頭汗出る者は、梔子豉湯之を主る」

陽明病、之を下して仍其の外に身熱あり。且つ、手足を厥逆せずして、自ら溫、心下硬滿して結胸を成さずして、心中懊懣し、飢て食を欲すれども、胸中窒塞して食すること能わず。氣上衝し、但だ、頭汗出るものは、以て、實熱とすべからず。梔子豉湯の主る所とするなり。

これは、大陷胸の證にも、心中懊懣を致すことある故に、「結胸せず」といいて其の疑途を弁ずるなり。又、厥陰の證、心中疼熱、飢て食を欲せざるの證あり。彼は、四肢厥逆して心中疼熱、飢て腹はすけども食

を欲せざるなり。此れ、疑途を弁じて手足温というなり。

凡そ、梔子豉湯の證は、心中^{おも}単に熱鬱結して水氣なく、虚寒の候なきものなり。

「下利後更に煩、心下^{みぞうち}濡き者は、虚煩と爲す。梔子豉湯之を主る」

これは、自ら下利の後、更にあらためて心煩するを以て、之を按するに、心下濡にして物なきがごときを名づけて、虚煩とするなり。此れ梔子豉湯の腹候を示すものと知るべし。

以上の諸章を通観するに、汗吐下の後、水氣燥して単熱・心中に鬱結し、輕きは心煩し、重きは懊憹結窒して外身熱あり。手足温にして厥逆せざるものを本方の證候とすべし。

梔子甘草豉湯

梔子生姜豉湯

枳実梔子豉湯

「若し、少氣なる者は、梔子甘草豉湯之を主る」

少氣は、氣たえたえになりて、息ぎれするなり。短氣と異なるなり。短氣は、せかせかし、強く短なり。少氣は急迫の證なり。

故に、「甘草を加う。若し嘔く者は、梔子生姜豉湯之を主る」

これは、津液竭^{つよく}ざるもの、氣逆によって嘔を発するゆえ、生姜を以て胃口を利して、嘔逆を定むるなり。若し、胸中痞滿するものは、前方に於て枳実を加えて、枳実梔子豉湯と名づく。

論に曰く、「大病差後、勞・復する者は、枳実梔子豉湯之を主る」

此の章、病因ありて病證なし、故に大病差後に余熱去らざるものは、勞復して、心中結痛、懊憹、痞滿の

證をあらわすものなり。例し用うべし。

梔子大黃豉湯

若しくは、發黃するものは、更に大黃を加え、梔子大黃豉湯と名づく。即ち枳實梔子豉に、大黃を加うるもの。

證に曰く、「酒黃疸、心中懊憹、或は熱痛するは、梔子大黃豉湯之を主る」

酒黃疸は、酒を好む人、酒毒鬱滯して熱を生じ、因つて發黃するなり。これ必ず胃中の宿毒あるものとす。故に大黃を加えて利するなり。

梔子厚朴湯

論に曰く、「傷寒、下して後、心煩、腹滿、臥起安からざる者は、梔子厚朴湯之を主る」

此れは傷寒下して後に、熱去らずして、心煩腹滿するもの、其の滿、胃實にあらず、但だ内氣外に出ずして腹滿するなり。且つ下後というときは、水氣あるにあらず。故に、氣脹として、厚朴・枳實、之を解し、梔子を以て、心煩の熱を去るなり。

是の故に、其の腹滿之を按して底に堅實ならざるものと知るべし。

「起臥安からざる」は、腹滿するを以て、臥しても起きても安かざるなり。或は云う、心中懊憹、胸腹はりて息急しく喘き、立居し難く熱あるものを治す。

梔子干姜湯

論に曰く、「傷寒、医丸薬を以て、大いに之を下し、身熱去らず、微煩する者は、梔子干姜湯之を主る」
これは、傷寒し、医誤ちて、丸薬を以て大いに之を下して、水氣のみ去って身熱仍去らず。微煩して、反覆顛倒・心中懊憹等の劇證を發せざるものは、是れ、熱去らずといえども、煩微にして劇しからず。是を以て、干姜を以て中を溫め、梔子を以て心熱を解すなり。

梔子柏皮湯

又、曰く、「傷寒、身黄ばみ、發熱する者は、梔子柏皮湯之を主る」

此の證、単に發熱・惡寒せずして、心煩するもの、柏皮亦熱を解す。本草に云う、「腸胃中の結熱を主る」
と。此の方、發黄・發熱・心煩下すべからざるものに用うべし。此の方、口舌の病に考え用うべし。

茵陳蒿湯

茵陳蒿湯は、發黄・腹微滿・小便不利、或は渴し、或は大便秘きものを治す。

論に曰く、「陽明病、發熱、汗出ること能わざるは、發黄するなり。但、頭汗出で、身汗無きは、劑・効ければ反って、小便不利・渴して水漿を引き・身は心より發黄す。茵陳蒿湯之を主る」

（訳者注：「劑効」とあるべきを「劑頸」と誤伝されて、原文も頸となつてゐる。よつて、七行下に「劑頸くして還つて」の義は、「未詳」と述べてゐる）

陽明病、熱実するもの、發熱汗出でて水氣瘀滯せざるときは、黄を發すること能わず。但、頭汗のみ出で

て、身に汗無く、頸より上には汗あるもの、加うるに、小便不利を致せば、其の熱は水氣を結びて、瘀熱となるゆえ、汗出でず、水氣去らずといえども、却って渴し、水漿を引くなり。

此の如きものは、其の熱蒸蒸して、発越すること能わざるを以て、必ず黄色を発するなり。茵陳は、瘀熱を解す。梔子は、心胸の熱煩を解す。大黃は、之を和して、瘀熱を大便に瀉するときは、小便自利することを得て、病愈ゆるなり。

「劑頭して、還って」は、其の義、未だ詳らかにせず。或は云う、「劑分るるなり。頭を分ちて還り、頸より下へ汗出ざるの謂なり」と。瘀は、壅滯の義なり。

「傷寒、八・八日、身黄ばむこと梔子の色の如く、小便不利、腹微滿の者は、茵陳蒿湯之を主る」

傷寒、七・八日、熱裏に及ぶるとき、水氣と相結びて、瘀熱をなすもの、身黄を発して、梔子の色のごとし。小便不利、腹微滿するもの、裏に水氣あるの候なり。

此の證、又汗出でず、渴せざるを以て、黄色甚だしきを致すなり。故に橘皮のごとしというなり。

此の方、口舌の熱瘡、及び齒齦の腫痛熱に属するもの、或は眼目痛等に考え用うべし。

附

陸奥・仙台の松川世徳、善く古方を運用す。余の遊歴中、其の治験を録するところの書を覽るに、其の発する所、亦少なからず。其中、梔子豉湯の治験数条。世医の知らざるところ頗る奇なるを以て、左に標出して、以て同志に示す。前の図説と併せ讀みて、其の意を考うべし。

世徳、名は進修喜三太と称す。世徳は、其の字なり。遊歴中、下毛の足利学校に客死す。余は其の名の湮滅せんことを惜しみて、此処に附録す。

松川世徳 梶子鼓湯の治験

呂民金五郎妻 年二十五 血下ること数日、身体倦み、心煩微熱、服薬するも効見われず。予、本方二貼を与う。血下ること半ば減す。婦人喜び、菓を乞うに、前方敷貼を与えて全く愈ゆ。
岳母某君、躓き而して腰を撲ち、爾来、血下、小腹微痛す、服薬するも効無し。余、以為、此の病、転仆驚惕に由つて致す者なり。乃ち本方敷貼を進めて全く愈ゆ。

伴蔵が妻、産後に血下ること過多。忽ち唇舌の色白く、氣陷つて眠るが如く、脈・有るが如く無きが如し。殆ど死せんとす。乃ち存膿苦酒を作らしめて、本方に甘草の加え、之を与う。半時計りにして、五・六貼を尽す。忽ち大寝の寤るが如し。

月洞老の妃、年七十余、鼻衄過多、衄を止むるの諸方効無し。予、其の状を問う。頗る虚煩の候有り。因つて本方を作つて、之を与う。四・五日後に来りて謝して曰く、「良方を服し、忽ち已ゆ」と。

柳田長助 年八十計り、一日鼻衄過多、鬱冒恍惚たり。乃ち、本方を与え愈ゆ。

松川昌兵蔵 便血数日、服薬して漸く愈ゆと雖ども、身体色無く、面上及び両脚浮腫、心中煩悸、頭微痛し、時々嘔き、寸口脈微なり。乃ち、本方に生姜を加え与えて愈ゆ。

某婦人 年二十五、六 動作するときは、則ち心中悸而血下る。是の如くなれば、数日人を走らし菓を乞う。余、親しく之を診せざるを以て、固く辞するに已まず。因つて本方三貼、之を附す。数日の後、二介

を遣し報じて曰く、「良方を服し全く治せり」と。

一老人 冒風・寒熱し、發表の劑を服せるに、下利數行・飲食進まず・疲労甚だし。本方を与え、利止み、食進みて常に復る。

右、治驗、亦皆な心胸の診を以て之を得るもの、宜しく図説と併せ考うべし。

大^{だい}黄^{おう}々^{おう}連^{れん}瀉^{しゃ}心^{しん}湯^{とう}図
（翼 四編上冊）



132、
大黃黃連瀉心湯の證（翼 四編上冊）

図の如く、心下痞して、一物ある如く覚え、手を以て之を按ずるうちに、散り失せて何も無く、濡にして、両傍にも亦二大竹を立つる如きものもなく、只、何となく心下の痞を覚えるものを、大黃黃連瀉心湯の證とす。

此れ、其の之を按ずるに濡らかなるもの、梔子豉湯の腹に似たりといえども、梔子豉湯は、心下の痞を覚え、且つ其の濡らかなるもの、殊に濡弱にして、綿絮を按すが如く、心中結痛、若しくは壅塞、之を探按するに痛を知るもの、前に弁ずるが如し。

此の方は、自ら其の痞を覚え、之を按すに硬からずといえども、濡弱に至らず。深く按して腹底に凝結するものあり。此れを其の別とす。

論に曰く、「太陽病、医、発汗させ遂に発熱惡寒せしむ。因つて復、之を下す」

案ずるに、此の下に「心下痞云々、手足温なる者は愈え易し」と四十三字、文辭不古にして、後人の僞入する所なり。故にこれを刪る。

「心下痞、之を按すに濡、其の脈、关上浮なる者は、大黃黃連瀉心湯之を主る」

太陽病、医、発汗すれども解せず、遂に発熱惡寒するを以て因って復た又、之を下して、表裡の水氣俱に去つて、血氣独り心胸に迫つて痞するもの。自ら其の痞を覺えるといえども、之を按すに硬からずして、其の脈の浮なるものは、其の痞を攻むべし。

関上の二字、亦、後人の補挿するものにして刪るべし。古は、脈に寸・関・尺を分けず、一に之を寸口という。是れ蓋し、関脈、中焦を候う部位とす。心下痞して硬からざるを以て、其の部位の脈は殊に浮なるをいうのみ。然れども、他に例せず。後人の僣入するものとするべし。

「傷寒大いに下して後、復発汗、心下痞、惡寒する者は、表未だ解せざるなり。痞を攻む可からず。當に先ず表を解すべし。表を解し、乃ち痞を攻むべし。表を解するは、桂枝湯に宜し。痞を攻むるは、大黃黃連瀉心湯に宜し」

此れは、傷寒の邪が大いに下るの後、また発汗し、水氣去つて心下の痞を致して、仍惡寒するものは、此の惡寒を、表いまだ解せざるものとす。表解せざれば、痞を攻むべからず。故に桂枝湯にて表を解し、惡寒止みて後、瀉心湯を用うべきなり。

傷寒の惡寒、本桂枝湯の主治する所にあらずといえども、前に一たび発汗して、邪勢頗る減するを以て、之を和解するに桂枝湯を用いるなり。此れ皆、一時權宜の施用なるを以て、並びに宜しというなり。

此の方、癰癤に考え用うべし。驚癰亦同じ。又、河豚毒を解す。

「心下痞して復た惡寒、汗出る者は、附子瀉心湯之を主る」

太陽病、發熱惡寒するもの、因つて之を下して惡寒止むもの、心下痞して、また前の如く惡寒するものは、表證の惡寒にあらず。下して後に致すところの虛寒なるを以て、附子を加えて、下焦を温むるなり。

案するに、此の方、前方に附子を加えるもの。然るに、此の方、黄芩ありて、本方黄芩なし。今、方名によるときは、黄芩なきを是とすべし。而して此の方も亦、黄芩あるべからず。

或は云う、「黄芩、痞を治すとあるものを是とすべし」と。未だ熟ぬることを知らず、是れ姑しよく疑を存すと云う。」

「三黄瀉心湯は、心氣不定、心下痞するものを治す」

不定は、心中落つかずしてトカトカとし、胸に塞がり跳るように覚え、手を以て按ずれば、却つて、思うほどに跳せらぬもの。亦、血氣の熱なり。故に吐血、衄血等の證あるなり。

或は痔疾、下血、便血等亦あるべし。或は狂乱の證あるなり。是、心氣不定によるなり。

或は、血氣上衝して眼目亦く、翳を生じ、或は頭項腫れ熱し、口舌の熱、瘡疔癰の熱疼、氣疾、積聚の心悸驚煩、産後の血崩、便秘、脈数、心下痞硬、衝逆、面赤きもの。

或は小児の丹毒、積熱一切、血熱、血氣上逆して、心煩心悸するもの、天行下痢膿血等、要するに、心下痞、心中煩悸して不定なるものを以て、腹證の準据として、之を考え用うべし。

證に曰く、「心氣不定、吐血、衄血は、瀉心湯之を主る」と。金匱・不定を不足に作るは、非なり。今、千金方に従う。

瀉心は、心中血熱を瀉するの義なり。心は血のそそぐところ、血・陽氣を得て、一身に順環す。陽氣余りあるときは、血、上逆して湧き出だす。吐血、衄血を致す所以なり。

是を以て、心氣揺々として定まらず、常にトカトカとして、跳るを覚えて落着かず。或は、驚悸憂悸甚だ

きものは、狂を發す。之を心氣不定というなり。不定は、揺りすわらずしてあるのいいなり。

又、曰く、「婦人涎沫を吐く、医、反つて之を下し、心下即ち痞、当に先ず其の涎沫を治すべし。小青龍湯之を主る。涎沫止みて乃ち痞を治す。瀉心湯之を主る」

凡そ病は、男子婦人を分たず、證に隨いて之れを治するを法とす。然るに、婦人の雜病を言うものは、婦人の病、男子より多きもの、大率、血證及び氣疾なり。

此の證、涎沫を吐するものは留飲あるなり。其れ小青龍を主薬とするにて知るべし。而して其の痞を致すものは、血氣を動かすの致すところなり。此の方、血熱ありて、痞するものを治す。是を以て、婦人の病として之を論するなり。

此の方中、辰砂を加えて狂證、及び痢後の鬱冒を治す。又、此の方は、大黃を去りて、黄蘗梔子を合すれば黄連解毒湯なり。火熱、表裏俱盛にして、狂躁煩心、口燥し咽乾き、火熱乾嘔、錯語し、眠らず、吐血衄血、熱甚だしき者を治す。又、三黄、梔子を加えて徳本の解毒丸なり。十九方に詳かなり。

此の證、甚だしきものは、單方宝丹を用う。口訣あり。

附 心煩に諸證あるの弁

夫れ、心中煩悸を診する法は、覆手圧按して之を得べし。診法初編に詳なり。蓋し煩は熱煩なり。

思うようにならぬ所のことを、心にもちたるを煩という。もやもや、わくわくとして、いきれ急しく思う

ことなり。

熱、鬱結、伏匿して、外に発することを得ざるときは、必ず煩悶す。

桂枝湯に反煩して、解せざるといふものは、頭項強痛して煩するなり。故に風池、風府を刺し解す。

大青龍湯の煩躁は、汗出づべくして出でざるを以て、煩躁するなり。煩躁、心煩して身を躁の謂なり。

麻黃湯の発煩は、藥を服し藥力いまだ汗を發するに至らずして煩するなり。故に汗出で熱散じて解すべし。是れ表證の煩なり。

小柴胡湯の心煩は、熱漸く裡に及び、水氣此処に聚りて煩するなり。故に胸脇苦満して、喜く嘔するなり。

大柴胡湯の鬱々微煩は、熱既に裡に薄りて、内実せんとして煩するなり。故に心下急にして、煩微なり。

蓋し煩熱の外に出でんとするもの、出でること能わざるによるゆえ、外出の熱、盛なるものは、煩も亦大なり。

小柴胡は、熱裡に及ぶといえども、内実の機なし。是を以て煩も亦大なり。故に藥を用いて、適々熱の發出するを解することあり。

例に云う、「凡そ柴胡湯の證にして、之を下し、若しくは柴胡證罷まざる者は、復、柴胡湯を与う」必ず蒸々として振い、却って發熱汗出て、而して是れ解すなり。

大柴胡の如きは、まさに内実せんとして結実の機あり。其の煩、却って微なる所以と知るべし。

大陷胸の煩躁の如きは、下すに因つて、客氣膈を動かして煩躁するもの。故に、既に結胸を成すときは、

復^{なほ}つて煩躁せず。若しくは結胸して、仍^{なほ}煩躁するものは死す。

例に曰く、「結胸の證、悉^{ことごと}く具わり煩躁する者は死す」是なり。

白虎湯の煩渴の如きは、熱裏に結びて煩するなり。其の、渴して水を飲まんと欲するを以て、之を知る。若しくは、此の證にして、内に水氣あるものを五苓散^{ごれいさん}の證とす。故に、亦煩渴の證あり。

若し夫れ調胃承氣湯の微煩、甘草瀉心湯の心煩、安きを得ざるものの如きは、誤つて吐下して其の熱去らず、却つて急迫を致すものとす。

小承氣湯、亦微煩の證ありといえども、これ亦、太陽病、若しくは吐し、若しくは下し、若しくは発汗して、熱^な仍^{なほ}解せずして微煩するものとす。

大承氣湯は、熱既に内に結実す。故に、短氣腹滿の證ありといえども、煩せざるものを見るべし。

以上の煩は、熱裡に在り。或は外出せんと欲して煩し、或は内実せんと欲して煩し、或は誤治急迫して煩するもの。其の煩、微あり、大いにあるものを見るべし。

柴胡加龍骨牡蠣湯の煩驚は、外邪之を下して、胸滿を致して煩するもの。其の煩は、猶^{なほ}、柴胡の例とす。但、煩して驚くものは、之を下すの致す所にして、動氣躁擾^{どうきそうじょう}の候とす。

龍骨牡蠣を加えるもの、此れ驚狂を發するにあるなり。是を以て、桂枝甘草龍骨牡蠣湯の煩躁するもの亦、火逆、上衝、急迫の致すところにして、その龍骨牡蠣を用いるの意は同じく一揆なり。

柴胡の證、外邪裡に薄りて、水氣あるを煩して驚惕^{きょうてき}し、此の證火逆之を下し、津液脱して氣独り上衝急迫す。故に煩して躁す。却つて驚惕の候なし。

梔子鼓湯の、虚煩を發し懊憹を致すは、水氣去りて、熱独り心胸に結ぶものとす。其の説、前に詳かなり。小建中湯の、悸して煩すというが如きは、悸を主として煩を主とせず。其の悸は、氣上衝して急迫するの致すところとす。煩は、蓋し傷寒の邪、外を束るによつて煩するなり。故に雜病のごときは、復、悸して煩せず。以上を陽證の於いてするものとす。

其の陰位に於けるもの、黃連阿膠湯の心中煩し、眠りを得ざるあり。此れ、蓋し血氣心に迫つて、熱煩するものなり。故に、其の煩を見ず不及びては、復陰位の主薬に拘らずして、すぐに心中の熱を主として之を治す。其の内攻の變に至つては、吳茱萸湯の吐利煩躁を治するあり。是れ吳茱萸は、熱を主治するものに非ずといえども、氣逆心に迫るときは、亦煩熱の状あり。故に氣逆を下すときは、煩躁自ずと止むものとす。是を以て、氣逆を主として煩躁せざるなり。

猪苓湯の水を利し、血を和するものにして、亦、心煩して眠り得ざるの證あり。此れ、下利して血氣上にせまり、水氣逆激して咳あり。嘔を生じ、渴を致して、心中熱をあらわすものは、血を和し、水利すれば上攻隨いて治し、心煩自ずから止むなり。是の故に、煩甚だしといえども、復煩を主とせずして、熱を解し水利す。

白通加猪胆汁湯の厥逆、無脈、乾嘔、煩するが如きは、下利止まざるを以て厥逆上攻して、心中熱煩を致すもの。その厥逆、無脈、下利止まざるを以て、煩を主とし、治を施すべからず。直ちに干姜、附子、葱白を以て陽を助け、甘草急迫を解くべしといえども、心煩、之が妨げをなして、藥をして下焦に達せしむること能わざるを以て、猪胆の苦汁、胃口を撞開し、人尿心中の熱を解し、白通湯をして其の功をあらわさしむ

るものなり。

以上を其の陰位に於てするものとす。

或は煩を主とし、或は煩を主とせざるもの、病の緩急と標本とを詳かにするにあるなり。之を要するに、虛実陰陽を問わず、病心に迫るものは、必らず熱を生じ、而して、その熱・外に達せざるは煩悶の状を致すものとす。

故に、煩をいうときは、大率、心胸を以て其の位とす。よろしく其の陰陽虛実を審かにして、之を治すべし。此れ仲景心煩の證をいうの大略なり。

動悸の弁、初編に出す。併せ見るべし。

又、案するに、瀉心湯、心氣不足、心下痞の證を挙げて、心煩を言わずといえども、其の心氣不定なるもの、是れ血熱鬱悶の状にして、煩せずということなし。且つ煩するもの、之を按ずるときは、必らず胸中跳る故に、煩悸を連言することあり。然れども、悸は必らずしも熱煩のみにあらず。故に黃連・悸を治すといえども、心中熱ありて煩悸するの状を得ずんば、妄りに以て黃連の主治とすべからず。

案するに、三黃瀉心は、衝逆病、眼目口舌等の病を治す。桂枝・衝逆を治すると驟り混ずべからず。三黃瀉心は、血氣上衝、心中熱あるものを治す。桂枝は、肌表虛乏の氣上衝するものを主治す。故に、瀉心の證は、脈數、便秘等の證を兼ね。桂枝湯は、専ら肌表を和するを以て主とす。

世間の癰毒を治するもの、其の證を審かにせず、旧貫に仍つて、動すれば芩連を主用し、加うるに土茯苓を以てす。夫れ芩連は、血熱を瀉するもの。心胸を以て其の位とす。土茯苓、肌膚の濕潤を燥すもの。芩連

と伍するは、溫熱兼治するの意といえども、濕なきものにおいては、大いに類せずとす。
初學の士、妄りに誤用することなかれ。初編桂枝湯の下に弁ず。あわせ読むべし。

半夏瀉心湯図
（翼 四編上冊）



133、はんげ半夏瀉心湯しゃしんとう図解 (翼 四編上冊)

図の如く、心下痞満して、之を按すに硬くして痛まず、嘔して腸鳴するものを半夏瀉心湯の證とす。

其の鳴るもの、宛も、雷の如く鳴り走るを以て、又、之を雷鳴という。雷鳴は、熱、其の水を激動するなり。多くは胸中より、中脘臍上までの間、腸鳴痞痛して、やがて大便秘するもの、之を熱瀉とす。

又、病人、食すると忽ち、箸を置く間に泄瀉せんと欲するもの、亦、此の方の證あり。然れども、腹診を詳かにして、之を用うべし。

下脘已下、臍をめぐり、脇下腰間に雷鳴切痛し、或は嘔し、或は瀉する者、附子粳米湯の證なり。是れ寒疝なり。必ず腹中腰間、冷氣を覚え、且つ心下痞硬せず。是れ其の別なり。

又、姜桂棗草黄辛附湯の證、心下硬、水氣転鳴す。

此の證、嘔せず下利せず、水氣に似て水氣にあらず、冷氣遊走するなり。二編に詳かなり。併わせ読むべきなり。

或は曰く、世に積と名づけて、心下にさしこみ、按して甚だしく痛むもの。是れ痞痛なり。甚だしき者は、心下へさしこみ、反張して手足痙攣するもの。此の方を用う。若し応ぜざるものは、白虎加黄連。更に応ぜざるものは、大柴胡加芒硝を用う。

愚案するに、既に胸中にせまるものは、風引湯の證あるべし。又、左の脇下にさしこむもの、桃核承氣湯の證なり。

此の方は、黄芩ありて心下の痞を解し、又、黄連ありて胸中の熱を去るを以て、亦、瀉心の名あり。然れども、其の多きものは水なるを以て、半夏を主として水を去り、干姜を伍して結を散じ、人參を伍して胃の口を開き、甘草・大棗、饴（ひつぱり）をとき急を緩む。相和して胸中の熱を退け、水氣を逐うを以て嘔を治し、心下の痞を去るなり。

論に曰く、「傷寒五六日、嘔而して發熱する者は、柴胡湯の證具あり、而して他薬を以て之を下じ、柴胡の證の仍在る者は、復柴胡湯を与う。此れ已に之を下すと雖も、逆と為す、必らず蒸蒸として振い、却って發熱して、汗出で而して解す。若し、心下滿して硬痛する者は、此れ結胸と為すなり。大陷胸湯之を主る。但、滿して痛まざる者は、此れ痞と為す、柴胡を与うるに中らざるなり。半夏瀉心湯之を主る」

此れ胸脇滿・結胸・心下痞の三證を弁するなり。柴胡の證具わるとは、胸脇滿するなり。他薬を以て下すといえども、胸脇滿、去らざるものは、復た柴胡湯を与えて治すべし。

逆は之を犯して、其の治を逆して壞症をなす謂なり。證變ぜざれば逆とせず、必らず蒸蒸として振い、却って表に出て、發熱汗出で解す。これ、此の病、初め嘔して發熱するもの、外出の状あるを以て、下すといえども、内攻せずして、竟に外出して解するなり。

若しくは、之を下して内に陷り、結実し、心下滿して硬痛のものは、此れを結胸とするなり。

若しくは下の後、心下滿ばかりにして、按して痛まざるものは、此れを痞とす。柴胡を与うるにあたら

ず。半夏瀉心湯に宜しきなり。中らずとは、あた的中の劑にあらずとなり。後の二方は、下して治を逆にしたるなり。皆水氣のことなり。

證に曰く、「嘔して腸鳴し、心下痞する者」

嘔して腸鳴す、というものは、水氣なること明かなり。故に、下利せずといえども、此の方を用いるなり。

生姜瀉心湯は、前方の證にして、胃中の不和を覚え、乾噦かんがい、食臭しょくしゅう、雷鳴、下利するものを治す。

乾噦、食臭は、食穀速かに化せざる候なり。是れ、水氣胃中に入りて、陽氣を抑遏おさへつす。乾姜、厥を温して、結を解すの能ありといえども、反って泛濫はんらんの水を去らず。生姜、能く胃口を開きて、泛濫の水去り、胃陽を回す故に、乾姜を減じて生姜を加う。古人製劑の密なるを是に於て見るべし。

論に曰く、「傷寒、汗出て、之を解して後、胃中不和、心下痞硬、乾噦かんがい、食臭、脇下に水氣有り、腹中雷鳴、下利する者」

傷寒、汗出て解するの後、但、胃中不和をおぼえて、心下痞硬、食臭の氣を乾噦するなり。噦い（おくび）は、食臭の氣を出づるをいう。氣出て物いはず、故に乾噦という。是、胃中不和をいうの證なり。

脇下に水氣ありて、其の水氣、下降雷鳴して、下利するなり。此の外ほか、邪、解して後、水氣脇下にあるの致す所にして、邪氣内迫の水氣にあらず。然れども、尚、其の心熱あるものとす。故に瀉心湯にして、生姜を加うるなり。蓋し、余熱あるなり。

此の方は、乾嘔、下利、或は苦き黄汁を吐するを治す。

甘草瀉心湯は、半夏瀉心湯の證にして、乾嘔、心煩安きことを得ず、急迫して、雷鳴下利するものを治す。

論に曰く、「傷寒中風、医、反つて之を下し、其の人下利すること、日に数十行、穀化せず腹中雷鳴、心下痞硬して満、乾嘔心煩安きを得ず。医、心下の痞を見て病尽きずと謂い、復た之を下し、其の痞益す。此れ結熱に非ず、但、胃中の虚し、客氣上逆すを以ての故に硬からしむるなり。甘草瀉心湯之を主る」

傷寒、中風、外邪発汗すべきの證、医、反つて之を下して、邪氣解せずして下利を致すを以て、其の下利劇しく日に数十行も水瀉するを以て、食穀を化するに間なくして完穀を下し、腹中雷鳴、心下痞硬して満す。

此の満、邪氣内迫の満にあらず。下利氣逆して満するゆえ、而ち満というなり。

「乾嘔心煩して安居することを得ず」は、是れ逆氣迫して安からざるなり。

医、又、心下の痞を見て、病未だ尽きずと謂いて、復之を下せば、逆氣いよいよ盛んにして、痞硬いよいよ甚だし。

此れ、痞の結熱の致す所にあらず。但、之を下して胃中空虚、客氣上逆して痞硬を致すものなれば、下すを誤治とす。

此の證、下すによって氣逆甚だしく、急迫するを以て甘草を加増す。

論に曰く、「狐惑の病い為る状、傷寒の如く黙々として、目・眠らんと欲し、閉じることを得ず、臥起安

からず、蝕・喉に於けるを惑とす。蝕・陰に於けるを狐と爲す。飲食を欲せず、食臭を聞くを惡み、其の面目、乍赤・乍黒・乍白、蝕・上部に於けるは、則ち声喝す。甘草瀉心湯之を主る」

狐惑の字義は、未だ詳かならず。但、證を以て之を考へるときは、黙々として飲食を欲せず、食臭を聞くを惡むは、蓋し、心下痞硬するゆえとす。

眠らんと欲するも、目、閉ずるを得ず、臥起安からざるは、心煩急迫の致す所とす。

其の面目、乍赤・黒・白をなすもの、蓋し、血氣衝逆するときは赤を乍し、或は暗黒下降するときは白を乍すものか。其の喉に蝕し、陰に蝕すというもの、蓋し、血熱虫を生ずるものか。然れども、狐惑と名づくるの義、つまびらかならず。

稻葉翁の云う、「蓋し、狐・蠱は同韻。義・亦相通じ難きときは、音相近きを以て訛するものか」と。

此れ、左氏伝「晋公の疾、蠱の如くにして、鬼に非ず、食惑に非ず。以て失志」というの義に證して、狐惑を蠱惑とす。然れども、彼れは淫溺惑乱の疾、比の病名に取り用いがたし。且つ、狐惑を分ちて、上下を蝕するの名とするもの。強いて解すべからず。但だ其の證に隨いて、之を考へ試むべきのみ。

腹證奇覽翼四編上冊終

旋覆花代赭石湯図
(翼 四編下冊)



腹證奇覽 翼 四編下冊

134、旋覆花代赭石湯図解 (翼 四編下冊)

右図の如く、心下痞硬して、其の人、常に噎氣(おくび)を患い、大便秘く、若しくは反胃、若しくは嘔逆、若しくは食噎(むせぶ)等の患いあるものは、旋覆花代赭石湯の證なり。

凡そ嘔吐の諸證、大便秘するものに効あり。故に、妊婦の惡阻(つわり)も、亦、此の方の證あり。考へ用うべし。

論に曰く、「傷寒、発汗、若しくは吐し、若しくは下し、解して後、心下痞硬、噎氣除かざる者、旋覆花代赭石湯之を主る」

傷寒の外邪、汗・吐・下の治にて、解して後、邪氣内攻するにあらずして心下痞硬、噎氣出づるもの、前の瀉心湯にて除かざるものは、旧毒あるものとす。

生姜瀉心湯は、脇下に水氣有りて下利するもの。此の證、汗吐下の後をいうもの。其の泛濫の水氣なきの意を示すもの、噎氣いづるもの、胃氣不和にあらずして旧毒あるものとす。方中、赭石あるは、蓋しこれが為なり。

周の楊俊が曰く、「予、此の方を用い、以て反胃噎食氣逆して、降らざる者を治するに神効」と。

愚、熟々此の方意を考うるに、旋覆花代赭石の能、他に徴すべきものなしといえども、蓋し旋覆花は、瘀血を治し、赭石は旧毒を解す。方中、生姜・半夏多きを以て考うるに、痰飲瘀血の旧毒、胸膈に凝結停滯して、中焦の氣、理せざるを以て、常に食穀の消化遅く、暖氣出て、或は朝に食して夕に吐し、或は、食する毎に胸煩して、飲食水穀、胸咽に壅滯(ふさぎ)して下りがたく、時に嘔吐するもの、此の方、之を主る。

證に曰く、「肝著、其の人常に其の胸上を踏まれんと欲し、未だ苦しまざるに先つ時、但熱して飲まんと欲す。旋覆花湯之を主る」

胸中に毒ありて、胸かたく煩し、水穀、咽胸につまりて下りがたく、甚だしきものは、胸を人に踏ませたくおもう。

此の方、金匱に見えずといえども、乃ち右の方を用いて効あり。又、転用して小児の龜背(せむし)に用い、或は五疳食毒停滯するもの、此の方を丸とし、用いて効あり。

135

黄連湯
（翼 四編下冊）



135、おうれんとう黄連湯の證（翼 四編下冊）

図の如く、胸中に熱ありて、モヤモヤとして苦しく、心下より臍上に至りて痛み、之れを按すに、硬くして乾嘔するもの。黄連湯の證とす。

茶談ちだんに云う、「舌胎の模様、奥ほど厚くかかり少し黄色を帯びて、舌上潤滑なるもの、乾嘔の證あるときは、腹痛なしといえども、此の方を用いて効あり」と云々。

論に曰く、「傷寒、胸中熱有り、胃中邪氣有り、腹中痛み嘔吐せんと欲する者、黄連湯之を主る」
傷寒の邪、胸腹の間にせまりて、胸中に熱あり、胃中の邪氣にて、腹中痛み、嘔吐せんと欲して実に嘔吐せず、但、乾嘔の氣味あるなり。

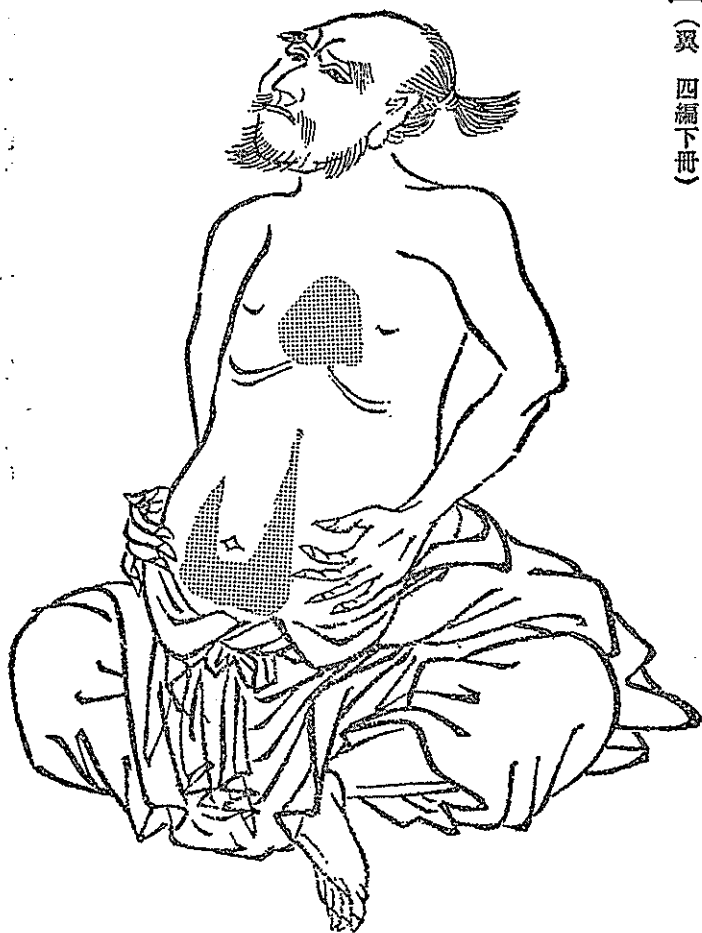
案するに、胸中の熱は、心煩の状を得て知るべし。胃中の邪氣は、腹中痛むを以て之を知るなり。然る則は、此れ、腹痛、中脘臍上の間に於て、之を得べし。嘔吐を欲するものは、痰あり・邪氣あるを以てなり。方中、黄連を主として心胸の熱を解し、半夏・乾姜は結滯の水を解し、人参は胃口を開き氣逆を降し、甘草・大棗は急をゆるめ引痛を和し、其の桂枝あるものは、邪氣を逐い正氣せいきを発して、衝逆を治するなり。此の證、黄連あつて黄芩なし。心下の痞なきゆえなり。

或は曰く、「火を見て発る癰癤ようえきを治す」或は曰く、「齒の痛みを治す」

愚謂う、齒の痛み、寒熱あり一定すべからず。まさに證に隨うべし。
或は曰う、「腹證、心下の処すいて、上・中脘に塊あり、食を嗅ぎて嘔を催す」

調氣飲図

(翼 四編下冊)



136、調氣飲の證 ちようきいん (翼 四編下冊)

図の如く、心中熱煩して、小腹痛み忍ぶべからず、下利、赤白後重のものを治す。

證に曰く、「赤白痢、小腹痛み忍ぶべからず。下重し、或は面青く、手足俱に寒する者」

小腹痛むものは、血證の候なり。面青、手足俱変するものは、「痛み甚だしくして、急迫するなり。此の方、心胸の熱を去り、血を和し、急迫を緩くす。黄連阿膠湯の證に似たり。二方考え用うべし。

調氣飲の方

黄臘(三錢) 阿膠(同)。

右二味、溶化。黄連末(五錢) 勺しく攪ぜ、三服に分け、熱服す。

此の方、金匱に出、今本は脱落するを以て、此に載す。

黄連阿膠湯

黄連阿膠湯は、亦、調氣飲の證の如く、胸中モヤモヤとさわぎて、氣のしまりなきものを治す。胸中もやつき、じゅつなきは、吐血などの患いあるものなり。忽つにすべからず。

此の方の證の如きは、血、心中に迫るものなり。調氣飲の證に比すれば、少腹急痛なきを異とす。此の方

も亦、熱血を破りて、便血を下すものに効あり。故に、二方とも天行痢に考え用うべし。

論に曰く、「少陰病、之を得て二三日以上、心中煩し、臥すことを得ず。黄連阿膠湯之を主る」

少陰病は、下焦の虚実を本とす。軽きものは、外体より其の證をあらわす。所謂、背惡寒、或は手足寒、是れなり。然れども、其の脈微細、但、寝んと欲するもの、下焦の虚寒にあらざるることなし。蓋し下焦の寒氣、体外に應ずるときは、氣血内にせまりて、上攻することあり。この故に少陰、或は、心煩の證をあらわす。然れども、熱実にあらず。氣血上逆し心にせまるときは、必ず熱狀をあらわすこと、復た陰陽を問わざるなり。

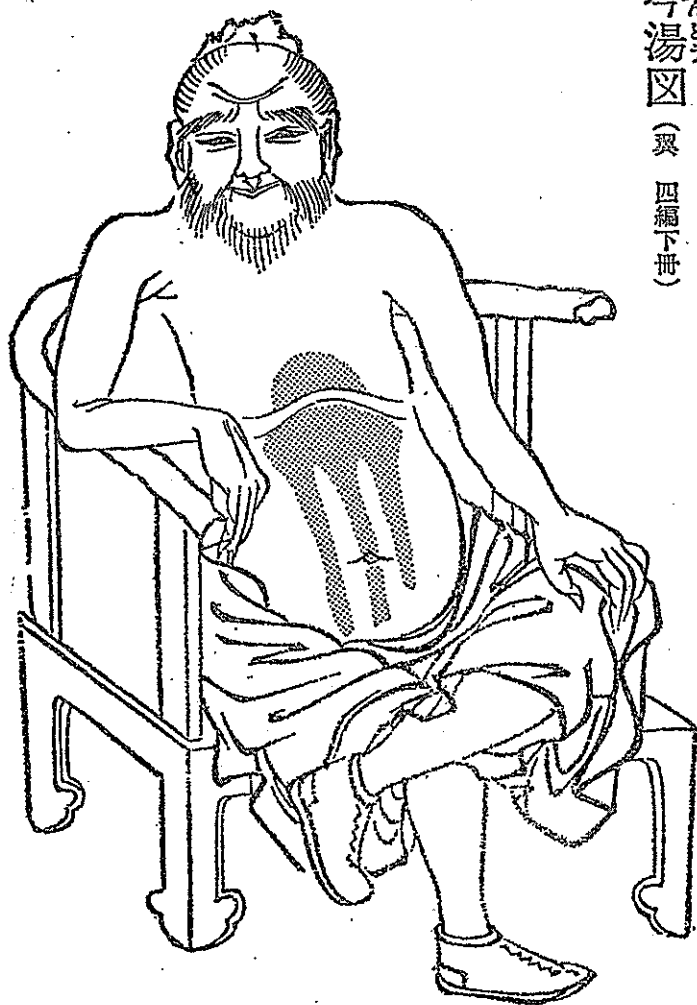
此の證、全く血・心にせまって、煩熱を致すもの。其の黄連・阿膠、並びに血證血熱を治するものを主とするにて、知るべし。故に、少陰病初めに比の證あることなし。二、三日以上にして、緩か比の上攻を致すものとす。臥すことを得ざるものは、急迫するによるなり。考うべし。

或は云う、「交腸は、男人・茎中より糞便を出し、婦人・陰中より糞便を出す。大率、不治の證なり。此の方、丸と爲し、五苓散送り下す」

愚按するに、此の説、医統によるものとす。ある人、此の證を治するに、大黄牡丹皮湯を以て験を得たりと。考うべし。

137

黄芩湯図
（翼 四編下冊）



137、おうこんとう黄芩湯の證（翼 四編下冊）

図の如く、心下痞して、腹拘急して下利するものは、熱瀉なり。黄芩湯の證とす。

其の熱を候うもの、之を口舌に於てす。乃ち、咽乾き、口苦きもの、是れなり。天行痢赤白、裡急、腹痛、発熱、脈数なるもの、此の方を用うべし。若しくは、心下痞硬、甚だしく、口舌乾燥胎を生じ、裡急、裏迫、脈滑なるものは、大承氣湯の證なり。

おうこんかはんげいしょうきょうとう黄芩加半夏生姜湯

論に曰く、「太陽と少陽の合病、自ら下利する者は、黄芩湯を与う。若し嘔する者は、黄芩加半夏生姜湯之を主る」

頭項強痛・発熱・惡寒するものは、太陽とす。口苦く・咽乾き・目眩する者は、少陽とす。太陽病、日を経て、口咽の変をあらわすものは、転入するなり。

初めより、両證を併せ現わすものを、合病とす。合病なるを以て、自ら下利するなり。

此の方、心下の痞を解し、熱をさます。兼ねて血分を和するを以て主とす。熱解し、血和するときは、下利自ら止むなり。此れ、合病といえども、主とするところは、心胸間の熱を解すにあるときは、其の治は少

陽にあるなり。

然れども、之を合病というものは、太陽少陽の正證、自ら下利するものなし。故に之を合病とするなり。一
陽明合病下利を主とせず。少陽の合病、下利を主とす。

故に、又、下利、嘔をかねるときは、半夏を加う。

葛根湯、陽明合病と病の在る所を同じうせざる者、併せみるべし。一

六物黄芩湯ろくぶつおうじんとう

六物黄芩湯は、心下痞硬、乾嘔、下利、發熱のものを治す。此の方、亦、天行痢にして、赤白を下して、
前證あるものに用い、承氣丸を兼用すべし。證に曰く、「乾嘔下利」

干姜黄連黄芩人参湯かんきやうれんれんじんとう

干姜黄連黄芩人参湯は、下利、心下痞硬、心煩して、「食、口に入れば、即ち吐す者。干姜黄連人参湯之
を主る」

傷寒の邪氣、裏に薄はくつて、自ら下利す。故に寒下という。寒は、即ち傷寒の寒なり。然るを、医、復之を
吐して、氣逆上迫して、寒邪仍去らずして、胸膈に止まり、拒捨こかくしてあるうえに、更に逆治して、吐下する
により、いよいよ胸膈胃口に攻めあつまりて、食物をつきかえすなり。

此の證、乾嘔なし。食すれば吐し、食せざれば吐せざるなり。干姜・結滯の水を解し、黄連黄芩・上攻の
血熱を治し、人参・心下を開き氣逆を和す。

翼（四編下冊）

138

大建中湯図
だけんちゅうとう
（翼 四編下冊）



138、大建中湯の證 （翼 四編下冊）

図の如き塊物、腹中より上衝して、心下にせまり、腹皮の上にあらわれ、起つて頭足あるが如く動き、大いに急痛して、死せんと欲す。

其の塊物、手を以て按せんとすれども、痛み甚だしくして触れ近づくべからず。乾嘔して、身体冷汗流るるが如くなるもの、大建中湯の證とす。

較輕のものは、時々心下に攻り上るものあるを覚えて、乾嘔を發し、心腹急痛、身冷ゆるものを此の方の證とす。此の方・応に桴の響に應ずることく、咽を下れば忽ち愈ゆ。

證に曰く、「心胸中、大寒痛ありて、飲食能わず、腹中の寒・上衝し皮に起り出で、頭足有るを見る。上下痛み、而して触れ近づくべからず」

此の證、下焦の寒氣上衝して、痛みを發するなり。故に寒痛といい、寒上衝というもの、見るべし。

皮起り出でて、頭足有るを見るとは、むくむくと、動き起るを以ていうなり。甚だしきものは、塊物、瓜の如きの大きさを覺う。

然れども、上下ともに痛み甚だしきを以て、其の塊、的に按すべからず。痛みの愈るときは、塊なきもあり、存するもあり。婦人、積冷滯下のものに多し。

要（四編下冊）

委しくは、奇覽後編にあり、併せみるべし。

五苓散^{ごれいさん}図
(翼 四編下冊)



139、五苓散ごれいさんの證（翼 四編下冊）

図の如く、心下痞あり。其の痞を按せば力なく散り、腹中、水分に動氣あり。之を按して痛み、小便不利、微熱、消渴しょうかつす。或は、渴して水を飲まんと欲し、水入れば則ち吐くもの、五苓散の證なり。

或は、下利、渴して水を飲まんと欲し、小便不利のもの、亦あり。或は、腹微満し、之れを按すに、濡瀼じゅうらう冒ぼうして、顔、微腫するものあり。

又、小兒疳證、顔面青白、微腫、耳輪みみりんすきとうるがごとく、腹満して之を按すに濡なるもの、何れも渴して、小便不利を以て證応とすべし。

論に曰く、「太陽病、発汗後大いに汗出て、胃中乾、煩燥して、眠ることを得ず。水を飲まんと欲する者、少々与え之を飲ましめ、胃氣をして和せしむれば、則ち愈ゆ。若し、脈浮にして、小便不利、微熱消渴する者は、五苓散之を主る」

「大いに汗出て」の字は、斜挿法しやさうはふなり。発汗後、「更に出るにあらず。胃中乾くを言わんが為に、此の三字を挿むなり。」

「発汗後」というは、表證解するの意を示す為の例なり。大いに汗出て津液燥いて、水を飲むことを欲するものは、熱渴にあらず。故に、少しづつ水を与えて、之を飲ましめ、胃中を潤して、調和することを得れ

ば、解す。

「少々与う」というは、水を懼るるにはあらず。此れ、胃の氣の和せざるによるゆえ、少々与えて胃の氣和し、復た、水を欲せざれば与えず。故に少々与えて、其の愈ゆるや否やをみるなり。

「若し、脈浮數、小便不利して、身微熱あり、水を飲めども、内消して小便少なく、仍お渴するものを消渴として、五苓散之を主る」

これは、脈浮なるを以て、病解せざることを知る。汗出て、津液を亡すによって、小便不利、消渴を致すといえども、尚、水氣あるものとす。而して、其の渴、但に津液を亡すのみにあらず、脈・浮數を以て、熱渴なることを知るなり。是れ五苓散の主治する所なり。

「発汗已み、脈浮數、煩渴する者、五苓散之を主る」

発汗已むは、発汗し汗出で已つてなり。脈の浮・數、煩渴するものは、小便不利、微熱等の證なしといえども、亦、脈狀を以て、熱渴なることを知るゆえ、五苓散之を主るなり。

「傷寒、汗出て渴する者は、五苓散之を主る。渴せざる者は、茯苓甘草湯之を主る」

傷寒、外襲の邪氣、自ら汗出でて、渴するものは、此れ邪内実の機なく、却つて外に出づるの候あり。故に其の渴、亦熱実にあらずることを知る、故に汗出でて渴という。

言うところは、汗出づるによつて渴を発するなり。然れども、亦病解せざるものとすれば、胃中不和の渴にあらず、乃ち、前證と同じ帰趣なるを以て、五苓散之を主るなり。

若しくは、汗出つといえども、渴せずして、心下に水氣あり。心下悸して熱あり、衝逆するものは、茯苓

甘草湯之を主る。茯苓甘草湯は、熱を解し、水を逐いて、心下を和する劑なり。

「中風・發熱、六・七日解せずして煩するに表裡の證有り。渴して水を飲まんと欲し、水入れば則ち吐く者は、名づけて水逆と曰う。五苓散之を主る」

此の章は、偏に中風一證を論ずる故に、太陽中風といわずして、其の意を示すなり。中風の邪氣劇しからざるゆえ、六・七日も解せずして汗も出でざるゆえ、始めて煩するに至る。

然れども、輕邪なるを以て表證仍あり。其の煩を發するもの、裡症も亦あり。且つ渴して水を飲まんと欲して、水口に入ればやがて吐出するもの。

此の證、輕邪の致すところといえども、汗出で、表裏の證、解せざるを以て、心下の水氣停滯して去らず。故に、渴すれども水を受けざるなり。水逆と名づく。此れ、五苓散の正證見然たるもの。

「病・陽に在りて、応に汗するを以て之を解すべきを、反つて、冷水を以て之を漬ぎ、若しくは、之に灌ぐ。其の熱、劫かされて去ることを得ず。弥々更に、煩を益し、肉上り粟起を意う。水を飲まんと欲するも反つて渴せざる者は、文蛤散を服す。若し差えざる者は、五苓散を与う」

古人に漬水灌水の法あり。漬は、面に水をふきかけるなり。灌は、からだに水をかけるなり。此の二方は、陽證の證に用いて、外より水氣を以て激するとき、却つて鬱陽勃起して、發散して解するなり。

此の陽證なきものに漬水、灌水の法を行なえば、其の表熱劫かされて、外に出て去ることを得ずして、弥々更に内迫を益して心煩し、肉上は、却つて正氣虚して粟起するなり。粟起は、俗に鳥肌たつというものは

なり。是れ水に劫おびやかされたるゆえなり。

この意は、水に劫かされて内攻したるものゆえ、意に水を飲むことを欲すれども、反かえりて渴いしよして水嚮すいしやうを引くほどのことなし。たとえば、水を与えれば、却かへつて飲むほどにいたず、与えざれば何となく水をほしく思うの類。是れを文蛤散の證とするなり。

若し、文蛤散にて差いえずして、いよいよ水を欲して渴状を定むものは、是れ、煩渴して熱あり、水氣あるものとすれば、五苓散を与えて其の応否をしるなり。此の證、正證にあらず。故に与えるというなり。

「本もと之を下すを以ての故、心下痞す。瀉心湯を与えて痞解せず、其の人渴し、而して口燥煩、小便不利の者、五苓散之を主る」

瀉心湯は、大黃黃連瀉心湯なり。下すの故を以て、心下痞す。之を按ずに濡やわかなる者は、小便不利を致せば瀉心の痞にあらず。下すによりて津液・渴を致すといえども、其の痞乃すなはち水氣あるの候とす。故に五苓散之を主るなり。

此の痞、痞硬にあらず。之を按ずに濡かなるもの、瀉心湯と腹状の疑途ぎと（うたがわしき）あり。此れ、本方腹證のよところなり。前の図説と併せ考うべし。

「霍かく乱らん、頭痛、発熱、身疼痛、熱多く水を飲むことを欲する者、五苓散之を主る。寒多く、水を用いざる者、理中丸之を主る」

霍乱かくらんは、吐瀉きやくして揮霍きかく撩乱りやうらんするなり。此れ、中焦停水の変をなすものなり。発熱、身疼痛の外證ありて、

水を飲むことを欲するもの、前と同證なり。

此の方、水を利するといえども、桂枝ありて肌表を和す。兼ねて熱を解し、表を和するゆえんなり。

若しくは吐利の後、頭痛、發熱、身疼痛等の熱多の證なく、水を飲むことを欲せざるものは、理中丸にて、中焦を調和して之を治するなり。

證に曰く、「男子消渴、小便反って多く、以て一斗を飲み小便一斗。腎氣丸之を主る。脈浮、小便不利、一微熱、消渴の者は、宜しく小便を利し、汗を發すべし。五苓散之を主る」

消はきゆるなり。飲むところの水、内消して小便少なきを以て、名づけて消渴という。今、飲むことも多く、小便することも亦多き故に、反って多しというなり。五苓散の證、前と一例にして弁をまたず。

或は曰く、「癰癩、涎沫を吐し、水を見て発するものを治す。黃連湯は、火を見て発するを治す」と。

愚謂う、此れ同物相感するなり。

證に曰く、「仮令に瘦せたる人、臍下に悸有り、涎沫を吐き、而して癰癩の者、此れ水なり。五苓散之を主る」と、是れなり。

以上の諸證を通観して本方の證詳かなり。此の方、茯苓・沢瀉・猪苓・朮は、並に水を去り、小便を利するもの。就中、沢瀉は、渴を解するの能あり。其の桂枝あるものは、熱を解し表を和す。相伍して消渴、小便不利、微熱、煩するものを治す。故に泄瀉、或は浮腫にして、前證あるもの、亦此の方の證あるもの考う

べし。

或は曰く、「風疹治しがたきもの、此の方の内に、木通・忍冬羌活連翹（冬に忍え羌く活きる連翹）・甘草を加う。熱あるもの、黄芩を加えて妙なり。又、深師用いて白禿瘡を治す」と、考うべし。

或は、又曰く、「諸熱、小便淋瀝澀痛短少、小腹堅滿し、之を按して痛むは、濕熱膀胱に結ぶものなり。本方に梔子・黄柏・滑石・木通・黄芩・龍胆の類を加う」と云々。

或は、本方に沈香、若しくは石交明を加えて、雀目を治す。亦、證に隨うを要とす。

或は、本方に厚朴・橘皮・芍薬・甘草を加えて、胃苓湯と名づく。泄瀉し、食すれば則ち腹痛して下利するものを治す。其の加減の方、許多く、枚挙するに遑あらず。要は、本方の證を審らかにするにあるのみ。若しくは、此の方の證にして、黄疸を病むもの、茵陳蒿を加えて、茵陳五苓散となづく。

追考

華佗曰く、「病を得て熱無く、但、狂言、煩躁して安からず、精しく言語を采り、人と相い主当せざる者は、火にて之を迫むることなれ。但、五苓散一方を以てすべし。寸匕水を和して之を服す。当に、新に汲める井水を以てす。強いて飲ませること一升許り、若しくは一升半も可なり。二升到れば益々佳なり。指を以て喉中を刺し、之を吐かしめば、病・手に隨いて愈ゆ」と。

或は曰く、「中・喝水の皮中を衍り、虫の行く如き者は、亦、此の法を用いて探り吐するをよしとす。乃ち一物・瓜蒂湯の證なるものなり」云々と。

140

猪苓湯図
ちよれいとう
（要 四編下冊）



心煩

腹微滿
按之濡

左臍傍小結あり按之

即痛

140、猪苓湯の證 （翼 四編下冊）

猪苓湯の腹證は、大率、五苓散の腹状にしにして、血證の候あるを異とす。血證の候は、左の臍傍小腹に於て、小しく微結を得るものはなり。若しくは五苓散の腹状にして、心煩して寝ても眠らざるものを治す。凡そ腹微満して、之れを按すに濡かにして力なきものは、水氣あるものとす。わけて心下に於て、之を審かにすべし。

其の血證の候を得るもの、芎藭膠（とうきようかう）交湯（かうたう）の腹證に彷彿たり。然れども、彼は腹微満、小便不利、渴の證なし。此の方、渴して水を飲まんと欲し、小便不利の候あるを其の別とす。又、五苓散は、汗出づるを目とす。此の方は、汗出ざるを別とす。

論に曰く、「少陰病、下利六・七日、欬して嘔・渴し、心煩して眠りを得ざる者は、猪苓湯之を主る」少陰病、下利し、六・七日に及んで、氣血上攻して水氣心下にせまりて、咳を致すなり。咳逆するより乾嘔を致す。故に咳して嘔し、心煩するもの、氣血・心にせまりて、熱状をあらわすもの、真熱にあらざるなり。

此の方、水氣を利し、渴を止め、血を和するを主とす。少陰下利するもの水氣なり。心煩するもの血熱なり。故に、此方を用いて血を和し、水を治すれば、病愈ゆるなり。是れ猪苓湯の変応なり。

「夫れ正候の若き」は、陽明篇にありて、乃ち曰く、「脈浮、発熱渴し、小便不利の者は、猪苓湯之を主る」と、いうものに随いて之を得べし。五苓散の疑途の如きは、腹状に随いて分弁するときは、以て謬誤なかるべきのみ。

此方、溺血及び、淋瀝病にして、渴あるものに効あり。或は曰く、「婦人、少腹軟らかにして、塊あるものは、水血凝結するなり。其の塊、軟らかなるもの、帶下とす。此の方、桂枝茯苓丸を合方す。或は浮石丸を兼用して効あり。

愚、比の證を治するに、猪苓湯を用いて、復た他の合方、兼用に及ばずして効を得ること多し。亦、證に随うを要とするのみ。

又、此の方、水腫病の実證にして、氣急せず、氣息平常の如くなるもの、或は腰已下腫れて、上に腫れなく、常のごとくにして氣急せざるもの、渴の有る無きを問わず、此方を用いて疏通して奇驗ありと。（「導水瑣言」）

141

苓桂朮甘湯図
(翼 四編下冊)



141、苓桂朮甘湯の證（翼 四編下冊）

図の如く、心下に痰飲水氣ありて逆満し、之を按ずに濡かにして、久しく之を捫すれば水声をなす。虚里の動強く、胸ダクダクとして、氣上衝し、起きれば頭眩し、俗にいう「立ちくらみ」するもの、若しくは、目赤く翳み、或は身ふるい常に舟に乗るがごとく、或は胸さき支えて息せわしく、呼吸の短かきものを苓桂朮甘湯の證とす。

此の證、心下に水氣あり、加うるに氣上衝急迫して致すところのものなり。故に茯苓を主として、心下の水飲を逐い、桂枝を臣として氣を平らかにし、衝逆を解し、朮を佐けとして、水氣を小便に利し去る。甘草相和して氣逆の急を緩くす。

論に曰く「傷寒、若しくは吐し、若しくは下して後、心下逆満し、氣上つて胸を衝き、起てば則ち頭眩し、脈沈緊、汗を発すれば則ち経を動かし、身・振々と揺りうごくを爲す者は、苓桂朮甘湯之を主る」
「傷寒、若しくは吐し、若しくは下して後、外襲の邪氣解して水氣去らず、吐下の故を以て、氣逆して心下に満ち、上つて胸をつき、平臥すれば何をなけれども、起歩すれば目眩し、其の脈・沈緊なるは、水氣あるの候とす。」

其の沈緊なるを見て、尚お外襲あるとして、誤つて汗を發すれば、則ち血脈を動かし、水氣をさわがしくして、身振々とゆするがごとく、揺くことを為すものは、此の方を用いて、氣衝を降し、水氣を利し、急迫をゆるめれば、諸證皆いゆるなり。

證に曰く、「心下に痰飲有りて、胸脇支満し目眩むは、苓桂朮甘湯之を主る」

心下に痰飲ありて、胸脇支満、目眩するもの、皆水氣の致すところにして、氣衝逆するによるなり。

例に曰く、「其の人、素盛なれど、今は瘦せ、水・腸間を走り、瀝々として声有り。之を痰飲と謂う」と。これ痰飲は、飲水停滯して利せず、心下にあり、腸間に走り、水声をなすものをいうなり。此の證、氣逆を降し、小便を利用して水氣を去るの意、前意と異なることなし。

「夫れ短氣は微飲有り。当に小便に従り之を去るべし。桂朮甘湯之を主る。腎氣丸も亦之を主る」

短氣は、呼吸短かく息切れするなり。微飲有るは、心下に微飲あるなり。短氣なるを以て之を知る。此れは、小便より利し去るを的とす。

二方の分別あるなり。二方の分別は、此の方は前の二章に弁ずるごとく、胸脇逆満、目眩して短氣なり。八味腎氣丸は、小腹不仁、若しくは、臍下拘急して短氣なり。

或は曰う、「此の二方の別は、病人の呼氣の短かきものは此の方、吸氣の短きものは腎氣丸の證。是れ伝うなり」と云々。

愚案するに、此の方、真武湯と證相似たり、故に其の旨を弁ぜずんばあるべからず。

真武湯の證の曰く、「太陽病、発汗汗出るも解せず。其の人仍お發熱、心下悸し、頭眩、身瞤動振々と

して地を擗けんと欲する者」と。是、心下悸し、頭眩、身振々とするものは、桂苓朮甘草湯の證に似たり。然れども、此の方は、傷寒、外より來たる邪氣を吐下するものにして、氣逆、心下滿を致し、上^{うへ}せて胸を衝くもの、心下の悸より甚だしといえども、一に衝逆の致す所にして、劇しいえども却て易し。

故に曰く、「起れば則ち頭眩」と。是れ、臥坐すれば自ら発するものにあらず。

真武湯は、起き臥し俱に頭眩し、且つ振々するもの、地に擗ぐとするにいたる。其の病、太陽病にして、内より発するものにして、加うるに虚寒の證あるものにして、発熱固より発汗の解すべきものにあらず。誤つて発汗すれば、必ず氣血躁擾して、水氣を逆行せしむるものなり。

同じく茯苓を主とすといえども、附子を相伍して下焦をあたため、水氣を利するの意、彼れ此れより重くして、異趣なること併せ考えて、之を知るべし。

又、此の方の證に似たるもの、桂枝茯苓丸の證あり。此れ、痰飲を主とし、彼の血證を本とす。若しくは、所謂、風痰にして眩悸を發するもの、諸方の応じなきものは、沈香天麻湯の治するところあり。考うべし。

眼中・赤脈を生じ、衝逆頭眩するもの、車前子を加え用う。

此の方、朮を去りて生姜を加うときは茯苓甘草湯なり。

茯苓甘草湯

論に曰く、「傷寒、厥而して心下悸する者は、宜しく先ず、水を治すべし。当に茯苓甘草湯を服すべし。却りて其の厥を治せ。爾せざれば、水・胃中に漬入り、必ず利を作すなり」

厥は四肢厥逆なり。厥逆して心下悸するものは、是れ水の上逆して心下にせまるの候とす。先ず此の方に水を治し、後に其の厥を治すべしと。

或は曰く、「此の厥、蓋し当帰四逆湯の主治するもの」とか。考うべし。

又、曰く、「傷寒、汗出でて、而して渴ある者は、五苓散之を主る。渴せざる者は、茯苓甘草湯之を主る。」

此の證、具せざるに似たり。然れども、五苓散の證を詳かにするものと、厥して心下悸の證とを併せ考へるときは、五苓散の證にして、渴せざるものを治す。若しくは、苓桂朮甘湯の證に似て、嘔吐逆滿して心下悸し、水気あるものを治することを考うべし。

東洞、云う、「当に嘔吐の證有るべし」と。此れ生姜の分量多ければなり。

或は曰く、「此の方、痰飲眩暈するものを治す。又、欬而遺溺するものを治す。腹證、心下フワフワ・ダクダクとして、心せわしく、水気あるもの」と。

茯苓朮塩湯は、小便淋瀝して通じがたく、若しく小便閉のものを治す。渴して塩味を好むもの、此の方を用いて妙とす。

要（四編下冊）

142

苓姜朮甘湯図
りようきやうじゆつかんとう
（翼 四編下冊）



142、苓姜朮甘湯の證 (翼 四編下冊)

図の如く、腰已下病ありて、冷ゆること水中に坐するが如く、重くして痛み、甚だしきものは、腰痛して反張（そりかえる）するに至る。小便自利するものを、苓姜朮甘湯の證とす。

此の方は、下焦腰中の水氣を去り、冷を温むることを主る。疝氣冷痛、少腹結聚するものあり。之を按して、陰囊、若しくは、股へ引きつるものには、芍藥甘草湯を合方す。

證に曰く、「腎著の病、其の人、身体重く、腰中冷え水中に坐するが如く、形は水状の如し。反って渴せず、小便自利、飲食は故の如きは、病・下焦に属す。身勞、汗出で衣裏冷湿、久しく之を得、腰以下、冷痛、腰重きこと五千の錢を帯ぶるが如し」

腎は臍を夾んで左右にあり。故に腰以下の病を、腎著と名づく。其の位を紀するなり。水氣の病、渴するもの多し。故に「反って渴せず」という。凡そ水氣の病にして、氣上衝するものは小便不利す。此の病、衝逆の證なくして下焦にあり。故に小便自利するなり。自利とは、薬を用いずして自ら通利するなり。小便、常よりも多きの謂なり。

飲食の故の如しとは、病を得ざる已前と、飲食の変らぬなり。此れは下焦にあるゆえ、胃中の変に非ざることを示すなり。下焦は、臍より已下なり。身勞云々は、病因なり。然れども、これ但だ下焦に湿氣を得る

の由をいうのみ。衣裏の冷湿を得て、病のみにあらざるなり。

愚案するに、下焦は虚し易し。故に、寒冷必らず下焦より感ず。蓋し下焦の寒は、湿気を感じるの致す所なり。此の方、茯苓・干姜を主として、冷を去り水を利す。其の心下悸、目眩等の證なき者は、氣衝逆の候なければなり。

或は曰う、此の方と、真武湯とは表裡の裏なり。此の方は、腰の冷氣をぬき、腰冷重痛の證を主として用いべし。真武湯は、臍下の冷氣をぬき、腰の患いなし。是れ其の別ちなり。腹状は、何れも微満して、之を按すに力なく覚えるものと知るべし。

又、曰く、心下より臍上まで中焦の冷氣をぬくには、姜附湯に茯苓を加うべし。

143

茯苓桂枝甘草大棗湯図
(翼 四編下冊)



143、茯苓桂枝甘草大棗湯の證（翼 四編下冊）

図の如く、臍下に於いて、ダクダク・ビクビクと動くものあり。やがて、ムクムクとして、心下へさしむものは、所謂、奔豚の氣なり。

此の證、水氣を挾みて上衝す。故に臍下悸して、奔豚の氣を発するなり。

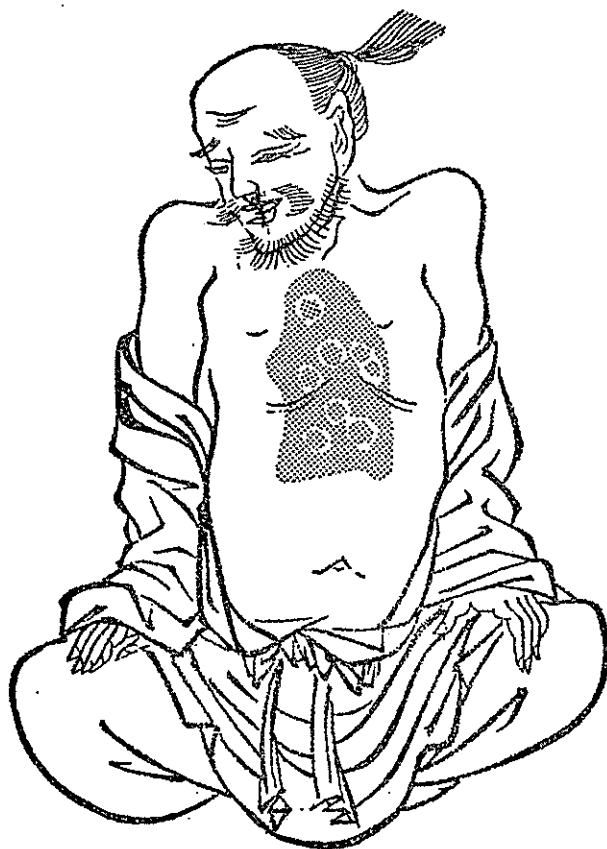
論に曰く、「発汗後、臍下悸し、奔豚を作さんと欲するは、苓桂甘棗湯之を主る」

此れ、発汗して津液を亡ぼし、氣衝逆して奔豚を発するなり。臍下悸するものは、奔豚の氣に前にあるなり。故に「作さんと欲す」という。此の方、茯苓を主として水氣あるものとす。苓桂甘草湯は、苓朮相伍して水飲を利用するを主とす。此の方、水を利用すといえども、茯苓のみを主とし、甘草・大棗・相伍するものは、急をゆるむるの意を専らとす。此の方の異なるところなり。

此の方、疝氣奔豚を発するもの、或は、霍乱臍上に築するものを治す。尚、奔豚湯及び加桂湯等の諸證あつて、並びに奔豚を治す。方意を審らかにして考へ用うべし。

144

茯苓杏仁甘艸湯図
(翼 四編下冊)



144、茯苓杏仁甘草湯の證（翼 四編下冊）

図の如く、胸中塞がり、ダクダクと躍り、息急しく、甚だしきは、山の径をよじ登りたる如く、肩息喘き、或は胸痛のものを治す。

證に曰く、「胸痺（胸痺の解は二編・人參湯に出づ）胸中氣塞、短氣するは、茯苓杏仁甘草湯之を主る。橘皮枳実生姜湯も之を主る」

此の二方の分別は、茯苓杏仁甘草湯は、心中悸して喘急するものとす。

橘皮枳実生姜湯は、千金論に云う、「胸痺し、胸中煩々として満の如く、噎塞し習々として癢の如く、喉中・渋燥し、沫を唾するを治す」と。

胸いっぱいになり、食することに咽につまり、常にモヤモヤと癢きがごとく、喉中しぶり燥きて沫を唾くものなり。橘皮は胸中の氣満を解し、枳実は痞を破り痰を退ぞけ、生姜は、胃中を開くに冷をあたむ。是れ、此の方の意なり。

茯苓杏仁甘草湯は、茯苓・胸中の水を降して、杏仁・喘をしりぞけ、甘草・短氣の急をとく。是れ二方の別ちなり。

或は曰う、「茯苓杏仁甘草湯は、喘急に効あり。其の證、心下・胸中悸するを以て眼目とす。橘皮枳実生

姜湯は、胸腹偏痛して、嘔逆するものを治す」と。

又、曰く、「茯苓杏仁甘草湯は、酒客の病に問此の證あり」と。

腹證奇覽四編下冊終

嘉永六癸丑（一八五二）三月官許

同 四月発兌

書林 江戸両国横山町三丁目 和泉屋金右衛門

（他十四名）

稲葉文礼と和久田叔虎

…… 腹診の伝承 ……

大塚 敬 節

傷寒論系の腹診書として最も詳細で内容の豊富なもの、腹證奇覽及びその続篇である腹證奇覽翼、全二巻である。腹證奇覽は稲葉文礼の著するところにして、腹證奇覽翼は和久田叔虎の著である。私はこれから、この人がどのように結びついて、この著述を残すに至ったかについてのべる。

稲葉文礼の生立ち

文礼は名を克、通称を意仲、号を湖南といい、文礼は字である。父の名は文内といい、字を武次といった。その先祖は河野七郎から出て、代々江州の菩提寺村に住んでいた。文礼は幼少の頃、両親に別れて孤児となり長ずるに及んで放蕩無頼の徒となりいつも京阪の間をぶらついて、悪のかぎりをつくした。彼は腹證奇覽の自序で「鄙夫野人のなすところ、大人君子の惡むところ、一としてなさざるなし」と書いているから、相当な不良であつたらしい。

ところがある時、友人の言葉に感動して、医者になろうと志した。しかし学問をしたことがないから「目、書を知らず、耳、文を聞かず」という状態の文盲であつた。そこであちこちの名医の門をたたいて、

書物をよまないで医者になる方法をたずねて歩いた。

鶴 泰 榮

そうこうしているうちに、彼は鶴泰榮という名医にめぐりあった。この人は雲州の生れで吉益東洞の門人ではないが、東洞を尊崇して、古方を研究し、腹診の名人であった。文礼が天明六年（一七八六）に書いた腹候弁略という書物の序には鶴台先生について学んだとあるが、同じ人であろう。泰榮がいうのに、お前は学問はないが、見どころがあるから、わしの弟子になれと云ってくれた。そこで文礼は泰榮の弟子となつて、一生懸命に腹診の術を学んだ。

文礼と泰榮の初対面の時期について、私は一七七五年頃であろうと推定する。和久田叔虎が遠州浜松で初めて稲葉文礼に逢ったときが、寛政五年（一七九五）で、この時、文礼は「吾れさきに雲州の鶴泰榮に従つて腹の法を学び、逐にもつて其術をおさめ、而して四方を遊歴し、幾んど二十年、未だ嘗て同志の人に遇はず云々」と云っているから、この年から、逆算すると、安永四年（一七七五）頃となる。

腹 候 弁 略

天明六年（一七八六）に、文礼は腹候弁略という二巻の書物を書いてゐる。この書物では、胸脇苦満、心下痞硬というような腹證がどんな形状のものであるかを説明している。その頃、文礼は諸国を漫遊して、江戸にきて、京橋に住んでいたらしい。傷寒論文学攷の著者である伊藤鳳山との交遊も、この頃のことである。

この腹候弁略は珍本で、矢数道明氏の所蔵である。

徳本十九方

寛政四年（一七九二）に、文礼は甲州に遊んで、知足斎徳本の遺著を手に入れた。このことについて、腹證奇覽の序では「王子の歳、甲州に遊び、富嶽に登って塗を失し、黒川の里の禪院に投宿す。幸にして知足斎の遺書、奇方十九方を獲たり」とのべている。この書はのちに、徳本翁十九方として和久田叔虎が刊行した。ところが、この書は徳本の遺方ではなくて、偽書であると、小島蕉園はその著、蕉園隨筆で次のようにのべている。

腹診の伝承

「甲斐の山梨郡に小原村と云ふあり。そのかみ我れその県令たりしとき、配下の村なり。其村に早川五兵衛と云ふ郷士あり。其先祖の肥後守の子なりや、徳本と無二の友にして、甲斐にあるときは、いつも此内に止宿すと云ふ。今に至るまで徳本の書きをきたるもの敬通ありて、実に自書と見ゆ。右の徳本の方書はとどめておきて、家人も見ぬこと世々申し伝ふ。夫をつのつてみれば目つぶるなどと云ふことなりしが、其配下のものなれば、命に従つて持来り残らず写し置きぬ。余が医友に甲斐の人磯野弘道と云ふ人あり。其父を原泉という。岑少翁の門人なり。小原村の五兵衛（早川）大病の折衆医みな辞去しとき江戸より古医方を學び得て帰たり。因て診を乞ひしと云ふ。この原泉、五兵衛が家に徳本の医方あることを知り、治さば謝礼に一見を得せしめよと約して療す。若し申伝の如く聞き見て眼潰るることあらば、我等が眼潰るべしと云ひ置きしに、終に五兵衛が大病治したり。因て原泉一人此書を見て之を写せしと云ふ。世の十九方と云ふ書は甲斐の異人に遇ふて伝来すと云ふ序文もあれども、これは方名同じくして薬味異なり。これは近世京都の稻葉維伸と云ふもの、実に此ことを聞及びて甲斐に赴きしに、果して原泉に逢て乞ひしなり。この原泉は

倅弘道とちがひて、方法を惜しむこと千金の如し。殊に骨折て漸く得たる珍方なれば容易に許し難く、維仲が懇望も亦空しくし難く、方名ばかり同じく薬味異なる偽書を作りて其内二方ばかり正明の方を書いて与へしと云ふ。其偽書の下書は倅の弘道余に戯に見せたり。原泉は維仲独りを欺き、其偽書刊行して天下の人を欺く、嘆ずべし。」

このようにして、文礼が苦心して入手した徳本十九方は真の徳本の処方ではなかったのである。

文礼と叔虎の会见

寛政五年（一七九三）甲州からの帰路、浜松で文礼は和久田叔虎とはじめて逢った。その時、文礼は、自分の術を伝えるに足る人物に始めて逢ったといつて喜び、数カ月間、ここにどどまって、自分の修得した腹診の法を残さず叔虎に伝えてから、西の方を指して旅立った。その後、叔虎は江戸に移り住むこととなり、この師と弟子とは、しばらく相みることがなかった。和久田叔虎は、名を寅といい、浜松の人で叔虎と号した。

腹證図彙

叔虎に別れた文礼は、腹診の術を伝へるために京都にゆき、ここに落ちついた。時に一七九五年（寛政七年）のことである。ところがその頃の京都には、吉益南涯、和田東郭、荻野台州などの名医が羽ぶりをきかせている時で、文礼の術はあまり行われなかったらしい。元来酒好きであった文礼は、その憂鬱をまぎらすために毎日酒をのんだ。彼は一七九七年に半身不随になった。しかしこの時は、自分の治療で全快した。し

かし病氣がよくなるとまた酒を嗜んだ。彼は何回も半身不随になった。その頃、門人の関宗俊は師に代つて、腹證図彙を書いた。

文礼の性格について、門人の宗輔は、腹證奇覽の序で「先生、性直にして術精し。然れどもその言行、殆んど京師の人に非ず。たとひ先生をして京師に留寓せしむるも、恐くは素意の如くなること能はざらん。美器あつて用をなさず。実に惜しむべし。」とのべている。

腹 證 奇 覽

文礼は一七九九年に腹證奇覽四巻を著した。これは門人たちの手になるもので、さきの腹證図彙の増補改訂版である。

一方、和久田叔虎は寛政十二年（一八〇〇）の冬（読腹證奇覽では享和改元の年の春となつていて、少しのずれがある）江戸の書店で、腹證奇覽という書物をみつけ、これをよんだところ、それは先年、浜松で別れた師匠の稲葉文礼の著述であつた。叔虎は胸をおどらせながら、この書物をよんだ。ところで、これを読んでいる中に、いくつかの誤謬を発見し、彼と見解を異にするところもあつた。そこで叔虎は読腹證奇覽という書物を書いて、その誤を正した。この読腹證奇覽は珍本で石原・矢数阿氏の紹介した如く、東京医科大学図書館の所蔵である。

ところで、叔虎は、この腹證奇覽をよむと、急に師匠の文礼に逢いたくてたまらなくなり、江戸を去つて、関西に旅立った。そして享和三年（一八〇三）の秋になつて、やつとこのことで文礼の浪花の住居をみつけることができた。このようにして、師と弟子は十年ぶりの再会を大いによろこんだ。

叔虎は江戸に帰ることをやめて、京阪の間にとどまることを決心し、たびたび文札をたずねて医事を談じたが、話題はいつも腹診に関することばかりであった。そうこうしている中に、文札の病は重くなり、再起が不能であることをさすると、文札は叔虎に後事を托して、腹證奇覽を増補して完全なものにしてくれと云った。そして文化二年（一八〇五）の六月に浪花の家で死んだ。

そこで師の遺言を果すため、叔虎は文化四年に京都に居を構えて、腹證奇覽翼四編八巻を著すのである、このようにして、腹證奇覽及び同翼の十二巻は完成した。しかしこれとても、傷寒論系の腹診書としては完全なものではない。文札、叔虎のあとをついで、この書を完璧なものにするのはだれであろう。

稲葉文礼と和久田叔虎の師弟関係

矢 数 道 明

傷寒論系の腹診書として最も有名なものは、いうまでもなく稲葉文礼の著わした「腹證奇覽」四冊と、その門人、和久田叔虎の著、「腹證奇覽翼」八冊とである。

この両者の師弟関係と、その交渉については、既に日本東洋医学会誌（第十二巻二号）で大塚先生が詳述され、従来あまり明らかにされていなかったこの腹診の伝承経過が鮮明化された。

日本漢方医学の特徴とされている腹診学に大功績のあったこの二人の伝記はいままで明らかにされていなかった。即ち日本医学史、明治前日本医学史、皇国医学大年表等には単に腹證奇覽の著者として記載があるのみで、医学文化年表、医学史概説、医家人各辞書、皇国名医伝、本朝医人伝等には、その名を掲げていない。大塚先生は両者の著書における序文跋文等を彼此参照して、従来見られなかった二人の姿を浮かび上がらせている。ここに私見も加えてその要約を掲げる。

○

稲葉文礼と和久田叔虎のあらまし

文礼の生れた年もとこも判つきりしない。文礼は名を克、通称を意仲（または維仲）といい、湖南と号

し、文礼は字である。父は文内、字を武次といつて、その祖先は河野七郎より出で、代々江州（いまの滋賀県）の菩提寺村に住んでいた。

文礼は幼少のころ両親に別れて孤児となり、青年期には放蕩無頼の徒となつて京阪の間を彷徨し、悪の限りをつくしたという。文礼は自ら腹證奇覽の自序の中で、「鄙夫野人のなすところ、大人君子の惡むところ、一としてなさざるなし」と正直に告白している。

ところがあるとき、友人の言葉に感激して医家を志した。しかし學問をしたことがないので、各地の名医の門を叩いて、書物をよまないうで医者になる方法をたずねて歩いた。彼は自ら「目書を知らず、耳文を聞かず」と謙遜している。そして門人関宗俊も腹證奇覽の序の中で、「先生、性直にして術精し、然れどもその言行、殆んど京師の人に非ず、美器あつて用をなさず、実に惜しむべし」といっているところを見ると、性格的にも相当常軌を逸した変り者であつたらしい。

文礼は各地を遍歴している中に、鶴泰榮という名医に出会つた。泰榮先生は雲州（いまの島根県）の生れで、吉益東洞の門人ではないが、東洞を尊敬し、古方を研究した腹診の名人であつた。文礼はこの泰榮先生の弟子となつて熱心に腹診の術を學んだ。

文礼が鶴先生に師事した年代はいつか。文礼がその弟子和久田叔虎と会つたのが寛政五年（一七九三）で、文礼は鶴泰榮に従つて腹診を學んでから二十年、各地を遊歴したが未だかつて同志に会わず、ここに初めて叔虎にめぐり合つたということから逆算すると、安永二―四年（一七七五）頃であるうというのが大塚先生の推定である。

文礼は寛政四年（一七九二）甲州（いまの山梨県）に遊んで、黒川の里の禪寺に泊つた。その寺にはから

ずも永田徳本の奇方十九方があって、偶然その処方を知ることができたといつて大喜びであった。この処方
は腹證奇覽の中にも出ているが、小島蕉園隨筆によると、徳本十九方は実は寺僧が偽つて書いて見せたもの
であつたという。

甲州に遊んで徳本秘方を得たといつて喜こんで帰る途中、翌寛政五年（一七九三）に遠州（いまの静岡
県）浜松で和久田叔虎に会い、意氣投合し、二十年振りで同志に合つたといつて喜こんだ。叔虎のところが
居心地がよかつたとみえて、そこに数カ月も滞在した。このとき叔虎は文礼の会得した腹診のことを学んだ
という。

天明六年（一七八六）秋、文礼は腹診に関する初めての著書を書いた。それは「腹候弁略」という小著で
あるが、珍本で私が所蔵している。大塚先生によつて珍本の折り紙をつけられたものである。

寛政七年（一七九五）になると文礼は京都に移り、ここで関宗俊が代筆して腹診図彙を著した。文礼は酒
豪であつたらしいが、翌々年寛政九年（一七九七）に腦溢血で倒れ、半身不随になつた。このときは自分の
治療でよくなつたが、相変らず酒を嗜み、何回も再発したという。

文礼は門人達に口述筆受させ、寛政十二年（一八〇〇）に腹證奇覽四巻を著わした。（奥付けをみると寛
政十二年夏五月に出版されたことになっている）

一方和久田叔虎は早くから腹證に重大関心を払つていたが、文礼が半年も宿つていてその間教を受け、腹
診の勉強を続けていた。寛政十年（一七九八）に叔虎は浜松から江戸に移住した。「読腹證奇覽」の自序の
中で、「余は故あつて家を提え、東都に遷り、事故に遇い、窘迫しきりに至る」とあることから、何か不幸
な事故のため困窮の生活を送つていたらしい。享和元年の春叔虎が江戸に在つて街の本屋をのぞいてみた

ら、「腹證奇覽」というものが目についた。叔虎は躍る胸を押えむさぼるごとくこれを読んでみた。ところが叔虎の期待はあえなく崩れ、読めば読むほど不満が蜂起してくるのであった。

叔虎はその罪を師の文札に被せず、すべて門人達の科しやうとして、これに対する不満をぶちまけ、攻撃の火蓋を切ったのであった。その偽らない叔虎の吐露した意見がこの「読腹證奇覽」であつた。しかし勿論これを公刊するつもりはなかつた。恩師の名で公刊された腹證奇覽をこのままにしておくことは、叔虎の良心が許さなかつた。この「読腹證奇覽」は、その序文を正しいものとすれば、享和元年にこれを手にしてた翌享和二年になされたものではないかと推定される。

叔虎は読腹證奇覽を書いたものの割りきれない気持であつた。熟慮の末、翌享和三年（一八〇三）秋に西下し、師の文札を搜してやつと大阪で十年振りの面会をすることができた。

叔虎は病体の文札と腹診について語り、逐に文札の跡を誦いでその足らざるところを補い、古方の腹診番を完成せんことを誓つた。

文化二年（一八〇五）六月、文札は叔虎に後事を托して浪花において長逝した。その年齢は不明のままである。

叔虎は文化四年（一八〇七）京都に移り、翌々年文化六年（一八〇九）「腹證奇覽翼」初編二冊を刊行した。

そして腹證奇覽翼の第二編二冊の刊行されたのは、それから二十四年も過ぎた天保四年（一八三三）であり、第三篇と第四篇の四冊の出版は、実にそれから二十年を過ぎた嘉永六年（一八五三）のことである。この六冊は原田憲子、原田養賢の校となっているところから推察すると、叔虎は第二篇刊行の天保四年には既

に他界の後ではないかと思われるのである。叔虎の生年月日も、死去の年月日も不明のままである。京都と大返の墓地を捜せば叔虎や文礼の墓碑が発見されるかも知れない。

文礼と叔虎の年譜

以上を簡単に表示してみると次のようになる。

年	号	稲葉文礼と和久田叔虎の略歴	医界事情
一七五五	(安永四年)	稲葉文礼はその師鶴泰来と初対面師事す。	吉益東洞没す。(一七七三)
一七八六	(天明六年)	(中秋の月) 稲葉文礼腹候弁略を著す。	多紀安元の医学館火災、吉益南涯方機を著す。
一七九二	(寛政四年)	稲葉文礼甲州に遊び、黒川の里禅院に泊り、徳本奇方十九方を得たり(偽方であることが後日判明す)。	福井楓亭没、南涯(四三)氣血水説を樹つ。
一七九三	(寛政五年)	稲葉文礼、遠州浜松で和久田叔虎と初対面し、意気投合し、叔虎の所に数ヵ月滞在す。	杉田玄白、六十才
一七九五	(寛政七年)	稲葉文礼京都に定住し、関宗俊代筆腹証図彙を作る。	片倉鶴陵産科発蒙を著す。
一七九七	(寛政九年)	稲葉文礼発病半身不随となる。	中神琴溪生々堂医談を著す。
一七九八	(寛政十年)	和久田叔虎江戸に移住し、困窮す。	和田東郭御医となる。
一八〇〇	(寛政三年)	稲葉文礼、腹證奇覽四巻を著す。	大槻玄沢重訂解体新書を著す。
一八〇一	(享和元年)	和久田叔虎は江戸の本屋で腹證奇覽を見る。	原南陽叢桂偶記を著す。
一八〇二	(享和二年)	和久田叔虎「読腹證奇覽」を著す。	杉田玄白、形影夜話を著す。
一八〇三	(享和三年)	和久田叔虎は稲葉文礼を訪ね浪花(大阪)で十年振りに面会す。	和田東郭没す。(六〇)
一八〇五	(文化二年)	六月稲葉文礼は浪花において死去す。	華岡青洲初めて乳癰手術。
一八〇七	(文化四年)	和久田叔虎京都に移住す。	原南陽、經穴斂解を著す。
一八〇九	(文化六年)	和久田叔虎「腹證奇覽翼」初篇二冊を発行す。	田村玄仙没す。(七三)

一八三三	(天保四年)	和久田叔虎(原田成憲子校) 翼二篇二冊を出版す。	中神琴溪没す。
一八五三	(嘉永六年)	和久田叔虎(原田義賢校) 翼三、四篇四冊出版す。	浅田宗伯、脈方私言を著す。

漢方治癒百話(第二集)「読腹證奇院」より

序

腹診の術は古より之を伝ふ。傷寒論中既に之を論ずれども九夏にありては夙に亡びて伝らず。我邦徳川氏の中世に及び後藤、香川、吉益の徒、競ひ起りて古方を唱ふ。是に於て腹診の術復大いに興り、著述世に出づる者少からず。腹證奇覽及び奇覽翼、亦その一なり。腹證奇覽四卷稻葉文禮著す所、而して門人久田叔虎之に羽翼し以て腹證奇覽翼八卷を選す。合して十有二卷此書を以て実に腹診書中の歴巻となし。腹診に就きて問ふ者あらば、先ず此書を示して以て一読を奨む。然れども巻間、此書完壁の者頗る稀なり。予之を憾となす。頃日昭文堂主、宮本守太郎氏来り、予に図るに、此書の覆刻を以てす。予此挙の徒爾ならざるを讀し、蔵する所の一本を出して氏に与ふ。数旬の後、氏再び来りて曰く。刻成る是に序せよと。乃ち固辭するに忍びず。一言を巻端に列ね、以て声援をなすと云ふ。

昭和十二年丁丑正月申浣

大塚敬節識

この序文は昭和十二年昭文堂より発行された腹證奇覽の復刻本に寄せられたものである。

跋

第一回拓殖大学漢方医学講座が東京文京区茗荷谷みょうがたにの本校で開かれた昭和十二年に、昭文堂(宮本守太郎氏)からこの本が孔版三冊で復刻発行された。原本を忠実に復写したその「根」と「技術」は立派なものであった。今度当社が活字にして一冊に纏めてみて、その御苦労がわかった。

筆者がこの原本を手にとってみたのはそれから数年後であるが、当時はこの孔版を唯一の教本として勉強したものである。未だ三十歳に至らぬ青二才であったが、それだけに新鮮な気持で、この古くて新しい珍しい、東洋医学に没入していた。中でも各頁毎にユニークな図解によって解説する「腹證奇覽」は受講生一同の好奇の眼をみはらさせた。

大塚敬節氏の傷寒論の講義の中にも屢々この本が引合いに出されていたので印象が更に深かった。今日ここに自らの手で活字本として復刻発行する事になったのも若き日の「感激」のあらわれと、その因縁の浅からざるを感じる。

本書の原本は大塚敬節氏秘蔵のものを拝借し、忠実にその古き姿を失わないようにとめて時間をかけて再現した積りである(挿図は全部原寸である)。

原本は本編（稻葉）が四冊、翼（和久田）が八冊の計十二冊で、積上げると一〇センチ余になる。古書らしい風格のある文献である。印刷技術の低い時代によくここまで残してくれた。と先哲の御苦労に感謝せざるにはいられない。

この分厚い原本を今回、一冊にまとめられたのは、印刷、製本の技術が上ったが為である。十二冊ではないかはバラバラになって散逸の怖れがある。これは惜しい事であるし不便でもある。

この本を読み易くするために「本」「翼」を通して一連番号とした、原本では、初編上冊・下冊、二編上冊下冊、等の繰返しで、忙しい現代では、読みたい所を探すのに時間がかかって能率的でない。目次も原本では各編毎に茲べてあるだけで番号が使われていない。これを巻頭に一括して、一連番号をふったので目次をみれば、たちどころに目的の「證」をとらえることができるし、各ページの柱（欄外の見出し）も亦目次同様便利なもので、本が翼か、本の何編か、翼の何編かがわかるのである。このことは現代の造本常識ではあたり前であるが、昔はこの点感覚がちがう。

本書の初編の発行は一八〇〇年で、翼の第四編が一八五三年である。実に五十三年の長丁場である。書いた人も稲葉・和久田・原田成憲子・原田養賢等数人の人によっているので、書き方、考え方も、違いがあるので一冊にまとめるには無理もあると思われるが、「腹證奇覽」というこの名著を一括しておくのも現代の我々の務めかと考えたのである。

「日本漢方ここにあり」と大いに気を吐いた、日本独得な腹診法。その中でも代表的な本書をここにこの形で後世の人のために残しおく事の意義は大きいと思う。

本書の解説には当代日本漢方医学界の最高峯である大塚敬節・矢数道明の両大家の解題をのせる事ができ

たのは大変幸運であつた。これによつて読者は本書のなりたち、と応用そして価値を掴むことができる。大塚・矢数両氏にはこの数十年の長き間、色々と御指導をいただいております、今回この出版にあたっては一段と厚い御支援をいただいた事を心から御礼申上る次第である。

ここで痛恨事は大塚敬節氏の御逝去である。五十五年十月十五日（一九八〇）急逝され（満八十歳）、本書の上梓を御目につけられなかったのが心残りである。謹んで氏の霊前に本書を捧げます。

校者の上田晋平氏は各編各冊の細部に亘つて目を通して、昔のミスプリントから原著者の人間関係まで洞察する、眼をもって本書の完成に尽された。ここに満腔の感謝の意を表します。

昭和五十六年三月辛酉（一九八一）

発行者 戸部 宗七郎

68	^{よ し ころべいとう} 附子梗米湯	176
53	^{よ し とう} 附子湯	138

ほ

48	^{ぼうふう ぶくろ とうとう} 防風茯苓湯	125
112	^{ほ ちゅう ぎき とう} 補中益氣湯	436

よ

37	^{よく い よ しはいし とうざん} 薏苡附子敗漿散	89
----	-------------------------------------	----

り

14	^{りつぐん し とう} 大君子湯	37
54	^{うちゅう か よ し とう} 理中加附子湯	141
142	^{きょうきょう じつ かん とう} 苓 姜 朮 甘湯	596
143	^{きょうけい かん とう} 苓 桂 甘 棗湯	599
32	^{きょうけい じつ かん とう} 苓 桂 朮 甘湯	77, 591

し

57	四逆散 <small>しやくいさん</small>	150
38	四逆湯 <small>しやくいとう</small>	92
41	梔子豉湯 <small>ししとう</small>	98, 534, 538
65	十棗湯 <small>じつさう</small>	168, 529
12	磁石丸 <small>じしやくがん</small>	33
24	芍薬甘草湯 <small>しやくやくかんざう</small>	59, 339
56	朮防己去石薜加茯苓芒硝湯 <small>じゆつぼういきよせつじやくふくりようほうしりようとう</small>	147
23	小陷胸湯 <small>せうけんとう</small>	57, 520
19	小建中湯 <small>せうけんちゆうとう</small>	47, 323
3	小柴胡湯 <small>せうさいことう</small>	13, 16, 409
46	小品奔豚湯 <small>せうしんぺんとん</small>	121
91	小青龍湯 <small>せうせいりゆうとう</small>	307
49	小品牡蛎奔豚湯 <small>せうひんばいれいべんとん</small>	127
55	真武湯 <small>しんぶとう</small>	143

せ

134	旋覆花代赭石湯 <small>せんぷくかだいしやくせきとう</small>	566
76	千金甘草湯 <small>せんしんかんざう</small>	195

た

61	大黄酒連瀉心湯 <small>だいけうかうれんしやしんとう</small>	159, 550
16	大黄酒遂湯 <small>だいけうかんずいとう</small>	41, 526
28	大黄酒甘草湯 <small>だいけうかんざう</small>	68, 178
73	大黄酒硝石湯 <small>だいけうしやうせきとう</small>	188
60	大黄酒附子湯 <small>だいけうふしとう</small>	157
33	大黄酒牡丹皮湯 <small>だいけうぼたんぴとう</small>	80
125	大陷胸丸 <small>だいけんとん</small>	516
21	大陷胸湯 <small>だいけんとん</small>	53, 55, 511
62	大建中湯 <small>だいけんちゆうとう</small>	162, 164, 166, 578
5	大柴胡湯 <small>だいさいことう</small>	18, 39, 426
17	大承氣湯 <small>だいじやうきとう</small>	43, 45, 472, 475

ち

117	竹葉石膏湯 <small>ちくようせつじやくとう</small>	468
58	調胃承氣湯 <small>ちやういじやうきとう</small>	152, 500
136	調氣飲 <small>ちやうきいん</small>	572
34	救痛園 <small>きうつうえん</small>	83
140	猪苓湯 <small>ちよれいとう</small>	588

て

40	抵当湯 <small>ていとう</small>	96
----	-------------------------	----

と

75	桃核承氣湯 <small>とうかくじやうきとう</small>	193, 506
50	当帰建中湯 <small>とうきけんちゆうとう</small>	129
95	当帰四逆湯 <small>とうきしやくいとう</small>	333
44	当帰芍薬散 <small>とうきしやくやくさん</small>	116
9	桃軍園 <small>とうぐんえん</small>	27, 29
79	土瓜根散 <small>どくわこんさん</small>	203

に

8	人參芎藭桃花湯 <small>にんじんきやうどうとう</small>	24
45	人參去朮加桂湯 <small>にんじんきよじやくつかいとう</small>	119
114	人參湯 <small>にんじんとう</small>	445

は

80	八味丸 <small>はちみがん</small>	207
66	半夏瀉心湯 <small>はんげしやしんとう</small>	171, 174, 560

ひ

116	白虎湯 <small>びやくことう</small>	460
-----	---------------------------	-----

ふ

97	風引湯 <small>ふういんとう</small>	342, 347
144	茯苓杏仁甘草湯 <small>ふくりようきとうにんかんざう</small>	601

腹證奇覽 湯名索引

- ・ 1 ページから 214 ページまでは 本編 (稲葉克文礼)
- ・ 217 ページから 603 ページまでは 翼 (和久田寅叔虎)
- ・ 本、翼の両方にある湯名は両方のページを記した。

う		31 芍 ^{きゅうりきょうかいとう} 婦 ^ふ 膠 ^{きょう} 艾 ^い 湯 ^{とう}74
え		け
100 烏 ^う 頭 ^{づけい} 桂 ^{けい} 枝 ^し 湯 ^{とう} 354		78 下 ^げ 瘀 ^お 血 ^{けつ} 湯 ^{とう} 201
お		2 桂 ^{けい} 枝 ^し 湯 ^{とう}11, 280, 298, 316
106 越 ^{えつ} 婢 ^び 湯 ^{とう} 400		20 桂 ^{けい} 姜 ^{きやう} 芩 ^{きん} 草 ^{そう} 黄 ^{わう} 辛 ^{しん} 附 ^ふ 湯 ^{とう}49, 376
か		105 桂 ^{けい} 枝 ^し 加 ^か 黄 ^{わう} 香 ^{きやう} 湯 ^{とう} 386
137 黄 ^{わう} 芩 ^{きん} 湯 ^{とう} 575		93 桂 ^{けい} 枝 ^し 加 ^か 芍 ^{しやく} 藥 ^{やく} 湯 ^{とう} 319
51 黄 ^{わう} 土 ^ど 湯 ^{とう} 132		52 桂 ^{けい} 枝 ^し 加 ^か 附 ^ふ 子 ^し 湯 ^{とう} 135
26 黄 ^{わう} 連 ^{れん} 湯 ^{とう}64, 569		99 桂 ^{けい} 枝 ^し 加 ^か 龍 ^{りゆう} 骨 ^{こつ} 牡 ^{ばい} 蠣 ^り 湯 ^{とう} 350
こ		102 桂 ^{けい} 枝 ^し 甘 ^{かん} 草 ^{そう} 湯 ^{とう} 367
42 樞 ^{かいじつ} 実 ^{じつ} 100		72 桂 ^{けい} 枝 ^し 去 ^{しやくやく} 芍 ^{しやく} 藥 ^{やく} 湯 ^{とう} 186, 360
59 鶴 ^{かく} 家 ^か ・甘 ^{かん} 遂 ^{ずい} 桃 ^{とう} 花 ^{かう} 湯 ^{とう} 154		115 桂 ^{けい} 枝 ^し 人 ^{にん} 参 ^{じん} 湯 ^{とう} 454
74 鶴 ^{かく} 丸 ^{がん} 190		
25 葛 ^{かつ} 根 ^{こん} 湯 ^{とう}61		47 広 ^{こう} 濟 ^{さい} 奔 ^{ほん} 豚 ^{とん} 湯 ^{とう} 123
11 括 ^か 莖 ^き 薤 ^{がい} 白 ^{はく} 酒 ^{しゆ}31		29 厚 ^{こう} 朴 ^{ぼく} 三 ^{さん} 物 ^つ 湯 ^{とう}70
30 乾 ^{かん} 姜 ^{きやう} 附 ^ふ 子 ^し 湯 ^{とう}72		121 厚 ^{こう} 朴 ^{ぼく} 七 ^{しち} 物 ^つ 湯 ^{とう} 496
27 甘 ^{かん} 遂 ^{ずい} 半 ^{はん} 夏 ^げ 湯 ^{とう}66, 523		120 厚 ^{こう} 朴 ^{ぼく} 大 ^{だい} 黄 ^{わう} 湯 ^{とう} 493
67 甘 ^{かん} 草 ^{そう} 瀉 ^{しゃ} 心 ^{しん} 湯 ^{とう} 174		7 呉 ^こ 茱 ^{しゅ} 萸 ^ゆ 湯 ^{とう}22, 440
103 甘 ^{かん} 草 ^{そう} 附 ^ふ 子 ^し 湯 ^{とう} 371		139 五 ^ご 苓 ^{りやう} 散 ^{さん} 581
71 甘 ^{かん} 草 ^{そう} 粉 ^{ふん} 蜜 ^{みつ} 湯 ^{とう} 182		
70 甘 ^{かん} 麦 ^{まい} 大 ^{だい} 棗 ^{そう} 湯 ^{とう} 180		さ
き		6 柴 ^{さい} 胡 ^こ 加 ^か 芒 ^{ぼう} 硝 ^{しやう} 湯 ^{とう}20
13 橘 ^{きつ} 皮 ^ぴ 大 ^{だい} 黄 ^{わう} 朴 ^{ぼく} 硝 ^{しやう} 湯 ^{とう}35		110 柴 ^{さい} 胡 ^こ 加 ^か 龍 ^{りゆう} 骨 ^{こつ} 牡 ^{ばい} 蠣 ^り 湯 ^{とう} 423
		109 柴 ^{さい} 胡 ^こ 桂 ^{けい} 枝 ^し 乾 ^{かん} 姜 ^{きやう} 湯 ^{とう} 418
		107 柴 ^{さい} 胡 ^こ 湯 ^{とう} の ^の 弁 ^{べん} 407

本書の本文用紙は中性紙です

本の寿命が百年そこそこだ、と今、世界的な大問題となっています。

これを防ぐには、製造に酸を使わない、〔中性紙〕がよいことが定説になりました。

本書の用紙は王子製紙のサンファンタジーA判（クリム）です。

腹 證 奇 覧 全（復刻）

昭和 56 年 4 月 10 日(1981) 発行

昭和 56 年 8 月 20 日 第 2 版発行

昭和 58 年 11 月 30 日 第 3 版発行

平成 4 年 5 月 1 日 第 4 版発行

原 本 大塚敬節氏蔵本

著 者 稲葉克文 礼

和久田寅叔 虎

解 題 大塚敬節

矢数道明

発行者 戸部宗七郎

発行所 医道の日本社

〒237 横浜賀市追浜本町 1-45

電 話 横浜賀 (0468) 65-2161

振 替 東京 5-163541 番

F A X (0468) 65-2707

腹證奇覧 全 (復刻) (オンデマンド版)



2002年1月20日 発行

原 本	大塚敬節氏蔵本
著 者	稲葉克文礼・和久田寅叔虎
解 題	大塚敬節・矢数道明
発行者	戸部雄一郎
発行所	株式会社 医道の日本社 〒237-0068 神奈川県横須賀市追浜本町1-105 TEL0468(65)2161 振替00150-1-163541 FAX0468(65)2707
新宿支店	〒160-0022 東京都新宿区新宿2-1-11 御苑スカイビル3F TEL03(3341)3470 FAX03(3341)6045
印刷・製本	株式会社 デジタルパブリッシングサービス 〒162-0812 東京都新宿区西五軒町11-13 TEL03(5225)6061 FAX03(3266)9639

AA802

ISBN4-7529-6041-9

Printed in Japan

本書の無断複製転写 (コピー) は、著作権法上での例外を除き、禁じられています